

大学教育研究開発センター年報

第 9 号



平成17年 3 月

茨 城 大 学
大学教育研究開発センター

表紙中央の図案は、茨城大学の校章であるイノバラ (*Rose multiflora*) の若芽をイメージして、教育学部の島田裕之先生にデザインしていただいたマークです。センターの刊行物(ニューズレター等)で使用しています。

目 次

巻 頭 言	曾 我 日出夫 (大学教育研究開発センター長) ……………	1
平成15年度教養教育シンポジウム……………		3
教養教育に関する論文・研究ノート		
自律的学習者を育てる読解クラス—多読とプロジェクト活動を中心として—	上 田 敦 子 (人文学部) ……………	41
茨城大学における自己点検評価システムの構築—PDCAサイクルとTQM—	嶋 田 敏 行 (評価室)、田 切 美智雄 (学長特別補佐 評価室) ……………	51
韓国の私立大学における点検評価体制 (慶熙大学の例)	嶋 田 敏 行 (評価室)、白 根 純 人 (総務部) ……………	61
VCSを使用した教養英語プログラム	ロバート・ベッツ (人文学部)、ジョーン・マクレーン (筑波大学外国語センター) ……………	65
教養教育に関する授業の実践報告		
推奨授業実践報告：授業を平和学する試み—レスポンス・シートを使って—	蓮 井 誠一郎 (人文学部) ……………	81
推奨授業実践報告：ものづくり創成実践	前 川 克 廣 (工学部) 他……………	91
茨城大学新入生の実態に関する調査研究第二報 (資料)		
	大 辻 永 (教育学部) 他 ……………	103
教養科目推奨授業選定の経過及び結果 ……………		111
ニュースレター「ローザ・ブルムラ」の軌跡：No.13~17 ……………		119
平成16年度大学教育研究開発センター活動内容		
大学教育研究開発センター活動の経過 ……………		175
大学教育研究開発センター関係委員名簿 ……………		178

巻 頭 言

早くもこの3月で国立大学が法人化されて1年が過ぎることになる。まだ法人としての体制が整ったとは言いがたい状況であるが、「中期計画」や「大学評価」がどのようなものなのか、その意味がようやく分かってきた感じである。昨年の巻頭言で次のようなことを書かせていただいた。法人化はわれわれが自ら望んだものではないが、それへの作業は、真の大学改革を意図したものでなくてはならない。そして、何よりも教育における「質の保証」に取り組むべきである。具体的に言えば、ガイドラインに沿った授業科目編成と点検評価、そして評価結果に基づく改善というサイクルを早く確立することが必要である。すなわち、最近よく言われる「PDCA」サイクルの確立である。また、教養教育で何を目指すのか、みんなの元気が出るようなプラカードめいたものを作ることも大事であると言った。

さて、このようなことがどの程度進んだのか気になるところであるが、かなりの進展があったと思っている。何よりも、茨城大学の教育力の向上を目指した3年計画の「教育力向上プロジェクト」(概算要求)が採択されたことである。2～3年前から旧総合計画委員会等のもとで、教養教育の運営体制を抜本的に見直し、大学教育研究開発センターをより全学性の高いものにする改革案が検討されてきたが、この概算要求は答申された改革案の実現をはかろうとするものである。今後、概算要求書にある年次計画に沿って、教養教育の運営体制や大学教育研究開発センターは次第に大きく生まれ変わるようになるであろう。

しかし、最終的には授業の質を支えるものは、教員ひとりひとりの努力であると思う。運営体制やセンターは、その努力を支えるための仕組みであり、努力のし甲斐のある雰囲気をつくるためのものであると思う。さしあたっては、PDCAサイクルの確立が最重要事項ではあるが、今後、もっと各人の教育活動への支援体制を充実していかななくてはならないだろう。上記の概算要求で謳った「全学生の高いものにする」の内容は、この各人への支援体制の充実などを意味している(例えばeラーニングの支援等)。

本年報では、以上のような「教育力の向上」に基礎を与えるような考察や活動報告を提供したいと考えている。今号は、教育の評価システムに関する話題や推奨授業の実践報告などを取り上げている。これらを多くの人で共有し、茨城大学の「教育力の向上」につなげたいと願っている。

平成17年3月

大学教育研究開発センター長

曾 我 日 出 夫

平成15年度教養教育シンポジウム

平成15年度

茨城大学教養教育シンポジウム

これまで茨城大学大学教育研究開発センターでは、毎年「教養教育シンポジウム」や「FD研究会」を実施し、教養教育システムの改革・改善に取り組んできました。

今年度は、法人化後の大学教育を念頭において、本学が多様な社会的ニーズに即対応しうる教育力の再構築を推進するために、教育力を支える「質」と法人化により一層の重みを増す「保証」をテーマに、「教養教育における“質の保証”因子の探索」と題して教養教育シンポジウムを企画いたしました。

日 時：平成16年2月20日（金）13時15分

場 所：大学会館（茨苑会館）2F 第7～9集会室

参加対象：茨城大学全教職員、学生及び学外者

日 程：

13：15 オープニングアドレス

大学教育研究開発センター長 曾我 日出夫

13：20 招待講演「江戸時代の教育と現代」

講演者：茨城大学教育学部教授 鈴木 暎一

（司会：大学教育研究開発副センター長 横山 功一）

14：20 休 憩

14：30 「教養教育における“質の保証”因子の探索」

全学点検評価「教養教育」からの探索（30分）

茨城大学副学長 田切 美智雄

15：00 「GPA導入」からの探索（30分）

茨城大学副学長 池谷 文夫

15：30 「“質の保証”システムづくり」からの探索（30分）

大学教育研究開発センター長 曾我 日出夫

16：00 「習熟度教育導入」からの探索（30分）

大学教育研究開発副センター長 永井 典子

16：30 休憩

16：45 総合討論

（司会：大学教育研究開発副センター長 横山 功一）

17：45 学長挨拶

茨城大学学長 宮田 武雄

18：05 閉会

（進行係 阿久津 克己）

*教養教育シンポジウム終了後に、懇親会（時間：18:30～19:30、会費：3,000円）を大学会館（茨苑会館）で開催いたしますので、ご参加ください。

主催：茨城大学大学教育研究開発センター

問い合わせ先

水戸市文京2-1-1 茨城大学大学教育研究開発センター内 教養管理係

Tel. 029-228-8414 Fax. 029-228-8499

招待講演

「江戸時代の教育と現代」

鈴木 暎 一 (茨城大学教育学部 教授)

講演要旨

(1) 江戸時代、特にその後半期は教育爆発の時代といわれる。大は百万石から小は一万石に至るまで、藩はほとんど例外なく学校(藩校)を持ち、城下にはいくつもの私塾が開かれ、どんな小さな村にも必ず一つや二つの寺子屋が存在した。

藩校では儒学の基本文献である四書・五経の修得が課業の中心で、そのために、講義、会読、輪講、質疑など様々な形が工夫され、知識の定着が図られたが、そのベースは、素読にあった。

一方、私塾と寺子屋では、読み書き・ソロバンだけでなく、地理、歴史・産業・数理など多様な分野にまで学習の幅を拡げていたところも多く、そこでは、「智」と「財」とを比較し、後者の有限的価値よりも前者の無限的価値を強調し、この「智」に至るプロセスとして、刻苦して読書に励み、勤労に出精すべきことを諭すところに共通性が見られた。『実語教』の、「山高きが故に貴からず、樹あるを以て貴と為す。人肥ゆるが故に貴からず、智あるを以て貴と為す」はその好例である。徹底した習字と暗記によって「智」の増進を図ろうとしたのである。

幕末に駐在公使として来日したイギリス人オールコックは、

日本では、教育はおそらくヨーロッパの大半の国々が自慢できる以上に、よくゆきわたっている。(『大君の都』)

と述べ、明治7年に政府に招聘されたお雇い外国人の一人、ロシアのメーチニコフは、2年近くの滞在経験を基に、

日本の文化は、近年のヨーロッパの文明のレベルに達していた訳ではないが、そのかわり、都市及び農村の最下層にまであまねく浸透していた。(『回想の明治維新』)

と記している。外国人の眼で、当時の教育普及の実態を的確に捉えた言葉と言えよう。こうした教育の全国的な普及こそ、わが国が近代国家として発展していくことができた要因だったことはいまでもない。

(2) しかも、江戸時代の教育は、民間主導で展開した点に大きな特徴がある。どこの地方でも多数の私塾や寺子屋が自然発生的に開設され、こうした広汎な民間の教育的関心の高まりを背景に、18世紀以降、藩校が次々と開設されることになるのである。

この時代、隣国の中国や朝鮮では、国家が教育の制度を整え、官主導でこれを行っていたのに比較すると、わが国では逆の傾向を示し、官営の教育機関の設立を待たず、それぞれの地域の実情に即し、民間人により主体的・積極的に教育の普及が図られたのである。

(3) その実例を、水戸藩について見てみよう。

19世紀初頭、城下では既に手習いの私塾が40、武芸を学ぶ私塾が140ほど存在していた。そこでは1塾5、6名が普通だったが、青山拙斎の手習い塾には70余人の門弟が学び、藤田東湖の青藍舎ではその妹が女子の教育を担当していた。これら城下の私塾は、武士だけでなく、庶民の入門も許したので、近郷近在から、あるいは通学し、あるいは内弟子として師匠と起居を共にする者もあった。城下成沢村の加倉井砂山の日新塾は、北関東随一の規模を誇り、

最盛期には100名を越す門弟がいて、遠く会津・越後から笈を負うて学ぶ者さえいたほどである。私塾・寺子屋では師弟間の情誼が厚く、学問・教育の普及と精神的感化という点では藩校にまさるものがあった。

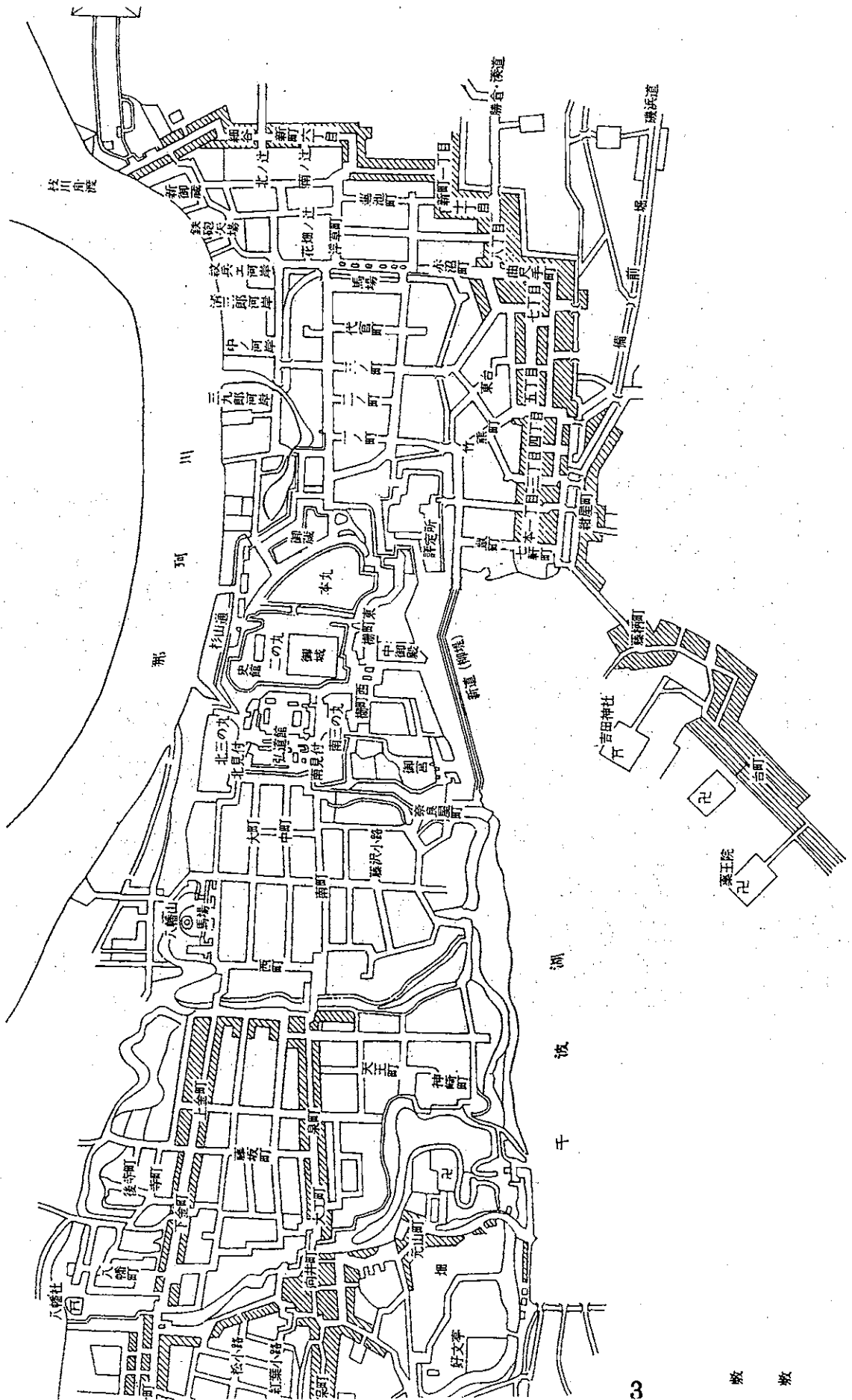
水戸藩でその藩校弘道館が開設されたのは19世紀半ばの天保12年（1841）である。弘道館は、藩校としては全国一の敷地5万4千坪を有し、文館・武館・医学館・天文台・調練場・馬場などの施設を備え、15歳から40歳までの藩士が通学した。文館については、試験に合格しなければならず、入学後も身分に関係なく学力による階級制が採られていた。しかも、「弘道館記」によって文武一致以下5項目を柱とする教育理念が明示され、その精神に基づき、校舎の配置に独自の工夫がなされていた。教育課程については、総合大学と呼ぶにふさわしい内容を備え、先見性、実践性、国家的視野を持つ人材の育成を目指したのである。

なお、14年からは江戸の小石川藩邸内にも藩校（江戸弘道館）が設けられ、在府の藩士教育が始まった。

また、藩内各地には郷校と呼ばれる教育機関もあった。郷校はまず、民間有志によりおもに郷医研修の場として5校が次々と開設された。藩校設立以後はさらに増設されて計15校となり、文武の教場も備える半官半民の施設となった。郷校は幕末期、政治運動の拠点となったところが多い。

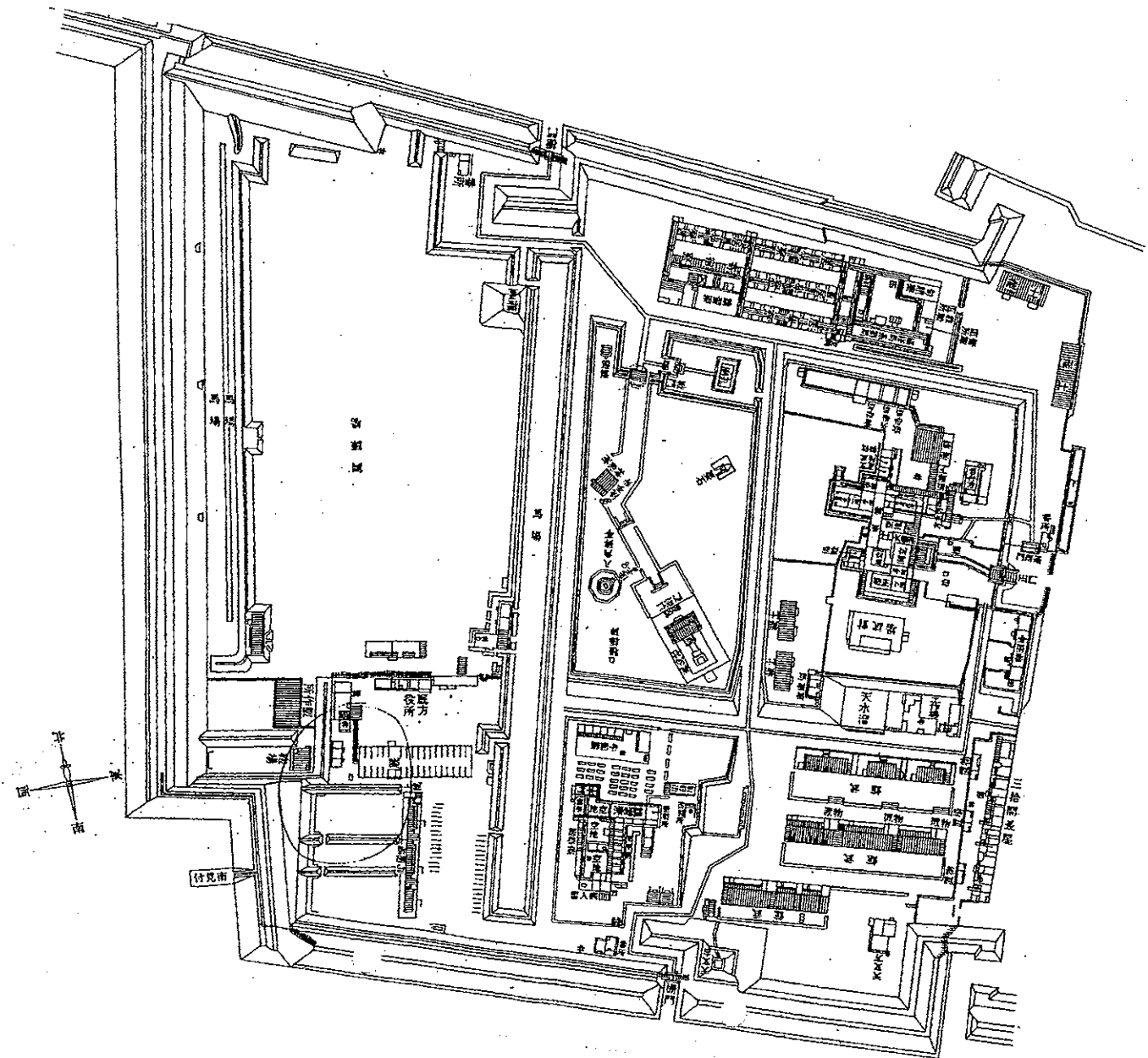
(4) 「教育爆発」の様相は、水戸地方でも顕著であった。教師の人格・識見・学力による競争的環境の中で、素読を基本に反復練習を重ね、「智」の定着とその重要性を説いた私塾と寺子屋。その基礎の上に立ち、明確な教育理念のもと、国家有為の人材育成を図った藩校。地域の具体的課題解決のための実践的能力開発に努めた郷校。

それぞれの教育機関がそれぞれの使命を担って行った教育のあり方をふり返ってみると、そこには、時代を超えて変わらぬ教育の本源について考えさせられるところが少なくないと思われる。

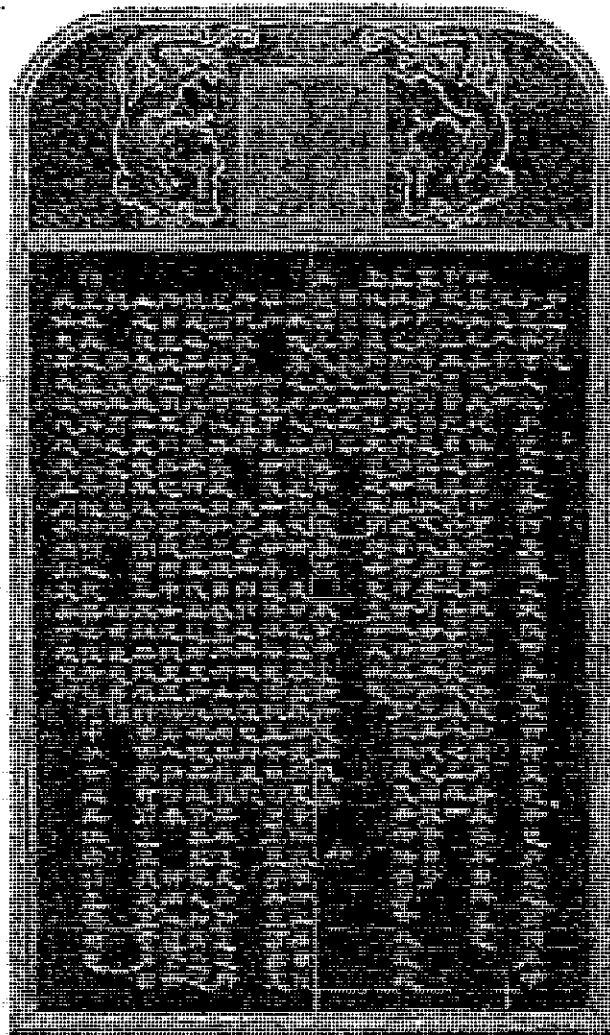


33

敷 敷



4



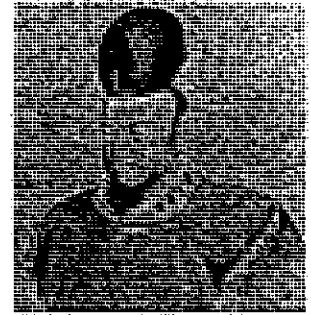
「弘道館記」の拓本



会沢正志斎肖像（水戸市・会沢安之氏所蔵）



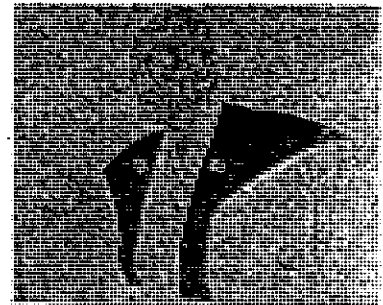
森田徳右衛門肖像（高松藩二階堂「四谷全忠」より）



徳川斉昭肖像（熊本と明治の博物館所蔵）



森田徳右衛門肖像（茨城県立歴史館所蔵）



青山拙斎肖像（茨城県立歴史館所蔵）

人よく道を弘む。道を世に弘め行つ力は、人に備つてゐる。道は人の力によつて世に行われる。の故。論語、衛道公「子曰、人能弘道、非道弘く入也。」

天地の大経。天地の間に備つてゐる大道。経は常。中庸三十二章「唯天下至誠、參能賛天下之大経」。立「天下之大本」。知「天地之化育」。生民。天下の人民。人たる者。須臾も少しの間も阻れることはできない。中庸一章「道也者、不可須臾離也、可離非道也。」

神監。紀紀神話の神々。一五一頁注撰を立て。極は極道の極端となるもの。尚書、洪範「皇極、其有極」。孔丘に「極、中也」。蔡氏に「極、北極之極」。至徳之義。極端之名。中立而四方之所取。正徳者也。

統を垂れ、子孫に傳承させる。御宗元の盤山柱「立統垂統、施于後嗣」。

天地位し。天地の位置が定まる。中庸一章「致中和、天地位焉、萬物育焉」。

六合以明統。徳八統、而為天下不亦可乎。六内。天下。萬は字の古字。類聚「しん」とも言説する。右の天地の大道を指す。

至精。天皇の位。

固体。固の才が。貞風。

弘道館記

弘道とは何ぞ。人、よく道を弘むるなり。道とは何ぞ。天地の大経にして、生民の須臾も離るべからざるものなり。弘道の館は、何のために設けたるや。恭しく惟みるに、上古、神聖、極を立て、統を垂れたまひて、天地位し、万物育す。その六合に照臨し、萬内を統御したまひし所以のもの、未だ嘗て斯道に由らざるなり。至精、これを以て無窮、固体、これを以て尊嚴、蒼生、これを以て安寧、至美、これを以て率服す。しかも聖子神孫、なほ肯へて自から足れりとせず、人に取りて以て善をなすことを樂しみたまふ。すなはち西土唐虞三代の治教のごときは、賢りて以て皇統を賛けたまへり。ここに於て、斯道いよいよ大に、いよいよ明らかにして、また尚ふるなし。中世以降、異端邪説、民を誣ひ世を惑し、俗儒曲學、此を合せて彼に従ひ、皇化陵夷し、禍亂相踵ぎ、大道の世に明らかならざるや、蓋したま久し。

我が東照宮、撥亂反正、尊王攘夷、尤に武、尤に文、以て太平の基を開きたまふ。吾が祖威公、実に封を東土に受け、夙に日本武尊の為人を慕ひ、神道を尊び、武備を繕む。義公、感述し、嘗て感を夷齊に発し、さらに播教を崇び、倫を明らかにし、名を正し、以て國家に藩屏たり。兩米百数十年、世、遺緒を承け、恩沢に沐浴し、以て今日に至れり。以て

蒼生 人民。あおひとく。

至精 服従。尚書、洪範「至精車版」。聖子神孫 神聖の子孫。歴代の天皇。人に取りて。人の善を取つて、自らも善を行つことを樂しむ。孟子、公孫丑上。一・二・三頁注。

西土 西方の國。中国を指す。

唐虞三代 唐は堯の、虞は舜の國号。三代は夏・殷・周。儒教において理想とされる時代。治教は政治教化。

皇統 世を治める大きなはかりごと。中世以降、仏教伝来のころ以後、異端邪説、主に仏教を指す。

俗儒曲學 見識が低く、世俗に迎合する學者たち。「此」は日本。「彼」は中国、儒者の外國崇拜を指す。

皇化陵夷 天皇の徳化がしだいに衰退する。朝福の衰退を指す。

至美 徳川家訓。「我は親愛の辭、亂反正、徳は治、乱世を治めて正道にかへす。公羊伝、哀公十四年「變風世反、禮正、莫近禮春秋」。尊王攘夷、皇室を尊び、夷狄を攘う。

盤山 鹿岡（菅仲相祖公）即「盤山」「一匡天下」の朱注「匡、正也」。周室 漢夷狄、皆所以正天下也。尤に武。 詩經、豳風、采芣。威公 初代藩主頼房の諡号。

封、封女 親地。東土は常陸を指す。至公 二代藩主光圀。論述は父祖の志を継ぎ、その事業を推廣させる。中斷十九章「夫至者、善與人之心、善與人之心者也」。

弘道館記

すなはち苟しくも臣子たる者は、豈に斯道を推し弘め、先徳を慕揚する所以を思はざるべけんや。これすなはち館の、為に設けられし所以なり。そもそも、夫の建國當神を祀るものは何ぞ。その、天功を草昧に充け、成道をこの土に留めたまへるを以て、その始を原ね、その本に報い、民をして斯道の蘇りて来るところを知らしめんと欲するなり。その孔子廟を營むものは何ぞ。唐虞三代の道、ここに折衷するを以て、その徳を尊り、人をして斯道のますます大にして且つ明らかなる所以の、偶然ならざるを知らしめんと欲するなり。

嗚呼、我が國中の士民、夙夜解らず、斯の館に出入し、神州の道を奉じ、西土の教を究り、忠孝二元く、文武較れず、學問・事業、その効を殊にせず、神を敬ひ儒を崇び、偏党あるなく、衆思を築め群力を宣べ、以て國家無窮の恩に報い、すなはち豈にただに祖宗の志、墜ちざるのみならんや、神皇在天の靈も、またまさに降臨したまはんとす。

斯の館を設けて、以てその治教を統ぶる者は誰ぞ。樞中納言從三位源朝臣齊昭なり。

天保九年歲次戊戌春三月、齊昭、撰文、并びに書、及び篆額

弘道館記

弘道者何、人能弘道也、道者何、天地之大経、而生民不可須臾離者也、弘道之館、何為而設也、恭惟上古、神聖、立極垂統、天地位焉、万物育焉、其所以照臨六合、統御萬内者、未嘗不由斯道也、至非以之無窮、固体以之尊嚴、蒼生以之安寧、至美以之率服、而聖子神孫尚不肯自

皇孫齊昭に発し、伯夷、叔齊の伝(史記、伯夷列傳)を讀み、兄弟が國君の地位を譲りあふた徳に感服して、倫を明らか、人倫の道徳を明らかにし、君臣の各分を正しくする。主に大日本史の編纂を指す。

漢屏、一一二頁後、遺業、尚書、

書、

建御雷神、

天孫降臨に先立ち、出雲に下

つて、大己貴神(大國主神)から葦原

中國の支配権を譲渡させた武神。

威靈をこの上、鹿島神社の祭神

として常陸に遷座している。

本に預し、一五三頁後、

孔子を道の基準とするの意、折衷は、事を取捨してその

中を定める。史記、孔子世家の文、

國中の士民、水戸殿下に住む藩士な

らびに武蔵奉公人を指す。

夙夜匪懈す、朝早くから夜遅くまで

勤励する。神皇正統、

忠孝三光く、忠と孝とは根本に在り

て一であることを知るの意、

半問事業、學問と英社会の活動と、

偏愛あるなく、一方に偏らす。尚書、

洪範「無偏無党、王道荡荡。」

深恩をまつ、多くの人の考えを

集め、その力を発揚させる。

祖宗、藩の祖先たる成公、顯公、

神皇、神々と歴代の天皇、

降筆、天より人間界のことを見る。

足、榮取於人以爲善、乃若西土唐虞三代之治教、齊以贊、皇猷、於是新道命大命明而無復尚焉、
中世以降、異端邪說、匪民惑世、俗備曲學、會此從彼、皇化懷夷、禍亂相踵、大道之不明於世
也蓋亦久矣、我、東照宮撥亂反正、尊、王權、允武允文以開太平之基、吾祖、威公受封於東
土、夙暮、日本武尊之爲人、尊神道、結武備、義公繼述、管堯感於夷齊、更崇儒教、明倫正名
以辨異於、國家、爾來百數十年、世承遺緒、沐浴恩沢、以至今日、則苟爲臣子者、豈可弗思所以
推弘新道、甞揚、先德乎、此則紹之所以爲說也、抑夫祀、建御雷神者何、以其亮天功於草昧、留
威靈於茲土、欲原其始、報其本、使民知新道之所繇來也、其嘗孔子廟者何、以唐虞三代之道折衷
於此、欲飲其徳、實其教、使人知新道之所以益大且明、不偶然也、嗚呼我國中士民、夙夜匪懈、
出入新道、率、神州之道、廣西土之教、忠孝无二、文武不岐、學問事業、不殊其効、敬神崇儒、
無有偏党、集衆思、宣群力、以報、國家無窮之恩、則豈徒、祖宗之志弗墜、神皇在天之靈亦將
降鑒焉、設新館以統其治教者誰、權中納言從三位源朝臣齊昭也、
天保九年歲次戊戌春三月、齊昭撰文并書及露頭、

表12 素読・講釈吟味実施一覽

指南姓名	実施年月日																										
	文化8年												9年												10年		
	5	5	6	6	7	8	9	10	10	11	12	12	1	2	3	4	5	5	6	6	7	8	9	10	10	12	12
	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1515
伊藤友次郎	○																										
中村与一衛門	○																										
立原翠軒	○	○																									
向坂慎節	○																										
伊藤左一衛門	○	○																									
寛右平	○																										
藤田次郎左衛門	○	○																									
高橋又一郎	○	○																									
青山堂助(介)	○																										
宇佐美久五郎	○																										
吉田本助(介)	○																										
大竹与五兵衛	○																										
石川久次衛門	○																										
佐々木佐次郎	○																										
小宮山次郎衛門	○																										
谷佐之衛門	○																										
佐々木彦吉	○																										
鶴殿八大夫	○																										
安松七郎兵衛	○																										
村田弥一郎	○																										
庄司玄秀	○																										
小田倉十大夫	○																										
飛田勝太郎	○																										
村田隆民	○																										
菊池治兵衛	○																										
秋山豊之助	○																										
横山吾平太	○																										
川上庄八郎	○																										
萩谷八助	○																										
都筑惣八郎	○																										
堀清衛門	○																										
久保田永介	○																										
堀長次郎	○																										
飯村富吉	○																										
郡司三之介	○																										
広瀬伝五衛門	○																										
清水基衛門	○																										
竹下吉左衛門	○																										
富田理助	○																										

注 ○は素読吟味, ⊙は講釈吟味を示す。

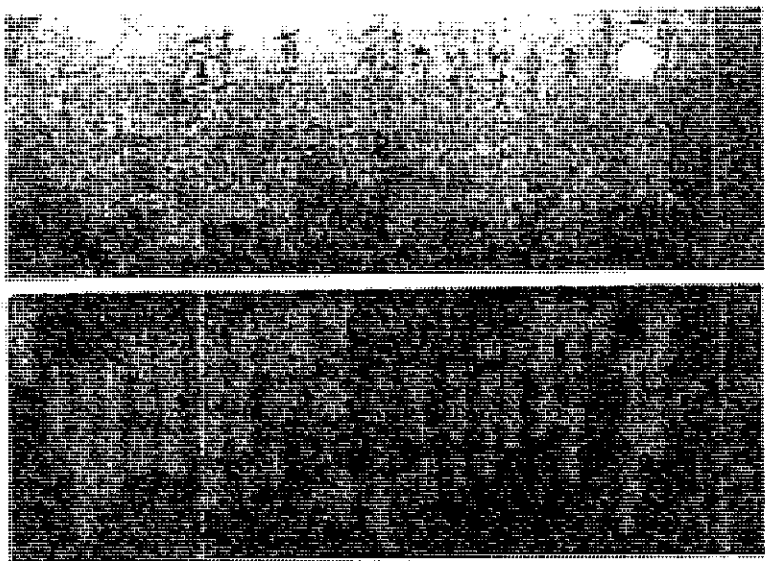
表10 武芸指南者一覽 (文化7年3月)

流儀	指南者人数	姓名
槍術	9	原田兵助, 岡本野水, 酒井平衛門, 猪飼伝八, 深沢茂衛門, 谷田部藤七郎, 岡見治平, 山内善左衛門, 布施太郎八
長刀	7	白石又衛門, 佐久間伝介, 天野竜衛門, 平山弥次郎, 谷田部覚衛門, 三宅十衛門, 西野庄藏
居合	18	林十左衛門, 片山太郎吉, 陸山又十郎, 斎藤三郎大夫, 井出弥八郎, 三宅十衛門, 滝重兵衛, 渡辺久介, 佐藤権内, 駒井藤次郎, 駒田八十郎, 谷田部藤七郎, 奥山市之衛門, 加治平内, 河野利左衛門, 谷佐之衛門, 高橋与之衛門, 鈴木【】
兵法	14	内藤弥大夫, 横山謙殿藏, 床井彦大夫, 市毛谷衛門, 伊藤左一衛門, 鬼沢尉藏, 寛庄藏, 小田源太左衛門, 君島藤内, 宮田三郎介, 岡見基内, 三木陸衛門, 鶴殿平七, 佐藤政之進
剣術	8	皆川源大夫, 堀口庄大夫, 栗田郡司, 三谷政弥太(大劍), 中山半衛門, 鳴海弥衛門, 白須又藏, 坂内忠次衛門(両劍)
柔	10	梅沢孫太郎, 坂内忠次衛門, 山本新五郎, 芳賀庄兵衛, 武平次(町同心), 天海政五郎, 国分弥惣衛門, 石野源次郎, 小田野与一郎, 嘉藤次(町同心)
長剣	6	内藤林之平, 堀口庄大夫, 河野利左衛門, 岡本小兵衛, 矢野長九郎, 国分弥惣衛門
陣鎌	2	白須又藏, 天野竜衛門
兵学	3	谷倉十郎, 安積三郎衛門, 谷左之衛門
軍用	7	富田理介, 井上辰左衛門, 山本新五郎, 佐野孫兵衛, 徳大寺左兵衛, 根本新平, 岡本小兵衛
射術	14	池上新衛門, 渡辺太郎左衛門, 太田彦衛門, 太田彦八郎, 横屋半大夫, 佐野四郎衛門, 庄五次衛門, 榊原新次郎, 佐々兼殿介, 尼子久藏, 鳴海何衛門, 芹沢介次郎, 朝倉稻母之介, 佐々木雲八
鉄砲	16	兼子八十衛門, 岡山次郎兵衛, 多賀谷勘兵衛, 安松伊織, 美濃部又五郎, 竹谷忠衛門, 高山角馬, 跡部田宮, 河方内蔵, 尾崎権大夫, 神代奎大夫, 駒井藤次郎, 佐藤権内, 白石丹次衛門, 横屋半大夫, 松平源藏
馬術	11	大田原伝内, 河方善兵衛, 瀬谷竜左衛門, 小川喜衛門, 岡見治太衛門, 江橋市左衛門, 堀口幸介, 岡見弥七, 堺野伝三郎, 後藤政衛門, 加藤丹次
踏礼	5	加藤伝之衛門, 石川治左衛門, 岡見基内, 益子小作, 新井宗左衛門
火術	5	堺和角之九, 根本新平, 梅沢孫太郎, 本郷金衛門, 徳大寺左兵衛
水術	4	宮本源藏, 松村伝七郎, 市川吉【】, 太田【】
騎術	1	榎本四郎兵衛
居物	1	遠山忠三郎
三島流	1	前田介十郎

注【】は欠損のため不明の部分(欠損していても他の部分の記載で判明した者は書き入れてある)。



会沢正志斎・青山佩弦斎「文館日録」(本文354頁参照)、茨城県立歴史館所蔵



藤田東湖「塾生来往簿」(上)と「塾生寄宿料之覚」(下)(本文466・467頁参照)、共に水戸影考館所蔵

附属図書館所蔵
 佐藤一斎宛徳川斉昭書簡

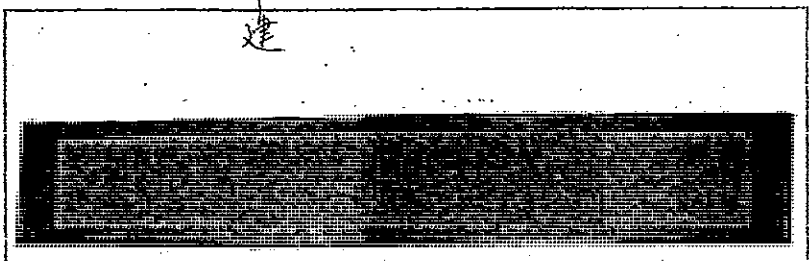
この書簡は、第九代水戸藩主の徳川斉昭が天保八年(一八三七年)九月三日付で佐藤一斎に宛てたもの。一斎は「言志四録」の著者として高く、林家の塾長や幕府の儒官を勤めた。

斎(ともに弘道館初代人物)にも意見を徴し、参考にして自身で裁定し、三月、現在みる「弘道館成するのである。」

教育学部 教授 終

藤田東湖が斉昭の命を受け、藩校の建学主旨を記した「弘道館記」の原案を起草し、これを斉昭に提出したのは、同年七月三日であるが、九月一日になって斉昭はまた東湖に、記文についての批評を求めたため一斎に書簡を送りたいので草稿を認めるよう指示した。東湖が三日にこれを斉昭に届けると、斉昭は即日直筆に認め直して送付した。これが本学附属図書館所蔵の斉昭書簡である。

その内容は、前段で神儒一致、文武一致の教育を目指す学校を建てるべく、その主旨を文章にしたことを述べ、つぎに構内に孔子と鹿島神宮の祭神(武御魂神)を祭ることとした理由を記し、最後にどうか存分の派削を願いたい、が、学校が出来るまでは他見無用にしてほしい、と結んでいる。



氏名	講習	15日詰	9	8	17
伊藤徳之允			7 ¹ / ₂	9	16 ¹ / ₂
市川主計(三左衛門惣領)			8 ¹ / ₂	17 ¹ / ₄	25 ³ / ₄
石原繁八郎(主馬惣領)			11 ¹ / ₂	13 ³ / ₄	25 ¹ / ₄
遠山熊之助(電介惣領)			8 ¹ / ₂	9 ¹ / ₂	18
河方善太郎(善兵衛惣領)			10 ¹ / ₂	10 ³ / ₄	21 ¹ / ₄
朝比奈宗平(弥太郎惣領)			9 ¹ / ₄	3 ¹ / ₂	12 ³ / ₄
△野中順藤			8	7	15
赤林敦馬(三郎兵衛惣領)			9	8 ¹ / ₂	17 ¹ / ₂
雄賀八五郎(孫市惣領)					
肥田大助					
井上 錫(次郎大夫惣領)	講習	12日詰	9	3 ¹ / ₂	12 ¹ / ₂
市川亀次郎(市平惣領)					
小川徳次郎			8 ¹ / ₄	6 ³ / ₄	15
○小原勝之介(忠次郎惣領)			19	6	25
小笠原勝太郎(五兵衛惣領)			5 ¹ / ₂	7 ¹ / ₂	13
岡村定之允(太左衛門惣領)			17 ³ / ₄	2 ¹ / ₂	20 ¹ / ₄
川瀬介之允(準太惣領)			11	8 ¹ / ₄	19 ¹ / ₄
河西西太郎(源七惣領)			10 ¹ / ₂	8 ¹ / ₂	19
吉成勇太郎(又衛門惣領)			7	11 ¹ / ₂	18 ¹ / ₂
高田卯之允			5	7	12
高橋又左衛門			7 ¹ / ₂	8 ¹ / ₂	16 ¹ / ₂
高山祐吉(勝五郎惣領)			7 ¹ / ₂	5 ¹ / ₂	13
名越小十郎					
山国喜太郎(喜八郎惣領)			8 ¹ / ₄	7	15 ¹ / ₄
藤田季彦			6 ³ / ₄	7 ¹ / ₂	14 ¹ / ₄
福原登介			8	7	15
小池源太衛門			4 ¹ / ₂	9 ¹ / ₂	14
近藤常五郎(団介弟)			5	13 ³ / ₄	18 ¹ / ₄
新井謙吉			9 ¹ / ₂	6 ³ / ₄	16 ¹ / ₄
佐野勝八郎(孫兵衛惣領)			7	6	13
佐治省太郎(七衛門惣領)			9	3 ¹ / ₂	12 ¹ / ₂
三浦平太郎(養男惣領)			4 ¹ / ₂	20	24 ¹ / ₂
宮寺辰介(忠衛門惣領)			17 ³ / ₄	0	17 ³ / ₄
久木直次郎(清大夫惣領)			2 ¹ / ₄	11 ¹ / ₄	13 ¹ / ₂
望月綱藏(四郎大夫惣領)			13 ¹ / ₂	6 ¹ / ₂	20
鈴木鉄藏(庄次郎惣領)			3 ¹ / ₂	1	4 ¹ / ₂
鈴木秀五郎			4 ¹ / ₂	5 ¹ / ₂	10
井上藤太郎	講習	10日詰	6 ³ / ₄	5	11 ³ / ₄
池上巳之介(新衛門惣領)			5	8 ³ / ₄	13 ¹ / ₂
磯野七次郎			11	5 ¹ / ₂	16 ¹ / ₂
石橋為八郎			1 ¹ / ₂	1	1 ¹ / ₂
井出徳太郎(弥八郎惣領)			6	6	12
原田八兵衛(兵助惣領)			11	6 ³ / ₄	17 ¹ / ₂
服部初太郎(源七郎惣領)			10 ¹ / ₂	3	13 ¹ / ₂

文武共不参
10月9日より不快、24日
よりは忌中にて相引

文武共不参無届

不快に付、日数不足
不快に付、日数不足

病氣不快に付、日数不足

表 14 天保 12 年 10 月における文武出精状況

姓 名	会長・居学・講習・軍書の別と 登館すべき日数	登 館 日 数			摘 要
		文館	武館	計	
△鈴木主膳(石見守弟)	会学 7日半詰	1	0	1	
获吉次郎(庄左衛門次男)	" 12日詰	13 ¹ / ₂	7 ¹ / ₄	20 ³ / ₄	
石川秀太郎(嘉大夫惣領)	" 5日詰	7 ¹ / ₄	0	7 ¹ / ₄	
坂 橋 龍 吉	" 勝手	8 ¹ / ₂	1 ¹ / ₂	9	
安食喜八郎(七兵衛惣領)	" 6日詰	10 ¹ / ₄	0	10 ¹ / ₄	
佐野順次郎(勤兵衛次男)	" 10日詰	11 ¹ / ₄	0	11 ¹ / ₄	
鶴殿平太衛門	" 勝手	3	0	3	
藤咲密三郎	居学 12日詰	8	6 ¹ / ₂	14 ¹ / ₂	
児玉園衛門	" "	12 ³ / ₄	1	13 ³ / ₄	
青山鉄三郎(曼介三男)	" "				10月中より不快に付相引 候旨届あり
友部八太郎(正介惣領)	" "	13	1 ¹ / ₂	13 ¹ / ₂	
大橋松次郎	" "	13	5	18	
美濃部新藏(又三郎惣領)	" "	6	8 ¹ / ₄	14	
彦坂定之助(小十郎惣領)	" "				10月2日より不快に付相引。 11月3日より罷出旨
山崎三郎衛門(源七惣領)	" "	7 ¹ / ₄	6 ³ / ₄	14	
石川竹之介(徳五郎惣領)	" "	6	5	11	
佐藤 登 平(平三郎惣領)	" "				9月中より温厩にて相引
鹿島又四郎(又三郎惣領)	" "	5 ¹ / ₂	9 ¹ / ₄	14 ³ / ₄	
住谷寅之助(長大夫惣領)	" "	12 ¹ / ₂	1 ¹ / ₂	14	
若瀬介七郎(介左衛門惣領)	" "	11 ¹ / ₄	4	15 ¹ / ₄	
豊島源次郎(源八郎次男)	" "	14	5 ¹ / ₂	19 ¹ / ₂	
松崎 新 介(新八郎惣領)	" "	16 ¹ / ₄	2	18 ¹ / ₄	
小林多一郎	" "	16 ¹ / ₄	5 ¹ / ₄	21 ¹ / ₂	
小田部季吉(長八郎惣領)	" "	6	17 ¹ / ₂	23 ¹ / ₂	
菊池万之介(善左衛門惣領)	" "	8 ³ / ₄	6	14 ³ / ₄	
名越吉次郎(平藏惣領)	" "				御軍用御厩中勝手
加藤木左内衛門(庄八郎惣領)	" "	6	6 ¹ / ₂	12 ¹ / ₂	
榎沢辰藏	" "	9	0	9	
堀 七之介(清左衛門惣領)	" "	13 ¹ / ₄	4	17 ¹ / ₄	
石川權次郎(嘉大夫次男)	居学 8日詰	10 ³ / ₄	4	14 ³ / ₄	
菊池真三郎(善左衛門次男)	" "	4	1	5	願の上江戸へ登り日数不足
倉次隆五郎(親之助弟)	" "	21 ¹ / ₄	1 ¹ / ₄	22	
佐野五三郎(七郎兵衛次男)	" "	8 ³ / ₄	3 ¹ / ₂	12 ¹ / ₄	
△获吉太郎(庄左衛門惣領)	居学 7日半詰	5 ³ / ₄	1 ¹ / ₂	6 ¹ / ₄	
△佐野右膳(勤兵衛惣領)	居学 6日詰	4 ¹ / ₂	2	6 ¹ / ₂	
堀 玄 友(道玄惣領)	" "				文館、武館の記載なし
井坂登次郎(兵左衛門次男)	居学 4日詰	6 ¹ / ₄	4	10 ¹ / ₄	
小野鉄之助(新平弟)	" "	16 ¹ / ₄	2	18 ¹ / ₄	
△西 三 善	居学 3日詰			1	文館、武館の記載なし

後編 水戸藩校弘道館の教育と士庶の向学

夫治天下必有法度治國家必有法度有法度者去廢則天下國
 州里不能治法度立而後擁在上擁在下而後有威而後實則行
 行則此之可以制也今有法家者其法者七十有餘人其法者十五
 世幼者七歲其法之也有法度其進退周旋以法度其精粗備者
 必賞罰別其明嚴門戶爭先會客執事皆拜揖曰先生之客其當
 在座之中央敬之則群童皆恐懼左手執事右手執事皆拜揖曰
 日而不從又無出一言者皆羞且不在家則不然有法者有法者
 者有怒者有涕者其法者是諷人之怒者也其笑者是其法者有
 誰者也其喜者是為俳優之狀者也其怒者是宜爭相爭者也其
 是所法其法者也其法是操臂開眼天比之曰子等何為不字其法
 之野童意氣向者亦無懼也何法者何為不字其法者何為不字
 非先立之命不敢執事且子志勿時豈在法乎如法何也去力非不
 之力吾勇非不及家君之勇然家君從法教之心雖難其事以甚有
 也吾操臂欲教之或危投事以其法其法也其法也其法也其法也
 罰不能制之金謂之制家君制然天下國家之重事豈非法度乎
 今已焉法成之家無空可以為他日受美時云云

外器 秀林 本十 兵折	外器 秀林 本十 兵折	外器 秀林 本十 兵折	外器 秀林 本十 兵折	外器 秀林 本十 兵折	外器 秀林 本十 兵折
軍村 及是 之元	軍村 及是 之元	軍村 及是 之元	軍村 及是 之元	軍村 及是 之元	軍村 及是 之元
望月 劍簾	望月 劍簾	望月 劍簾	望月 劍簾	望月 劍簾	望月 劍簾
野井 宗五 印	野井 宗五 印	野井 宗五 印	野井 宗五 印	野井 宗五 印	野井 宗五 印
原原 八 御	原原 八 御	原原 八 御	原原 八 御	原原 八 御	原原 八 御
官軍 伏不	官軍 伏不	官軍 伏不	官軍 伏不	官軍 伏不	官軍 伏不
女精 德後 前媽	女精 德後 前媽	女精 德後 前媽	女精 德後 前媽	女精 德後 前媽	女精 德後 前媽
寬頭 介介 三邪	寬頭 介介 三邪	寬頭 介介 三邪	寬頭 介介 三邪	寬頭 介介 三邪	寬頭 介介 三邪
谷牛 吉	谷牛 吉	谷牛 吉	谷牛 吉	谷牛 吉	谷牛 吉

教養教育における“質の保証”因子の探索

—全学点検評価「教養教育」からの探索—

2004年2月20日

田 切 美智雄 (学術担当副学長)

1. 点検評価の概要

平成13年度と14年度の2年間にわたり、大学評価・学位授与機構によって、「教養教育」の点検評価を受けた。この点検評価システムは当時は2年目の段階で、試行的な側面をもったものであった。その意味で、機構側も大学側も手探りの状態で、点検評価が実施された。始めに評価方法の概要を紹介します。

まず平成13年度には事前調査が行われ、その後本調査が実施された。本調査では評価項目毎に要素が設定され、要素毎に観点を設けて自己評価を行うことから始められた。評価項目を整理して列挙すると、この点検評価による教養教育の“質の保証”の「ねらい」が何であったのか、明らかとなります。

1. 教養教育に関する目的及び目標

2. 評価項目ごとの自己評価

(1)実施体制

- ・要素(教養教育の実施組織に関する状況)：観点(教育課程の編成並びに運営のための組織形態、授業担当の教員体制、実施のための事務体制、教養教育の検討体制)
- ・要素(目的及び目標の周知・公表に関する状況)：観点(学内における周知、学外への公表)
- ・要素(教養教育の改善のための取組状況)：観点(学生による授業評価、点検評価及び改善を行うシステム、FD、学外との連携)

(2)教育課程の編成

- ・要素(教育課程の編成に関する状況)：観点(教育課程の編成の内容的な体系性、教養教育の編成の実施形態(年次配当等)の体系、教養教育と専門教育の関係)
- ・要素(授業科目の内容に関する状況)：観点

(授業科目と教育課程の一貫性)

(3)教育方法

- ・要素(授業形態及び学習指導法等に関する取組状況)：観点(クラスサイズと授業形態、導入教育・動機付けと学力の多様化に即した対応、学習指導法、シラバスの内容と使用法)
- ・要素(学習環境(施設・設備等)に関する取組状況)：観点(授業に必要な施設・設備、自主学習のための施設・設備、学習に必要な図書・資料、IT学習環境)
- ・要素(成績評価に関する取組状況)：観点(成績評価の一貫性、成績評価の厳格性)

(4)教育の効果

- ・要素(履修状況や学生による授業評価結果から判断した教育の実績や効果の状況)：観点(履修状況から見た教育の実績、学生の授業評価から見た教育の効果)
- ・要素(専門教育履修段階や卒業後の状況等から判断した教育の実績や効果の状況)：観点(平成8年度改革後の新体制への教員の評価、卒業生アンケートにみる教養教育の効果)

3. 特記事項

以上の概要をみても明らかなように、今回の「教養教育」の点検評価のねらいは、教養教育の授業内容改善ではない。どの要素・観点をみても、問われているのは大学が教養教育を実施する目的・目標であり、同時にその目的・目標を大学として常に点検評価しているかである。それを、点検評価の常道であるPDCAを置き換えて、「体制・編成・方法・効果」という観点で点検を求めたのである。つまり、大学評価・学位授与機構は、教育の「質の保証」を

大学における教育マネジメントに求めたのである。

2. 教育の「質の保証」はマネジメントによって示せる

大学評価・学位授与機構が、教養教育の「質の保証」を教育マネジメントに求めた根拠を考察してみる。

大学で行われている授業群には「質」の面からみて多様な状況にあることは想像できる。しかし、授業の「質」を上げることが教育の「質」が上がることと直結しない。授業の「質」は教育を受ける学生がおり、学生がどんな教育を受けたいかという意向（これは社会の要求の反映である）に依存している。つまり、授業の「質」は教員側の問題のみではなく、学生側（社会側）の評価の問題でもある。現在の入学生の学習の多様化や学習能力の変化を考えると、後者の方が大きな問題となっているのは、今や周知のところである。この課題に対して教員個人が努力できることは極めて限られている。大学や学部・学科が組織的に取り組まなければ、この課題に対処することはできない。これが教育マネジメントである。

別な側面もみておく必要がある。大学教員は必ずしも教育の専門家としての教育は受けていない。自己の経験と学術への理念によって最善の努力を教育に注いでいるのが通例である。この状態で、教員側の「質」を問題にしてもなんの解決にもならず、ただひたすら（何年も）授業の「質」の向上を求めるのは、教員を精神的に疲弊させるのみである。大学はこの時に教育マネジメントが必要となる。教員を疲弊させずに、教育の「質」の向上を図るために教育マネジメントが必要なのである。

教育の「質」の向上を図るための教育マネジメントは何か。それは、日本技術者教育認定基準を例に示すことができる。この基準は技術者教育という目標を前提として作られており、それだけ明瞭なものとなっている。基準は6項目ある。

基準1 学習・教育目標の設定と公開

技術者教育という範疇のなかで、どこに目標を設定するかが問われる。現在行われている技術から最先端の技術までである中で、大学の高等教育の課程としてどこに目標を設定するかの決定は、高度なマネジメント

である。学生の意向、社会の要求、学術の動向、そして大学の現状などを判断し、組織として決定される。その目標の妥当性は公開によって社会から評価されるのである。

基準2 学習・教育の量

どのくらいの単位を必要単位とするのか、さらには、学生と教員の相互学習時間は保証されているかが問われる。つまり、カリキュラムが体系化されているかどうかである。ただなんとなく出来上がった体系ではなく、目標と得るべき成果に沿った体系を求めている。これもマネジメントである。

基準3 教育手段

入学試験システムから、教育方法、教育組織まで、技術者教育というマネジメントに適合したものになっているかどうか問われている。

基準4 教育環境

学生が教育を受けることへの支援体制として、どうであるかという視点が求められている。これは施設マネジメントであるが、学生支援という重要なマネジメントでもある。

基準5 学習・教育目標達成度の評価

基準6 教育改善

この二つは、自己点検・自己評価に関する基準である。特に、評価システムや点検システムが組織的に活動しているかどうか問われており、教育マネジメントの重要な柱である。

以上のように、日本技術者教育認定基準においても、「体制・編成・方法・効果」という観点が基本になっている。これら6つの基準が達成されると教育の「質」の向上は相当に期待できることになる。しかし、J A B E Eはそれだけでは教育の「質の保証」をしたとは言わない。基準6の中に示されているが、残る一つが「質の保証」の重要な因子なのである。それは、「継続的改善」という基準である。

「継続的改善」は次のように示される。「教育点検の結果に基づいて、教育内容、教育手段および教育環境の改善が行われ、必要があれば学習・教育目標、達成度の評価方法・評価基準の改訂が行われていること。さらに、これらの改善活動を継続していくシステムができていくこと」。教育は学生と教員と社会という3

者間で極めて流動的・相対的に行われるという視点の下に、継続した教育マネジメントを要求しているのである。この継続した教育マネジメントが保証されている大学については、教育の「質の保証」が行えるとしているのである。

3. 茨城大学教養教育の「質の保証」のために求めるもの

以上述べてきたように、本学の場合に「質の保証」のために必要なものは、教養教育マネジメントである。教養部改組後に大学教育研究開発センターが組織され、一定の教育成果は上げてきている。大学教育研究開発センターの脆弱な組織にしてはかなり成果を上げてきたのは認める。しかし、教養科目区分や分野毎にみた場合、教養教育システムとして上記のような検討が行われてきただろうか。また、そのような権限を大学教育研究開発センターに与えてきただろうか、疑問である。多くの場合、教育の「質」の改善は教員個人の責任に課され、教育マネジメントからの「質」の改善は極めて少ない。例外的に、シラバスの改善、習熟度授業による改善、授業アンケートの改善などが行われたにすぎない。履修登録上限設定や6段階評価、GPA活用はどうなったのだろうか。中期計画では教育の「質」の向上を既にうたっており、確実にマネジメントしなければ、高等教育としての保証が得られなくなることを知っておくべきである。教養教育の「質の保証」のためには、しっかりしたマネジメント組織が必要であり、法人化に対処するために、早急に具体化すべきである。

4. 総合品質経営（TQM）の必要性

本日は教養教育についてのシンポであるので、教養教育についてのみ意見を述べた。しかし、教育マネジメントは大学の教育に関わる全ての組織で行われなければならない。学部・学科毎に独自の教育マネジメントが行われることになるが、それらのマネジメントの方向性がバラバラで統一性がないと、大学全体の教育目標の実現はおぼつかない。教養教育のように大学一体で行われる教育にとっては、大問題となる。教養教育の一つの教育目的に対して習熟度を行うかどうかの

方針が学部間で全く統一性がないと、教育マネジメントは崩壊する。特定の基礎科目などにも同じ様なことが言えよう。この時、大学として総合的な教育マネジメントを行う必要が起こる。つまり、教育サービスの品質を大学内で一定の範囲に保ったり、品質の向上を共通に図ったりする必要が起こるのである。このような事例は大学内には数え切れないくらい存在する。大学組織としてそれら全体を総合的にマネジメントし、各業務の品質の向上を図るのが、TQMの考え方である。TQMとは基本的には、自己が設定した目標に対する自己点検・自己評価とその継続改善である。教育には終わりがありません。継続的改善のためにも、大学経営にTQMの手法の導入が必要です。

5. 付録

最後に、TQMを行うための参考データと、成績分布に関するデータを紹介します。

UFJ総合研究所から「新たな大学評価のあり方の提言」—大学側の意思、社会のニーズの両側面からの考察—という報告が今年の9月に出ました。そこには興味深い4つのデータがあります。最初の2枚は、国公私立の大学299校の回答によるものです。第1図は「図10外部評価の目的であるべきこと」、第2図は「図11 外部評価の課題」です。どちらも妥当な回答で、法律改正によって認証機関による外部評価を義務づけられた大学としては、肝に銘じておく必要があります。次は、主要企業268社からの回答によるもので、第3図は「図3 企業が大学を評価する際に重視する側面」、第4図は「図4 企業が大学を評価する際の情報源」です。結果は想定される範囲ではありますが、企業関係者がどのように考えているかがわかるデータで、今後の改善の参考になるものです。

もう一つは、「カレッジマネジメント」という雑誌の2004年1—2月号です。著者は北海道大学高等教育機能開発総合センターの小笠原氏ですが、氏のコメントによると、左側の2001年度の成績分布は楽勝科目の例、右の2002年度の成績分布は適正評価のグラフとしています。皆さんの場合と比較してみてください。

図10 外部評価の目的であるべきこと

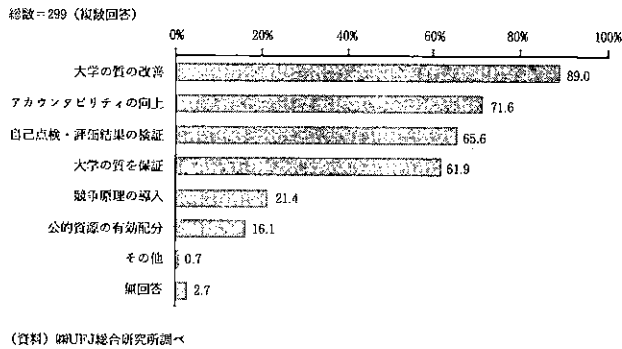


図11 外部評価の課題

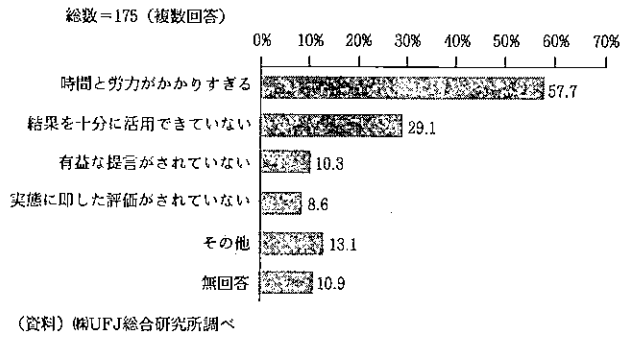
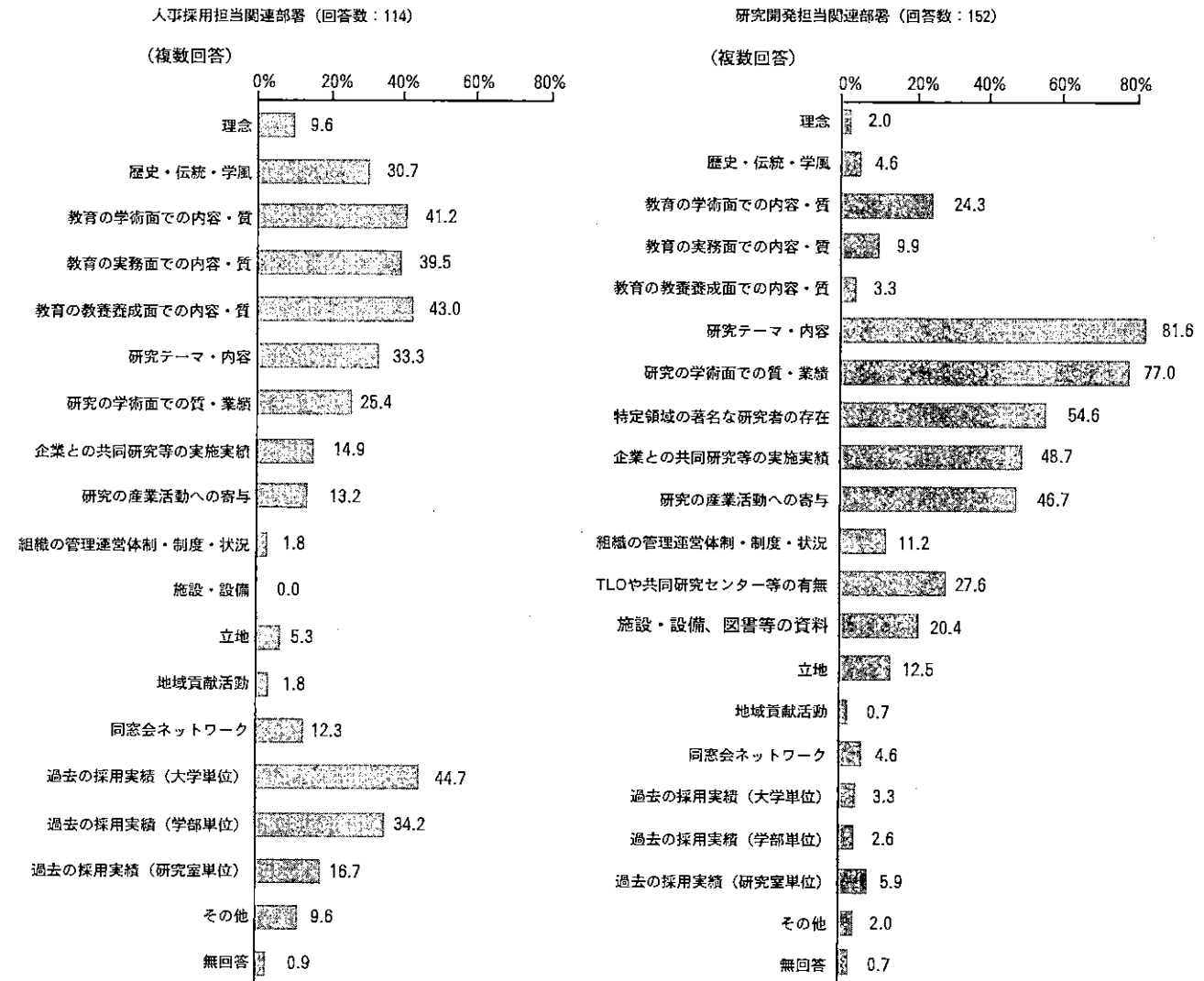
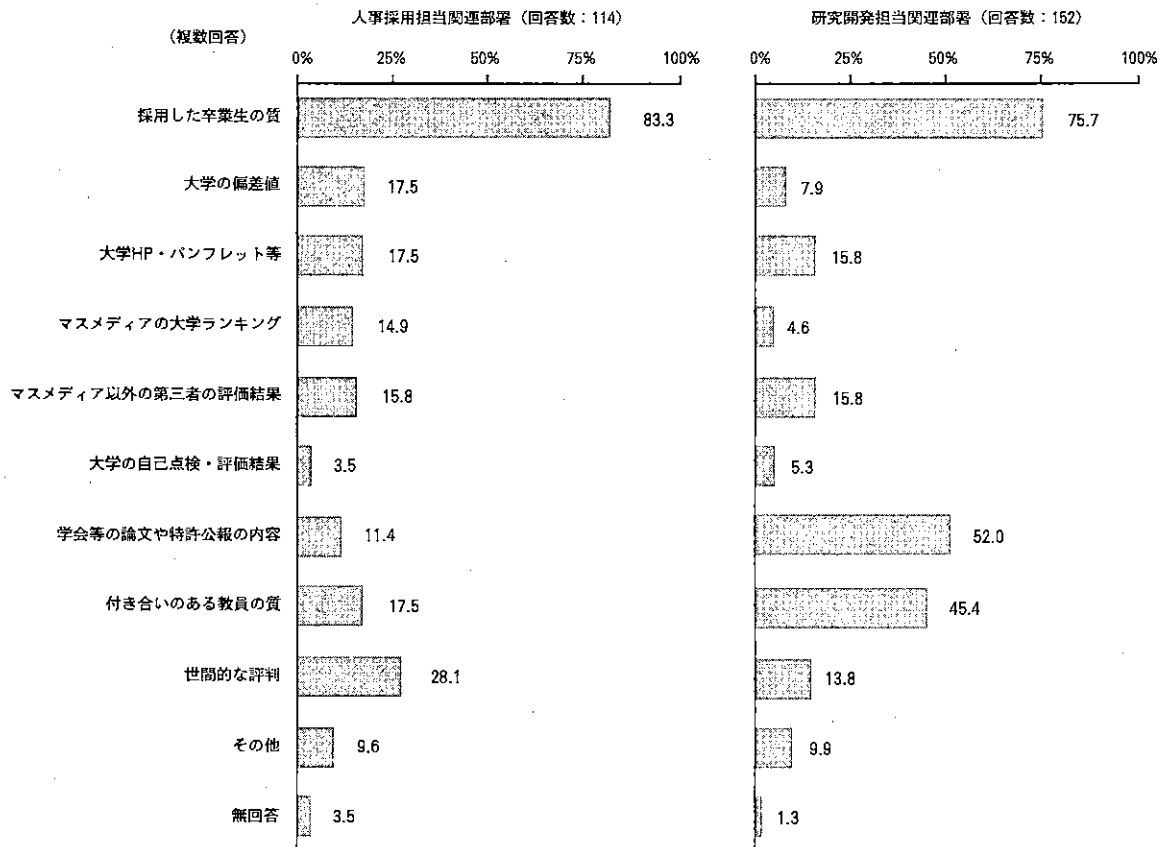


図3 企業が大学を評価する際に重視する側面



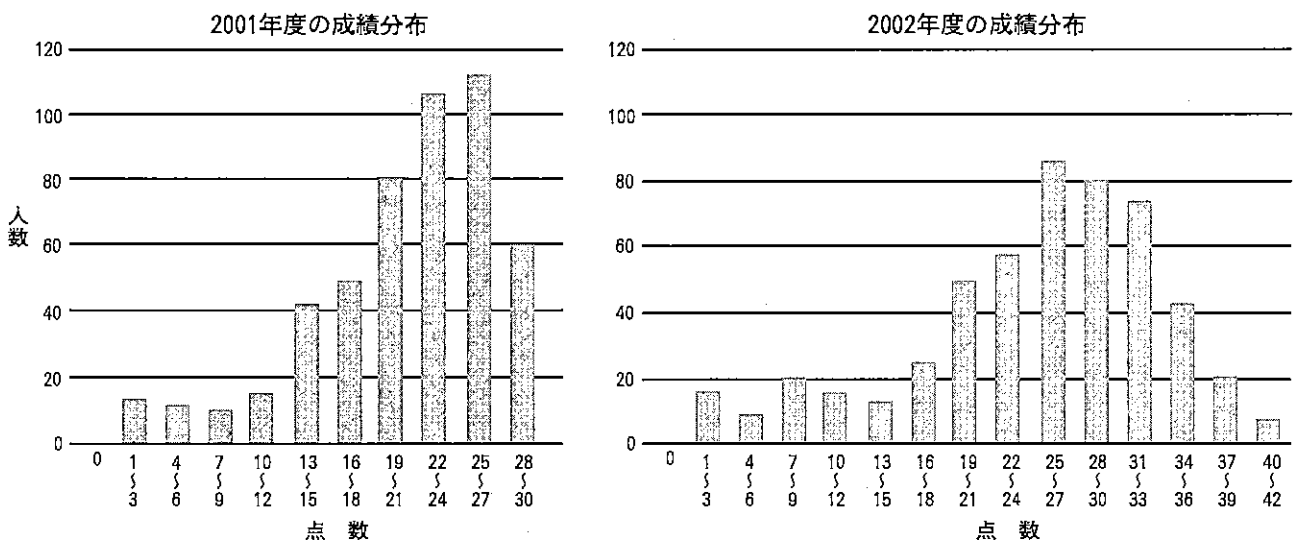
(注) 左は採用の観点で大学を評価する場合、右は研究パートナーとして大学を評価する場合
 (資料) ㈩UFJ総合研究所調べ

図4 企業が大学を評価する際の情報源



(注) 左は採用の観点で大学を評価する場合、右は研究パートナーとして大学を評価する場合
 (資料) ㈱UFJ総合研究所調べ

図5



平成16年2月20日

GPA制度の活用に必要な諸課題

副学長(教育担当) 池谷文夫

はじめに

教育の質の保証が強く言われ出してから久しい。卒業時の質の保証こそ、大学教育の今日的かつ緊要な課題であり、その達成なくして、本学の目標である教育・研究・社会貢献の三本柱は十分な強さを得られない。成績の有効かつ適切な評価方法として、その活用が必要であるとされるGPA(平均評価点)及びGPA制度の活用に向けて必要な課題や活用の手段について考える。

1. GPA (Grade Point Average : 平均評価点)

* GP (Grade Point)

授業科目毎に成績をA+、A、B、C、D、Eなどの段階評価を行い、それぞれの評価に対して与える評価点(それぞれに対応して5、4、3、2、1、0のポイント)

* GPAの算出方法

上の評価点に基づき、 $[5 \times A+$ の修得単位数] + $[4 \times A$ の修得単位数] + $[3 \times B$ の修得単位数] + $[2 \times C$ の修得単位数] + $[1 \times D$ の修得単位数] + $[0 \times E$ の総単位数] の総和を [総履修登録単位数 (Eの単位数を含む)] で割ると得られる

例：A+が30単位、Aが50単位、Bが30単位、Cが10単位、Dが8単位、欠試及びEが12単位だったとすると、GPA(平均評価点)は、獲得評価点合計468(= $5 \times 30 + 4 \times 50 + 3 \times 30 + 2 \times 10 + 1 \times 8 + 0 \times 12$) を、履修総単位数である140単位(= $30 + 50 + 30 + 10 + 8 + 12$) で割ると得られる3.34である)

2. GPAはアメリカの大学の教育制度の主要要素

GPA制度は、多様な学生の入学するアメリカの大学で、卒業する学生の質の確保を図るために行われている。学生に対して教育指導を行き届かせ、大学の教育の質を保証する。

GPA制度は、その運用では成績の不良な学生を切り捨てるシステムではなく、成績の悪い学生には厳しい措置を執ると同時に、きめ細かな教育指導・相談体制を行っている。

3. 日本におけるGPA制度の導入

1998年の大学審議会(当時)答申『21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—』において、厳格な成績評価の実施が求められて以後、我が国でもGPA制度を導入する大学が増加。

段階的評価を厳格にすることから始めている大学が多く、GPAを卒業要件や専攻選択の条件として明確化しているのは少ない。大学教育の質の保証という方向で活用されているとは言い難い。

GPA制度のメリットは十分に認められる。例えば、授業料免除や奨学金貸与の資格者を決めるためには一つの数値指標が必要であり、多数の学生が在籍する中で、著しい成績不振者への適切な指導のための指標ともなる。

もちろん、GPA制度活用の最低限の前提条件は、GPAの数値を過剰に適用しないこと、実際の授業での成績評価を適正に行うことであろう。

4. 日本の大学でのGPA制度の実施・運用状況

◎同志社女子大学の「グレードポイントアベレージ

に関する調査」(2003年；国公立268大学に対するGPA制度の実施状況及び運用状況についてのアンケート)

* GPA実施状況：実施46大学（学部単位での実施を含む）、実施していない170大学

（検討中82大学、2004年度から実施予定12大学、2005年度実施予定1大学）

* 本学は「GPA制度導入を検討中、GPA制度導入の前段階として2002年度より6段階の成績評価を実施」という状況

* GPAの運用状況：実施46大学中44大学が回答

(1) 奨学金に関わる審査に利用している26大学、していない18大学

(2) 成績表彰制度に利用している29大学、していない15大学

(3) 履修指導に利用している31大学、していない13大学

5. GPA制度についての二つの捉え方

(1) 単位修得と成績評価点を基盤とする、学生個人の成績管理及び教育指導への適用を主眼とする狭義の捉え方（学生の進級・奨学、進路指導、卒業退学といった、実践適用の方向を志向）。

(2) 学生個人の成績管理と教育指導という狭義の解釈を当然ながら含みつつ、広く適用して、大学及び学部としての総合的な教育改革の推進を主眼とするもの（広義の捉え方：カリキュラム構築、開講授業の精選、厳格なシラバス作成、適正な成績評価、教育効果の測定及び評価といった、大学全体の教育改善への取り組みと連動し、年次毎の履修科目の上限設定、学生からの照会や苦情処理、授業の再履修、卒業ないし退学の指導、機器設備・教材の充実を含む自律的な学習環境の整備といった、学生に対する支援・サービスに加えて、教員へのFD、教員・学生による授業評価までも含む広範なもの）。

* GPA制度を広義に捉えて、教育改革を行うことが本学では重要と考える。

6. GPAの活用を保証するための教育改革の実施

①大学・学部・教養教育における明確な「教育目標」設定、「達成計画」の策定と具体的実施

②学部・学科でのカリキュラムの構築、それに即して展開される開講授業科目の検討

* 現在の開講科目の検討：現在の科目の質量ともの見直し、授業精選（開講数及び授業内容の両方、しかも専任・非常勤教員の担当する授業科目全般にわたるもの）

③厳格な成績評価基準の設定

(1) 学部・学科・教養教育、カリキュラムに即した開講授業の位置づけ、内容の確定、当該授業科目の実施計画等の確定、同一分野で複数の同内容の授業科目開講の場合の明確な成績評価基準の策定

(2) 一つしか開講されていない授業科目に関する、学部・学科・教養教育での基準策定、説明できる成績評価

* GPA活用の基盤は厳格な成績評価であり、次のことを必須とする。

(1) 評価基準の統一（前提：複数あるいは類似の開講科目間の成績評価の格差是正）

(2) シラバスの厳格化（前提：授業内容のガイドラインの策定）

(3) (1)、(2)をコントロールする組織・機関の設置

④上の①、②、③の取組の遂行と連携した、学生の教育指導へのGPAの活用（GPAは在学中の各種の学生への指導・支援、及び卒業時の質の保証、卒業研究や履修・進路の指導においても重要な指標となる）

* 本学ではこれらの事柄を各学部・学科・教養教育において、順次、早期に実施して行くことが重要である。

7. GPA算出のための具体的な検討事項

①総履修単位数に何を算入するか

②履修中止制度の導入

③再履修制度の導入

④GPAと卒業要件

⑤履修単位数の上限設定

⑥厳格な成績評価基準の設定

改革そのものである。

8. GPA制度の完全なる活用へ向けた環境の整備

- ①GPA制度本体の確立へ向けた取り組みの着実な遂行
- ②きめ細かな教育指導を行う体制の確立
- ③学習環境の整備
- ④成績優秀者へのケア
- ⑤成績不振者への支援・サービス制度の充実
- ⑥学生への教育指導と学生支援・サービスの学内体制の確立との連携

おわりに

本学の中期目標・中期計画（素案）

- * 『1 教育に関する目標』（以下『目標』）の「(1) 教育の成果に関する目標」：「④教育システムを整備し教育成果の向上を図る」
- * 『1 教育に関する目標を達成するための措置』（以下『措置』）の「(1) 教育の成果に関する目標を達成するための措置」：「④各科目に学修達成度を設定し、科目内での成績評価の一貫性を持たせ、各授業科目において成績評価の基準化と適正な点検評価を行う」
- * 同じく、『目標』の「(2) 教育内容に関する目標」：「④各教育組織で理念と目的に沿った体系的な教育課程を構築する」
- * 『措置』の「(2) 教育内容等に関する目標を達成するための措置」：「⑧各教育組織で教育の理念と目的を明確にし、それに沿った4年一貫教育課程を整備する」、「⑫個々の授業の内容と方法の見直しを行い、効果的教育方法の普及を図る」、「⑬授業の精選を行い、各授業科目の成績評価基準を明確にして、年間申請単位数の上限を設定するとともに、GPAによる成績評価の活用を行い、卒業生の質の確保を図る」
- * 当然、これらに加えて、『目標』の「(4) 学生への支援に関する目標」及び『措置』の「(4) 学生の支援に関する目標を達成するための措置」が緊密に関わることは言うまでもない。
- * GPA制度の完全なる活用は、本学の目指す教育

「質の保証」システムづくり

大学教育研究開発センター長

曾 我 日出夫

1. 「質の保証」について

大学で「質の保証」が話題になってきたのはそう古い話ではない。その背景には、大学過剰などによる入学生の変化や財政難からくる合理化など、最近起こってきているいくつかの事情がある。従来のように、特別気をつけなくても学生はそこそこ勉強し、多少効率が悪くても組織拡充の中で解消されていくというような時代ではもはやなくなったのである。入学から卒業までにどういうことをどのように学生に働きかけていくか、組織の各部分が十分機能を果たしているかどうか、等々について意識して対応していかななくてはならなくなったのである。そうしなければ、その組織(大学)は次第に消滅してしまう時代なのである。「質の保証」に真面目に取り組むかどうかは、その大学の存亡に関わっているということになる。

質の保証という場合、各卒業生の質と各授業の質という2つの視点があるだろう。当然のことながら両者は密接に関連しており、卒業生の質を確保しようとするれば授業の質を保証しなくてはならない。さらに、質の保証という以上はその内容が明示されていなくてはならない。ひとつひとつの授業からみれば、どういう趣旨の授業で、実際にどのように実施され、各履修者が合格点を取ることで何を保証するのかなどが問われることになる。以下において、成績評価、授業の質さらにそれに関わるシステムづくりなどについて述べてみたい。

2. 成績評価について

従来から、「楽勝科目」ということばをよく耳にする。また、C(合格の最低評価)を取って大喜びしているかと思えば、Bを取って不服そうにしている科目

もある。さらには、ほとんど全員がA(90点以上)という授業科目もある。このように、成績評価(の基準)には極めて大きなバラツキがあるのが現状である。恐らく誰もが問題ありと感じているにもかかわらず、成績評価は基本的には担当者任せで、拘束めいた基準らしきものはほとんどないのである。卒業生の質を保証しようとするれば、どこまで厳格にやるかはともかく、何らかの成績評価の基準化が必要になるのは当然であるだろう。成績評価の基準化が必要なのは、その他にも理由がある。大学のカリキュラムは大なり小なり積み上げ格的に(あるいは相互関連的に)なっており、ある科目の履修が前提となっている科目が少なからずある。この場合、事前の履修が何の保証も与えないことになると、最初からすべてをゼロからやらなければならないことになる。実際、修得が不十分でも合格点もらい、大きなバラツキを残したまま次の段階の科目を受講していくということがかなり一般的に起こっているのではないだろうか。このような現象は、成績評価の基準化をある程度行わない限り、解消しないであろう。さらに、この解消がないと、授業の精選、履修単位の上限設定といったところで、効果は上がらないのである。

3. 授業の質について

かなり以前から4年一貫カリキュラムの作成ということが叫ばれているが、教養科目はやはり重要なものとして位置付けられている。それにもかかわらず、教養科目は何となく軽く扱われる傾向が強い。それは、従来からの思いが残っているという面もあるが、各教養科目がどういう目的で用意され、それを履修すれば何が期待できるのかが明確でないことが大きく影響し

ているのではないだろうか。さらに、現実に関講されている教養科目で実際にどの程度効果があがっているのか疑われているということもある。教養科目だけに向けられるべき批判ではないが、個々の授業科目について、問題点のあるなしの点検評価、そしてそのフィードバックに実際のところわれわれは熱心ではなかった。

授業の質を保証するという以上は、その内容が明示されなければならない。しかし、従来各教養科目についてのガイドラインもなく、具体的な授業内容はほとんど担当者任せになっていた。また、学生によるアンケート調査は2～3年前から全教養科目を対象に行っているが、それによると評判のいい授業と悪いものとの落差はあまりにも大きい。例えば、「この授業を履修して、全体としてよかったですか」という質問に対して、平成15年度前期分野別科目（人文系）では、37本の授業科目のうち、「大変よかった」と「ややよかった」との合計が80%以上という授業科目が10本ある一方、その合計が40%以下というのが3本ある。同じく、社会系では35本のうちそれぞれ5本と15本、自然系では34本のうち1本と17本ある。また、総合科目では35本のうちそれぞれ5本と10本ある。自由記述のアンケートにはその授業の問題点が具体的にでてくるものだが、「シラバスに初心者向けとあるにもかかわらず、全く専門的で何のことか分からなかった」とか「何を言っているのか聞き取れなかった」と多くの学生が訴えている授業がいくつかある。そもそもこのような授業は1本も出してはならないのである。

学生による授業アンケートですべてを判断する訳にはいかないが、下位グループの科目について何か問題点はないか分析し、もう少し底上げの努力を組織的に行う必要があるのではないだろうか。フィードバックのある点検評価を本気でやる必要があるだろう。

4. システムづくりについて

大学の教育力向上のためには、成績評価だけを厳格にするとか、授業の点検評価だけを厳しく行うとか、そういうことを独立してやっても効果は上がらない。「カリキュラムと授業内容」、「点検評価とFD」、「実施組織と運営体制」という3つの視点から全体的に取り組まなくてはならない。すなわち

- ・科目群全体の構成や各授業の内容をより適性なものにしていくこと
- ・実際に実施されているものの点検評価と充実改善へのFD活動を行うこと
- ・運営体制や組織形態を、より充実した教育の実施に相応しいものに整備改組すること

を、相互に連携させながら実行していくことが大切である。「質の保証」もこのようなものの中に組み込まれた形で行う必要がある。実は、これは、最近工学部などで導入されつつあるJ A B E Eの要求している内容と本質的には同じであることに注意しておきたい。

上記の考えを下に、「質の保証」に関連して次のことを(平成15年度から)当センターの取り組み事項としていくことを確認している(2003.3.13 運営委員会)。

- [1] 教養科目の科目区分ごとに、ガイドラインや(年次ごとの) 取り決め事項を設定する。それは、科目群全体で満たされるべき条件、学部の意向からくる要請事項、科目群の内訳の種類等々を意味する。各専門部会(責任部局)においては、それに沿って基本計画案および実施計画案の作成、シラバスのチェック、授業の点検評価等を行う。
- [2] 教養科目の科目区分ごとに、当該専門部会(責任部局)が中心となって、FD活動を積極的に進める。具体的には、ガイドラインや取り決め事項の周知、カリキュラムの設計段階の討論、テキストや授業方法の開発、見本授業の公開と研修会等々を実施する。
- [3] 授業の点検評価について、その狙い、内容等を整理検討し、それに沿って授業アンケートの内容や(標準的な) 分析法を定める。さらに、結果のフィードバックのやり方についても検討する(標準的な様式を定める)。
- [4] 成績評価について、現状の分析を行い、今後のあり方について検討する。その検討結果には成績の厳格化やG P Aの導入への必要事項(ガイドラインの設定、分析点検事項等)が示されるものとする。

これらのことが運営委員会で申し合わせられたのは、昨年度(2003.3.6-7)のFD研究会においてこのことが今後必要であるとの議論や指摘があったことを踏

まえている。

また、この内容は「中期計画」(教養教育部分)の中にも盛り込まれた。さらに、「中期計画」には教養教育の運営体制やセンターの組織の改革を謳っている。その改革は、上で述べたように、「質の保証」と相互に関連したものなのであり、組織改革が伴わなければ、「質の保証」も効果的に実行することができないのである。この「中期計画」を実現化するために、さらに詳しい計画案をまとめたものが「参考資料」である。以下の章で、「中期計画」(教養教育部分)と「参考資料」を転記した。これらは現時点で一応茨城大学として策定しているもので今後多少修正されることもある。

5. 「中期計画」(教養教育部分)について

茨城大学の「中期計画」には「教養教育」の項目が設けられ、そこには以下のような内容が書かれている(平成15年12月時点)。今後各国立大学法人は6年を周期に法人としての評価を受けていくことになるが、その評価は基本的には「中期目標・中期計画」の達成度が基準となる。したがって、「中期計画」は極めて重要なものとなり、改革の主要なものはすべてその中に盛り込まれることになる。

1) 教育の成果に関する目標を達成するための措置

○教養教育

[教育プログラム]

- ① 4年一貫カリキュラムをより実質化するために、各学部の専門教育と連携した教養科目の編成と授業内容の設定を行う。
- ② 効果的な4年一貫教育の実現のために、教養科目を区分ごとに趣旨を明確にし、履修基準を見直し、積み上げ的な学習が求められる科目(群)は、体系的なカリキュラムを組み、授業科目を精選する。
- ③ 教養科目の年次履修を適切に配分し、各学部の専門カリキュラムと整合的に配置する。

[教育システム]

- ④ 各科目に学修達成度を設定し、科目内での成績評価の一貫性をもたせ、各授業科目において成績評価の基準化と適正な点検評価を行う。

- ⑤ 科目の特性に応じたクラスサイズの設定や学生の習熟度を配慮したクラス編成と授業内容にする。
- ⑥ 学生の自律的学習を支援するシステムを整備充実する。

[教育改善施策]

- ⑦ 教育に対する学生の知的満足度及び理解度の視点から点検評価し、教育改善に取り組む。
- ⑧ 授業改善と教員の教育資質の向上を図るため、点検評価と連携するFDや推奨授業表彰をより充実させる。

2) 教育の実施体制等に関する目標を達成するための措置

○教養教育

[教育実施体制]

- ① 大学教育研究開発センターを改組し、広い意味での専門への基礎教育を含む教養教育の実施組織として整備充実し、継続的な改善がやりやすい組織体制とする。
- ② 4年一貫教育の実現のために、教養科目区分と履修基準を見直し、各分野で専門性の基盤となる教養科目と専門基礎科目を重視した実施体制を構築する。
- ③ 教養教育体制、教育内容の管理・評価体制を見直し、JABEE認定可能なレベルに整備する。

[教育設備等の活用・整備]

- ④ 情報通信環境を整備し、シラバスや教育資料を電子化するとともに、IT機器や情報システムを利用した効果的授業の開発・普及や教養教育のe-learningシステムの整備を図る。
- ⑤ 学生の自律的学習を支援するプログラムを支える諸施設を整備充実する。
- ⑥ 教養教育教材の開発や学生用図書の実用を図る。

[連携した教育]

- ⑦ 地域社会への貢献として、市民に教養科目を積極的に公開する。
- ⑧ 市民や社会人、専門職業人を活用した教育を行う。

[教育の質の改善]

- ⑨ 教養教育に関する点検評価システムを充実し、

評価結果をフィードバックして改善に資する。

6. 参考資料について

「中期計画」をもとに、各部局ごとに作成したさらに詳しい計画書が「参考資料」である。上記の教養教育に関する項目をもとに作られた大学教育研究開発センターの「参考資料」は次の通りである(平成15年12月時点)。

1) 教養教育の基本方針について

茨城大学では教養教育を、「豊かな人間性を涵養し、人間や自然との共生および学問と社会との開かれた関係を築きうる能力を育成することにある」と位置付けており、具体的に次の6項目を掲げている。

- 1) 心身の調和を図り、生涯にわたる人生設計への基礎を培う。
- 2) 専攻する学問と異なる専門分野の学問に触れることにより、多種多様な文化と価値観を理解し、幅広い視野を身につける。
- 3) 学際・複合的学問分野に触れることにより、総合的・全体的に物事を捉える態度を養う。
- 4) 物事を主体的に判断し、実証的な態度や批判的能力を身につける。
- 5) 専攻する学問の基礎を修得することによりその学問の基本を理解する能力を培う。
- 6) 国際化・情報化の社会に主体的に対応できる能力を培う。

この6項目の実現のためにさまざまな教養科目が用意され、茨城大学の教養教育が実施されている。

この実施を維持し、さらにより充実させるため、3つの視点「カリキュラムと授業内容」「点検評価とFD」「実施支援体制」から常に改善改革に取り組みなくてはならない。すなわち

- ・科目群全体の構成や各授業の内容をより適切なものにしていくこと
- ・実際に実施されているものの点検評価と充実改善へのFD活動を行うこと
- ・運営体制や組織形態を、より充実した教育の実施に相応しいものに整備改組すること

が求められている。

2) 「中期目標・中期計画」に対応する教養教育の計画内容

上で述べた「教養教育の改善改革」のために、茨城大学の「中期目標・中期計画」にはいくつかの教養教育に関する「目標を達成するための措置」が掲げられている。それを実行するために、以下のような計画の実現化を図る。

(1) 教育の成果に関する目標を達成するための計画内容

[1] 専門科目への接続をスムーズにするための教育(すなわち接続教育)を充実させる。接続教育は、専門科目への基礎教育という趣旨のものと、入学生の実力(習熟度)の多様化に対処するものがある。前者については、現行の分野別科目の中にこのための科目群を新設し、現行の分野別科目は非専攻者をも対象とするリベラルアーツ的な色彩を強めた内容にする。後者については、補講的な科目を新設し、事前テストでその履修の必要性を判定する。また、これと連動して、専門基礎科目をより高度なものとなるように一定程度的見直しをする。

{⇒ これについてのより具体的な計画が(平15.7.3)「教養教育等分科会答申に基づく検討について(最終報告)」(授業の在り方に関する実施小委員会)(教務委員会)にある。この計画内容の実現化を図る。}

[2] 入学から卒業までを見通した一貫制のあるカリキュラムとなるように、卒業必要単位数の設定も含めて、見直しを行う。また、授業科目の精選を図る。

{⇒ これについての具体的な計画案を、各学部と教養教育関係部門(大学教育研究開発センター等)の協力のもとで、早急に作る必要がある。}

この見直しのもとで、教養科目の科目区分ごとに、ガイドラインや(年次ごとの)取り決め事項を設定する。それは、科目群全体で満たされるべき条件、学部の意向からくる要請事項、科目群の内訳の種類等々を意味する。各専門部会と責任部局

(以下で述べる新体制以後においてはその体制の専門部会)は、そのガイドラインや取り決め事項に沿って、基本計画案および実施計画案の作成等の諸作業を行う。

{⇒ この方向で取り組むことを大学教育研究開発センター運営委員会で申し合わせており('03.4.24運営委員会)、現在ガイドラインの第1次案ができている('03.7.24運営委員会)。}

英語教育、上記の接続教育などにおいては、習熟度を考慮した体系的なカリキュラムを編成する。

[3] [2] で述べたカリキュラムの編成の際、教養科目の履修年次についても見直し、2年次以後向け教養科目の充実をはかる。

[4] 成績評価について、現状の分析を行い、そのあり方について検討し、各科目の学習達成度を考慮した成績評価ガイドラインや点検評価の標準様式等を定める。J A B E Eの認定やG P Aの利用に求められる諸条件を整える。

{⇒ (平13.9.20)「成績評価基準及び授業の改善について(第一次答申)」(授業の在りに関する実施小委員会)(教務委員会)にある内容をさらに進展させ実現化させる。この方向で取り組むことを大学教育研究開発センター運営委員会で申し合わせており('03.4.24運営委員会)、現在具体的内容の素案を改革案検討ワーキンググループで検討している。}

[5] 教養英語教育、情報教育、上記の「接続教育」等は習熟度を考慮したものにす。特に、現在導入が進行している「総合英語プログラム」による授業は全学部生を対象とする。さらに、この「総合英語プログラム」の実施を支える運営組織(教員集団)を構築する(これは下記の運営体制の見直しの一環としてみる)。

{⇒ 「習熟度別英語教育の実施について(答申)」(平14.8.8 大学教育研究開発センター)等にある「総合英語プログラム」導入計画の実現化を図る。「総合英語プログラム」で最も問題となるのは、その授業運営の中心となる教員集団の形成であり、この具体的な計画案を早急に作る必要がある。}

[6] 各授業において、自律的学習を促す工夫をする。特に、上記の「総合英語プログラム」、「接続教育」等では、自律的学習を支えるシステムを正規の授業と連動させて構築する。

{⇒ 上記の [5] の計画と連動してこの方面の計画を作成する必要がある。}

[7] 学生の知的満足度および理解度をみるアンケート項目を取り入れ、その結果を各授業の点検評価において利用する。

[8] 教養科目区分ごとに、ガイドラインや取り決め事項の周知、カリキュラムの設計段階の討論、テキストや授業方法の開発、見本授業の公開と研修会等々、授業改善に直接むすびつくFD活動を活発にする。当面はこのような活動が各専門部会(責任部局)で起こるようにする。また、推奨授業などをこのようなFD活動により積極的に利用する。

{⇒ この方向で取り組むことを大学教育研究開発センター運営委員会で申し合わせており('03.4.24運営委員会)、現在具体的内容の素案を改革案検討ワーキンググループで検討している。}

(2) 教育の実施体制等に関する目標を達成するための計画内容

[1] 現在の責任部局と専門部会との機能を一体化する方向で、教養教育の運営体制を改組充実する。これと連動して、現大学教育研究開発センターを改組し、構成員の所属形態を業務に専念しやすいものにするとともに、何名かの定員化を図る。定員化により、統計データ処理、教育方法評価、情報処理方面の専任的な教員を用意するようにする。さらに、独立した事務部門を置き、予算も独立した枠をもつようにする。これは、上記「(1)教育の成果に関する目標を達成するための計画内容」にある [1] [5] および下記の [9] の実施を支えるためのものである。

{⇒ 「大学教育研究開発センターに関する改革(答申)」(平14.12.24 教養教育等小委員会)にある内容をさらに進展させ実現化させる。}

[2] 上記 [1] の運営体制の改組に際して、各分野

で専門性の基盤となる教養教育の実施がやりやすくなることに留意する。

[3] 上記 [2] において、JABEE認定で教養科目に求められる諸条件をみたすことを考慮したものに
する。

[4] マルチメディアを活用した授業の開発やそのような授業の展開を支援する体制をつくとともに、
そのための教室と機器の整備を行う。さらに、シ
ラバスや教育資料等の電子化を図る。

[5] 総合英語プログラムの教育や接続教育などにお
ける自習に必要となる情報機器や部屋の整備をす
る。

[6] 教養教育のビジュアル教材等を開発し、その教
材を学生が自由に使用できるようにするとともに、
学生図書をより充実したものに
する。

[7] 教養科目の公開講座化を促進する。

[8] 市民や社会の専門職業人を活用して教養教育を
充実させる。

[9] 各専門部会と責任部局（上記 [1] にある新体
制以後においてはその体制の専門部会）は、上記
「(1)教育の成果に関する目標を達成するための計
画内容」にある [2] にあるガイドラインや取り
決め事項に沿って、シラバスのチェック、授業の
点検評価等を行う。

授業の点検評価について、その狙い、内容等を
整理検討し、それに沿って授業アンケートの内容
や（標準的な）分析法を定める。さらに、結果の
フィードバックのやり方についても標準的な様式
を定め、それに沿って実施する。

{⇒ この方向で取り組むことを大学教育研究開
発センター運営委員会で申し合わせており（'03. 4.
24運営委員会）、現在具体的内容の素案を改革案
検討ワーキンググループで検討している。}

「習熟度教育導入」からの探索

大学教育研究開発センター

副センター長

永井典子

1. はじめに

今、大学教育に求められていることは、2つあるように思われる。1つは、どのような学生を世に送り出すのか、すなわち大学教育の明確な到達目標を示し、学生の学力がその到達目標に到達していることを保証することである。そしてもう1つは、その目標を達成することができる教育システムを構築することである。

では、茨城大学では、どのような学生を世に送り出そうとしているのだろうか。これに関して、「茨城大学の中期計画・目標」の大学の基本的な目標に以下のように述べられている¹。

国立大学法人茨城大学（以下茨城大学と称す）は、我が国の先端科学関連の研究や産業の拠点の一つである首都圏北部に立地する本学の特徴を生かし、人文・社会科学、理学、工学、農学、教育学の各分野における高等教育と、基礎・応用両面にわたる多様な研究活動を行う総合大学として、幅広い教養と専門的能力を備えた社会に有為な人材を育成するとともに、地域と国際社会における、学術・文化の発展に寄与することを目的として運営される。この目標の実現のため、半世紀にわたって培われてきた教育や研究における経験と実績を基に、新しい社会に適合した教育・研究体制を構築するとともに、教養教育、基礎科学分野の教育研究、教員養成教育の拠点となる水戸地区、それぞれ先端的科学技術と生命科学分野の教育研究の拠点とな

る日立、阿見地区の3キャンパスが一体となって、本学の教育研究を推進する。（国立大学法人 茨城大学 中期目標・中期計画（素案）：1）

すなわち、茨城大学は、「幅広い教養と専門的能力を備えた社会に有為な人材」を育成するという教育目標を掲げている。この目標を達成するために、次のステップとして、「幅広い教養と専門的能力を備えた社会に有為な人材」に必要な知識と能力とは何かを具体的に示す必要がある。そのために、アメリカの大学の教育目標はかなり具体的で参考になる。調査した大学の中で、教育目標が最も具体的であったDuke大学の学士課程教育の目標を以下に例示する²。

Revised in 2000, the Trinity College curriculum prepares undergraduates for the opportunities and challenges of the 21st century. Students take courses in **four areas of knowledge** (arts and literature, civilizations, science and mathematics, social sciences) and **three fields of focused inquiry** (cross-cultural study; science, technology, and society; and ethical inquiry); pursue **two modes of inquiry** (interpretative and aesthetic approaches; and quantitative, inductive, and deductive reasoning); and acquire **three competencies** (in a second language, research,

総合英語プログラムは、大学教育研究開発センター運営委員会の下部組織である英語改革小委員会の委員によって企画され、実施案が作成され、運営されている。各委員の先生方は多くの困難に立ち向かい、多大な時間とエネルギーを提供してくださっている。心から感謝を申し上げたい。

1 国立大学法人茨城大学中期目標・中期計画（素案）の大学の基本的な目標より抜粋。太字は筆者。茨城大学の詳しい中期目標・中期計画は、文部科学省のホームページ、各国立大学の中期目標・中期計画の素案（平成15年9月）を参照いただきたい。

2 Duke大学の学士教育課程のカリキュラムより抜粋。太字は著者。詳しい教育内容は、Duke大学のホームページを参照いただきたい。

and writing). The curriculum provides Trinity College students with an education in language, culture, and scientific principles that enables them to live and work in a global economy and an interdependent world. (Trinity College of Arts & Sciences, Duke University)

Duke 大学は、学士課程教育の目標として、21世紀を学生が主体的かつ積極的に生きていくために必要な学力の養成としている。そしてその学力を、1) 4分野の知識、2) 3領域における課題探求能力、3) 2つの探求方法、そして4) 3つの能力と特定している。その上で、学士課程教育のカリキュラムでは、それぞれの学問領域の科目がどのような授業を開講するのか、また異なる学問領域が3領域での探求を行うためにどのように融合し新たな研究領域を形成し教育するのかを示されている。

このように、大学が保証しようとする学生の学力を特定することによって教育の質を保証する上で欠くことのできない2つのことが可能になる。1つは、体系的カリキュラムの構築であり、もう1つは、大学が保証しようとしている学力の評価・測定方法を定めることができることである。

大学の教育力を保証する上で、次に必要とされていることは、カリキュラムに基づいて確実に教育を実践し、教育成果をあげるための教育システムを構築することである。大学が1つのゴールに向かって教育をし、確実に教育成果の上がる教育システムを確立することなく、真の意味で学生の学力を保証することは困難であろう。

本シンポジウムでは、現在茨城大学で実施されている総合英語プログラムについて、学生の英語力の保証および教育力を保証する教育システムという2つの観点から、述べたい。

2. 学生の英語力の保証

2.1 保証レベル

茨城大学が育成しようとする「幅広い教養と専門的能力を備えた社会に有為な人材」が必要とする英語力とは、具体的にどのようなものであろうか。

「社会に有為な人材」が必要とする英語力に関して、文部科学省が平成15年3月31日に提示した『『英語が使える日本人』育成のための行動計画』が参考になる。この行動計画で、文部科学省は、大学における英語教育の目標を、「大学を卒業したら仕事で英語が使える」こととし、**各大学が独自に**、「仕事で英語が使える人材を育成する観点から達成目標を設定」することとしている。すなわち、目標の具体化は各大学にゆだねられている。「仕事で使える英語力」とはあまりにも一般的、かつ漠然としすぎているので、茨城大学では、「仕事で使える英語力」養成には、どのような英語力が必要なのかをまず特定し、次にどの教育段階でどの能力を教育するのか明確にする必要がある。

そこで、総合英語プログラムでは、茨城大学で保証すべき英語力は、ヨーロッパ連合 (Council of Europe) の Threshold Level に準拠するレベル、すなわち総合英語プログラムのレベル3と定めた³⁾。このレベルに到達した学習者とは、CEの定める外国語の “Independent User” であり、日常的な場面において外国語が使用できるレベルである。Council of Europe (2001) で、“Independent User” は、以下のように定義されている。

Can understand the main points of clear standard input on familiar matters regularly encountered in work, school, leisure, etc. Can deal with most situations likely to arise whilst traveling in an area where the language is spoken. Can produce simple connected text on topic which are familiar or of personal interest. Can describe experiences and events, dreams, hopes and ambitions and briefly give reasons explanations for opinions and plans.

(Council of Europe 2001: 24)

³⁾ 茨城大学の総合英語プログラムの教育理念・目標、および総合英語プログラムの目標レベルの設定に関する詳細な説明は、福田 (2003) を参照いただきたい。

総合英語プログラムでは、このThreshold レベルの目標を基に、教養英語における英語学習の到達目標は、以下のような場面で、英語を使用できる能力と設定している。

- 1) 英語が一般的なコミュニケーションの手段として用いられる場所に短期間出かけたり、一時的に滞在したとき、
- 2) 英語を共通のコミュニケーションの手段として用いながら、国内で外国人の訪問者や一時的滞在者と交流するとき、
- 3) 英語の母語話者や非母語話者と接するとき、
- 4) 英語で書かれたテキスト、もしくは口頭によるテキストに接したとき、

学習者は、遭遇する可能性が非常に高い場面、特に、

- 1) 生活上、ほとんど予測できるような言語使用が要求される実際的な処理での話し合いを含む場面
- 2) 学習者が社会生活で接触をはじめ、また続けることができるようにする個人的な言葉のやりとりにかかわる場面
- 3) 書かれたテキスト、もしくは口頭によるテキストの要点や、それに関連する重要な細部の理解を要求する間接的なコミュニケーションにかかわる場面において必要とされる、主として言語的要求に対応するため、英語を使用することができる。

(福田2003: 122)

教養英語教育で保障すべき英語能力をレベル3と設定することで、「仕事で使える英語力」の基礎となる英語能力を教養教育の英語教育で保証することができる。そして、このレベルを中心とした体系的な英語教育のカリキュラムを構築し、どの教育段階でどのような英語能力を養成するのかを明確にすることができる。

2. 2 体系的カリキュラムの構築

英語学習の達成目標を英語の知識ではなく、英語の運用能力に基づいて定めると、当然の結果として、そ

の目標を達成するための英語教育は、習熟度別教育となる。すなわち、達成目標のレベルを中心とし、達成目標レベルにまだ到達していない学生のための教育と達成目標レベルを超えた学生への教育とは明確に区別し、学生の能力に応じた授業を考える必要がある。総合英語プログラムは、5段階の習熟度別英語教育からなるが、レベル1とレベル2は、茨城大学が保証する英語能力レベル3に達するための基礎力補完のための授業、レベル4、レベル5は、達成目標を超えた学生に、より高度な英語の運用能力を養成する授業となる。また、レベル3修了以上の学生が履修することができるEAP (English for Academic Purposes) は、さまざまな学問分野で必要になる課題探求力、情報を収集し取捨選択する能力、批判的思考能力、問題解決能力、表現能力などを、英語を通して養成する授業に特化することができる。

このような考えの下、総合英語プログラムでは、以下に示したカリキュラム体系に基づき各レベルの英語の授業が組み立てられている(図1を参照)。

さらに、このカリキュラムのもと、1学期の授業は、以下のような流れで進んでいく。前期の授業は、まずプレースメントテスト(G-TELP)が実施され、第2回目の授業で、総合英語の学習に必要な学習の説明、動機付けなどを行う学習方法の学習セミナーが実施される。そして、第3回目から習熟度別クラス編成で、週2回同一教官による対面授業が行われ、学生には少なくとも週1回の自習が課せられる。1学期の中間時点、すなわち15回目あたりの授業で中間試験が実施され、前期の後半へと続く。そして、1学期終了次期に再度G-TELPを受験する。そして、最後の授業(30回目)で、期末試験が実施される(図2を参照)。

このような体系的な教養英語のカリキュラムを構築することにより、各学部と合理的かつ効果的連携が可能になり、4年一貫の英語教育プログラムを構築することができる。教養英語教育は、学部の専門性を超えて必要になる英語能力の養成であり、各学部で行う英語教育はその分野で必要となる英語能力の養成ということになる。現在、人文学部、教育学部、工学部、農学部で、専門分野で必要となる英語教育が行われているが、これまでのところ、人文学部コミュニケーション

総合英語プログラムカリキュラム構造図

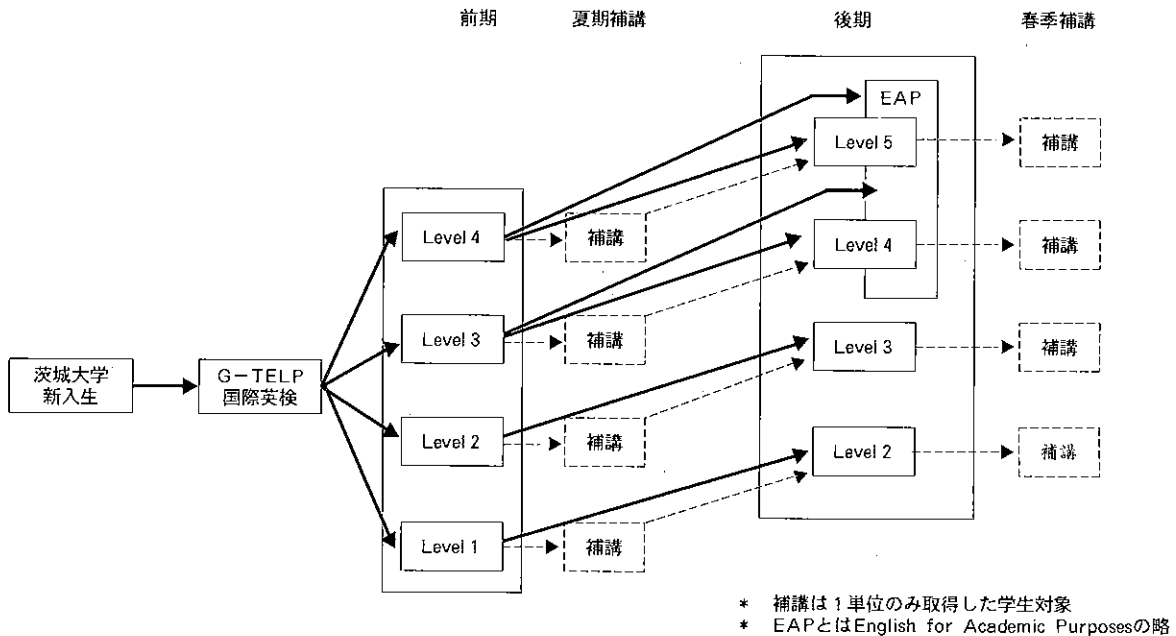


図 1

前期授業の流れ

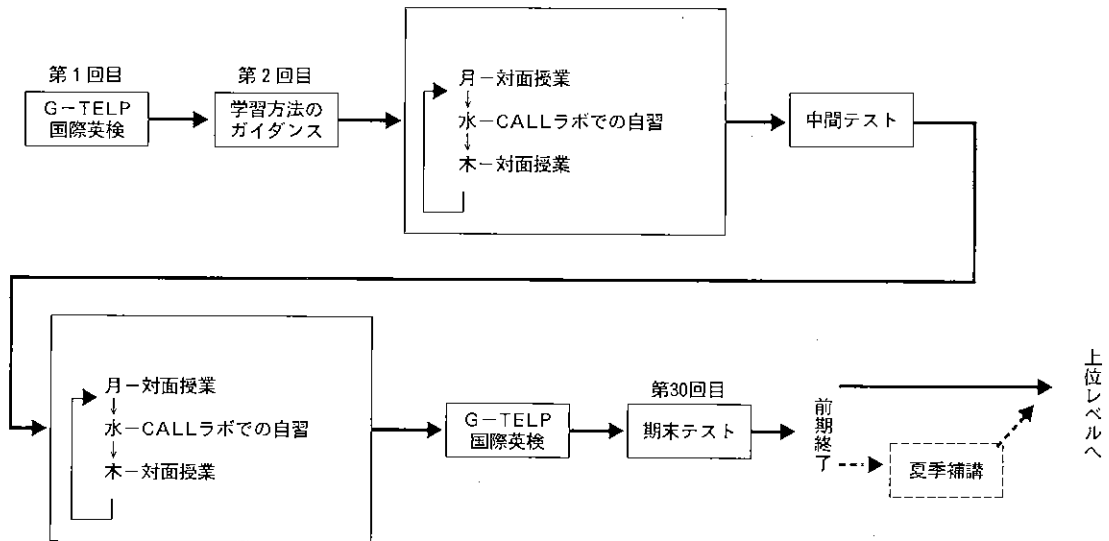


図 2

ン学科を除くと、どの学部の英語教育も教養の英語教育と連携してカリキュラムが構築されていない。今後は、各学部で必要になる英語能力を特定し、教養教育のどのレベルの修了者を対象とした授業を用意するのか考える必要がある。その結果、教養教育と専門教育での英語教育が有機的に連携され、より効果的な専門の英語教育が可能になるだろう。そして、最終的には、各専門分野や仕事の種類で異なる「仕事で使える英語力」を、養成することが可能になるだろう（図3を参

照）。

2. 3 学力測定方法

学生の学力を保証する上で、欠かせないのが、保証しようとしている学力を学生が有していることを判定し証明する手段である。すなわち、どのような手段が有効な判定方法なのかを慎重に検討しなければならない。その際に、到達目標が詳細に記述されていることが不可欠の要素であることは言うまでもない。

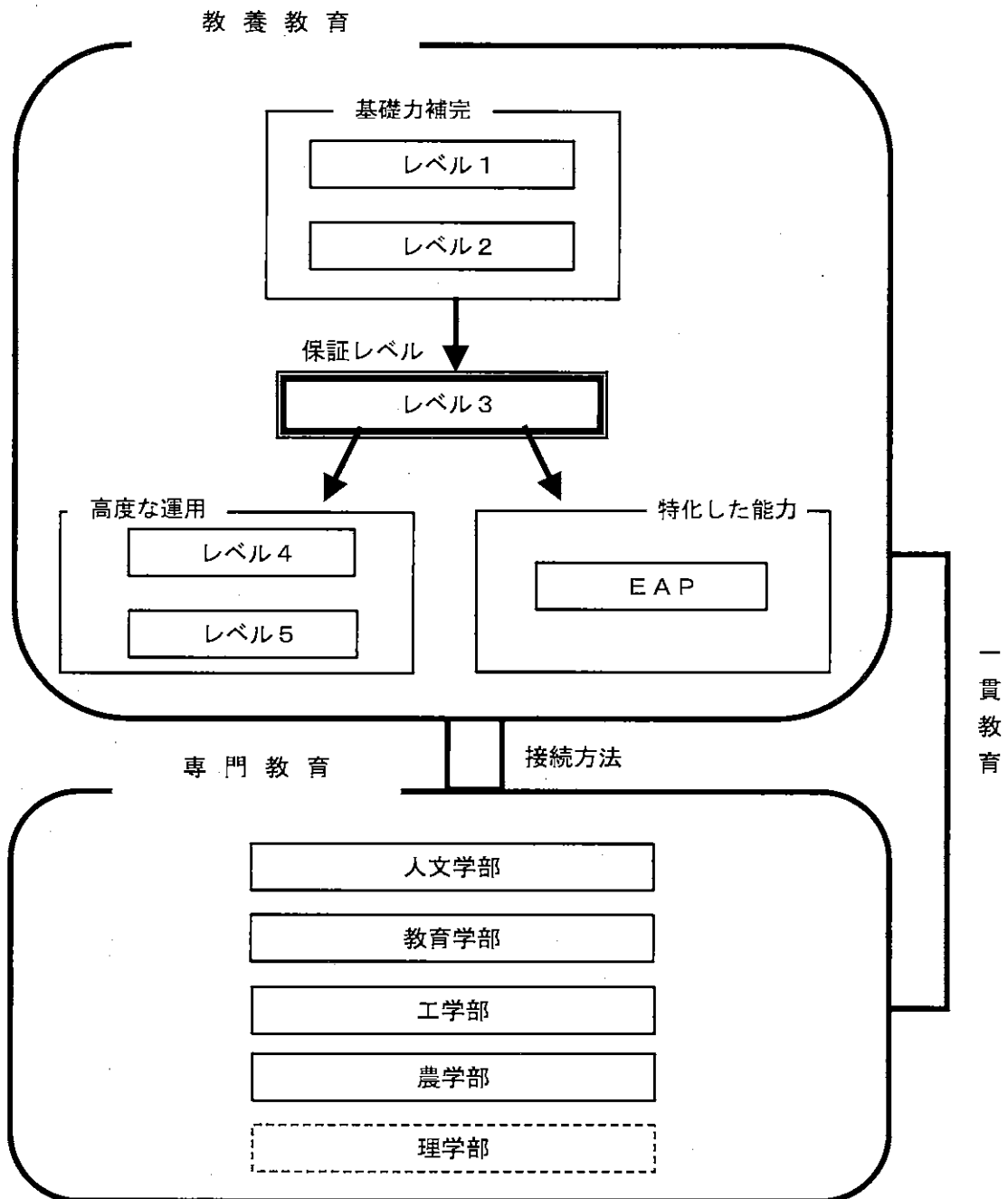


図 3

英語能力をどのように判定すればよいのかについて、英語評価の分野でも明確な解答は得られていない。というのは、測定しようとしている対象、すなわち、英語能力がさまざまな下位能力、例えば、発音能力、文構成能力から成り立っており、どの能力をどのように測定するのかは議論の分かれるところである。細分化した個別の能力を総合的に英語能力としてどのように測定するのは、まだ解明されていない（金谷 2003）。

このような状況下で、総合英語プログラムでは、平

成15年度、G-T ELP（国際英語検定）を年度始め、前期の学期末、および年度末の3回受験させ、学生の英語能力を測定した。すなわち、客観的英語能力テストによって、学生の英語能力を検定した。さらに、授業への貢献度、中間・期末テストの結果、授業で課される課題の成果を総合的に考慮し、そのレベルの到達目標に達しているかを判断し、成績評価を行っている。しかし、各レベルで設定している英語能力に到達しているかどうかを測定する手段として、これまで使用し

てきた測定方法が最適な方法かどうか、またその測定方法が妥当かどうかは、今後さらに検討する必要がある。

3. 総合英語プログラムの教育システム

英語教育の到達目標に沿ったカリキュラムが構築され、そのカリキュラムに基づき授業内容が決定されても、その授業を効果的に実践し、教育成果を上げることができなければ、教育の質の保証をすることはできない。そこで、カリキュラムに沿って効果的に授業が実践でき、教育効果が上がる教育システムを構築することが必要になる。総合英語プログラムでは、以下の3項目を考慮し、教育システムを構築した。

- 1) 常に改善していく進化型のカリキュラムが構築できるシステムの確立
- 2) カリキュラムを効果的に授業で実践できる教官へのサポート体制の確立
- 3) 学生の自律的学習を支援するシステムの確立

総合英語プログラムの教育システムは、下記の図のようにカリキュラム検討部門⁴、教育運営支援部門、学習支援部門の3つの部門からなるシステムとした。このようなシステムで大切なことは、それぞれの部門内での点検評価、改善のサイクルを確立するとともに、3つの部門を有機的に連携させ、総合的システムとして起動させることである（図4を参照）。

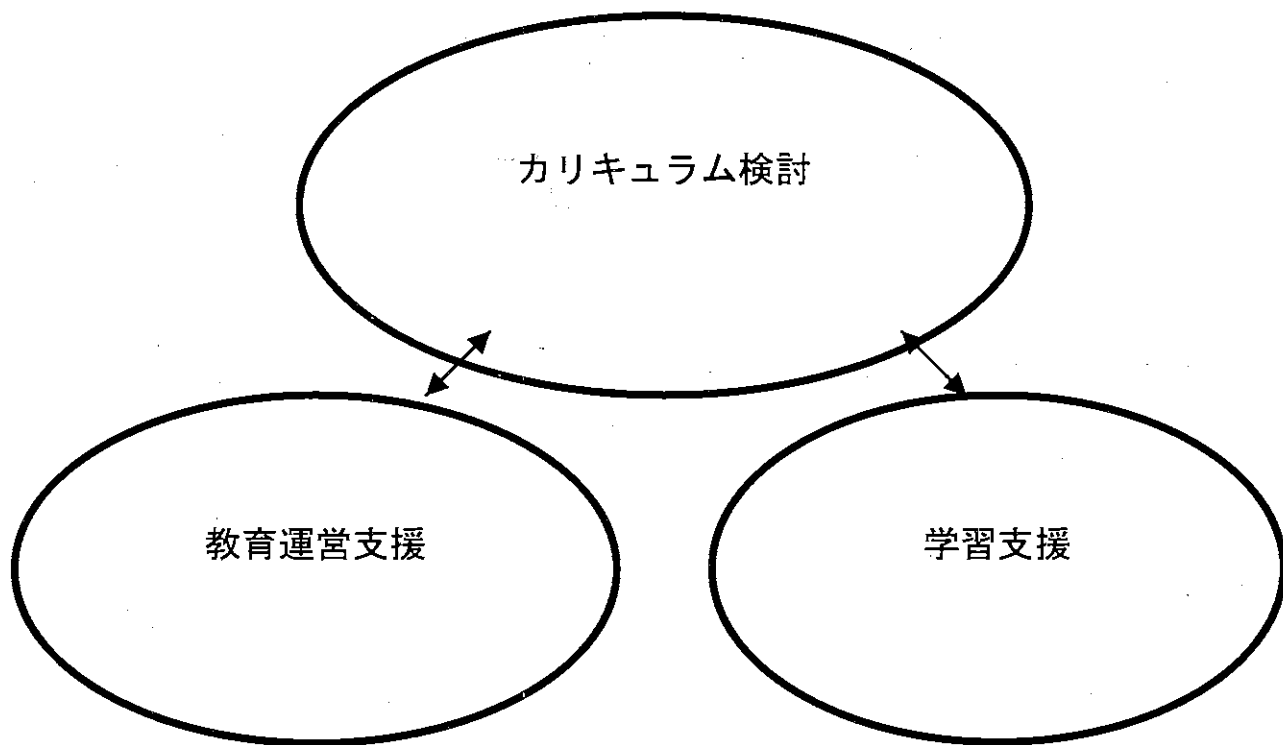


図4

3. 1 カリキュラム検討部門

カリキュラム検討部門では、主に以下のことを行う。

- 1) カリキュラムに沿った教育内容の精選

- 2) 教育を効果的に実施できる教材および教育方法の提案

- 3) クラス分け方法の提案

4 これまで、この部門はカリキュラム構築部門と称してきたが、総合英語プログラムの基本的なカリキュラムの構築はすでに終了しており、そのカリキュラムの見直しを今後続けていく必要がある。よって、本稿では、カリキュラム検討部門としている。また、今後はそのように名称を変更していく必要がある。

4) 評価方法の提案

提案内容を実際の授業で実施した後、その成果を評価し、改善が必要な部分は即改善ができるように体制を整えておく必要がある。すなわち、だれがどのような業務に責任を持って対応するのかを明確にしておく必要がある。総合英語プログラムでは、学生の授業評価、英語能力テストの結果、および、教材調査などを分析することにより、その都度見直しを行っている。

3. 2 教育運営支援部門

理想的なカリキュラムに従って理想的な教育内容を決定しても、実際にそのように授業が行わなければ、教育成果は上がらない。そこで、総合英語プログラムでは、個々の教官が協力し、質の高い教育を提供できるように教育運営支援システムを構築した。総合英語を担当する教員への支援として、2つのタイプのワークショップを行っている。

1) 年度始めのガイダンス的ワークショップ

2) 効果的な授業を行うためのワークショップ

年度始めのワークショップでは、総合英語プログラムの教育理念、目標を共有化し、授業を実施するうえで知っておかなければならない事柄を項目化し、説明している（たとえば、授業評価方法など）。来年度は、これらの内容を文書化し、担当教官に配布する予定である。後者のタイプとしては、効果的な授業を行うためのワークショップとして、今年度はIT機器使用のワークショップを行った。今後は、VCSなどを使用した授業のワークショップも必要になってくるだろう。

質の高い教育を提供する際に、教官同士の協力体制は欠かせない。特に、総合英語プログラムの授業を担当する教官は、多数であり、また専任教官、任期付き教官、非常勤講師と職務義務も異なる。そこで、それぞれのレベル間で担当教員の意思疎通が円滑に行われ、お互いに協力し、それぞれのレベルの教育内容などについて話し合えるような体制作りを行った。すなわち、各レベルにコーディネーターを設置し、コーディネーターを中心に、各レベルの授業内容、学生の学習態度などを確認し、授業で改良すべきところは、速やかに改善している（図5を参照）。

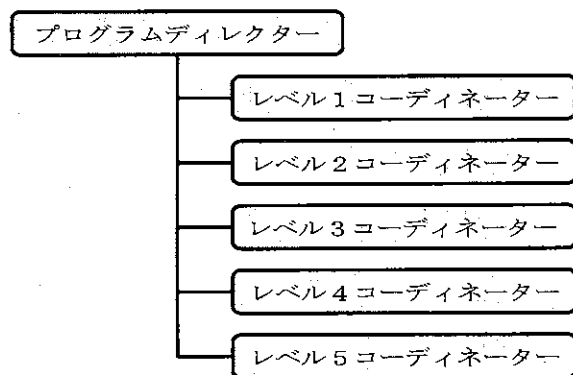


図5

3. 3 学習支援部門

教育効果を着実に上げるためには、学生の自律的学習が欠かせない。また、学生が卒業した後、さまざまな仕事や場面で必要になる英語力を自ら習得するために、自律的学習方法を習得しておく必要がある。そこで、総合英語プログラムでは、学生の学習支援として自律的学習のための学習メニューや自律的学習環境の整備を行ってきた。これまで、自主学習メニューとして、レベル別に学習教材を整備してきた。今後は、それぞれのレベルで必要とする自主学習教材の選定とともに、どのレベルの学生にも必要な自主学習教材の選定なども行わなければならない。例えば、発音矯正などは、レベルに関係なく不得意に感じている学生がいるので、レベル横断的に必要な自主学習教材を特定する必要がある。

以上のように、カリキュラム検討部門、教育支援部門、学習支援部門が有機的に連携し、常に、よりよい体制を整えることで、大学の英語教育の質が保証されると考える。

引用文献

- 茨城大学英语教育改革プロジェクト作業部会. 2002. 『効果的な英語教育をめざして 茨城大学英语教育改革プロジェクト報告書』 茨城大学
- 茨城大学大学教育研究開発センター. 2003. 『教養英語教育改革 21世紀の大学英语教育を目指して—茨城大学教養英語教育改革プロジェクト報告書—』 茨城大学

金谷 憲. 2003. 英語教育評価論：英語教育における
評価行動を科学する. 河源社.

文部科学省「『英語が使える日本人』育成のための行
動計画」(平成15年3月31日)

文部科学省「各国立大学の中期目標・中期計画の素案」
(平成15年9月) [http//www.mext.go.jp/a__
menu/koutou/houjin/03101701.htm](http://www.mext.go.jp/a__menu/koutou/houjin/03101701.htm)

福田 浩子. 2003. 茨城大学教養英語教育の理念と
目標 - 「『英語が使える日本人』育成のための行
動計画」の一環として-. 茨城大学人文学部紀要
(コミュニケーション学科論集) 14.

Trinity College of Arts and Science. Duke
University. [http//www.aas.duke.edu/trinity](http://www.aas.duke.edu/trinity)

教養教育に関する論文・研究ノート

自律的学習者を育てる読解クラス—多読とプロジェクト活動を中心として

Reading Class That Promotes Autonomy—Using Extensive Reading and Projects

上 田 敦 子 (人文学部)

Atsuko Ueda (College of Humanities)

1. はじめに

平成15年度、筆者は茨城大学ではじめて総合英語などのクラスとともにTR (テキスト・リーディング、以下TRと略す) を担当することとなった。TRに関しては英語読解をメインに1年のシラバスを作成することになったわけだが、それまで会話中心のクラスを担当することが多かった筆者は、実際にリーディングを中心にすえたクラスを指導するのは初めてのことだった。また、シラバス作成の時点では担当する学生達がどのような指向を持っているのかもまだ不明であった。

そこで、授業計画をたてる上で大枠の方向性を決めてシラバスを作成し、それ以降は授業を行いながら、学生の反応を見て仮説検証を繰り返して微調整を行っていくことが必要であった。その結果として、授業を組み立てていった過程はまさにアクション・リサーチとなった。この稿では、リーディングのクラスにおいて自律的学習者を育てるために行った授業の工夫とその結果を報告する。

2. 自律的学習者の育成

いささか古い数字ではあるが、大学の英語の授業としていわゆる「訳読」を中心とするものが55%あるという (小池、1990)。一般的に、英語が専門ではない学部・学科の教養英語クラスにおいて、「訳読」を中心とする授業内容はかなり学生が受け身になってしまうのではないだろうか。またこれらのクラスでは、大多数の学生にとって、教養科目として単位をとることが第一の目的になってしまうこともあり得る。積極的・能動的に英語に関わりたい学生はECなどの会話を中心としたクラスを選ぶ可能性が高そうである。

しかし、「読まされる」と「自ら読む」のは違う。

読解のクラスにおいても、その受講を通じて学生たちが自分の読みたいもの、読む必要なものを選び取って自ら読めるように導くことは可能であるはずだ。受け身の学習から主体的・自律的英語学習へ学生の視点を変える、そのきっかけになることができるなら、1年次の教養英語教育としては成功であると考えられよう。

学生が主体となるべき読解の指導にはどのような手法や授業の形態が可能か、まずは検討する必要がある。検討した内容は、多読学習、リーディングストラテジーの指導、そしてテキストの内容である。

3. 多読 (Extensive Reading)

「読む」という作業は基本的には個人レベルの作業である。そのために、いくら授業であてられた部分を読んでも、自ら読むという行動をしない限り、本当に「読める」学習者とは言えない。では、「自ら読む」学習活動を教室内で行うにはどうすればよいだろうか。その答えのひとつが「多読学習」である。

多読とは、Masonによれば、「学習者自身の實力にあった、個人的に興味深い本を、出来るだけ学生が自分で選び、自分のペースで、要求されたページ数を読む」ことである。適切なレベルの内容の本を楽しみながら読み進めることで、結果として学習者は膨大な量の理解可能なインプットを得ることが可能となる (Mason & Krashen, 1997)。また、いままでなじみのなかった単語や文法的用法も、文脈の中で登場してくるために自然な形で理解することができる。そして、成功した個別読書の体験は、学習に対する動機づけにつながる自律的学習を促す、とDickinsonは述べている (1995)。

Mason & Krashen (1997)、Krashen (1997) の事例

日本の大学で多読クラスの学生と伝統的教授法を行うクラスの学生の英語力の伸びを比較したところ、1年後には多読クラスの成長が勝るという結果が出た。また、Masonの調査によると、多読クラスの方がライティングの力も伸びた。

水野の事例

水野はインターネット上と大学の教室という2本立ての授業を展開している。彼の多読授業で特筆すべきはその精緻なつくりのBBSを含んだウェブサイトと、読んだ本についてディスカッションすることが主体となるクラスでの活動である。

酒井 (2002) ・古川・河手 (2003) の事例

酒井はその多読クラスを運営するなかから、①辞書は引かない、②わからないところは飛ばす、③つまらなくなったら後まわし、という三原則を考案した。酒井は大学で指導にあたるだけでなく、現在はSSS英語教育研究会において多くの一般の英語学習者に影響を与えている。また彼はパンダ読み、キリン読み、シマウマ読みなど、学習者がレベルを調整しながら読む方法にも名前をつけ、上記の三原則などとともにわかりやすく多読を指導することに成功している。

「多読は読解力を伸ばす唯一最良の方法であるが、にもかかわらず、外国語の授業の中ではあまりすすめられていない」とGrabe & Stoller (2001) は述べている。その理由は以下による。①静かに学生が本を読む教室では教師は教えている実感がなく、こういったことは家で行えばよいと思いがちであること。また、②本の数・量が揃わず、十分に学生の興味を引き出したり、適切なレベルを合わせることができない場合がある、③教師が何か学生の手助けをしたいと思ってもどうしてよいかわからない、などである。①に関しては酒井 (2002) も同様に、教師たちから本を読むだけのクラスを運営する勇気がない、なぜなら教えていないように見えるため外部からどう思われるか不安である、などの声があることを指摘している。②については、潤沢な予算がないかぎりは何らかの工夫をしなければならないだろう。③については、水野や酒井らのインターネット上での活動が大いに参考になると思わ

れる。

4. リーディングスキル・ストラテジーの指導

「大量に読んで読み方をおのずと身につける」多読とは逆に、効果的な読み方を知りながら読むこともアカデミックな読解指導において大きな目標のひとつである (Grabe & Stoller 2001)。とくにノンフィクションを読む場合において、読解の様々な方略や文全体の構造を意識しながら読むことは効果的である。この方略とは、テキストを読みはじめる前に全体をとらえておくこと、さっと見て必要な情報を拾って読むスキニング、次に何が語られるか予測すること、テキストの構造や理論的な流れをとらえながら読むこと、などが含まれる。

高校までの英語の授業では、方略的な英文の読み方を意識させる場面はあまりなかったであろうと推測する。となれば、アウェアネスを高めるのにはよい機会である。幸い、大学生用には“Independent Reader” (木村、清水 1998) や、“Reading Power” (Mikulecky & Jeffries 1998) などの使用しやすくよくまとまったテキストが存在することも判明した。

5. 多様でオーセンティックなテキストの提供

読解、という物語を読む、新聞記事などを読む、というイメージがあるが、何を、どのような形状のものを素材として提供するかは検討すべき事項だ。

また、オーセンティックな素材に触れるひとつのメリットは、英語が教室の中だけのものではなく、外部と繋がっている、具体的な実社会と繋がっていると痛感することができることである。つまり、英語で読む必要性、意義を知り、吉田 (2002) の主張するfish bowlモデルからopen seaモデルへの移行を意識することができる。

オーセンティックな素材を使用する際には、内容を吟味し、学習者のレベルに合うものを選択することが教師側の配慮として必要不可欠である。難しすぎるもの、不適切なものを不注意に与えてしまうと、かえってモチベーションを下げることになりかねない (Harmer, 2001)。

また、多読とも大きく関係してくるが、「読みたい」

という気にさせる、魅力的な内容のテキスト、タイムリーな話題、学生の興味・関心のあるジャンルを選ぶことが必要である。様々な興味をもつ学生がいるため、全てが全員の気に入るジャンルになるわけではない。であれば、なるべく多様なジャンルを扱うことがその解決につながる。

6. 仮説の設定

以上を検討したうえで、次のように仮説をたてた。

- 1) Dickinson (1995) が述べているように、「多読」を取り入れることで、自然に読解力が高まるだけでなく、学生が自律的に学習を行うようになっていくだろう。
- 2) リーディング・ストラテジーを紹介していくことで、学生の「読み方」はかわっていくだろう。
- 3) 授業で扱うテキストにはなるべくバリエーションをもたせ、吟味したうえでオーセンティックなものも取り入れる。そうすることで、学生が興味・関心を持つことができるだろう。

7. 前期授業の内容

仮説をふまえ、以下のように授業を計画し、実行した。担当クラスは教育学部、43名である。

●授業開始時に3種類の調査

- ・事前アンケート。学生の興味・関心の対象や中学・高校での英語に対するイメージなどを問うもの。
- ・学生のラーニング・スタイルを確認するもの。
- ・リーディングストラテジーの Awareness を確認する質問紙 (木村・清水、1998 pp.1-2)

●学生の固定観念を覆せるような、目新しい内容の読解クラスをめざす

学生の大半は文法のクラスで構文を学び、リーダーを訳読するというオーソドックスな高校での英語教育を受けてきているはずである。大学ではじめての英語の授業を受けるのなら、高校での英語教育のイメージを払拭するような「新しい印象」を持たせたい。

そして、英語を苦手、面倒、と思っている学生の視点を変えられれば、大きな刺激になるだろう。

●1コマの前半は一斉授業形式

授業の前半はリーディング・ストラテジーに意識を持たせるような活動を行う。一斉授業といっても、内容によって、グループで読んだ内容を話し合うような協同学習、お互いにバラバラな情報をつなぎ合わせるといったグループを前提としたタスクなどを常に取り入れ、基本的に訳読にならないように気をつける。

ここで扱う素材は、かなりバリエーションに富んだものとした。いくつか例を挙げる。

- ・海外輸出版G-Shock (カシオ製のカジュアルなデジタル時計) の取り扱い説明書を読む。なんの説明書かという部分はあえて隠しておき、どのような商品の取り扱い説明書か、また、この商品の特徴は何かを考える。
- ・料理のレシピを読む。実は馴染みのある料理 (カツ丼、肉じゃがなど) の作る過程を読んで、なんの料理ができるかを考える。逆に、食べたことのないような料理のレシピを読み、どんなものになるかを想像する (メキシコ料理Sopapiyas)。
- ・旅行ガイドブック (“Let's Go”) をよく読み、グループでハワイ・マウイ島3日間の滞在の計画を立てる。何を食べ、どう予算を使うか、どういうルートで回るかは、ガイドブックを注意深く読まない計画できない。いっさい訳を添える必要はないが、旅行計画を立てて提出。
- ・ニューヨークのホットドッグ大食い競争で優勝した日本人の記事を読む。
- ・メジャーリーグ、バリー・ボンズを歩かせるかどうか。是と非の二つの視点から書かれている記事 (“Major League Baseball 2003 The Official Guide to the 2003 Season”) をスキミングしながら読む。

実際にこれらをクラスで行ってみると、最初のうちは「和訳をしなくてよい」といくら言っても端から端までこまかく和訳をしなくては納得ができない (当然遅いのでクラスの速さについていけない) 学生がいたものの、だんだんと「内容をくみとる」ことに慣れて

いったようだった。また、用意した素材も学生にとっては楽しみながら学習できるものだったようだ。

ハワイの旅行計画では、どこで何を食べ、何を見る、宿泊はどこで、出費を抑えたいからここは節約、などと教師が思いもよらないような節約プランをガイドブックの情報から引き出してくるチームもあり、クリエイティブな活動となった。

●授業の後半はIndividual Reading Time (多読タイム)

この時間は学生が自分たちで好きな読み物を選んで読む時間とした。

多読については、学生の方もなぜこのような時間があるのか、ということをも十分に意識させては始める必要がある。そこで、最初の授業で多読の重要性とその効果をよく説明した。そして、図書館にあるGraded Readersのレベル解説とReading Logと名前をつけた記録シートを配布した(図1)。

3.でもふれたが、多読の授業を行うには、実際に多くの準備が必要だった。まず直面するのがライブラリーの問題である。

教師が自前だけで40人の学生が好みの読み物を選んで読むだけの素材を用意するのは難しい。そこで、時間中に図書館も利用してよいことにした。幸いにも使用教室が図書館に比較的近い場所にあったため、多読

タイムの間だけ図書館に移動して読んでくことを認め、学生はチャイムが鳴る前に戻ってきてReading Logを書く。図書館にあるGraded Readersは教養図書のコナーにあったが、本来は総合英語で使用されるものであったので、基本的には授業中はその場で読んで、戻ってくる、という形をとったのである。

それでも大半の学生は、特に最初のうちは教師が用意した本や素材を読むことが多かった。というのも、図書館にある本は「自分にとって楽なレベルから読む」という多読の観点からすると多少難しいものが多かったからだ。酒井らが主催しているSSS式多読法では、どんな学習者もレベル0(ペンギンのEasystartsか児童用Graded Reader)から始めよ、と言っているが、当時茨城大学の図書館には最も平易なものでEasystartsより1段階上のものしかなかった。

幸いに筆者は子ども用の絵本や簡単な読み物を多少個人で蔵書していたので、これに加えて新たに蔵書を増やすこととした。Graded Readersにこだわらず、簡単で面白そうな本を児童書中心に何回かにわけて用意した。

さらに、「学生の興味」を考慮した場合、文学の香り高い本ばかりが人気を得ると思えず、またフィクションばかりに偏るのも良くないと判断し、さらに雑多な素材を購入することにした。それらは例えば、以下のような雑誌である。この他にも音楽、芸能、スポーツ、ファッション雑誌などを用意した。


- Major League Baseball Magazine
- Basketball Magazine
- Seventeen
- Hip Hop Magazine
- Shonen JUMP

いくら興味が深いといっても、学習者にとってこれらの雑誌を1冊まるごと読むのは敷居が高い。また、同時に複数の学生が読めるようにしたいという経済的な理由もある。そこで、コラムだけ切り取ったり、何枚かページをはがしてホチキス止めするなどし、それぞれをポリエチレン製のファイルポケットに収納してボックスに入れ、読みたいものを探して勝手に読めるように準備した。

教師側で準備した本や切り抜きなどにはすべて素材

冊数	タイトル	著者	W	F
1/28	Frog and Toad Are Friends	...	2000	
2/12	New York Yankees News	...	600	
3/2	Seattle Mariners News	...	700	
4/17	Brown Bear, Brown Bear, What do you see?	...	176	
5/14	Mighty Robot	...	522	
6/24	Mighty Robot vs. THE VAMPIRES...	...	2340	
7/24	See to Chibi no Kamifushi!	...	430	
8/2	Frog and Toad All Year	...	2000	
9/2	Marcel and the white star	...	200	
10/2	YOU'RE READING THE WRONG WAY	...	220	
11/9	ONE PIECE	...	1500	
12/6	t.a.t.u	...	150	
13/16	FRIENDSHIP	...	10843	
14/23	"	...	110843	
15/30	Frog and Toad Together	...	960	
16/30	CORBUROY	...	632	
17/7	Days With Frog and Toad	...	11235	
18/14	Do You Want to Be My Friend?	...	200	
19/28	June B. James and Sam's Smiley Spots	...	113435	
20/4	図書館とTEMPAPER	...	1000	

ごとに記録シートを用意しておいた。最初に読んだ学生がタイトル、およその単語数、そして読み終わった感想やさわりの部分を書いておき、次の学生が選ぶ基準として使おうというものであった。これはamazon.co.jpのブックレビューシステムを参考に紙の上で実現させてみたものだった。(図2)

タイトル		およその単語数		
The Giraffe and the Pelly and Me				
こんな内容です ⇒ ゴリラとアフリカペリと上り下りして、公園(?)の ハートフルなお話。 				
#	日付	ひとことコメント	おすすめ度	難易度
1	4/10	動物の話 (ゴリラとペリ)。	★★★★★	★★★★★
2	5/12	これ読んでほしい。面白い!!!	★★★★★	★★★★★
3	5/1	読んでいて楽しいお話。	★★★★★	★★★★★
4	6/9	一巻。「おもしろい!!!」	★★★★★	★★★★★
5	7/23	動物の話、面白かった。	★★★★★	★★★★★
6	11/17	ペリとゴリラの話。Duke が好き。 おもしろかった。	★★★★★	★★★★★
7	12/1	動物の話、おもしろい。2巻も読みたい。	★★★★★	★★★★★
8	12/15	おもしろい話、読み始めたら面白そう!	★★★★★	★★★★★
9			★★★★★	★★★★★
10			★★★★★	★★★★★
11			★★★★★	★★★★★

上記の雑誌のうち、学生が特に喜んだのは野球雑誌と少年ジャンプの英語版だった。ドラゴンボール、ワンピースなど、自分たちが筋を知っているものを英語で読むのはとても新鮮だったようだ。学生たちはそのオノマトペの表現の違いに驚き、台詞回しの翻訳したときのニュアンスの違いなどを楽しんでいった。

●学生の評価

このクラスは出席して本を読むという行動自体が必要不可欠である。よって、参加度を重視することにした。毎時間学生がReading Logを提出するため、参加の様子は確認できた。前半のリーディングの時間に課題を出すことも多かったため、その提出物も評価の対象とした。

そして、Reading Log で読んだ単語数が一定以上あった学生にはボーナスポイントを与えた。

テストはいっさい行わず、学期最後にレポートを課した。レポートは3種類のうちどちらかを選ぶというもので、①-1自分の好きなテーマに関して、英語の

文献少なくとも3つ以上を読んだ上でその内容について説明し、自分の意見も述べる。英語で書く。①-2同様に、読んだ内容について日本語で書く。分量は①-1の倍。②期末までに40,000語分の本を読み、そのReading Diaryをつける。の3種類とした。

上記の内容で前期の15回のクラスが終了した。

8. 前期終了後 (中間時の検討)

●リーディング・ストラテジーの Awareness

前期が終了し実際にリーディング・ストラテジーを意識しながら読めるようになったかどうか、木村・清水(編)の“Independent Reader”(1998, pp. 1-2)にある質問紙を再度利用してその変化をみた。100ポイント満点の自己診断シートのうち、授業開始時には平均63.5ポイントであったものが、前期末には70.0ポイントとなり、6.5ポイント(10.2%)の上昇が認められた。

●アンケート結果

自分のラーニングスタイルに合った学習ができているか、前期の授業をどう感じたか、などを自由記述させた。

記述のうち、主なものをあげる。(原文ママ)

- 1人で読み進む部分もあり、グループで協力できる部分もあるところがよい。
- 英語を楽しく読めるとは思っていなかったのが嬉しかった。
- 前期はつい短い本ばかり読んでしまったので、今後は長いのにも挑戦してみようと思う。
- グループをやったおかげで友達ができた。その後はペアとかも楽しかった。
- またさらにいろんなジャンルの本を読みたい。
- 楽しく英語ができました。高校の時は受験英語だったので、実践に役立つ気がしなかったけど、この授業は、自分にプラスになった気がします。
- こんなに英語を読む授業ははじめてだ!!!
- 英語の本を読むきっかけになったし、2,000語ぐらいのならていこうなく読めるようになった。こうい

う授業の形は初めてなので、新鮮でした。

・楽しみながら英語にたくさん触れられてよかった！
後期は頑張って英語読みまくりです！！

と、動機も高く、肯定的な回答がほぼ100%を占めた。

上記2点を分析する限り、学生の反応はすこぶる良く、また彼等がストラテジーを意識する読者になってきていることも確認できた。多読の意義も理解しているようであるし、試行錯誤を重ねた授業はなんとか形になったと感じた。

しかし、後期このままの授業形態で同じように半年進んでよいものか。特に、多読の時間がいかに大切といってもこのまま1年間マンネリに陥らずに続行できるかどうか、にはこの時点では自信がなかった。

また、「自律的学習者を育てる」という目標を考えてみると、学生の記述が「楽しい」ばかりなもの気にかかるところだった。もちろん動機を高めなくては自律的学習にも繋がらない。「つまらない」という反応ではその先が見えてこないから、授業は常に興味を持たせる方向に持っていかうとしている。しかしこの授業では「学びを楽しませてもらう」学生を育てるのではなく、「自ら学びを楽しみにいく」学生を育てたいのである。「後期は読みます！」的な宣言はあるものの、全体的にまだまだ受け身なのではないか、という感触があった。

●レポートの提出結果から考える

学生は自分の興味のあることはかなりこまかく、熱心に調べてきた。テーマは何でもよい、知りたい情報を得るために英語を読むことが大切である、と特にアカデミックな内容にこだわらなかったせいか、内容は古代生物学（恐竜）からマイケルジャクソンの整形疑惑まで、驚くほど多岐に渡った。しかしやっつけ仕事のレポートは少なく、自主的に何かを調べてくることに対しての喜びのようなものが感じられた。

この内容は教師一人が採点という目的のために読むだけでは惜しい。そこで後期は教師が素材を与えるばかりではなく、学生が自分達でテーマを作るところから始め、学び進めるタイプの学習を増やすことにすればどうだろう、と気づいた。それだけではなく、調べ

た事柄をお互い発表しあう、よりインタラクティブな学習の場を作るようにするよう、プレゼンテーションも学生が行うようにしたらどうだろうか。この学生たちなら十分に興味深いテーマを扱うことができるだろう、と感じるに至った。

一方、Reading Diaryを選択した学生達もよく健闘していた。読み終わったら書くのではなく、毎日読んだ分だけ感想を書くように、と指示をしたので、外国語で読んでいるにもかかわらず、彼らがだんだん内容にのめり込んでいく状況がよく伝わってきた。それを記録として書き留めることで、読んでいる学生自身もそれが実感できたのであろう、40,000語を読んだ後の達成感と読後の充実感を述べる記述が多くみられた。

9. 仮説の追加設定（2）

4) 最終課題としてグループ単位のプロジェクトに取り組み、さらにプレゼンテーションを行うことで、学生達はより自律的に学習するだろう。

10. 後期の授業内容

9.の仮説をもとに、後期の授業計画に手直しを入れる。とはいうものの、せっかくいい雰囲気が進んできたこともあり、前期行ってきたことは基本的に続けることにした。前半全体でリーディング・ストラテジ的な素材を読み、後半多読をする、というパターンは大きく崩さない。それに加えて後期は年度末に向けて大きな山場をつくり、それを目玉とする。目玉とは以下の2つの活動である。

●グループ・プロジェクト、プレゼンテーション

後期の15回のクラスのうち、最後の4回をグループ・プレゼンテーションに充てる。

学生は4～5人でグループを作り、テーマを決め、自分達のテーマに沿ってリサーチを行う。リサーチの段階では、必ず3件以上の英語の文献（ウェブサイト含む）にあたるようにする。プレゼンテーションは日本語でよいが、ハンドアウトは英語で作成する。パワーポイントなどプレゼンテーションソフトを使うのもよいし、実物を持ってきて見せる、パフォーマンスをする、など何をしてよい。創造性を生かして自分たち

しかできない発表を作り上げること、とした。

この課題を発表してからは、教師の方も忙しさを増した。毎時間少しずつディスカッションの時間をとり、何のテーマにするか、どれだけ掘り下げているかを確認し、のんびりしているグループには適切なアドバイスを与える、という時間が増えた。さらに、プレゼンテーション直前の週には授業時間外にそれぞれのグループが何度か研究室を訪れ、ハンドアウトの確認（教師がハンドアウトを事前に預かり、人数分コピーを用意することになっていた）をしつつ全体の流れを打ち合わせるようになった。筆者の観察によれば最早プレゼンテーションは最終到達点でしかなく、この過程ですでに学生達は自律的学習者となっていたように思う。

学生達の発表は、バリエーションに富み、プレゼンソフトを使用するだけでなく、音楽を流す、実演をする、イラスト満載のハンドアウトを用意するなどクリエイティブな活動が多く、実り多いものとなった。日米のお菓子の違いがテーマだったグループなどは、甘さを実感してもらうためにわざわざアメリカのレシピそのままに焼いたクッキーを全員に配ったし、技術科のメンバーで作ったグループは調べてきた世界の木材について語り、手に入れてきた木材をその場で切ってその匂いをかがせたり、軽い木材を手にとらせたりした。

●ブックリスト作成

プロジェクト・プレゼンテーションだけでなく、多読を行ってきた総まとめとして、ブックリストを作成する、という課題を追加した。具体的には、「過去1年間で自分が読んできた英語の本の中からクラスの仲間に勧めたい本を5～7冊選び、自分の読んだ体験も織り交ぜつつ、他人が思わず読みたくなるようなブックリストを日本語で作る」という個別の活動である。

多読では、何ワード分読んだか、何冊読んだか、ということがインプットの量として重要な意味をもつが、それだけならクラスでおこなう活動でなくとも個人学習でできることになる。読む、という作業自体は個人的であることには他ならないが、その感動を仲間と共有することは継続に向けて大きな意味を持つ。3.で紹介してきた事例のうち、水野や酒井・古川・河手が

行ってきたケースでは、読んだ内容を共有化することに配慮してきていることに注目したい。水野の事例では、読むという作業は完全に課外に行われ、対面クラスでのセッションでは読んできた本の感想を語り合う（それも日本語で）ことに大半の時間を費やしている。彼らは本を読んだその感動をコミュニティで共有化することの効果の高さを実感しているのだ。

水野のサイトだけでなく、筆者が参考にしたのはインターネットブックストアであるamazon.com およびamazon.co.jpで使われている「リスト」である。「自分の読んだ本の内容を途中まで語り、相手にも読みたい気持ちにさせる」テーマをもったブックリストを作成しひとつにまとめれば、学生はこの授業が終わった後もリストを片手に「英語の本を読む」活動を続けることができる。

ブックリストは締め切りを敢えて最終日の1週前に設定した。そして、提出した学生のリストを全て集め、コピーで簡易な冊子を作成した。これも当初はカバーページ（本についての情報と、かんたんなコメント）のみをコピーして薄い冊子を作るつもりでいたのだが、提出されたリストの充実ぶりを見て急遽方針変更を決断するに至った。最終日には全員の書いたものすべてを含んだリスト集を配布した。

11. 後期・1年間を振り返る（仮説の検証）

まずは終了時のアンケート（自由記述）を分析する。ときに教師としてはこそばゆいほどの表現もあるが、これは学生たちが担当教師にお世辞を書こうとしたのではなく、いかに自分たちが燃えていたか、盛り上がっていたか、を表現したかったのではないかと思うので、原文のまま載せた。文からは、自分達の体験を語りたくてしょうがない様子さえ感じられる。

後期終了時の学生の記述から¹⁾

（感想およびこの1年で何か変わったか）（原文ママ）

●洋画などで二重音声でやっている番組を見るとき、英語の方で聞いてみたりするようになった。少し英語が好きになった。今まで英語の本を全く読まなかったのに少し読んでみようとしたりするようになった。1年間、月曜朝一でつらかったけど楽しかったのでやっ

てよかった。英語の楽しさがわかりました。サイコーです！

●後期になって結構大変になった。この授業はテストがない分楽かと思いきや、自分で考えながらやらなきゃいけなかったのが苦労しました。でも、いろんな人の発表がきけたり、話し合ったりする機会もあり、良い刺激となりました。

●最初シラバス見て「あ！この授業テストない」と思って、選んでしまいました(笑)。でも、全然思ったより英語の文献を読むのが楽しかった。今まで、「全部英語」みたいな本読んだことがなかったので、読む機会ができてよかったと思った。この授業は生徒主体！という感じだったのがすごいよかったと思います。きっとこんな授業がこの大学にあふれてたら、毎日、遅刻せずにみんなちゃんと来るのになあ～

●この授業は、英語を学ぶというより、英語を楽しむ、というかんじでした。それはとても楽しくて、初めて自分から学んだ感じ。先生の熱意がすごかったです(笑)。これからも英語と親しんでいきたいです。

●この英語の授業は、受験英語とだいぶ違ったので新しい気持ちで授業に臨むことができたと思います。月1ということで、朝が一番辛い時間でしたが、楽しんで授業を受けることができました。英語を楽しむ！ということを経験できたことが、この授業で最も得たことだと思います。

●1年間この授業を受けてみて、英語に向き合ってみるといって英語にふれてみるのもおもしろいことなんだと思いました。高校では文法と単語ばかりを学習してきた、それなりに楽しみを感じてはいたのですが、なんだか今いち…。というかんじがしていました。大学に入学し、新しいスタイルでの英語の授業を受け、今までは見向きがなかった英語で書かれた本なども読んだりして、英語がそんなに嫌なものじゃないと感じました。むしろ絵本や、雑誌などは、もっと読んでみたいなあと思いました。自分的には進歩ある1年でした。

●前期からお世話になりました。教科書をつかった授業ではなくて、生活と密接しているので、よかったです。(中略)もともと、英単語すべてが分らなければ先に進めないような読み方しかしていませんでしたが、

この授業を受けて、だいたいの意味を想像して読むことができるようになりました(昔は日本語も辞書を引きながら読んでいました)。

●英語というと、中学から高校、そして大学入試と年をおごとに文法だとか句型だとか、かたくなるしくなり、受験以外に役に立つのかしらと思うような丸暗記ばかりで、とても苦手意識が生まれてきてしまっていました。けれど、この授業ではそんなに息苦しいことは言わないのに内容は充実していたし、自分のペースで自分の好きな本を読めてとても楽しかったです。

●この授業を受けるまでは英語の本を読むことに関して少し劣等感のようなものを抱いていました。過去に「ハリーポッターと賢者の石」を読んだときには、内容があらかじめ分っていたからよめたものの、わからない単語がすごく多く、読み飛ばしたり速読する技術も乏しかったので、ハリーポッターじゃなかったらきっと読めなかつたらろうと思います。しかし、この授業にあたり、いろいろな内容を知らない本まで読むようになり、いろいろな技術を身につけることができたような気がします。絵本のような簡単なものから読み進めていったおかげで、自然に英語を学べたのではないかと思います。

●今まではお決まりの「受験英語」をやってきて、小難しい文法とかやってきたけどこの授業は自分から積極的に英語に関わっていったので、今までと違う英語の楽しみ方をディスカバできました。かなり自由でPOPな感じで授業が進められたので英語むしろ月1が全然苦もなく受けることができました。ありがとうございます。今のところ大学の授業でNo.1はこれです！

●この授業は本当におもしろかったです。自然な形で英語にふれることができて、自分の好きなものを英語で読めて、大学に入って英語の授業に不安を感じていたのを一気にふきとばしてくれるような授業でした。先生が持ってきてくれる英語の本にかわいいものがたくさんあって、読むのが毎週楽しかったです。最後の発表は年末から準備をしていて、それが最後にちゃんと発表できて嬉しかったです。さっき皆が書いてくれた評価を見て、ああ～こういうところが悪かったなあと思うところや、ほめてくれるところなどがあって嬉しかったです。

●一年間この授業をうけて、英語勉強以外の面で学ぶことができたと思う。いままでは単語の暗記や文法の暗記などやられているという意識が英語にはあった。しかし本や雑誌などこの授業で使われているのはとても身近な教材が多かったので親しみやすかった。本来はこのような教育がふさわしいのかなと感じた。学力低下は子どもたちの学ぶことの興味の低下が一番だと私は考えています。国語も同じ言語学なので、この授業で得たヒントを活かしたい。

●この授業を一年間受けて、英語で書かれた本を読む楽しさを再確認しました。高校の時、私は長文の問題を解きたかったのに、先生から「文法が弱いから文法の方をちゃんとやりなさい」と言われ、英語でお話を楽しむ機会が少なくなっていたので…(中略)この授業でより多くの本を読むことができてとてもよかったです。と、同時に、英語の本を読むクセが少しずつついてきたりもしています。来年度はおそらく英語の授業をとらないと思うので、コツコツ図書館で読んでいこうかなあ、と思っています。

●はじめ、この授業を取った理由としては、テストがなく本を読む授業で楽しそうだからということだった。しかし、意外にレポート提出などが多くてたいへんだった。レポート提出はたいへんだったけれども、課題がやっておもしろいものだったので、楽しくレポートを書くことができた。インターネットで英文を読みたいと思ったりしたことがあったので、授業で取り上げてくれてよかった。一年間この授業を受けて本当によかったです。授業で学んだことをこれから役に立てていきたいです。

●小5の頃、英語を始めて楽しかったときの気持ちを思い出した1年でした。高校のときはそれなりに英語を楽しんでたつもりだったけど、今思えば受験英語に苦痛だった気がします。やる気も下降してました…。でも、この授業はテストのための英語じゃなかったから本当に楽しかったです。英語の本を読む楽しさにも巡りあえました。もし、自分が今後どこかで英語を教える機会があたり、こういう楽しさを与えられる授業がやりたいな～と思いました。

これらの自由記述から、普段のクラスで言及したつ

もりはないのに、学生達の方から「自分から積極的に英語に関わっていった」「この授業は生徒主体！という感じだった」「初めて自分から学んだ」「いままでは(中略)やられているという意識が英語にはあった」「コツコツ図書館で読んでいこうかなあ」「やっておもしろいものだったので、楽しくレポートを書くことができた」など、自律的学習者としての視点が垣間見える発言が出てきている。量的に実証することは不可能ではあるが、当初この授業で設定した目標は達成に近づいた、と言えると思う。また、仮説1)の立証に繋がる事例ともなった。

仮説4)も、立証することができたと判断する。学生の記述から、プレゼンテーションまでの密度の濃い活動は、終わった時に相当の達成感と充実感を感じていたことがわかる。前期終了時の記述よりもより積極性を感じる記述になっている。中間時での振り返りを行ったことによって、より学生を積極的・自律的な学習者に強化することができたとと言えるだろう。

一方で、失敗した部分もある。後期終了時にわかったことだが、リアルな素材、オーセンティックな読み物を使っていたことは教師が創造していた以上に学生にとって魅力であったようだ。後期、ストラテジーによりフォーカスをあてるつもりで市販のテキストをコピーする割合が多くなってしまったところ、「後期はどこかの教科書のコピーが多くなったが、こういうのはつまらない」と言ってきた学生がいた。オーセンティックでなおかつ適切な素材にこだわり提供しつづけるべきであった。

また、後期終了時にリーディングストラテジーの Awareness を測る自己診断シートをもう一度行うべきであったのだが、教師が忘れ、行うことができなかった。ここでの結果があれば、後期の結果も継続的に見ることができ、計量的なサポートが可能となったはずだ。

12. 今後の課題

茨城大学総合英語の担当教員として、今回得られた結果と示唆を総合英語のクラスに活用していく方法を探っていこうと思う。今回の学生たちは習熟度で分けられていなかったが、多読はどのレベルの学生にも有

効で有益な活動であるし、ストラテジーも各レベルに合わせたものを指導していくことが可能である。これらを活用して、自律的英語学習者となるよう働きかけていきたい。

13. おわりに

この授業が実りのあるものとなったのは、試行錯誤を繰り返す教師と一緒にplayfulに学んでくれた教育学部TRクラスの学生達のおかげである。この原稿を書いてみて、「学び」がいかにインタラクティブに生じるものであるかを今強く感じている。教師である私に多くの学びを与えてくれた彼らに感謝したい。

References

- Dickinson, L. (1995). Autonomy and motivation: A literature review. *System*, 23, 2, 165-174.
- 古川昭夫、河手真理子、酒井邦秀（監修）『いっばい読めばしっかり身につく 今日から読みます 英語100万語!』（2003）日本実業出版社
- Grabe, W., and F. L. Stoller, (2001). Reading for Academic Purposes: Guidelines for the ESL/EFL Teacher. In *Teaching English as a Second foreign Language*, Third Edition. Edited by Celce-Murcia, M. Heinle & Heinle, Boston, MA
- Harmer, J. (2001). *The Practice of English Language Teaching*. Pearson Education, England.
- 木村真治、清水裕子 (1998) 『Independent Reader - Improving Essential Reading Skills』マクミラン ランゲージハウス
- Krashen, Stephen D. (1997). *Foreign Language Education The Easy Way*. Language Education associates. California.
- 小池生夫 (1990) 『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』（「職業人から見た英語教育に関する実態と将来像の総合的研究」別冊）文部省科学研究費補助研究（慶応義塾大学）英語教育実態調査研究会
- 酒井邦秀 (2002) 『快読100万語！ペーパーバックへの

道』ちくま学芸文庫

Mason, B. and Krashen, S. (1997). *Extensive Reading in English as a Foreign Language*. System 25, 1.

吉田研作「横浜言語と人間の会 春のセミナー」講演より、2002年3月

Mason, Beniko. 『多読を始める前に』。

<http://www.extensivereading.net/er/masonstart.html> Retrieved on Jan. 31, 2005.

“What is IRC?” Interactive Reading Community.

<http://www.entrance.sfc.keio.ac.jp/irc/pages/ircview/aboutirc.jsp> Retrieved on 01/31/2005

“IRC Version 1” 09/30/2003,

<http://www.sfc.keio.ac.jp/iwc/IRC/version1.html>

Retrieved on 01/31/2005

SSS英語学習法／多読＋シャドウイング『めざせ100万語！多読で学ぶSSS英語学習法』

<http://www.seg.co.jp/sss/>

Retrieved on 01/31/2005

i このアンケート記述の結果は一部拙稿「ケーススタディ：大学1年生の英語に対する学習動機」茨城大学人文学部紀要第16号の中において他のクラスの学生の結果と共に既出であることをお断りしておく。

茨城大学における自己点検評価システムの構築—PDCAサイクルとTQM—

The self-study system construction based on PDCA cycle and TQM in Ibaraki University.

寫田敏行 (評価室)・田切美智雄 (学長特別補佐/評価室)

Toshiyuki SHIMADA (office of Institutional Research)

Michio TAGIRI (Vice President Extraordinary)

1. はじめに

平成16年4月に国立大学は法人化され、それぞれの大学が自分たちのビジョンに従って、使命を果たすために努力している。本学も例外ではなく、使命を果たしているかどうかを点検評価し、自分たちの掲げた目標に向かって進んで行かなくてはならない。しかしながら、茨城大学の使命とは何なのかがはっきりしていないと感じるときがある。少なくとも、全構成員が茨城大学の使命は何か?という問に対して、共通の答えを持っていないのではないかと感じられることがある。大学の基本的な方向性のある程度統一しなければ良質な大学運営は為し得ない。さらに中長期的なビジョンの共有無しには、立てた目標や計画が生きてこないだけでなく、毎年立てる計画も場当たりのものになってしまうだろう。同時に、数ある大学の中で、光を放つ存在になること、即ち、個性化を図ることは難しい。従って、構成員が茨城大学の使命を明確に認識し、それを第一期中期目標初頭には行わなくては勝ち組にはならないだろう。

大学という機関の使命とは何か?という問に対して様々な考え方がある。一般的には、1) 人格の形成、2) 潜在能力の開発、3) 知識の伝授、4) 知的生産活動を行うこと、5) 文明の継承(鳥居, 2004)と考えられる。茨城大学の使命があまり明確になっていない部分があるのなら、まずは、社会が大学という機関に対して一般的に期待しているものにどのように応えていくのか、ということを考えなくてはならない。さらに、どこまで応えているかを点検評価して、その結果を活かして先に進む必要がある。

もう少し実際的な面から点検評価を見てみよう。「大学はなぜ点検評価を行うのか?」それは、教育・

研究の「質」の向上・保証のためである。良質の学生を社会に送り出すのは大学の使命である。そのためには、学生に施す教育の「質」を保証しつつ、同時にその「質」を高める努力をしなくてはならない。さらに、そのためには研究の「質」も高める必要があるのは言うまでもない。そうすることによって、少子化に伴う受験生の減少という状況の中で、教育市場における競争力を確保することができると考えられる。加えて、得られた「質」の高い研究成果を社会に還元することも大学に求められていることである。つまり、大学が学生を含めた社会に対して提供できる教育・研究サービスの「質」を全員で高める必要がある。そのために、点検評価を行うのである。

一方で、「大学にとって自己点検評価とは何か?」それは現状を認識することである。つまり、自分たちがどこまで何をしているのか、茨城大学のどこが長所でどこが短所なのか、そこを客観的かつ正確に把握することである。客観性の無い自己変革は「独りよがり」なものになりがちである。

こういったなかで、筆者らは茨城大学の自己点検評価活動を支援するシステムの構築を行ってきた。詳細は次章以降に記載するが、このシステムは①できる限り多くの構成員が参加できること、②茨城大学の様々な活動を記録し、その情報を全員で共有できるようにすることを基本コンセプトとして中長期計画委員会の下で開発を行ってきた。この自己点検評価システムは現在も構築中であり、学内構成員のみなさまの意見に耳を傾け、より使いやすいシステム、より有効なシステムを構築することが筆者らの使命であると考えている。構成員のみなさまのさまざまなアイデアをご教示いただくためにも、現在(平成17年1月末)の状況や

問題点などを整理して報告する。

2. 中期目標・中期計画について

2. 1 中期目標・中期計画の概要

国立大学法人茨城大学の運営は、中期目標・中期計画がベースとなっている。中期目標は、文部科学省から示される茨城大学が達成すべき目標であり、それを達成するための計画が中期計画である。中期目標は国立大学法人側から文部科学省に「中期目標についての意見」という形で原案を提出するというシステムになっている。つまり、実際には、国立大学法人側で目標、計画の両方が具体的に設定できる。これらは6年ごとにあらたに設定し、実施される。従って、6年に1度、その達成度の評価を受けることになる。評価を行うのは、文部科学省内に設置される国立大学法人評価委員会であるが、教育・研究に関する専門的な評価は大学評価・学位授与機構が担当する。大学に対する国立大学法人評価委員会の評価について、総務省の政策評価・独立行政法人評価委員会が評定を行うことが定められている。中期目標・中期計画の評価自体は6年に1度行うものだが、次期中期目標・中期計画の策定のために第一期5年目末後に「中期目標終了時の組織・業務の見直し」資料という形で、今期中期目標・中期計画の事前評価が行われることが確実視されている。また、そこに総務省が相当な関与を行ってることが推測されている。

年度計画は中期計画を実施するための計画であり、1年ごとに国立大学法人評価委員会の評価を受けることになっている。年度計画の届出は毎年3月末、その達成に関する自己評価書である業務の実績報告書は翌年6月末までに文部科学省に提出するよう定められている。その報告書において、教育・研究の状況に関しては中期計画（年度計画）がどの程度進んでいるのかを外形的、客観的な手法で記載する。業務運営、財務内容等の状況に関しては4段階で自己評価を行う。この大学側の自己評価に対する国立大学法人評価委員会の評価は8月末に示され、1ヶ月の意見申し立ての期間を経て9月末に確定する。この評価に対しても総務省の政策評価・独立行政法人評価委員会が評定を行うことになっているが、詳細については未定である。

中期目標・中期計画とは直接の関係はないものの、茨城大学が今後受けなくてはならない評価として、認証評価というものがある。中期目標・中期計画が国立大学法人法、独立行政法人通則法の定めに従い評価されるのとは異なり、認証評価は、学校教育法の定めに従って、全ての大学がこの評価を受けなくてはならないものである。中期目標・中期計画や年度計画が、茨城大学の事情によって作成できるのとは異なり、認証評価は予め設定されている基準に従って、教育水準等がある一定の水準を上回っているかどうかを評価される。これらは大学評価・学位授与機構や大学基準協会など文部科学省の認可を受けた認証評価機関に依頼して、7年に1度、評価を受けなくてはならない。評価のポイントなどについては、各認証評価機関のwebサイト等に掲載されているので各自参考にされたい。

2. 2 茨城大学の中期計画、年度計画

中期目標・中期計画策定の経緯について概説しておく。最初に(1)全学の中期目標素案を作成した。それを基に(2)各部局が各部局の中期目標・中期計画案を作成した。(3)中期計画策定小委員会においてそのとりまとめを行い、全学の中期目標・中期計画(素案)を策定した。(4)平成15年9月末に全学の中期目標・中期計画(素案)を文部科学省に提出した。同時に、参考資料として各部局の中期目標・中期計画の提出も求められたために、改めて作成し、「学部等に固有の具体的事項」として提出した。これらに対して、(5)国立大学法人評価委員会からいくつか意見が出たために、(6)それらを参考に全学の中期目標・中期計画(素案)の修正を行い、平成16年4月に中期目標を提出(5月提示)、5月に中期計画を提出し、6月初めに認可された。この際には、いわゆる参考資料の提出は求められなかった。

一方、年度計画策定の経緯は次の通りである。(1)各部局が各部局の年度計画を作成した。(2)点検評価担当理事(中長期計画委員長)が各部局の年度計画からのピックアップや融合によって全学年度計画素案を作成し、そこに全学的に行わなくてはならないと判断した年度計画の追加を行った。(3)中長期計画委員会においてその案を議論し、(4)役員会等で審議の上、

平成16年6月に文部科学省に提出した。

茨城大学の中期目標・中期計画は、各部局の中期目標・中期計画をベースに作成されたが、各部局の中期目標・中期計画は、認可や評価の対象ではなく（根拠：国立大学法人法）、最終的には提出も行っていない。即ち、茨城大学が公約したのは全学の中期目標・中期計画である。茨城大学は全学を挙げて全学の中期目標・中期計画の達成に取り組まなくてはならない。従って、各部局は、各部局の中期目標・中期計画に従って年度計画の作成を行うのではなく、原則的に全学の中期目標・中期計画をいかに推進できるか、という視点を持ちつつ、その部局の教育・研究や運営の質を着実に向上させる年度計画を立案し、実行しなければならないのである。

3. 自己点検評価システムとマネジメント

3.1 ワークシートーPDCAサイクルの具現化作業とTQMー

茨城大学の自己点検評価ならびにマネジメントのキーワードは、①PDCAサイクル、②ワークシート、③経営戦略情報システムである。PDCAサイクルは、Plan [計画] → Do [実施] → Check [点検評価] → Act [改善] を繰り返し行うことによって「質」の向上を図るワークフローである。年度計画について、PDCAのプロセスごとに記載を行い、併せて根拠となるデータを関連づけておくツールが、ワークシートである。ワークシートは、

- P1 [現状認識] (計画1)
- P2 [今年度の実施計画] (計画2)
- P3 [今年度の資源計画] (計画3)
- D1 [中間報告] (実施)
- C1 [実施計画に対する自己点検評価] (点検評価1) 【P2に対応】
- C2 [資源計画に対する自己点検評価] (点検評価2) 【P3に対応】
- A1 [改善案の策定] (改善)

という7つのフェイズと

- 評語・コメント

から構成される。これらを現場と理事・学長との間でやりとりをしながら自己点検評価を行いつつ、中期計

画の達成を図っていくというものである。これらのワークシートは1) 年度計画の数に関係なく、1つの中期計画に対して1枚の全学ワークシート、それぞれ1枚ごとの部局ワークシートから構成される(図1)。例えば、1つの中期計画を3つの部局で担当している場合には、3つの部局のワークシートを編集して全学用のワークシートを作成する。また、2) ワークシートは6年間継続して使用する。図1は中期計画と全学年度計画、部局年度計画の対応関係の例を示したものであるが、このように複雑になっている例が少なくない。平成16年度は、年度計画策定の時間的余裕がなかったために、部局の年度計画も全学の中期目標・中期計画に従って立てなくてはならないということが、周知できなかったからである。即ち、部局の多くはその部局の中期目標・中期計画(いわゆる参考資料)に従って年度計画を立案したために、全学の中期計画や年度計画と若干整合的ではない状況が発生したのである。

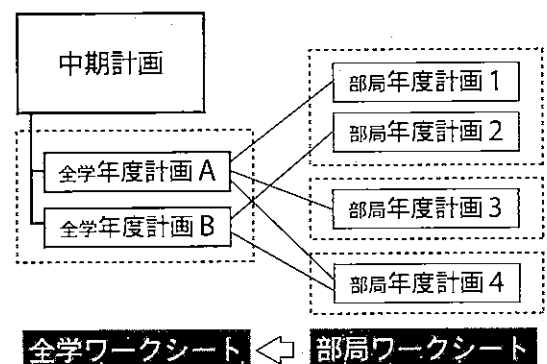


図1. 中期計画と全学年度計画、部局年度計画との関係の例。それぞれの破線が1枚のワークシートを示す。

ワークシートは、各現場において、割り当てられた年度計画(中期計画)の実施に携わるチームがそれぞれに記載することを想定している。学部組織であれば各委員会、事務組織なら部もしくは課である。それらの記載を、学部組織なら学部長が最終的に確認(評価)し、事務組織なら部長クラスのチェックを経た後に担当理事が確認(評価)する。なるべく多くの構成員がワークシートに携わる方式にしたのは、この茨城大学方式の自己点検評価システムがPDCAサイクルという循環型チェックシステムの他に、TQM(総合品質経

営)という考え方もベースにしているからである。TQMは、セイモア(2000)や館・森(2002)などにおいてまとめられているので、本小論での詳述を避けるが、その定義としては、館・森(2002)のなかで引用しているBemowski(1992)の「組織の全構成員の参加を基礎に、過程、製品、サービス及び仕事文化を改善することによって、顧客の満足を通じての長期の成功を目指す経営手法」などが一般的である。

大学の運営に関して顧客という単語は馴染まないかもしれないが、顧客をステイクホルダ(利害関係者:学生、地域住民、企業、受験生、保護者等)と読み替えば、それほど異質のものではないだろう。例えば、学生が「茨城大学で勉強ができてとても良かった」、学生を採用した企業が「茨城大学の卒業生を採用して本当に良かった」などと思っていただけになり、それを社会に対して客観的に説明ができて、さらに、社会の中でそういう存在であり続けることが出来るならば、茨城大学は数ある国立大学の中で確固たる個性を持つ大学として存在し続けることができる。ステイクホルダの満足のために全構成員が同じビジョンのなかで頑張ること、それがTQMである。

TQMでは全員の参加、が重要である。国立大学法人の運営についてはトップマネジメントの重要性が指摘されているが、これまでの運営方式を鑑みると、単に上意下達の意志決定方式にシフトしても法人がすんなりと動くとは考えにくい。そこで、茨城大学の自己点検評価システムをベースとしたマネジメントは、現場からの提案(ボトムアップ)と、トップのビジョン(トップダウン)との調和を図るスタイルを採用した。例えば、全学の年度計画の策定プロセスを見てみよう。全学の年度計画は、原則的に現場において発案する部局年度計画の中から、トップである学長、理事が吟味の上、採択する。その後、中期計画を全体的に見渡して進行が手薄になっている部分や、中長期的ビジョンから大学としてこれは実施、着手しておかなければならない、とトップが判断するものは、トップダウンという形で各部局に年度計画としての実施を指示する。

計画のセット状況、さらに実施状況は、公開されているワークシートを閲覧することによって、全構成員

が知ることが出来る。このようなシステムによって大学はどこへ進もうとしているのか、自分が大学の中で何をしているのか、関連する業務を行っている人々は何をしているのか、ということ認識しやすくすることで、あるビジョンの中での自分たちの行う業務の位置づけがより明確になることが期待される。

実際にワークシートをどのように使って自己点検評価を進めていくかについては、次章に譲るとして、茨城大学方式ともいえる現在試行中のこのワークシートは、①現場で起こっている問題を経営陣等に伝えるツール、②現場の実績を経営陣等に伝えるツール、③結果だけでなく、プロセスの記載を行い、改善すべき点を発見し、次年度につなげるためのツール、④データを蓄積し、自分たちの取組を客観的に把握するためのツール、⑤業務の連続性を確保するためのツール、⑥他の学部、他の委員会が何をしているのか、情報の共有を行い、切磋琢磨するためのツールといえる。これらのシートに自分たちの実績を記録し、それを点検評価して、業務改善、教育・研究の質的向上に活用する。

3. 2 経営戦略情報システム

これらのワークシートと付帯するデータを収録するために経営戦略情報システムという簡易データベースを準備した。現在のところ、このデータベースは学内のみの公開になっている。中期目標・中期計画、年度計画に関する各種情報、これらのワークシートとそれに付帯するデータの格納を行っているが、将来的には客観的な数値データから見る茨城大学の現在の姿や、他大学との客観データ比較(ベンチマーク)などの掲載を予定している。ワークシートはhtmlファイル、各種のデータは、MS-WordやMS-Excelなどお預かりしたデータファイルをそのまま掲載しているが、一太郎ファイルはMacintoshユーザの方で読めない方が多いために、PDFファイル形式に変換の上、収録している。なお、紙媒体でいただいた資料も全てPDFファイルに変換して収録している。お預かりしたデータは原則的に公開するが、プライバシーにかかわるもの、入試業務などに関連して非公開扱いのものなど取扱注意の資料については公開しない。urlは <http://msds.admb.ibaraki.ac.jp/>

である。

4. 茨城大学の自己点検評価と計画策定

では、実際にワークシートをどのように使うのかを見ていくことにしよう。計画の立案というのは、前年度に実施したことの改善から始まることを考慮して、Check [点検評価] からみていくことにする。なお、年間スケジュールは図2、PDCAサイクルの全体的な流れは図3に示す。

4. 1 [年度計画暫定評価] (毎年1月末) (図3)

本来ならば、年度計画が終わる3月末までの状況やデータに基づいて点検評価したほうが合理的であるが、次年度の計画は3月末の時点には策定されている必要がある(根拠: 国立大学法人法・第31条ほか)。そこで、各部署は、1月末を目途に暫定評価という形で点検評価 [Check] と改善 [Act] を実施し、それをベースに同時的に次年度計画を作成する。その際に記載するのは以下の項目である。

点検評価 [Check]

■C1 [実施計画に対する自己点検評価] (点検評価1)

- ・計画に対する結果をデータや資料を示しつつ記載する。
- ・計画が達成できていなかった場合、なぜ達成できなかったのか記載する。

(これらは後述の実実施計画の [P2] に対応する)

■C2 [資源計画に対する自己点検評価] (点検評価2)

- ・予算の執行状況について、記載する。
- ・無駄がなかった等のチェックを行う。

(これらは後述の資源計画の [P3] に対応する)

この部分には、今年度実施してきた年度計画はどうなったのか、ということに記載する。これらの記載を基にして、各部署では「年度計画の達成度」という観点から評語とコメントを記載する。1つの中期計画に対して、複数の年度計画を実施している場合には、その計画と同数の評語・コメントを記載する。これら部局ワークシートにおける評語・コメントの記載者は表1に示す。

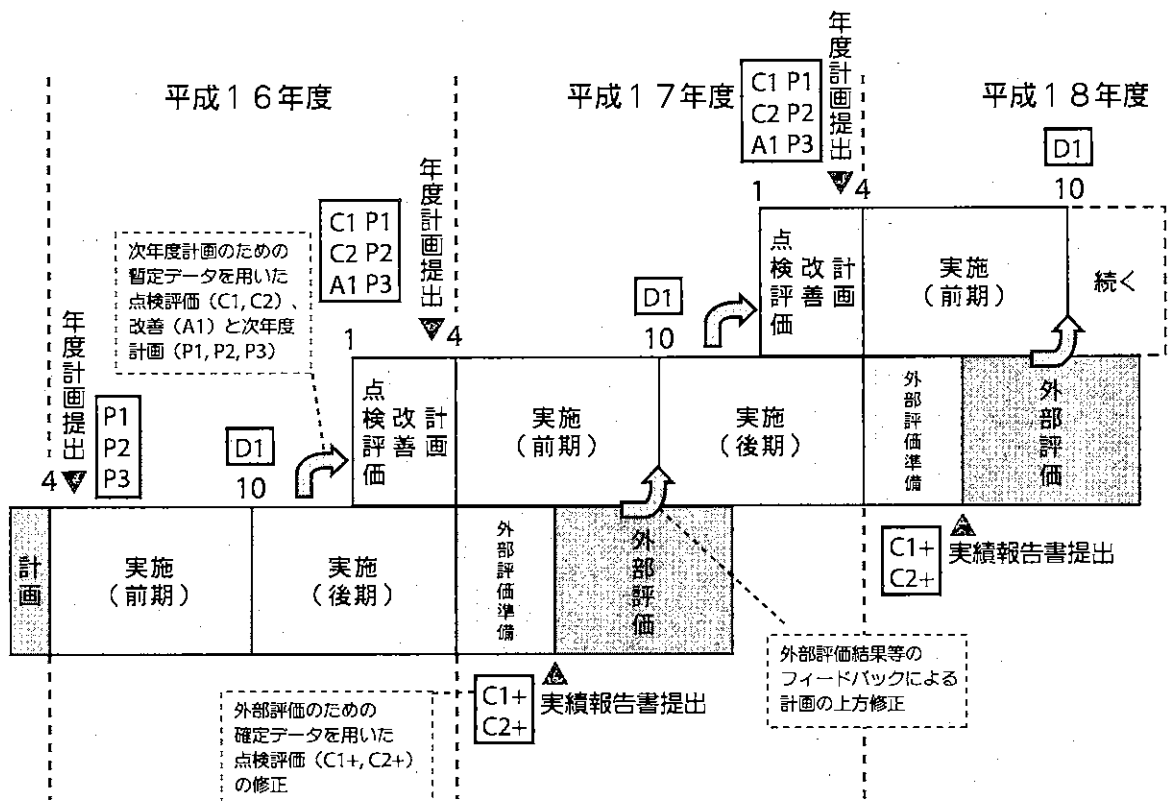


図2. 自己点検評価の年間スケジュール

P 計画	P1	[現状認識] (計画1) ・なぜこの年度計画を立てたのか ・これまでの経緯、現状
	P2	[今年度の実施計画] (計画2) ・P1を受けて具体的に誰が、何を、どのようにするのか ・それによって期待される成果は何なのか
	P3	[今年度の資源計画] (計画3) ・どれだけの人材と費用を使って何をするのか ・(予算要求の計画が入る場合は) 要求が実現しなかった時に計画をどうするか ・特筆すべきコストパフォーマンスの高さなど
D 実施	D1	[中間報告] (実施) ・9月末時点における年度計画の進捗状況を記載する
C 点検 評価	C1	[実施計画に対する自己点検評価] (点検評価1) 【P2に対応】 ・計画に対する結果(データや資料) ・計画が達成できていなかった場合、なぜ達成できなかったのか
	C2	[資源計画に対する自己点検評価] (点検評価2) 【P3に対応】 ・予算の執行状況について、記載する ・無駄がなかった等のチェックを行う
A 改善	A1	[改善案の策定] (改善) ・計画の達成について問題点があった場合、その解決策 ・計画の達成について特筆すべき良い点があった場合、その要因等

図3. 茨城大学におけるPDCAサイクルの流れ

■年度計画達成度評価

この部分には4段階評価の評語と、その評語にした理由をコメントとして記載する。

S: 特に優れた実績を上げている

A: 年度計画を十分に履行し、中期目標に向かって着実に成果を上げている

B: 年度計画を十分に履行しているとは言えない面もあるが、工夫若しくは努力によって、中期計画を達成し得ると判断される

F: 年度計画を十分には履行しておらず、中期計画達成のためには相当な改善が必要である

文部科学省に提出する際の評語と茨城大学で用いる評語は異なっている。文部科学省の評語とコメントは、その大学の自己点検評価を意図したのではなく、あくまでも年度計画が達成できたか、できなかったかという視点で見ている感が強い。一方、茨城大学方式では、改善すべき点がどのくらいあるのか、という観点でみているために文部科学省方式とはどうしても齟齬が出てくる。2つの評語の対応は表2に示す。

	学部・研究科	大学教育研究 開発センター	図書館	学内共同教育 研究施設等	事務局関連
自己評価者1 (現場担当者)	実施を担当した 委員会や点検評価 担当委員会	センター長	館長	各施設の長	部長もしくは センター長・所長
自己評価者2 (実施責任者)	学部長・研究科長	担当理事	担当理事	担当理事	担当理事

茨城大学方式		文部科学省方式	
特に優れた実績を上げている	S	IV	年度計画を上回って実施している
年度計画を十分に履行し、中期目標に向かって着実に成果を上げている	A	III	年度計画を順調に実施している
年度計画を十分に履行しているとは言えない面もあるが、工夫若しくは努力によって、中期計画を達成し得ると判断される	B	II	年度計画を十分に実施していない
年度計画を十分には履行しておらず、中期計画達成のためには相当な改善が必要である	F	I	年度計画を実施していない

即ち、例えば茨城大学で良い方から3番目の評語になったものも、後日、文部科学省の評価方式で2番目の評語に当てはめるなどの再評価作業が役員会等で必要になるが、「改善」という目的を果たすためには、計画の実施結果に対して大学内部の厳しい目で評価を行う必要がある。

点検評価が済んだところで、洗い出された問題点に対する改善策を記載する。顕在化された問題点が無くとも、「質」の向上にゴールは無いので、そのような場合には、さらに今年よりも良質な教育、研究、運営業務をするためには、どうしたらよいか、ということを考えて、この改善[Act]の項を記載する必要がある。

■A1 [改善案の策定] (改善)

- ・計画の達成について問題点があった場合、その解決策を具体的に記載する。
 - ・計画の達成について特筆すべき良い点があった場合、その要因等を記載する。
- (全学に発信するという意味合いである)

ここに書かれたことを、次年度計画に活かす。

4. 2 [次年度計画] (毎年1月末) (図3)

先に述べたように、次年度計画は、前年度の実施結果からの改善点を活かして立案するので、この作業は4. 1 [年度暫定評価]と連続的に行われる。各部局では、中期計画の進行状況、前年度の年度計画の達成状況、他部局の動きを考慮して、まず次年度の年度計画を立案する。その計画の実質的な内容をP1からP3としてワークシートに記載する。年度計画の立案は全学中期計画をいかに推進するか、という視点で立案することが肝要である。前にも述べたが、各部局の中期目標・中期計画(通称:参考資料)は評価の対象ではなく、全学の中期目標・中期計画のみが評価の対象である。従って、茨城大学としては全部局を挙げて、全学中期計画を推進して行かなくてはならない。

■P1 [現状認識] (計画1)

- 1) なぜこの年度計画を立てたのか、という記載する。

(①現状に問題がある、②特に問題は無いが改善を行うとよりよくなる、だから、この計画を立てたといったもの)

- 2) これまでの経緯、現状について記載する。
- 3) 受け手としては、学部長、理事ではなく、経営協議会の学外委員といったような内部事情に精通していない方を想定して記載を行う。

■P2 [今年度の実施計画] (計画2)

- 1) P1を受けて具体的に誰が、何を、どのようにするのか?、ということに記載する。
- 2) それによって期待される成果は何なのか?、ということに記載する。

■P3 [今年度の資源計画] (計画3)

- 1) どれだけの人材と費用を使って何をするのか、ということに記載する。
- 2) 概算要求や大学への予算要求の計画が入る場合は、要求が実現しなかった時に計画をどうするか、ということに記載する。
- 3) 特筆すべきコストパフォーマンスの高さなどがあれば記載する。

(P3は、資源配分とのリンクがある程度可能になれば、予算要求書的なものになる予定)

4. 3 [ワークシートのとりまとめ] (図4)

各部局は、これらのワークシートについて学部長など部局の長の評語・コメントを付加したのちに学長に提出する。提出された部局のワークシートは、2月中旬までに点検評価担当である学術担当理事ならびに学長特別補佐、企画課大学改革係が記載事項等をチェックする。全学のワークシートは、チェックを経た各部局のワークシートを編集し作成する。これらを、学長、理事に提出する。

4. 4 [理事評価・次年度計画策定作業] (図4)

それぞれの理事は2月下旬までに担当分野の今年度の全学年度計画の達成度を個別に評価する。それと同時に、**中期計画の進行状況**も点検評価する。これは、理事が自分の業務について自己評価するという意味もある。

■中期計画進捗度評価

S：特に優れた実績を上げている。

A：計画通り進んでいる、又は、計画を上回り、中期計画を十分に達成し得る可能性が高いと判断される。

B：計画通りに進んでいるとは言えない面もあるが、工夫若しくは努力によって、中期計画を達成し得ると判断される。

F：遅れている、又は、中期計画を達成し得ない可能性が高いと判断される。

その結果を踏まえて、次年度の全学年度計画案を作成する。全学の年度計画は、各部局の年度計画をそのまま採用するものもあれば、組み合わせて採用するものもある。また、全学的に行わなければならない計画を追加することもある。従って、各部局の年度計画に適宜修正を求める場合もある。この局面では、各部局が年度計画を着実に実施すれば、全学として中期計画が確実に進行するように全学的なバランスを調整する。

4. 5 [学長評価・次年度計画案吟味] (図4)

学長は3月初頭までに理事が作成した評価結果、次年度の全学年度計画案を吟味の上、今年度の全学年度計画を点検評価する。これは、理事の業務を評価するという意味合いもある。また、理事は205個の中期計画を3人で担当するが、学長は全てを吟味することになるので、中期計画4～5個を1グループとした単位で評語・コメントを作成する

4. 6 [次年度計画案の策定・学長室] (図4)

学長と理事（または総合戦略会議）は3月初頭に次年度の年度計画について協議する。そこで協議された次年度の全学年度計画案は、今年度の全学年度計画の暫定評価結果とともに3月上旬までに全学に公表する。

4. 7 [次年度計画の決定]

次年度の全学年度計画案の公表後、3月中に少なくとも2回の中長期計画委員会を開催し、次年度の全学年度計画案について議論を行う。ここでは理事や学長が追加、修正した年度計画の再吟味や、全学的な中期

計画の進捗度合いを考慮した計画の分担バランスの調整などを議論する。このようにして作成された全学年度計画案は教育研究評議会、経営協議会、役員会の審議を経た上で毎年3月末（法律上の締め切り）に文部科学省に届出を行う。

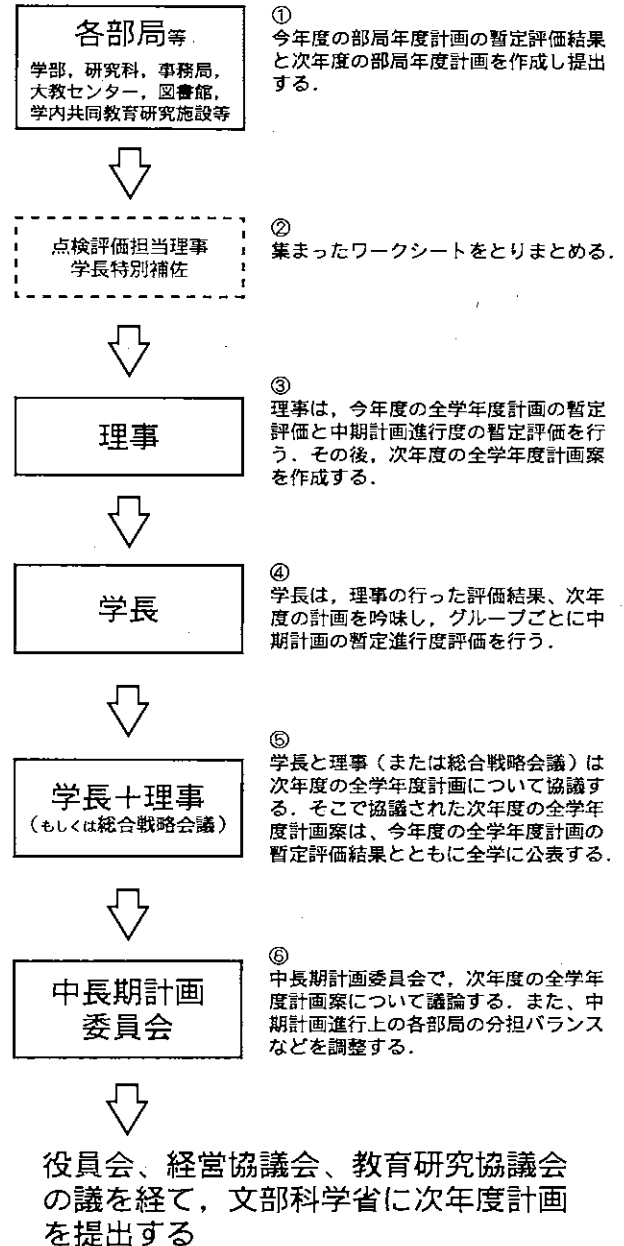


図4. 全学年度計画案策定の流れ

4. 8 [本評価と外部評価]

各部局は、4月に確定データを用いて1月末に行った暫定点検評価の修正を行なう。それらを基にして、理事・学長は全学年度計画達成度評価、中期計画進捗度評価の修正を行う。続いて、国立大学法人評価委員会の評価を受けるために、指示されたフォーマットに

従って、理事が中心となって業務実績報告書の記載を行う。この報告書は6月末に提出し、9月末に評価が確定する。

4. 9 [中間報告] (10月)

各部局では、実施状況把握のために9月末時点における年度計画の実施状況を記載する。実際のところ、計画に対する結果はC1 [点検評価] のところで記載するので、ここでは特筆すべきこと以外は、全体的な進捗を簡潔に記載する。また、8月末に公表される国立大学法人評価委員会の評価結果から、すぐにでも対応しなければならない事柄が発生した場合、D1を使って計画を上方修正するという設計である。しかしながら、外部評価は未経験なので、その状況次第でこの部分の記載方針は変更される可能性がある。

5. 今後の課題

①現在の課題として、計画と予算のリンクができていないことが認識されている。つまり、全学の資源配分プロセスが年度計画立案プロセスと整合的に整備されていないために、せっかく各部局で中期計画達成のための優れたアイデアを持ってきても、予算不足のために実現できないという状況が発生する。従ってP3 [資源計画] を資源配分要求書として機能させ、全学年度計画が策定されるときには、大枠の全学予算も確定しているという状況にするための仕組みを作っておかなくてはならない。一方、予算が得られなかったときにどのように進めるのか、という視点はどのような配分プロセスになっても必要な観点である。これらに関連して、概算要求と年度計画との関係も曖昧なままであるが、早急に流れを整理しなければならない。

②このようなワークシートによって現場レベルの状況を経営陣が把握しやすくなったと思われるが、経営陣の持つヴィジョンを現場サイドに流す仕組みの整備が遅れている。これについては、学内における情報の流れをさらに改善する必要がある。

③点検評価において、評価結果について一喜一憂することには、あまり意味がない。得られた評価をどのように活かすか、ということが重要である。しかしながら、現在、本学には、得られた評価結果やデータを収

集した上で客観的に解析し、各部局の求めに応じて「考えるための資料」を提供する組織が存在しない。例えば、得られたデータなどを適切に解析し、茨城大学の現状に関するデータの提供や、ベンチマーキングなどを行う組織が必要であると考えられる。

④ワークシートに何をどこまで書けばよいのか、という質問はかなり多くいただいた。これに関しては、自己点検評価の流れそのものが試行錯誤で進めている状態であるために、はっきりと答えられない状態が続いている。そのために、何のために自己点検評価を行っているのか、といった基本的なことに関しても、こちらの考えることと各記載者の考えることとの間に齟齬が見られる。自己点検評価は「何のために自己点検評価を行っているのか」ということを全構成員が認識していなければ、単なるアンケート調査になってしまう。従って、周知を十分に行わなくてはならない。一部では、「教育プログラム」「カリキュラム」といったタームにも混乱が見られた。これも次年度の課題としたい。

⑤今後実際に理事評価や学長評価だけでなく、文部科学省国立大学法人評価委員会の評価、さらに総務省評価といった一連の流れを経験しないと、自己点検評価システムの改良箇所について見えてこない部分も多く、しばらくの間は、手探りの試行錯誤を続けなければならない。みなさまにはご協力をお願いしたい。

6. おわりに

自己点検評価とは、大学がその使命を果たすために必要なプロセスである。適切かつ継続的な自己点検評価により教育・研究・運営などの質的改善を行うことで、大学はその使命に向かって着実に進んでいくことが可能になる。また、自己点検評価の記録は、社会に対して、茨城大学が使命を果たしていることを説明するための根拠資料でもある。自己点検評価を活用して、茨城大学の価値を高めること、その実績をきちんと社会に説明すること、それらは国立大学法人に求められていることである。

そのためには、できる限り多くの構成員が自己点検評価に参加し、できる限り多くの情報を共有することが重要である。換言すれば、大学が「何をしています」「どこへ向かっているのか」といった『現状』や『ヴィ

ジョン』を共有し、その中で自分の役割や専門分野を活かした、それぞれの「大学改革」に取り組む必要がある。

謝辞

点検評価システムの構築に関しては、企画課田中裕二大学改革係長をはじめとする、学術企画部企画課のみなさまに大変お世話になりました。また山形耕一委員長（学術担当理事）をはじめとする中長期計画委員会の委員のみなさま、各ワークシートの記載担当者の方のみなさまには、さまざまなお意見、ワークシートを使った際のご感想などをいただきました。記して謝意を表します。

引用文献

Bemouski, K. The quality glossary, Quality progress, 18-29, 1992.

セイモア・D・T, 『大学個性化の戦略』 [館昭、森利枝訳], 玉川大学出版部, 2000. [Seymour, D. T. On Q: Causing Quality in Higher Education, American Council on Education and The Oryx Press, 1993.]

館 昭・森 利枝, アメリカの大学におけるTQM (総合的品質経営) 活用状況に関するアンケート調査結果, 研究紀要「大学評価」, 1, 5-24, 2002.

鳥居 泰彦, 教育改革と大学のあり方, 現代の高等教育, IDE, 462, 5-14, 2004.

韓国の私立大学における点検評価体制 (慶熙大学の例)

A report of check and evaluation system in Kyung Hee University, Korea

畠田 敏行 (評価室)・白根 純人 (総務部)

Toshiyuki SHIMADA (office of Institutional Research)

Sumito SHIRANE (Administrative Affairs Department)

1. はじめに

隣国韓国では、「韓国大学教育協議会」という大学連合体が適格認定評価 (アクレディテーション) を行い、さらに政府 (教育人的資源部) が資源配分を念頭に置いた評価などを行っている。馬越 (2001) の報告によれば、韓国大学教育協議会には全ての国公私立大学が加入し、1982年から大学評価を行っている。10年間の試行錯誤の後に、1994年から「大学総合評価認定制」がスタートし2000年にその第一期が終わった。現在は、第二期に入っている。これらは教育・研究活動が一定水準を満たしているかどうかを認定し、それを通して水準の維持向上を図ることを目的としている。第一期が「条件整備のための評価」とすれば、第二期は国際競争力確保という視点での大学教育の品質保証を評価の戦略的目標としており、いわば「品質管理のための評価」と言える。

韓国の私立大学は政府からいわゆる経常費助成のような機関補助金を受けておらず、教育人的資源部 (文部科学省に相当する) からプロジェクトによって特別助成のような資金を得るだけである (喜多村, 2001)。従って、教育に関する競争的資金の配分を行う教育人的資源部の評価はかなり重要である。

今後わが国においても中期計画の達成度評価と運営費交付金とがリンクする制度や認証評価制度がスタートする。従って、各種の外部評価に対する対応、またそのための自己点検評価の充実は今後の大学発展のために必須であると考えられる。そこで、韓国の大学が①適格認定評価や政府の評価にどのように対応しているのか、②教育・研究の質的向上のためにどのような自己点検評価をどのような体制で行っているのか、③評価と教職員の処遇をどのように関連づけているのか

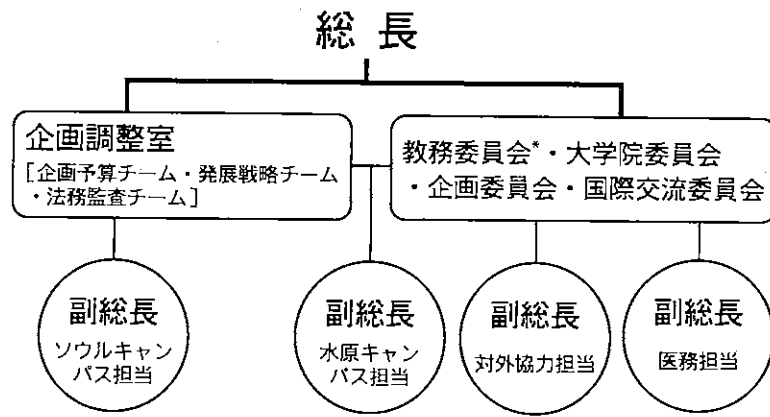
等を調査する目的で、筆者らは平成16年10月18日にソウル市にある慶熙大学を訪ねた。

慶熙大学 (Kyung Hee Univ.) は韓国の大学ランキングのトップ10に常連の私立大学で、2004年に開校55周年を迎えた。慶熙大学は、ソウルキャンパスと水原 (スウォン) キャンパス、光陵 (クァンヌン) キャンパスに約25の単科大学を持ち、世界52ヶ国、231校と姉妹校提携を結び、大学間の単位互換、語学研修、国際交流プログラムなどを実施している大学である。対応に当たっていただいたのは、国際交流処の金峻鉉 (Kim, Choon-hyun) 係長と高範秀 (Ko, Beom-su) 氏、理科大学地理学科の田中幸哉副教授である。国際交流処のお二人には、主として組織評価、職員評価体制を、田中副教授からは主として教員評価や教育・研究環境に関するお話を伺った。

2. 組織評価について (図)

総長の下に、教員のみで構成される全学企画委員会がある。ここが点検評価の担当委員会である。そこを実質的に動かしているのが企画調整室である。企画調整室は総長が任命する企画調整室長 (教員) を頂点に教員と職員とで構成される。その下に4人の副総長がおり、それぞれソウルキャンパス担当、水原キャンパス担当、対外協力担当、医務 (病院) 担当である。その下に、各単科大学長 (学部長) がいる。

定期的な自己点検評価は事務セクション、単科大学など教育・研究セクションともに毎年行っている (一部の教育・研究セクションを除く)。このような定期的な自己点検評価以外に、外部評価や競争的資金の申請などを行う際には、対応チームを企画調整室内に編成する。チームのメンバーは企画調整室の室員以外に



*本学の教務委員会とは異なり、人事なども所掌する。(Academic Affairs Committee)

図. 慶熙大学の運営組織

も、様々な部署、単科大学（学部）から招集する。メンバーの選出は、知識や実力といった点も選考基準になるが、将来を見据えての人材の育成という点も考慮して選考されている。評価に関する資料は基本的に職員がすべて準備し、教員が作文をする。しかし、教員は作文自体は巧みなものの現実味に欠ける場合があるので、職員がそれをチェックし修正する。教育、研究、運営に関する基礎的なデータは企画調整室でも確保しているが、詳細なデータは各部署のデータベースからその都度集めるという方式をとっている。

こういった評価等の対応チームは、短いものは1ヶ月程度、長いものでは1年以上の期間にわたって編成される。小規模なものは会議室を確保し、ほぼ毎日ミーティングを行い、作業自体は各自自分の机で進める。大規模なものは専用の部屋を確保し、いわゆる事務部門を設置して行っている。こういったチームに属する場合には併任となるが、その教職員には併任手当が支給される。

企画調整室長が評価作業の実質的な責任者である。例えば、芸術学部の評価を行ったとする。そこで音楽の教員の国際交流があまり進んでいないという結果が出れば、企画調整室長の権限で予算を回し、音楽の教員の国際交流を推進する、といったことを行う。このように企画調整室長は、ある程度の予算権限を持っている。額の大きなものは総長や経営母体である財団の理事会に相談しなければならないとのことである。ただし、単科大学などからの予算要求も企画調整室長が

承認しなければ、総長、理事会へとは話が進まない仕組みになっている。

3. 個人評価について

3. 1 職員評価

慶熙大学の職員採用にあたっては大学卒業が条件になっている。また、職員のスキルアップ研修の一環として、語学学校やコンピュータの学校に通うことも奨励されており、その際の授業料などは全て大学から支給される。修士号の取得も奨励されており、自大学のマスターコースへは上司の許可を得れば、授業料不徴収で入学できる。また、情報、広報、図書、国際関係の職員は専門職とし、基本的に異動はないようである。

業務目標は総長や企画調整室長から「こういったことをやりなさい」と命じられるものと、現場サイドで「これがやりたい」と提案するものを調和させて設定している。チーム（課）にはやるべきことのリストが存在し、それが個人にアサインされているスタイルである。従って、業務の責任体制が明確である。

職員評価はチーム（課）として目標が達成できたか、というチーム評価と個人評価をミックスしている。チーム評価でよい成績が得られても金一封が出る程度であるが、職員の士気が高いのか、あまり不満はない印象であった。

個人を対象とする勤務評価は①各人が自己評価を行い、それを②上司が評価する、というスタイルである。自己評価は協力体制が十分だったか等の数項目に点数

を付ける。上司による評価は主任以下については課長が行い、係長以上は企画調整室長や総長が行う。給与は1級から9級で基本的には1年で1号上がる。成績がよければ、2、3号上がるそうである。

1990年代からこういった評価を開始したが、開始直後の時期には、評価でかなりひどい評価を受けた7名が名誉退職（日本の勸奨退職制度に近いもの）をしたそうである。その中には課長級3名を係員級に降格するという人事を行い、退職を促すという方法も採ったそうである。ただし、こういった降格人事等は総長、副総長、総務部長、企画調整室長、労働組合委員長（入らないときもある）で構成される会議体で慎重に審議を行い決定する。一方で、教員のポストだった学生部長等のポストにも事務職員を登用するなど、有能な人材はどんどん使う人事方針である。

3. 2 教員評価

教員評価は、教育、研究、奉仕活動の3つのファクターで行う。奉仕活動は、地方の自治体で講演を行ったなどのいわゆる社会奉仕活動から、例えば、学科長や学内委員を勤めた、試験の監督をした、というような運営に参加した業績も含まれる。それぞれ単科大学ごとに明確な基準（点数表）を作成し、それによって次年度年俸を+10%、+5%、+0%、-5%とするが、-5%評価は現在行っていないそうである。また、年次評価とは別に、テニユアは教授にならないと得られないので、パーマネントである副教授、助教授、専任講師は4年程度で契約更改を行っている。

教員の年俸には校費的な研究費が込みになっている（これは非課税）。これに関しては、領収書等の提出義務も無いそうである。学内公募のプロジェクト経費や外部資金は大学が管理する。それを基本的にはPC上からネットワークを介して執行する。これらの精算は領収書でよいそうである。

また、研究に対するインセンティブとして報奨金制度がある。例えば、国際誌論文を1本書くと約15万円が教員個人の銀行口座に振り込まれる（国内査読付は5万円程度である）。また、学会発表を奨励しており、年2回の学会参加補助は校費と別に支給されている。このようなインセンティブの与え方には、全単科大学

（学部）を全国トップに持って行きたいという大学の意気込みを感じた。

4. 教育研究支援

評価とは直接関係ないが、慶熙大学における教員に対する支援体制も報告しておく。慶熙大学では教員をサポートする助教の制度がある。助教は日本の国立大学におけるTA、RA制度に近いものである。学生は助教になると授業料の減免があり、さらに手当が支給される。助教には2種類あり、研究助教と行政助教がある。

研究助教は教員1人に対して1人配置されている。大部分はその教員が指導している大学院生である。彼らは学内の居室にいることも多いので、大概はそこで連絡をとる。研究助教は書類作成や教材作りはもちろんのこと、担当教員のIDとパスワードを管理しており、PC上から旅費の精算、物品購入などの研究費の執行や管理を行う。つまりは秘書的な業務である。

行政助教は学科に配置されている。例えば、理科大学（理学部）の地理学科（教員数8名）では2名配置されており、学科事務を担当する。本部と学科教員との連絡調整や学科会議などの議事録作成なども彼らの仕事である。これも大学院生が担当しており、地理学科では2名体制なので、どちらかが必ず学科事務室に在室するという体制を採っている。

おわりに

教育人的資源部は、教育改善等の競争的資金の募集をいつも非常にタイトなスケジュールで設定するそうである。それは1) 教育人的資源部自体に問題がある、という解釈もできるが、2) 常にデータ等を蓄積、解析し、大学改善について活発に議論している大学ならば、すぐに書類を準備できるはずだから、タイトなスケジュールだから申請の準備ができない大学は教育改善の競争的資金に応募する資格がない、とも解釈できる。慶熙大学では後者と思って頑張っているそうである。また、もともとは企画調整室にいた金係長から、外部評価に関して1) いい評価になるようにがんばる面と、2) それをどう生かすかという面があるが、2) をしっかりとやっつけていかないと次へは進めない、とい

う競争を勝ち抜いてきた経験からのコメントがあった。評価を良くする、つまり教育・研究の質を向上させるためには、これまでの実績、得られた評価を客観的に解析し、それを全学にフィードバックするためのスタッフ組織と実施権限が必要であるということを感じた。また、併せて人事制度を充実し、組織評価と個人評価を両輪として展開してゆく必要性も強く感じた。

謝辞

慶熙大学国際交流処の金峻鉉係長と高範秀氏、理科大学地理学科の田中幸哉副教授には貴重な時間を割いていただき大変感謝している。この場を借りてお礼申し上げます。また、本報告のための海外渡航経費は平成16年度学長裁量経費（事務系職員海外研修）を用いた。

引用文献

- 喜多村 和之, 躍進するソウルの大学—ユニバーサル高等教育の行方, 教育学術新聞, No.2018, 私学高等教育研究所webサイト (<http://www3.ocn.ne.jp/~riihe/index.html>), 2001。
- 馬越 徹, 韓国私大の活力—大学評価とその取り組みに見る(上), 教育学術新聞, No.2041, 私学高等教育研究所webサイト (<http://www3.ocn.ne.jp/~riihe/index.html>), 2001。

Exploiting the Virtual Campus System (VCS)

VCSを使用した教養英語プログラム

Robert J. Betts (college of Humanities)

ロバート・ベッツ (人文学部)

George MacLean (Tsukuba University-Foreign Language Center)

ジョージ・マクレーン (筑波大学外国語センター)

Introduction

This paper is a brief report describing a Virtual Campus System (VCS) project conducted at the Mito and Ami campuses of Ibaraki University. The Mito campus is the university's main campus and the Ami campus serves as the site for the School of Agriculture. Students who attend the School of Agricultural spend one year in the General Education English Program (IEP) at the Mito campus, before continuing their education at the Ami campus. This created a logistical problem because of the limited number of courses the university can offer in Levels 4 and 5 at the Ami campus. In addition, future budget constraints will probably not allow for a variety of courses to be offered at the Ami campus. Therefore, it was suggested that we examine the possibility of using the Virtual Campus System to teach classes remotely simultaneously.

Given that this first class was experimental in nature, it was decided that instructors at each location would be used to facilitate the management of the class. George MacLean's class at the Ami campus and Robert Betts' class at the Mito campus were selected for this experiment to test the feasibility of using "virtual" technology to teach an interactive (exchange information) English language class. Another goal of the project was to expose the learners to technology that they may encounter in the

"real world" after graduation. Video Conferencing is not uncommon in the businessfield and this project gave the instructors an excellent opportunity to utilize the Virtual Campus System, which is similar to the video conferencing system used by many organizations around the world.

Class Aims

It may be important to note that these classes were designed to teach all four language skills, reading, and writing, listening and speaking. The syllabus called for the course to include one group activity in the form of a project-a cooperative learning project-that would give the learners an opportunity to use language they had practiced during class. Fried-Booth (2002) described project work as being "student-centred and driven by the need to create an end-product (p. 6)." The instructors hoped that this would give the students a chance to work on their own without the instructors constantly guiding them. The class aims are listed below as the two instructors presented them.

1. To give the English language learners in the Integrated English Program (IEP) an opportunity to learn "oral presentation" skills.
2. To give learners the opportunity to demonstrate what they have learned in class to a broader audience other than their classmates.

3. To give learners the experience of conducting an oral presentation similar to a "real life" presentation situation.
4. To give the students the opportunity to utilize "oral presentation" skills in a distinctive setting exploiting modern technology (satellite communications and digital image transfer).
5. To give the learners a chance to become familiar with communication systems, computers and digital media.

Theoretical Background

This project was set up to examine the feasibility of connecting classrooms using video and audio technology where as one instructor can be at one location and students can join the class from remote areas using the same kind of communication system. The goal was to test the idea of whether or not the VCS could be used to conduct an interactive communicative style English language lesson using one instructor and one or two remote classrooms. This concept is not unique to the education world, especially in Japan where it is not uncommon for universities to broadcast lectures to remote locations for examination preparation purposes.

This is a cooperative learning project where students were divided into groups of four or five members and asked to select a topic that they could present to the class using pictures they had taken near their university campus. The instructions learners were given appear in Appendix E.

The VCS experiment was a valuable opportunity unto itself, but it becomes ever more so when it is considered within a framework of what is known about Second Language Acquisition, and what can be learned. Discourse analysis,

linguistics, and content instruction are among the important areas to consider.

Numerous researchers have noted the fact that language acquisition takes place in an environment where there is a communicative imperative that is difficult to authentically replicate in language classrooms. There are discourse-level characteristics of a VCS class that significantly mitigate these differences. Sacks, Schegloff and Jefferson (1974) note some important facts about conversation which contrast the relatively controlled nature of a language class with the conversations that the VCS students attempted in this experiment, particularly where the interactive part (Q&A session) of the experiment is considered:

1. The turn order varied in these conversations, whereas it is often fixed in language class conversations.
2. Turn size varied in these conversations, whereas it is often fixed in language class conversations.
3. The length of conversation was not specified in advance, whereas it is often fixed in language class conversations.
4. What parties said was not specified in advance (although they did spend some time considering what sort of questions they would ask).
5. The relative distribution of turns was not specified in advance these conversations, whereas it is often fixed language in class conversations.
6. The number of parties can vary in conversation, whereas it is often fixed in language class conversations.

There are therefore a number of discourse-level points that suggest that VCS experiences could

be a rich language acquisition environment for students.

Another important theoretical factor to consider is that VCS classes allow for the possibility to combine pedagogical and real world tasks. Research suggests that a child's ultimate level of attainment almost always surpasses that of an adult in target language environments. With this in mind, a frequently cited difference to explain this is that children experience the target language and use it to learn about the world around them whereas adults are using the target language to talk about the world around them, as they already know it. (Wells 1986). Student who took part in the VCS experiment were highly motivated to learn more about the technology involved (a real world task, or experience), and to partake in the VCS experience by making a presentation (a pedagogical task, or something they already know, albeit with discourse differences that distinguish it from a normal language class). It may thus be possible to connect pedagogy and real-world experience in a manner that promotes language acquisition.

Both instructors thought that it was essential in an oral presentation situation to not apply too much anxiety or pressure to the students who were encountering their first experience standing in front of an audience and speaking in English. For that reason, a "cooperative learning" approach was adopted as one of the classroom teaching methods. Features of these kinds of projects are presented below.

Cooperative projects: topics/resources selected by students discovery learning

- Topics may be different for each group.
- Students identify subtopics for each group

member.

- Steering committee may coordinate the work of the class as a whole.
- Students research the information using resources such as library reference, interviews, and visual media.
- Students synthesize their information for a group presentation: oral and/or written. Each group member plays a part in the presentation.
- Each group presents to the whole class.
- This method places greater emphasis on individualization and students' interests. Each student's assignment is unique.
- Students need plenty of previous experience with more structured for this to be effective.

(Richards and Rogers, 2002, p.1921)

Hardware Description

Both campuses are connected via phone lines that can convey audio and video data. Special rooms have been constructed in various buildings to support this VCS used in this project. The rooms used at both campuses are set up with two projector screens and two to three video cameras. The concept here is to be able to display both classrooms onscreen for viewing by respective classrooms with the number of "views" only limited by the number of cameras that are utilized in each individual room. This system is managed with two computers, one in each classroom, which are linked by modems or connected to a LAN network. The result being that near "real-time" video and audio is available to both listeners and speakers in the remote classroom. From the writers' experience with the system used at Ibaraki University there was a short delay in video transmission, but audio signals were not noticeably delayed during

the connection. In addition, there were some problems in the first class with the connection and during one presentation by the students at the Mito campus, there was a short delay on two occasions when the technician assisting the instructor had to re-boot the system to regain the connection. In the survey following this project, students indicated that this was problematic because during the delay, the presenter had to remain at the speaking podium to wait for the system to be reconnected.

The list below describes the equipment used in the classroom at the Ami campus in detail.

- 2 Sony PCS-6000 Multimedia Terminals
- 2 Sony PCS-C160 cameras
- 2 Hitachi CP-X970 projectors
- 2 Sony SRP-S320 speakers
- 2 TOA F-160 speakers
- 1 TOA Wm 1210 microphone
- 2 Sony Cybershot DSC-P8 digital cameras
- 1 Hitachi Flora PC (Microsoft W 2000 OS)
- 1 Sony PCR-9 video camera

Presentation Project Steps

The instructors were asked to divide the students at the Ami and Mito campus into groups of 3 (4 if necessary). Give them a list of topics related to their interests or the topics covered in their textbook. Then, ask them to take 24 digital photos related to their selected topic. Plan an oral presentation using the best photographs. (Three or four pictures per student). Students in Ami will present to the students in Mito and the Mito students will present their topics to the Ami students. After each presentation the students who are listening both campuses) will ask the students presenting, questions related to the topic.

Both classes watched a brief presentation and

listened to an explanation of the fundamental points about giving a presentation. Good and bad examples of the key oratory points were demonstrated (See Appendix C). A further two classes were devoted to the fundamentals of giving a good speech. Topics included posture, gestures, eye contact, voice inflection, the structure of a speech, and how to integrate visual aids into a speech. The above points were divided into the same categories as those on the evaluation sheet, which students used to evaluate presentations.

Ultimately, it was decided that the Ami students would only evaluate presentations (see below), but they prepared short presentations about Ami campus, and took pictures to support their presentations. They also considered what questions to ask, based on the Mito students' topics. The form used for evaluation is published as Appendix F. In addition, the results of the Ami students' evaluation can be seen in Appendix B, Table 3.

Preparation

Learners were given a handout and an explanation was given by both instructors at the respective campuses (Appendix E). Each group was told to prepare a presentation, six to eight minutes in length using at least 3 pictures for each speaker. Topics should be selected based on the interests of University students. Students were given the opportunity to practice oral presentation skills and practice with the equipment used in the class. Both instructors explained how the VCS system works and how the class will employ it for this project. A demonstration was given on the use of digital cameras and learners were presented with a time schedule and place for borrowing the cameras.

Next, learners were taught the different skills needed to make good presentations and they practiced these skills in groups (See Appendix C). The notes used by the instructors are presented below. It is an example of the systematic process the students went through.

1. Have the student prepare a 15-second self-introduction speech.
2. Ask the students to memorize the speech and prepare to use it in small groups.
3. Ask the students to divide into groups and practice one of the presentation skills you talked about in small groups using their self-introduction speech. Encourage them to give each other feedback so that they can improve their skills (See the "Presentation Practice Worksheet.").
4. After practicing oral presentation skills, the learners will be instructed in how to write a speech for this project. (Approximately 2 minutes per speaker).
5. Small tape recorders and cassette tapes will be distributed to each group. Speakers can record their speech and listen to themselves. This gives each group the opportunity to provide constructive feedback to each speaker.
6. While preparing their speeches, learners can borrow digital cameras and take pictures for their presentations.
7. Pictures taken by the learners will be transferred from the digital cameras to the instructors' computers and learners will set up a Microsoft PowerPoint file for displaying their photos during their presentations. For practice sessions, at the Mito Campus, learners can use the IBM notebook computers purchased for the IEP program.
8. Instructors need to set up a schedule for

presentations and create a topic list and present it to the instructors at the Ami and Mito campus prior to the specified test date on the student handout.

9. Instructors need to design an evaluation form for learners to complete while they are listening to presentations, which will be part of the total evaluation system.
10. During presentations, IEP directors will assign a faculty member to take a ideotape of selected presentations.

Finally, the learners were given a questionnaire to fill out and the results are provided for the reader in Appendix B, Tables 1 and 2. In addition, the students were asked to comment about the project and their answers are published in Appendix A in Japanese.

Conclusion

The VCS experiment merits further investment. Its goals were conceived with a realistic assessment of the resources in place. Student feedback, the instructors' assessment of the pedagogical results of the endeavor, and current research in second language acquisition all suggest that further VCS classes should be attempted in the immediate future. A full evaluation of the potential of VCS technology was limited by time spent passing the microphone, the technology available, associated technical difficulties, and limited research resources (such as transcription and analysis of student interaction). The technology in place proved most useful for presentations and limited interaction (Q&A). A further investment in technology, such as web cameras, curriculum development, and research is immediately imperative to fully exploit the possibilities of video/satellite technology. VCS classes afford

the language teacher the rare opportunities to use "cutting edge" technology in the classroom to allow students to interact with the world in an unprecedented manner. Given the proper technology, time for curriculum development and research, it is possible to imagine a quantifiable improvement in student language acquisition, and the chance to pioneer significant pedagogical advances that will be recognized in the field long into the future. However, there is a window of opportunity. This makes it essential that we invest in the future today, and pursue this unique opportunity as soon as possible. Immediate action is required.

As was mentioned previously, the students who participated in the project were surveyed at the end of the class. Their comments varied to some extent, but the overall summary of their comments leads this researcher to the conclusion that this oral presentation project as a whole was considered to be a positive learning experience.

Acknowledgements

The writers would like to thank Professor Noriko Nagai Professor Hiroko Fukuda and Professor Atsuko Ueda at Ibaraki University for their help with this project. It could not have been completed without their assistance and cooperation.

This project was paid for by funding from the Ibaraki University Research Fund.

References

Chapelle, C. (2001). *Computer applications in second language acquisitions: Foundations for teaching, testing and research*. Cambridge: Cambridge University Press.

Egbert, J. (1999). Creating interactive CALL activities. *CALL Environments: Research, practice and critical issues* (27-40).

Egbert, J. and Hanson-Smith, E. (Editors). Bloomington, Illinois: Teachers of English to Speakers of Other Languages, Inc.

Fried-Booth, D. L. (2002). *Project work*. Oxford: Oxford University Press.

Hatch E. (1978). Discourse Analysis and Second Language Acquisition. In E. Hatch (Ed.) *Second language acquisition: A book of readings chapter 26*. Rowley, MA: Newbury House.

Harrington, D. & LeBeau, C. (1996). *Speaking of speech: Basic presentation skills for beginners*. Tokyo: McMillan Language House.

Long, M. H. (Lecturer). (2000). *Current Issues in Task-Based Language Teaching*, (Mini-Disc Recording). Tokyo: Temple University Japan, Distinguished lecturer series.

Powell, M. (1999). *Presenting in English: How to give successful presentation*. Hove, England: Language Teaching Publications.

Richards, J., Rogers, T. (2nd Edition) (2001). *Approaches and methods in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sacks, H., Schegloff, E., Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn taking in conversation. *Language*, 50, 700-701.

Wells, G. (1986). *The meaning makers: children learning language and using language to learn*. London: Hodder and Stoughton.

Appendix A

Students' Answers and Comments

Q 2 : 今回のVCSの授業を経験してどう思いましたか？

初めて茨城大の設備がすごいと思いました。TV中継みたいでおもしろかった。

普通の授業よりやりがいもあり楽しかったとは思いますが、普段英語でスピーチする機会などないので緊張はしましたが、その分初めての体験ということもあり学ぶことが多かったです。

他のキャンパスと生徒とリアルタイムで交流できて感激しました。

人前で英語を使ってスピーチするのは初めてだったので緊張しましたが、英語を話すという経験ができてよかったです。個人的にはもっと発音が上手になればと実感させられました。

回線の接続がもっとスムーズにできていれば授業を行う側・受ける側ともに余裕を持って進められたと思う。

新鮮な授業だった。個人的にはもっと英語力(スピーキング)がついている状態でやりたかった。何度も行えば慣れると思う。

単純におもしろかった。

面白い試みだと思った。

みんなの前で話すという機会はなかなか持ったことがなかったからよい経験になった。

他の場所にいる人々とあのように通信して授業にすることは、これからいろいろな役に立つと思う。

大変面白かった。

同じクラスメートだけじゃなくて、他のキャンパスの人も自分のレポートを聞いているのはある程度英語の能力をきたえることができたと思います。

まったく別の場所にいる人ともスムーズな会話できて驚いた。いつもと同じような教室同士で、同じ授業を受けている人と違う人とも画面越しで普通に会話できたりするのは、英語のようなコミュニケーションのための授業には良いことだと思った。

最初はとまどったが、新たな勉強方法に興味を持っ

た。また最新技術の導入は困難もあるが、人々の関心をひき、英語を学習する人にとってはきっと役に立つのもっとこのような機会を増やすべきだと思った。

少しでもプレゼンテーションという経験ができて将来に役立つと思う。阿見町の2年生とはなかなか触れ合う機会がないので楽しかった。

画期的だと思う。移動せずに多くの人に自分の意見を聞いてもらえる利点が、今回の授業で自分に多少の影響を与えてくれた。

今回の授業ではVCSを用いて授業をする必要がなかったように感じた。VCSを使うならばむしろ質問だけでなく、発表もするべきだと思う。質問だけでなくクラス内だけで十分です。

便利だと思った。

画期的だと思った。でも農学部側の発表がなく、こちら側が発表を見るという感覚が味わえなくて残念だった。

人前で自分の意見を英語で発表することの難しさを痛感した。自分の発音に自身がないためか、必要以上に緊張していたように思う。しかし他のキャンパスの学生とコミュニケーションもと、また同じグループ内での結びつきも強くなったりと、いい経験になったと思う。

授業の内容自体はよかったけれど、中継する際のトラブルにかなり時間をとられたことが気になった。すぐにきちんと使える状態にしておくべきだと思った。接続がうまくいかずなかなか進まずまいと思った。

阿見のカメラアングルがよくない。

めんどい。

初めて経験したのでとても新鮮に思えた。

結構おもしろかった。

同じグループのメンバーと協力して取り組むことができ普段の講義と違って主体的に取り組むことができた。

少し不思議な感じがした。

画期的な授業だと思いました。今までに経験したことのない授業でした。

非常にやりづらと思った。

とても良いと思った。まったく知らない人という点と、英語を使ったという点がうまく組み合わせられて

良かった。

Q3：先生やクラスメイトと同じ場所にて参加する授業と今回のような授業では、どういうところが違うと感じましたか。やりやすかったこと、やりにくかったことなどがあったら書いてください。

途中で電波が悪くなってつながらなくなったときが大変だなあと思った。

ちゃんとしたある程度の英語力がないと質問等にはきちんと対応できないと思うので、その点は大変でした。先生の助けがないときつかったと思います。でも自分で発言していく授業形式なので、普段の授業よりコミュニケーションができた点はよかったです。

あらかじめ文を決めていたことで少しはやりやすかった。いつもの授業と違って本当に身振りとかしてでもとにかく相手に伝えることを一番に考えて、わかりやすい言葉で伝える大切さを知りました。

スピーチをする際に話をする相手の顔が見えないことには少し違和感を覚えた。

初めてという点もあったが、やはり気軽に質疑応答はしにくかったと思う。トピックは簡単で分かりやすいものだったのでやりやすかった。

普段あまり気にしなかった、前を向いて話すとかジェスチャーをつけるということを意識しなければならぬことがやりにくかったけれど、重要なのだと思った。あと接続うまくいってないと「やりにくいな」と感じる。

同じ教室にクラスメイトがいたので画面のむこうの相手をあまり意識しなかった。

話している時に聞き手と直接顔を合わせていなかったのがやりにくかった。

同じ場所でやるよりも緊張はした。

画面でつながっていてもやはり遠く離れているので、伝えようと思ったことが伝わりにくい。

今回のような授業で緊張しました。やりやすかったところは先生がすごいおもしろかったので、緊張感は少し減ってきました。

目の前に本人がいるわけではないので上手く伝わっているかどうか不安だった。ただ話をするだけならそ

の方がやりやすいとも思った。自分の姿が画面に映ると話しにくい。

他のクラスの人達の考えを生で聞くことができる。きちんとした英語力がないと伝わらないので難しいと思うところもあった。

面と向かって話していないので、相手の反応が分かりにくい気がした。

相手のクラスの雰囲気が伝わってこない。

相手がすぐ近くにいるわけではないのであまり緊張しなかった。ただ向こう側の状況が分かりづらかった。

同じ場所にいる授業では自分がミスをしていても安心していられるが、今回の授業ではミスをしたら目立ってしまうという不安があった。いつも受け身な授業だったので、自らが動く今回の授業は責任のようなものも感じた。

相手に自分が伝えたいことが本当に伝わったかどうかの確認がしにくかった。

知らない人だからいろんな言いたい事が言えた。接続が途中で切れたり、イライラした。相手にどう伝わっているかが心配、気になった。

電波の関係で通信がとぎれる時があった。見学者がたくさんいたのでより緊張した。

普段の授業よりやる気がした。

前に出て発表する映像が送られるのはいいけど、普通に授業を聴いている教室の映像を送られると気が抜けない。

普段の講義とは異なりグループ活動を通して協力することで、積極性のある授業であると感じ。

相手の反応がはっきりと分からないので、きちんと伝わっているかが心配だった。

やりにくかったことは、質問などのやりとりがスムーズにいかなかったことです。

話をする相手の顔が見えないのが気持ち悪かった。

画面・カメラの設置場所に工夫の余地があると思う。

準備にとっても時間をかけた気がする。

Q5：そのほか、気づいた点、感想、授業のやり方の改善点等を自由に書いてください。

・（一回目）最初の授業で衛星通信の機械の状態が悪

かったのにはちょっとびっくりしたけれど、自分的にはとても楽しく内容のある授業ができたと思います。

・映像を映せば、話している本人を映す必要はないと思った。グループ毎の持ち時間はもっと多くあればいいと思った。

・接続が途中で途切れないようにしてほしい。

・他学部や他の大学との交流の機会としてこのような授業を行うのはよいと思った。

・機械の不良が多かった気がする（何度も止まったり）。そのたびに授業が中断されるのはやりにくかった。

・通信が途中で止まるのを何とかしてほしい。

・中継が途切れるのは見えても話していてもやりにくい。自分ではどうしようもないの、その点は改善してほしい。

・通信状態などの環境設定を授業が始まる前に万全にしておいてほしい。

・手際の悪さ等が目立った。

・教室が狭い。最初スムーズに進まなくて（機器のトラブル）ずいぶん待たされた。

・英語に限らず他の科目でもこういう授業があったら面白いと思う。また同じ大学ではな、違う大学と衛星授業をしたいと思った。

・いつものメンバーとは違った人達と授業を受けられるという点は気分転換にもなり楽しかった。

・接続の不完全によるごたごたは避けてほしい。意思の疎通が上手くできるようにしてほしい。カメラアングルにも気をつけてほしい。新しいもの好きでやる程度の気がして、別に他の校舎の生徒とやらなくてもという事が本意（今回の授業は）。

・グループ活動で他のメンバーと取り組むのはよい経験となるので、このような授業を増やしてもよいと思う。

・VCSを使うことで日本だけでなくいろんな国の人とコミュニケーションできるようになると思うので、すごくいいシステムだと思う。もっといろんな角度からの映像を映して、学生の顔が見えるようにしてほしい。

・このような授業を年に1回くらいではなく、もっとたくさんやれば将来の仕事などにも役立つと思います。

・自分が発表する立場にいないと、他の人の発表を聞

く立場でも、とても意味のあるものだった。2回目以降だったら皆積極的に質問などができると思う。

Information compiled by Fukuda and Ueda.

Appendix B

Table 1

Question 1: Is this the first time you have experienced a VCS class?

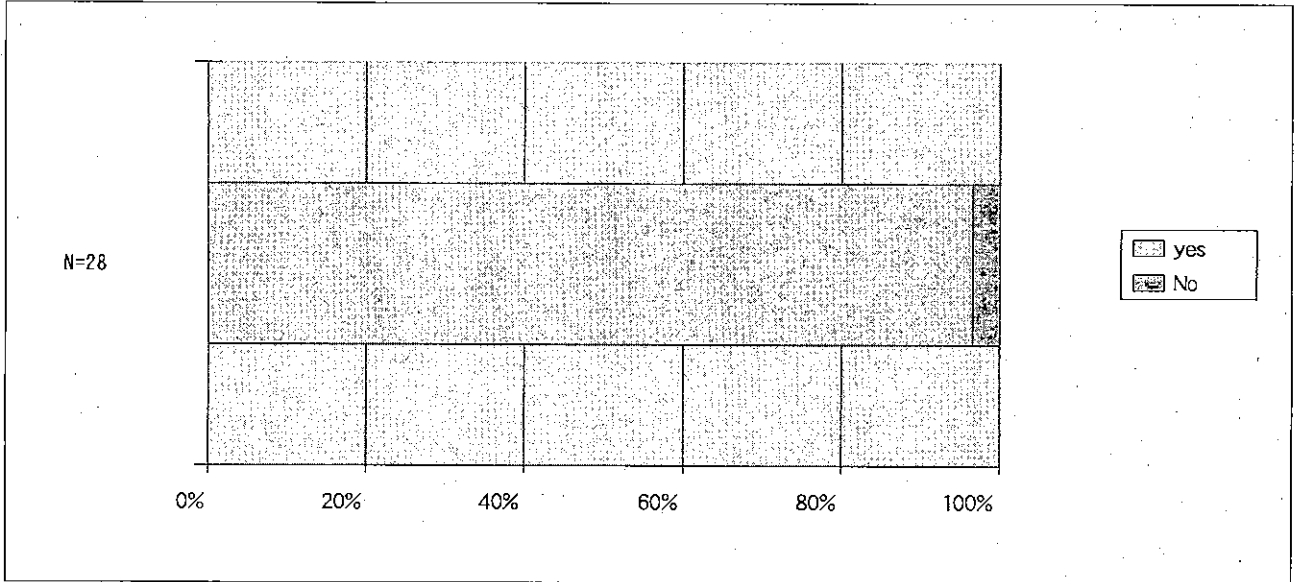
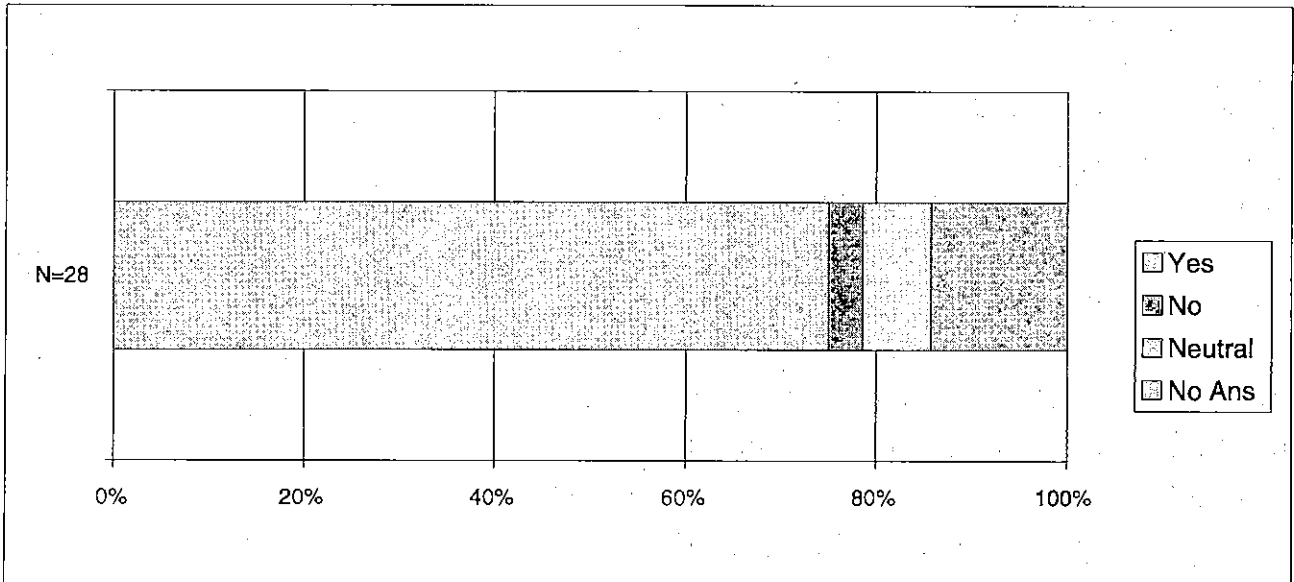


Table 2

Question 4: Is this kind of virtual class useful for future research or possible job?



Information compiled by Fukuda and Ueda.

Table 3

Category	Gp 1	Gp 2	Gp 3	Gp 4	Gp 5	Gp 6	Gp 7	Gp 8
Physical message/40	27.1	26.5	26.8	28	25.9	25.8	25.4	26.5
Story message/40	28.3	29.5	29.3	29.5	28.3	30.1	30.9	29.6
Visual message/20	15.9	15.6	16.2	15.3	15.7	15.6	16.8	16.1
Total/100	71.2	71.7	72.3	72.5	69.9	71.5	73.1	72.2

Information compiled by George MacLean.

Appendix C

Presentation Practice Worksheet

Evaluate your fellow group members' presentation skills. Please be polite and kind. The idea is to help them become better presenters in English.

Posture (Stance)	Eye Contact	Voice Variety
leaner swinger dancer marcher	astronaut gypsy clown carpenter	rabbit tortoise snake gorilla
Rule: Stand with your legs apart with you hands "cupped" in front of you. Make sure you have good balance.	Rule: Look at each section of the audience for 3 seconds before moving to the next section.	Rule: Change speed, tone and loudness to hold the audience's attention and make your speech interesting.
Gestures	Loudness	Clarity
comedian soldier policeperson	mouse lion elephant	sloth dragon fly boar
Rule: Use only gestures that help listeners understand you better and are part of your natural, normal behavior.	Rule: You need to speak at about 150% of your normal speaking voice.	Rule: Speak clearly and enunciate (pronounce) all of the important words correctly.

Idea adopted and modified from, Harrington, D. & LeBeau, C., (1996). Speaking of speech: Basic presentation skills for beginners. Tokyo: McMillan Language House.

Appendix D
Presentation Project Group Worksheet

Group Members		Group #
1.	3.	
2.	4.	
Project Title:		
Project Plan:		
Materials		

Appendix E

Photo Presentation Project #1 Student Worksheet

Winter 2003

Description: This project is an oral presentation project. Each group will be asked to select a topic, take pictures and present the topic using the Video Satellite System (VCS). Students at the Ami Campus will present to students at the Mito Campus and students at the Mito Campus will present to the students at the Ami Campus. Students will need to take pictures related to their group's topic in digital form and use them during the presentation as visual aids.

1. Each presentation will be approximately 10 minutes in length.
2. Each student in the group will participate during the presentation.
3. Photos will be installed on each instructor's computer before the day of the presentation and shown on the VCS screen during the presentation.
4. Digital cameras will be made available in the Student Affairs Office on the Ami Campus and Mr. Betts' office on the Mito Campus for students to checkout during this project.
5. Students will be asked to practice presentation skills before the presentation in order to prepare for this project.
6. Tentative presentation dates are:

January 15 th	January 22 nd	January 29 th
Test (check) day	Mito Campus presentations	Mito Campus Presentations (cont) Ami Campus Presentations

Suggested Topics

Local environmental problems
 Local social problems
 Popular youth culture ? music, fashion, fads.
 Cell phones
 University students' spending ? how do university students spend their money
 University life
 University circle activities
 Mito city/Ami-machi
 Cars/Driving in Japan
 Japanese customs-table manners, flower arrangement, tea ceremony
 Part-time jobs

Appendix F

Oral Presentation Evaluation Sheet

Presentation Topic: _____ Group Number: _____

1 = poor 2 = OK 3 = average 4 = very good 5 = best

Speaker 1	Speaker 3
1. How was the speaker's <u>posture</u> ? 1 2 3 4 5	1. How was the speaker's <u>posture</u> ? 1 2 3 4 5
2. How was the speaker's <u>eye contact</u> ? 1 2 3 4 5	2. How was the speaker's <u>eye contact</u> ? 1 2 3 4 5
3. How was the speaker's <u>voice variety</u> ? 1 2 3 4 5	3. How was the speaker's <u>voice variety</u> ? 1 2 3 4 5
4. How was the speaker's use of <u>gestures</u> ? 1 2 3 4 5	4. How was the speaker's use of <u>gestures</u> ? 1 2 3 4 5
5. How was the speaker's <u>voice volume</u> ? 1 2 3 4 5	5. How was the speaker's <u>voice volume</u> ? 1 2 3 4 5
1. _____ x 2 = _____ 2. _____ x 2 = _____ 3. _____ x 2 = _____ 4. _____ x 2 = _____ 5. _____ x 2 = _____ Total Points _____	1. _____ x 2 = _____ 2. _____ x 2 = _____ 3. _____ x 2 = _____ 4. _____ x 2 = _____ 5. _____ x 2 = _____ Total Points _____
Grade <input style="width: 40px; height: 20px;" type="text"/>	Grade <input style="width: 40px; height: 20px;" type="text"/>

Speaker 2	Speaker 4
1. How was the speaker's <u>posture</u> ? 1 2 3 4 5	1. How was the speaker's <u>posture</u> ? 1 2 3 4 5
2. How was the speaker's <u>eye contact</u> ? 1 2 3 4 5	2. How was the speaker's <u>eye contact</u> ? 1 2 3 4 5
3. How was the speaker's <u>voice variety</u> ? 1 2 3 4 5	3. How was the speaker's <u>voice variety</u> ? 1 2 3 4 5
4. How was the speaker's use of <u>gestures</u> ? 1 2 3 4 5	4. How was the speaker's use of <u>gestures</u> ? 1 2 3 4 5
5. How was the speaker's <u>voice volume</u> ? 1 2 3 4 5	5. How was the speaker's <u>voice volume</u> ? 1 2 3 4 5
1. _____ x 2 = _____ 2. _____ x 2 = _____ 3. _____ x 2 = _____ Grade 4. _____ x 2 = _____ <input type="checkbox"/> 5. _____ x 2 = _____ Total Points _____	1. _____ x 2 = _____ 2. _____ x 2 = _____ 3. _____ x 2 = _____ Grade 4. _____ x 2 = _____ <input type="checkbox"/> 5. _____ x 2 = _____ Total Points _____
Evaluation Comments:	

教養教育に関する授業の実践報告

推奨授業実践報告：授業を平和学する試み—レスポンスシートを使って

Class Report: An attempt to design a class from the point of view of Peace Studies.

蓮 井 誠一郎 (人文学部)

Seiichiro HASUI (College of Humanities)

I. はじめに

平成15年の春より、本学でお世話になりながら、自分なりに様々な試みを続けてきた。まさしくそれは試行錯誤であり、受講生にも多大な迷惑をかけたのではないかと危惧している。

だが光栄なことに、専任教員としての最初の授業、月曜1限目の「政治学(平和のための政治)」が、推奨授業として選定されることになった。レスポンスシートという道具や、バズセッションなどの応答型授業の試みが評価されたためであるようだ。レスポンスシートは私が発明したものではない。だが確かに、他ではあまりみることのない道具である。ここでそれをを用いた授業を報告し、記録しておくことは、何かの役に立つかもしれないと思われる。

以下の文章は、レスポンスシートを用いた私の授業の試みについて、その背後の考えや、手法を報告するものである。私のような経験の浅い若輩が、そのようなことを書き記すことには大いに抵抗があった。私が考えているようなことは、すでに先達が考えたことをたどっているにすぎない。「授業を平和学する」などというのは、私の試みからするとおこがましいかもしれない。だが、私はこれは一度考えてみる価値のあることだと考えた。そして、シートをその使い方も含めて教えてくれた研究仲間や受講生たちの、努力と忍耐を無駄にしないためにも、勇気をふるって筆をとった次第である。

II. 「授業を平和学する」とは

1. 暴力と平和

平和学(Peace Studies)とは、もともと冷戦時代の平和研究(Peace Research)から始まった学問分

野である。この平和学において注目されるのが、ノルウェーのヨハン・ガルトゥングが主張した、暴力(violence)の不在としての平和概念である。

ガルトゥングは、平和を暴力の不在と定義した。そして暴力を、「可能性と現実とのあいだの、つまり実現可能であったものと現実が生じた結果とのあいだのギャップを生じさせた原因¹⁾」と定義した。

すなわち、人びとやその集団が生まれながらに持っている能力、より具体的には社会生活を通じて成長し、子孫を残すという能力を阻害するものが暴力であるということを指摘したのである。さらに彼は、暴力を、その発生の責任を個人に帰することができる人為的暴力と、責任を社会構造に帰することができる構造的暴力とに分類した。後者の発見が彼の大きな功績である。特定の社会構造が、ある人びとの潜在的実現可能性(「潜在的実現可能性」という言葉は長すぎるので、以後、「本来性」と表記する)を阻害することを、それまで暴力として認知されてきた、殴る、撃つ、威嚇するなどの人為的暴力と同質の暴力として発見したことが、ガルトゥングの大きな功績である。

現在、この構造的暴力概念は、戦争や紛争の問題だけでなく、人種差別や性差別、貧富の格差、飢餓、環境問題など、様々な問題分野の研究・分析や、市民運動の理念を支えている。

2. 平和のために必要なのが教育

このように、平和のためには、暴力を減らしていくことが重要となる。人間はその本来性の発現のためには社会が必要不可欠であり、生まれた直後から社会(家庭や病院など)の中で保育されなければ死んでしまう。その後も、教育を通して、個人や集団の本来性

を認識し、それを阻害されぬように守ることが必要となる。

すなわち、それが学校という制度の枠組みにあるかないかはともかく、人間が平和を追求するためには、教育というものが不可欠なのである。これを逆から見れば、教育の目的とは、それを通じて教育を受ける者の本来性を発現させることにあるといえる。それは、「教育 (education) とは (中略)『学習者が本来持っているものを引き出すことである』」(大学教育研究開発センター年報第8号、26頁) という指摘にもありでありである。これは同時に、平和学からみた教育のひとつの位置づけではないかと私は考える。

平和学的視点からは、大学教育もまた、学生たちの本来性の発現を守ることを、教える側が意識することが重要だと考えられる。そこで注意すべきは、競争の名の下に、その学生個人の本来性の発現を、他人の本来性を阻害しながら行うことを認めるべきではないという点である。大学教育が、暴力ではなく平和を志向するのであるならば、本学の学生が、他者に対する暴力の上に自らの「平和」を構築することをすすめるのではなく、他者との平和的共存の上で、自らの平和を阻害されないようにすることをすすめるのが、大切なのではないであろうか。

そのような観点に立つならば、授業とは学生とふれあう最前線で行われる、平和のための営みといえるかもしれない。そこには、授業の目的だけではなく、その手法などにおいても、平和学的な視点から構築されることが求められるのではないかと、私は感じている。

本文のタイトルにある、「授業を平和学する」とは、平和学の視点をもって授業をデザインしていくことであるといえるのではないだろうか。以下は、そのような視点に立った、私の個人的な試行錯誤を報告するものである。

Ⅲ. 平和学からみた授業のデザイン：私の場合

1. 講義内容の概要

「授業を平和学する」ことの一面は、人が成長し、子孫を残すための社会生活を営むことの大切さを前提にして、そのための考え方を伝えることである。そこで私の政治学の授業においては、以下に記した三点を

意識して議論を進めることにしている。

第一に、暴力と平和の概念についての理解である。平和とは暴力の不在であり、暴力とは本来性の発現を阻害したものである。暴力には直接的暴力と構造的暴力があり、現在の世界と社会には目に見えない構造的暴力がいたるところにあり、それを克服することが大切だと知らせる。

第二に、自らの本来性に対する理解である。まず類としての人類の本来性とは、類として存在を維持し続けることである。それは自然環境の中で実現される。そして個人の本来性とは、生物として生まれながらに持っている能力である。それは多くの場合、生まれ、成長し、子孫を残す能力である²。それは、社会環境の中で実現される。したがって、自然環境と社会環境を本来性の発現という目的をもって守ることが大切であることを伝える。

第三に、「生存競争」ではなく、共存こそが、類としての人類の平和に必要なことを指摘することである。過剰な「競争」は、他者の本来性を阻害することを容認し、自らの本来性を確保するだけでなく、本来持っていたもの以上の何か(経済的利益や政治的権力など)を追求する。これが、自然環境や社会環境を、構成員の本来性発現という観点からは望ましくないものにしてしまい、暴力の源泉となるということを知らせる。またその「競争」による自然・社会環境の破壊は、世界の周辺部から徐々に環境の崩壊をまねき、やがては競争の勝者の環境をも崩壊させ、類としての人類の存続が不可能になってしまうことを指摘する。

以上のことを毎回の講義のそこかしこでふれながら、世界の政治状況について、学生に伝えるように努力している。これは、授業の内容を平和学的な視点から組み立てようとしたことになるのかもしれない。

2. 授業のパターン

以上のような講義の要点をふまえつつ、私の授業は、以下のようなパターンを意識している。

(授業開始：レスポンスシート配布)

- ①前回のレスポンスへのコメント (数分～15分)
- ②講義(1) (30分～60分)
- ③バズセッション (数分～10分)

④シェアリングとコメント (数分)

⑤講義(2) (15分~30分)

⑥レスポンス記入 (10分程度)

(授業終了：レスポンスシート回収)

一見して明らかなように、これらすべてを毎回行うことはできない。実際、順番も変えることが多い。ついしゃべりすぎて時間がなくなることもしばしばである。とくに今年度はバズセッションが少なかったと反省している。

以下、それぞれについてみていくことにする。

(1) 前回のレスポンスへのコメント

詳しくは後述 (IV-2-(4)) するが、ここでは、前回受講生に書いてもらったレスポンス、すなわち、授業でいつも出しているふたつのクエスチョンへの回答について、コメントする。

授業や講義の導入として使用することもあるし、要望などについては、今後どうするつもりかを伝えることもある。授業と設問のかみ合わせが悪いと、レスポンスも鈍いので、その際にはフォローを行うこともある。

(2) 講義

授業の核となる講義は何か単調にならないように努力している。自分の学生時代を振り返れば、たとえ本当に役立つ授業でも、ただひとつの声だけをじっと座って聞いていると、時間帯によっては眠気を催すことも理解できるからである。そこで私は、できるだけ、90分しゃべりっぱなしは避けたいと思っている。

したがって、授業を立案するにあたって意識しているのは、できるだけ受講生が「ひとつの声を聞きっぱなし」になるのではなく、何分かおきに複数の声を耳にするようにすることである。それはビデオの声だったり、バズセッションでの自分や他の受講生の声だったり、ゲストスピーカーの声だったりする。

声が違う。ただそれだけで気分転換になり、受講生の眠気は和らぐように見える。事実、90分一人でしゃべりっぱなしだと、月曜1限ということもあるのか、眠気に勝てない受講生が目立つ。

また、今時の受講生には、視覚に訴えることが効果的だと思うので、映像素材もできるだけ使用することになっている。まず、配布したレジュメそのものをスクリーンに投影しておく。講義をしながら、レジュメを指示棒でなぞることで、視覚的に、今どこを話しているのかをわかってもらうようにしている。また必要に応じて、新聞・雑誌のスキャン画像や、本の表紙、各種写真やビデオ (10分以内) などをレジュメとスクリーンの両方に用いる。テロや紛争の現場をみせると「朝からきつい映像でまいてしまう」というレスポンスも出る。気の毒だが、世界を知ってもらうためには仕方がないことと思っている。

(3) バズセッション (グループ討論)

複数の声を聞かせるだけではなく、自分で発声すれば、さらに眠気は和らぐし、話すことで頭の整理にもなる。そういう思いから、私の授業では、履修登録期間の後、全体をランダムに数人ずつの少人数グループに分ける。そして、授業に関連したテーマを与え、司会と書記を決めてもらい、10分弱ほどで討論してもらう。これを私は「バズセッション」と呼んでいる。同様の試みを行っておられる先生方も多いと思うので、特徴的かもしれないと思う点のみ記すことにする。

まず「10分弱」という時間は、短いようにも思われるが、20分もやっていると講義時間がなくなるし、議論がだらだらと続いてしまう。短時間に集中して、要領よく自分の意見を主張し、それを司会がさばき、書記が書き留めるという能力も大切だと思っているので、この設定にしている。「物足りない」くらいの方が、情報に飢えているので、その後のシェアリングにも集中しやすいかもしれない。

そして、書記は黒板に自分のグループで出た意見を書く。書記にマイクを向けることもある。これらでもって、意見のシェアリングを行う。他グループの意見を知ること、自分の意見が全体でどう位置づけられるのかなどがわかることもあり、好評である。ただ大勢の前でマイクを向けられるのを恥ずかしがる受講生も多い。

そして、この黒板に書かれた各グループの意見に対して、解説とコメントをしていく。それは、次の講義

への導入としても用いることもある。この流れを作るためには、ある程度答えを予測して、設問を行う必要がある。

(4) ゲストスピーカーの活用

すでいくつかの授業で、複数の講師による授業が行われている。私の場合、それは、90分間に、私を含めて複数の講師がしゃべることを意図している。つまり、ゲストがただひたすらしゃべり続けるのではなく、私の話も織り交ぜたり、複数のゲストが交代で話したりすることにより、「複数の声」を受講生に聞いてもらうことを意図している。

そして「複数の声」はまた、「複数の意見」でもある。社会科学、ことに政治学は立場の学問という側面があり、それを語る者の社会的な立場や階層によって、大きく見解は異なる。戦争ひとつとってもそうである。戦争は、大多数を占める非エリートにとっては害ばかりの非合理的なものである。だが、全体のほんの一部しかいないエリートは、戦争の害を避け、そのわずかな利益を独占できるかもしれない。このために、全体としてみれば害ばかりの、愚かな選択としての戦争でも、エリートの立場からみれば、「合理性」がある。従って、政治学において、戦争を主張する立場の人がいること自体は、何ら不思議ではないことになる。

ただ実際に、ここまで極端な見解の相違を、ゲストスピーカーが持ち込んだことはない。だが、同じ平和を志向する者同士でも、そこには異なる見方、対立する見解がある。それを意識してもらうことがもっとも大切で、それを実現しやすいのがゲストスピーカーによる話だと考えている。

またゲストスピーカーを呼ぶことは、受講生にとっても「好評」である。やはり授業中の教室に、複数の教員がいるというのは、珍しいのだろうと思われる。レスポンスにも「また呼んでほしい」と書かれると、何となく複雑な気がしなくもないが、学習効果は高いようなので、学外の研究仲間に声をかけ、続けることにしている。

(5) エクスポーズという教育方法（イベント参加）

本学に限らず、受講生に、授業時間外に何か授業に

関する準備や活動をしてもらうことは、年々難しくなっているという印象を受ける。だが、それらの諸活動が、授業のより深い理解にとって重要なものというまでもない。

私の授業では、授業内容である平和に関連した、学内外の様々なイベントに参加し、そこで感じた重要な点、疑問点、感想などをまとめて提出すれば、「イベント参加」ということでボーナス点を与えるようにしている。人びとが自らの手で守り、追求しようとしている平和を、少しでも肌で感じてほしいからである。そしてできれば、受講生も、一市民として、その運動に何かしら関わり、そこからいろいろなものを得てほしいと願っている。

平和学では「エクスポージャー (exposure)」という教育手法が重視される。これは、いわゆる社会調査とは異なる。岡本三夫は、「エクスポージャーの基本は、ある状況の中へ身をさらし、相手の世界観の中へ自分をさらけ出すことによって、状況から学び、相手から教えられること^{*3}」だとしている。つまりそれは、対象を観察するのではなく、対象である集団に入り込み、彼らの受けている暴力を感じ、ともに克服することを通じて、平和とはなにか、どのようにして守られるのか、などについて学習するというものである。もちろん、「イベント参加」がエクスポージャーそのものだというつもりはない。だが、その一部として、または、そのきっかけになってくれればと願っている。

これは、教室の中ではなかなかできない学習活動である。かといって、ただ勧めるだけでも、参加は進まない。昨今の経済事情はとくに、学生にとって交通費その他の出費をためらわせるものになっている。そこで何かインセンティブを、ということで、ボーナス点（1回につき5%、上限あり）としている。熱心な受講生は、ひとりで半期に数回も参加し、市民運動に関わったり、小さな運動を立ち上げたりする者もいるが、多くの学生は1、2回程度の参加である。

そして、あくまでひとつの受け皿としてであるが、私も学生や他の教員と組んでネットワークをつくり、様々な平和を考えるイベントを企画している。授業外の活動を体験してもらうためである^{*4}。

3. 平和学から授業をデザインする

問題はなくなるのか」など、今回の受講生が何を求めているのか、受講生の関心の動向を、ごくごく大まかにではあるけれども、把握するのに役立っている。これにある程度影響されて、半期の講義内容をシラバスが変わらない程度に変更することもある。それは順番を変えたり、ある回のテーマを若干ずらしたりという程度であるけれども。

(2) 2回目以降の授業

初回の授業が終わり、2回目以降の授業が始まると、シートを学科や学籍番号ごとに封筒に分類して、最前列の机の上に並べる。封筒ひとつあたり、10人程度が好ましい。これ以上になると、封筒の周囲が順番待ちで混雑し、シートを持って行くときに封筒やシートが散乱してしまう。学部ごとに異なる履修申告票と似た色の封筒を使えば、教養科目のような多くの学部の新入学生が混在する環境では混雑緩和に有効と思い、平成16年度から実行している。効果はあるように見える。

そして必ず「自分のシートだけを持って行く」ことを告げる。シートはいわば試験の答案用紙をも兼ねている。これを知人の分まで持って行き、代わりに記入することは、試験中に二人分の答案を記入する不正行為と同じとみなすことを周知している。したがって、持って行くときにも一枚、持ってくるときにも一枚のシートを持つべきことを告げる。もちろん、持って帰ってはいけないことも告げる。

(3) 授業中

毎回、授業の終わり、約10分程度を使用して、レスポンスの記入を行う。授業ごとに、授業内容に関連したクエスチョン(Q1.)をひとつ与え、それに対する答えをA1.の欄に書いてもらう。「どうすればテロをなくすことができますか。」など、現代世界の大問題をあえて出す。授業で学んだことを使って、「正解のない」社会科学上の問題を考えるわけである。これに10分というのは短いかもしれない。事実、多くの受講生達が、休み時間までがんばって書いている。こちら最後の受講生が提出するまで退出できないので、このあたりは時間との戦いとなる。今では、やはり15分くらいは必要か、と感じている。

ただ受講生の集中を誘うことはできる。受講生は、毎回正解のないような意地悪なクエスチョンに対して、短時間でレスポンスを記入せねばならない。その集中たるや、記入中になにかアナウンスしようものなら、「レスポンスを書いているときに話さないでほしい」という要望が増えるほどである。

もっとアンケート的な設問、「あなたの経験した暴力の例を書いてください。」なども行う。これらは、暴力の概念を説明した後で投げかけると、それまでの自分を振り返りながら、実はあれが暴力だったんだと気づくという長所もある。もちろん誤りや勘違いも目立つ。だが学生なので、それまでの学校や授業での様々な「暴力」が描かれることになり、興味深い。中には思わず笑いを誘うものもあり、次の授業の冒頭で個人名を伏せて紹介している。

ただ、予定していたところまで授業が進まないと、予定していたクエスチョンが出せなくなってしまう。そこで、大抵は、ここまで進んだらこの設問、最後まで進んだらこれ、というように、ふたつほど設問を用意することになる。

これについて、最近、私は考え方をえつつある。これまで、授業中は、レスポンスシートをあまり利用しないような形をとってきた。集中して話を聞いてもらおうとして、シートに記入するクエスチョンをいつも授業の最後に知らせていた。

だが、最近、レジュメに書き込んだり、授業の真ん中あたりで知らせておき、それを考えながら授業を聞いてもらう方がより効果的なのではないかと考え始めている。シートに徐々に記入していってもらい、授業の終わりには自然と記入が終わっているというのが理想かもしれない。専門科目の受講生たちに聞いてみると、こちらのやりの方が好評であった。先の横山教授の授業においても、そのような傾向にあるようである。

授業で出すふたつめのクエスチョン(Q2.)は、ほぼ毎回「授業への感想・質問・要望」を設定する。授業改善は、できるだけ早い段階で行わないと、受講生が授業に飽きて、出てこなくなってしまうから遅いと思うからである。これはA2.欄に書いてもらう。

(4) 授業後

授業が終わると、シートをすべて回収する。ここからが大変な作業となる。授業のはじめに「毎回、全員のシートに目を通すこと」を約束しているの、それを実行せねばならない。

Q1.については、ある程度レスポンス内容も予想されることがあるが、それでも、鋭い洞察や深い思考が現れている場合もあり、感心することもしばしばである。赤ボールペンで線を引きながら目を通し、質問が書いてあればそれに答え、興味深いレスポンスにはコメントを書き込む。レスポンスの典型例と、とくに優れたレスポンスなどはメモをしておき、それらへのコメント用紙を作成する。レスポンスを読んだら、出席取りをかねて、押印したり、サインしたりする。

受講生数にもよるが、この段階で採点することも可能である。私は5点満点で、大体3～5点の範囲で採点する。これは平常点として、評価に組み込む。ただ人数が多いときには、これは避けるようにしている。あまりに手間がかかりすぎるからである。また、「正解がない」わけであるから、客観的評価基準の設定と判断も複雑となる。

それでも、採点されるとなると、一生懸命に書く受講生もいるので、このあたりは人数と、採点に割ける時間とのかねあいとなる。私の乏しい経験からいうなら、50人を超えると、毎回採点するのはかなりの重労働となる。たまにやる小テストのように、いつの授業で採点するかをガイダンスで明確にしてから、授業を進めるのも一案かもしれない。

Q2.は、先述の通り、「授業への感想・質問・要望」である。「何を書いても評価に影響しない」と約束しているからか、ある程度率直な内容が書き込まれる。月曜1限目ということもあり、油断して90分しゃべりっぱなしにすると直ちに評価が悪くなる。「今日は眠かった」「話についていけなかった」が多発する。時間が不足すると「もっとレスポンス記入の時間をとってほしい」とか、「雑談を削ればいいのか」「同じことを何度も説明する必要はない」などと書かれる。厳しい。

それでも毎回、一喜一憂しながら、この欄を読むことにしている。「板書をもっと丁寧にやってほしい」「もっとゆっくりしゃべってほしい」「声が大きすぎる」

「もっと対立する意見をとりあげてほしい」「バズセッションをもっと長く（短く）してほしい」「バズセッションのテーマをもっと詳しく解説してほしい」「もっと黒板に各グループが書いたことを詳しくコメントしてほしい」など、授業改善に役立つ感想・要望もたくさんあるので重宝している。何より、早い段階でこれらの情報が得られるのはありがたい。

レスポンスをチェックしながら、次回の授業までに、前述の、レスポンスに対するコメント用紙を作っておく。レスポンスを読んだ私の感想やコメントを、授業の冒頭で行うためである。これから行う講義への導入として利用することもある。コメントは長くなることもあるので、そのときにはレジュメと共に印刷して一緒に配布してしまう。また事前に、授業内容からして時間が不足すると思われるときには、配布して読んでおいてもらうこともできる。

そして、次の授業が始まる。シートの使用は、これまでと同様のことが繰り返される。

(5) 長文レスポンスと成績評価

半期の授業の最後には「最終試験」がやってくる。私はこれを「長文レスポンス」として、レスポンスシートの最終頁右半分に記入してもらうことにしている。授業を通じた問題意識からの出題で、もちろん、「正解のない問題」である。従って、授業で配布したレジュメ、教科書、自筆ノートの持ち込みを許可している。教科書を含むどんな本にも正解は書かれていないからこそ、できることであろう。このような出題方法は、すでに他の先生方も実践例があるので、ここでは詳しく取り上げない。

成績評価に際しては、長文レスポンスだけでも、日頃のレスポンス記入だけでも単位は取れないようにしておく。できるだけ多角的に評価するために、イベント参加のボーナス点も加えつつ、評価しているつもりである。評価の際には、シート全体を見渡し、半期の授業期間中、その受講生が平和と政治の問題をどう考え、どう変化していったかをみてから答案を読むようにしている。長文レスポンスの記入欄がA4半頁と少ないので、できるだけたくさんの情報から、書かれていることの真意をくみとりたいと思っている。

3. 授業を平和学するためにどう貢献できるのか

以上が私のレスポンスシートの利用法である。これが、どのように「授業を平和学する」ことにつながるのか、説明を試みてみたい。

私は、授業はただ私の頭の中身を受講生に流し込むのではなく、できるだけ受講生とのやりとりを行って、彼らが何を求めているか、授業は何を改善すべきで、何がわからず、何を知っているのか、などを知った上で、ある種のファシリテーター (facilitator) として話をしたいと思っている。彼／彼女らがその本来性として持っている「考える力」を引き出すことが、教育の本質を構成する要素であって、それは、平和学の志向する価値に合致すると考えるからである。

さらに、受講生も講義内容をある程度コントロールすることができることで、教師と受講生との間の権力格差をほんの少しでも縮めることができるのではないかと思う。つまり、これらのことを通じて、「授業を平和学する」ことに一歩近づくことができるのではないかと思うのである。

だが現在の大学の授業を平和学するのは難しい。

平和学が問題視する暴力の源泉のひとつには、権力格差がある。権力者の行為が与える様々な暴力の例は、ここで言うまでもない。他方で大学の教師には、外部からの不当な干渉を排除し、自らの信じるところを受講生に教授する権利と責務がある。これは絶対に守られなければならないものである。だがそれゆえに、大学の教室において、教師はもっとも強大な権力を握っている。教育と平和との関連はすでに述べたが、教師の行う教育の一環としての授業における言動は、それが善意であれ悪意であれ、また作為であれ不作為であれ、権力格差故に、結果的に受講生や、その周囲の人びとの本来性発現を阻害する、暴力となる可能性をも秘めているものである。

成績評価についても同様のことがいえる。ここは大学であり、制度上、授業では「評価」が行われる。だが評価することは一定の権力格差を前提とした権力の行使である。大学の教室における権力の根源はこの成績評価制度にあるといっても過言ではない。「授業を平和学する」ことへの最大の障害ともいえよう。

私が最終試験を「長文レスポンス」と言い換えてみ

たところで、その本質は何ら変わらない。これは、学校という制度とそれを支える社会的価値観の根本的な変革なしには変わらないのではないかとすら思える。

「正解のない問題」を出してみても同様である。正解がないということは、評価の基準は、その答案のもつ「論理性」や「説得力」「実現可能性」「合理性」「正当性」などとなる。私はできるだけそれを客観的に判断するよう努力しているつもりだが、果たしてどれだけでできているのか、それこそ、「評価」される必要があるかもしれない。というのも、正解がない問題への答案を評価することこそ、恣意的で客観性を欠く権力の行使に陥る危険をはらんでいるのではないかという危惧があるためである。

では、レスポンスシートで、ここで指摘した権力格差と暴力はなくなるのであろうか。答えはNoである。報告者として告白するなら、私はこれらの問題を未だ解決できておらず、模索を続けている段階である。ひとついえるのは、「授業を平和学する」ことの本質は、もうすでに多くの先達の諸先生方が気づいて実践しているように、授業での権力格差を認識して、それを授業内容と手法において軽減することであって、道具はそれを助けるにすぎないのである。

それでも、教師と受講生との間の権力格差は、彼／彼女らがインタラクティブに授業を作り上げていくことで緩和され、暴力の可能性も減少する、というのは事実であろう。レスポンスシートは、この教師と受講生の権力格差をほんの少し緩和する作用をもっている。

レスポンスシートはまた、「授業を平和学する」ことに、別の貢献もしてくれる。シートは、それまでの授業の記録を一覧できるようになっている。シートを用いることで、私だけではなく受講生自身も、考え続けながら、自分の変化を知ることができる。

自分と他者の本来性を認識し、それをいかにして守るかという大問題には、単一の正解が存在しない。本来性が多様である以上、その発現も、守り方も多様だからである。そこで大切なのは、自ら考える力である。正解のみえない問題群を時にはひとりで、また時にはバズセッションのグループメンバーと共に考える力をつけることは、受講生にとってのエンパワメント (empowerment) の重要な一部となる。そしてエン

パワメントのもうひとつの重要な要素は、自らのエンパワメントの状態を認識することである。おそらくレスポンスシートは、この二つの点で、意義がある道具である。

4. 使用の「代償」

これまで報告してきたように、レスポンスシートは、教育にとって有用な道具である。ただ、これを実際に本学で使用してみて、問題を感じることもある。それは、受講生の数とそれに伴う時間の問題である。

毎回の授業ごとに回収し、目を通し、記入された質問に答え、コメントし、レスポンスをメモしながらそれらへのコメント用紙を作成する。この一連の作業を、100名を超える受講生に行うのは、決して容易な作業ではない。事実、慣れてきたとはいえ、90分の授業後、約120～180分以上がレスポンスシートのチェックに費やされた。同規模の授業が週2回もあれば、シートのチェックだけで週40時間の労働時間のうち、約15%がこれに費やされることになる。とてもそのような時間は取れないという教員が大多数であろう。

おそらく、レスポンスシートは、100名以下の規模のクラスで使用するのが現実的な道具であろう。つまり、大手私学のようなマスプロ教育ではなく、比較的少人数での教育が可能な本学のような大学でこそ、その教育における特徴のひとつとして、真価を発揮できるものではないだろうか（※たとえば200や300名でも、「すべてに目を通す」ことにこだわらなければ、使用は可能であるし、一定の効果も期待できるという考えもある）。事実、ゼミ形式の授業でQ1の設問をおかず、「重要点」「質問・疑問点」「感想その他」で1回の欄を16マス用意したシートを使用すると、やりとりが容易になる。また、数十名程度の専門科目での使用では、学生の質問にも丁寧に答え、アドバイスを記入することもできた。

私は、つたないかもしれないが、自分の話をひとりでも多くの受講生に聞いてもらいたいと願っている。レスポンスシートは、受講生一人ひとりと、重要なやりとりをする貴重な機会を与えてくれる。私は今後も、レスポンスシートを使い続けていきたい。ただ願わくば、その真価が発揮できるような授業規模か労働時間

のどちらかが、維持されればと思っている。

V. おわりに

私の授業「政治学（平和のための政治）」が推奨授業という過分な榮譽を受けたのには、おそらくレスポンスシートという道具が一役買っている。だが、ここまで述べてきたように、それはちょっとしたアイデアではあるけれども、決して画期的な理念や思想に基づいた革命的な道具ではない。私は、受講生と対話をしながら授業をしたいという、多くの教員が持っている思いを、ただ愚直に時間をかけただけで、実現しようとしたにすぎない。私は、多くの諸先生方が、ただシートを使わないだけで、同様のことを、同様の価値観に基づいて、すでに何年も前から実践しているのを知っている。私はそこに、レスポンスシートという、これも先達の先生が苦心して作り出した道具を紹介しているに過ぎない。

すでに、人文学部社会科学科では、何人かの教員が独自にレスポンスシートを改良しつつ使用する試みを始めている。今後、思いを同じくする本学の教員に、この小文が、何かしらの役に立つのであれば、それに過ぎる幸せはない。

最後に、現在のレスポンスシートを作り、私に教え、本学での使用を快く承諾してくださった横山教授と、シートを最大限に利用する授業スタイルを、授業の実践の中で教えてくれた「環境・平和研究会」の面々に厚く御礼を申し上げたい。そして、月曜1限目というハードな時間帯に、私のつたない授業にもかかわらず、それに辛抱強くつきあい、ときに授業とかみ合わせ難問を一生懸命考え、レスポンスで励ましてくれた受講生の諸君に、心より感謝したい。

注

*1 ヨハン・ガルトゥング著、高柳先男他訳『構造的暴力と平和』（中央大学出版部、1991年）6頁。

*2 生まれながらの個性として、子孫を残す能力を持たない人びとがいる。それは個性であって、その個人の本来性の一部である。つまり、本来性とは、個人やその集団によって、違いがあるものである。

* 3 岡本三夫・横山正樹編『平和学の現在』（法律文化社、1999年）32頁。

* 4 他大学の平和学関連のゼミでは、海外の現場へ足を運ぶ校外実習を義務づけるところもある。その点からするならば、私の授業はまったくささやかなものであるが、授業外では、本学でも、春休みのベトナム訪問など、エクスポージャーの機会は少なからず存在していることは確認しておきたい。

推奨授業実践報告：ものづくり創成実践

Class Report: Creative Thinking and Practice

前川 克 廣 (工学部) 佐藤 英 雄 (教育学部) 安田 健 一 (教育学部)
榊 守 (教育学部) 竹野 英 敏 (教育学部) 柴田 隆 行 (工学部)
大島 郁 也 (工学部) 伊藤 伸 英 (工学部) 熊沢 紀 之 (工学部)

Katsuhiro MAEKAWA (College of Engineering) Hideo SATO (College of Education)

Kenichi YASUDA (College of Education) Mamoru SAKAKI (College of Education)

Hidetoshi TAKENO (College of Education) Takayuki SHIBATA (College of Engineering)

Ikuya OHSHIMA (College of Engineering) Nobuhide ITOH (College of Engineering)

Noriyuki KUMAZAWA (College of Engineering)

キーワード：ものづくり実践、創造教育、体験型学習、課題探求・問題解決型学習、人間力養成

1. はじめに

「もの」を自分の手で作るという若者にとって最も重要な「創造」の原点を体験または経験する機会が極端に少なくなり、そのため本物を知らない多くの若者が育っている。ものづくりの実践現場である企業からも若者の自主性、創造性、問題解決能力の欠如が指摘されている。このような課題に対し現在の工学教育・技術教育では今なお教員から学生への一方的な知識伝達型の授業が主流である。しかし、いま問われているのは、学生が積極的、能動的に参加する意欲をもち、ものづくりの楽しさを実感でき、そのなかで創造性を育めるような体験型学習プログラムの構築とその実践である[1~3]。

このような背景から、座学ではなく体験型、教えるのではなく学ぶ、専門性ではなくものづくり感性の涵養をキーワードに、自主性と創造性を発現させるためのものづくり創造教育の実践を目的とした授業を計画した。ものづくり創造教育とは、「実現したい課題を自分で発見・発想し、調査し、設計し、作り、結果を評価する、一連の作業を基本的には個人に実践・体験させ、失敗と試行錯誤を通してある程度の到達度・満足感を体験させる」[2]ことである。これを実現するためには、ものづくりの体験を通して創造性を引き出すような実習教育、すなわち、創作活動での失敗を通

して、理由を考察し、改良工夫を重ねることによって創造性が育まれるようなカリキュラム開発と教育実践が求められる。

まず、カリキュラム開発に当たっては、現在、教育学部および工学部において開講されている関連科目をベースに、上記のキーワードを盛り込んだ教育内容と指導方法を検討した。次に、開発したカリキュラムを学部初年度生に対し短期集中授業(2単位)で実施し、最後に、学生授業アンケートや授業担当者グループの討論により教育成果を評価し、改善のための検討を行った。この流れに沿って「ものづくり創成実践」の授業内容を紹介する。

2. 授業計画と実施状況の概略

教育学部では先進的に総合科目(人間・文科系、1年次以上全学共通)として「ものつくりのすすめ」を開講している。ここでは「もの」(実験装置)の作り方や設計図面の書き方の座学による学習を主体にしている[4、5]。工学部では専門科目として「機械製作基礎」(機械工学科1年次、水戸開講)と「機械工学実習」(機械工学科2年次、日立開講)がある。前者は座学中心で生産工学(デザイン、設計、材料、加工、組立、品質管理、物流等)の基礎を教授し、後者は前期で工作機械の基本操作を実習させ、後期でものづく

りの基本を応用し、自分のアイデアを形にするための総合的な活動を求めている。「機械工学実習」における授業アンケート調査では、大多数の学生（受講生の87%）がものづくり教育に興味を抱く結果となり、また、多くの学生（受講生の86%）が自分のためになった授業であったとの認識をもち、大多数の学生（受講生の95%）から満足したとの声が聞かれるなど、大きな教育効果が得られている[3]。

このような教育学部および工学部において開講されている関連科目をベースに、学部初年度生に対し、ものづくりの体験を通じて、創意工夫を重ねることによって学生の創造性、主体性、積極性を育成するようなカリキュラムを開発した。実践テーマとしては、次の10テーマが準備された。

- ・電波時計を製作しよう！
- ・オリジナル木製品の製作に挑戦
- ・リサイクル品利用でモータ、扇風機を作ろう
- ・幼児が喜ぶ世界で一つのトミカの製作
- ・飛べ！プロペラ模型飛行機。昭和の中学生に挑戦だ！
- ・自走マシンでラビリンス（迷宮）を攻略せよ！
- ・マイデザインによるマシン彫刻への挑戦
- ・超小型電動ウインチを作ろう！
- ・接着剤を作って何でもくっつけよう
- ・これが「ものづくり創成実践」だ！—授業を映像化しよう—

この授業は、平成15年度茨城大学教育・研究支援経費プロジェクトとして企画された。採択後に担当者間ならびに学生課教養教育係と幾度かの打合せを行いながら、表1に示す手順でプロジェクトを実施した。

作成した学生配布用シラバスとテーマ概要については、「プロジェクト報告書」[6]を参考にさせていただきたい。学生にはこれらの資料とともに次のような案内を掲示し、受講生を募集した。この案内文に授業のエッセンスが凝縮されている。

「あなたは大学に入って、高校と同じような、先生からの一方的な授業に満足していますか。自分なりのアイデアを形にしたり、実験や工作をしてみたり、これまでと違う形の授業に参画してみたいと思いませんか。この授業のねらいは、とにかく自分の頭を使い、

表1 授業の準備状況

7月	プロジェクト立案時の授業計画（テーマ設定、日程、成績評価基準等）の見直し
9月	テーマの提出とシラバスの作成。総合科目としての認定
12月	集中講義受講生募集
1月	テーマ人数割り。受講者へのテーマおよび傷害保険加入の説明。教材準備終了
2月	場所、設備の手配。授業方法、発表会、成績評価基準の確認
2・3月	2月26日、27日、3月1日、2日授業実施。26日の開始時に安全教育。2日は発表準備（午前）と全体発表会（午後）
3月	授業アンケートの実施、成績の集計・提出、プロジェクト報告書作成

身体を動かして物を作ってみることで。テーマの大枠は与えられますが、それをどう実現するかはあなたとあなたの仲間だけです。チームワークと役割分担で何かを作りあげる。上手く行ってもいなくても、満足度と達成感はきっとあるはず。失敗の中からこそ学ぶことも多いのです。足りなかった知識や技術にまず気づくことが大切です。そこから自分なりの学習が始まるのです。

授業は10テーマ（概要は別紙参照）用意されています。各テーマ5～10人で、さらに2～4人のチームに分かれて、一人1テーマの創作活動を行います。今までの授業にあきたらなかったあなた、ものづくり実践に参加する意欲のあるあなた、全日程受講できるあなた、が対象です」

このとき、学生には集中講義申告票と併せて受講申告書も提出させた。受講申告書では受講希望テーマ（第1から第10希望まで）と、グループ分けの参考と受講意欲の確認のためテーマの選択理由を書かせた。

募集人数60名に対して156名もの申告票の提出があった。第1希望テーマを優先して143名（人文25、教育7、理14、工91、農6）の履修者を受け入れた。全日程受講を義務付けていたにもかかわらず、残念ながら約40名が授業を取り止めるか欠席した。その理由の一つとして、第1希望のテーマを受講できなかったことが挙げられる。

2月26日の開始日には、授業実施概要（担当者の紹

介、全体発表会、成績評価)の説明、安全教育、傷害保険料(200円)の徴収を行った。その後、各テーマに分かれ創作活動を進めた。最終日の3月2日は午前中に全体発表会のための準備をすすめ(一部のテーマでは競技を実施)、午後から実習内容と作品を発表させた。発表は1テーマ15分と短かったが、この授業の高い満足度が窺える熱気が感じられた。

次に、授業の一端を紹介する。この他のテーマに関しては「プロジェクト報告書」[6]を参照されたい。

3. 教育実践状況の具体例

3.1 自走マシンでラビリンス(迷宮)を攻略せよ!

(1) テーマ概要

両側を壁で囲まれた複雑な迷路(ラビリンス)をいち早く抜け出しゴールできる自走マシンの作製にチャレンジする。小型DCモータ2個とタイヤを使った駆動方式とし、単3電池2本(電池ボックス1個)を電源として使用する。また、迷路の壁に接触したことを左右に配置した2つの接触センサ(リミットスイッチ)によって検知し、簡単なアナログ制御回路によって2つのモータのON/OFFとそのタイミングを制御することで、自在に方向を修正しながら進むことができるようにする。具体的な作業の流れは、①設計仕様の決定と図面の作成(モータ、電池ボックス、接触センサ、制御回路などの部品の配置図を作成)、②アルミニウム板の外形加工と穴あけ加工を行って部品を搭載するためのシャーシを製作、③電気回路図をもとに自分でハンダ付けを行ってモータ制御用の回路基板を作製、④自走マシンの組立、⑤最適な性能が得られるようなマシンのチューニングを行う。チューニングは、回路基板の可変抵抗を微調整することでモータのON/OFFのタイミングを調整して行うことができる。最後は、自慢のマシンでラビリンス攻略の時間を競い合い優勝者を決定する。

(2) 受講希望者とグループ編成

本テーマには、人文学部3名、教育学部1名、理学部3名、工学部17名(機械11名、電気電子3名、情報2名、メディア通信1名)の計24名の受講申込みがあった。しかし、工作設備と自走マシンの製作コストの制約から、学生が提出した「テーマの選択理由」で受講

の意気込みが強く感じられる12名を厳選した。ただし、授業ガイダンスを受講した後に1名の学生(教育学部)が「テーマ内容が難しそう」という理由で受講を取りやめ、実際には11名となった。その中から、2名を1組として6グループで実施した。表1に示すように、他学部・他学科の学生でグループが編成されるようにすることで、グループ内での討論を通じたコミュニケーション能力の育成にも配慮した。

(3) 授業ガイダンス

授業に先立って行ったガイダンス(1月)では、資料を学生に配布し、テーマ内容の説明を行った。また、授業で製作する自走マシンの理解を助けるために、①自走マシン制御回路に使用する電気・電子部品の基礎および制御回路の仕組み、②与えられた制御回路図をもとにプリント基板の配線図の作成、③DCモータ、タイヤ、ギア、接触センサ(リミットスイッチ)、電池ボックスなどの部品のレイアウトとシャーシの設計、④競技用コース(ラビリンス)の作製方法、についての課題を与えた。ただし、工学部以外の学生に配慮し、できる範囲で勉強することを勧め、レポートの提出などは義務づけなかった。学生からの質問などについては、電子メールを活用して対応した。

(4) 授業の流れ

表2に授業の簡単な流れを示す。まず、配布試料をもとに、ガイダンスの際に提示した課題の解答と解説を行った。制御回路に使用する抵抗器のカラーコードの読み方、半導体の基礎およびダイオードとトランジスタの仕組み、自走マシンの制御回路の詳しい解説を行った。その後、グループごとに分かれて、どのよう

表2 授業の流れ

第1日	午前	課題の解答と解説 自走マシンの設計
	午後	電子回路・機械工作指導 制御回路の製作 シャーシの作製
第2日	午前	制御回路の製作
	午後	シャーシの作製
第3日	午前	自走マシンの組立・調整
	午後	競技コースの作製 自走マシンの調整・改良
第4日	午前	競技会 (授業アンケート)
	午後	発表会

な"自走マシン"を作製するのかを議論させ、目標を明確にするために、自分たちの作製するマシンの構想図とその特徴をA4版1枚にまとめさせた(図1参照)。さらに、構想図をもとにアルミ板で製作するシャーシの設計図面を作成させた。また、興味をもたせる意味で"マシンの愛称"を命名させた。各グループで作製するマシンの構想と設計図面ができあがった段階で、制御回路の作製方法および機械加工に関する指導を行い、製作を開始した。最終日の競技会では、ラビリンス攻略のタイムトライアルを行い、優勝者を決定した。

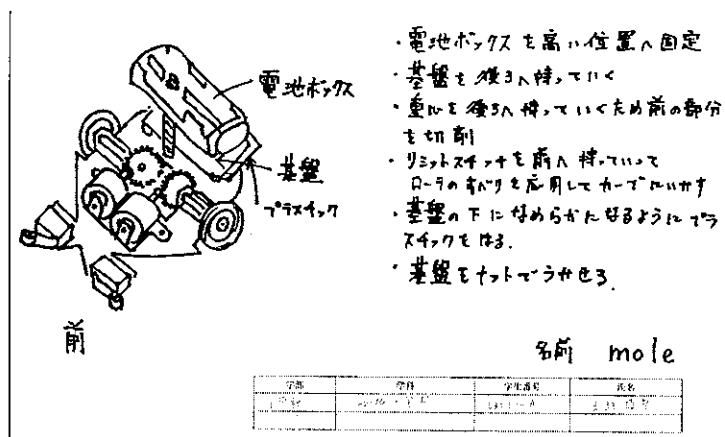


図1 自走マシンの構想図と特徴(一例)

(5) 自走マシンの製作

実質2日半という短い期間で、自走マシンを製作した。図2および図3は授業の様子である。機械工作(アルミ板の加工)および制御回路作製のために用意した工作設備・工具類は、卓上帯鋸盤(1台)、卓上ボール盤(1台)、万力(3台)、各種ヤスリ、ニッパ、ラジオペンチ、ペンチ、ワイヤストリッパー、精密ドライバー、ポンチ、金切りバサミ、ノギス、スケール、ハンダごて(6個)などである。また、競技用のラビリンス作製のために、ハサミ、カッター、ダンボールカッターなどの文房具も用意した。授業の中で学生が行った主な作業は次のとおり。

①制御回路の製作

制御回路図とプリント基板の配線図をもとに、トランジスタ、リレー、LED、抵抗、コンデンサなどの電気・電子部品をプリント基板上にハンダづけし、制御回路を作製した(図4)。ハンダ不良で一部不具合がでたグループもあったが、テスタを使って電子回路と格闘し、何とか全グループが完成にこぎつけた。

②シャーシの製作

DCモータ、タイヤ、ギア、接触センサ(リミットスイッチ)、電池ボックス、制御回路などを設置するためのシャーシを厚さ2mmのアルミ板を機械加工して作製した(図5)。学生は、自分たちが書いたシャーシの図面をもとに、帯鋸盤で外形加工を行い、ヤスリがけで形状を整え、ボール盤でネジ止め用の穴あけ加工を行い、思い思いのデザインのシャーシを作製した。学生の作品の一例を図6に示す。曲面形状をヤスリで

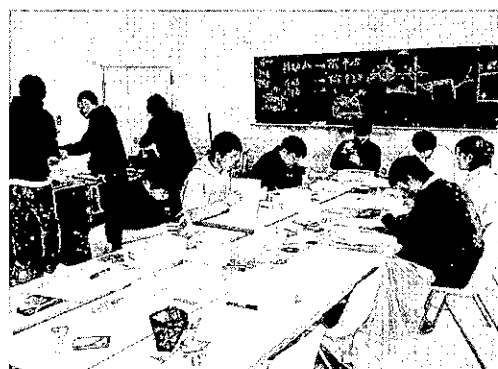


図2 授業風景



図3 マシンの構想を真剣に議論

きれいに整えるのに苦労していたが、予想よりもはるかに出来がよいのに感心した。

③自走マシンの組立と調整

作製したアルミ製のシャーシにモータ、タイヤ、リミットスイッチ(接触センサ)、制御回路などを組み立て、自立マシンを完成させた。図7に完成した自走マシンの例を示す。シャーシにあけた穴の位置が微妙にずれていたため、モータのウォームギアと車輪のギアとの噛み合わせが悪く調整に苦労していた。また、実際にラビリンスを走行させると、なかなか自力で

ゴールできないことがわかり、(b)のマシンのように、ピアノ線や針金などを使って、センサの接触部分を工夫し、マシンンの性能向上を競い合っていた。競技会に向け時間を忘れて取り組んでいたのが印象的であった。

④ラビリンス（競技コース）の製作

学生には授業開始前までにラビリンスの作製方法を考えるように課題を与え、電子メールを利用して議論を行った。最終的に、「空き缶とダンボールを使ってラビリンスを作製すれば、低コスト、簡単、しかもレイアウトの設計・変更も自由自在」ということになり、授業開始日に適当な量の空き缶とダンボールを各自が持参することとした。図8が完成したラビリンスである。出来上がった時点では、「ミニ四駆のコースと変わらないのでは？」との学生たちの感想であったが、実際にマシンを走らせてみるとコーナーでマシンが停止し、なかなか自力で走破できないことがわかった。簡単なコースにみえても学生たちのマシンにとっては、まさにラビリンスとなり、どのグループが最初に"ラビリンスを攻略"するかを競い合い、必死で自身のマシンに工夫を凝らしていた。

(6) 競技会と発表会

授業最終日の朝一番に競技会を実施した。前日の走行テストでは、ほとんどのマシンが調整・改良不足で自力走破ができない状況だった。当日の朝、学生たちは授業開始の1時間前には教室に集り、競技会に向けてマシンの調整・改良を行っていた。競技では、3回の走行でもっともよいタイムを記録とした。学生たちのラビリンス攻略の強い思いと必死の努力で、6台中5台が見事に完走した。また、学生たちにとって"夢の10秒台"の記録も達成され、競技会は大いに盛り上がった。印象的だったのは、なかなか完走できなかった他人のマシンがラビリンスを攻略できるように、学生同士が競技であることを忘れアドバイスをしたり、ついに完走したときには全員が自分のことのように喜んでいただことである。同じ目標に向かって頑張ったもの同士が味わえる一体感が教室を包んでいた。



図4 電子回路のハンダづけ

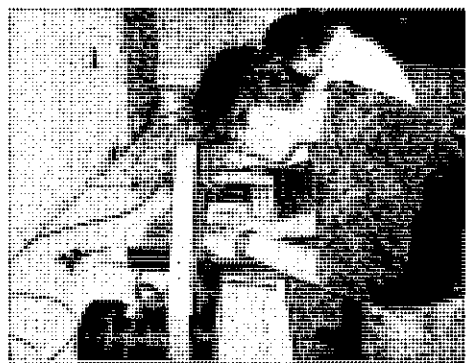


図5 帯鋸盤でアルミ板を加工

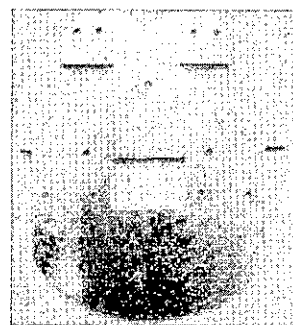
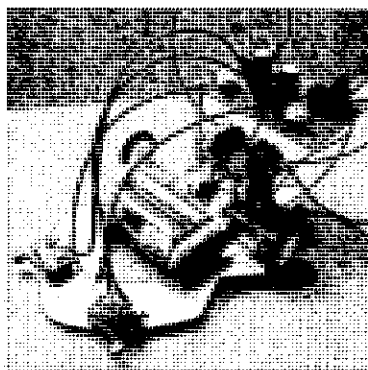
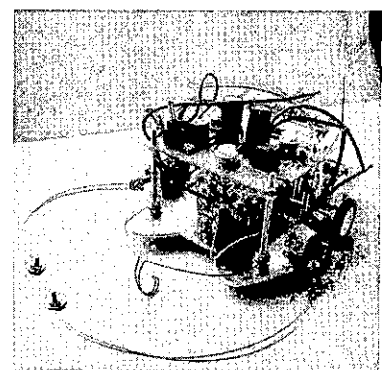


図6 アルミ板を加工して作製したシャーシ



(a) Jaws



(b) 21世紀の犬型マシン

図7 完成した自走マシンの例

最後に、発表会（図9）で、当初思い描いていた自走マシンの構想と特徴、完成したマシンの紹介とアピール、授業の感想などを全員がパワーポイントを使って発表し、全日程を終了した。

(7) まとめ

今回のテーマを設定するにあたり、①基本的な電気・電子回路の基礎を学習し、実際にハンダごてを使って制御回路を製作する、②自分のアイデアを設計図面に具体化し、簡単な機械工作で金属を加工して"もの"をつくる、③両者を組合せて"自走マシン"という形にし、思い描いた性能を発揮させるために創意工夫を凝らす、④グループの仲間と話し合い、作業分担を決め、互いに協力して一つの目標を成し遂げる、といった内容を通じて"ものづくり"の難しさと楽しさを体験的に学習させるという目的はほぼ達成できたと思う。反省点としては、今回設定したテーマでは、①自走マシンの製作コストが1台あたり3,500円程度と高額になったこと、②工作機械（帯鋸盤とボール盤が各1台）の台数が少なく、加工の待ち時間が多くなったこと、などが挙げられる。

学生の感想の一部を紹介する。『これから先、私は人文なので、今回授かった技術を生かす場はなかなかないと思うが、考え方や問題回避の仕方、パートナーと協力して作りあげていくというようなことは、今後様々な場面で生かしていきたい。この集中を受講して本当によかった』（人文学部、女子学生）、『やはり一からのマシンの製作、「ものづくり」はとてもおもしろかったです。マシンが動いたときの感動や、攻略できたときの感動はとても表現できないくらいのものでした。ぜひ来年にもこの集中講義は開くべきだと思います』（工学部、男子学生）

今回の"ものづくり創成実践"の試みは、工学を志す学生にとっても、工学とはあまり接点のない学生にとっても、たいへん貴重な体験になったと感じている。「ものづくりの体験」ということだけではなく、「みんなで議論し、協力し合いながら一つの目標を成し遂げる」という経験は彼らの将来にきっと役立つことであろう。授業を実施するための予算の恒久的な確保、教員の負担増、工作設備など解決すべき問題は多々あるが、このような貴重な"学びの機会"を今後も与え続け

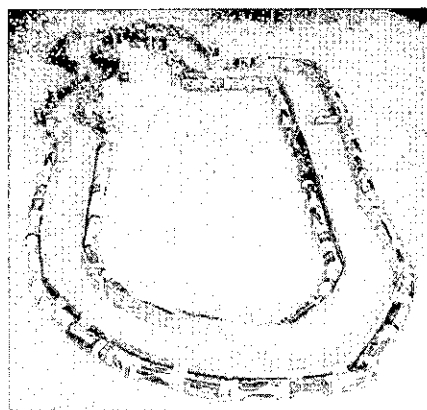


図8 空き缶とダンボールで製作したラビリンス（レースコース?）



図9 発表会の様子

ることが、学生のみならず茨城大学の将来にとっても意義のあることだと強く感じた。

3.2 リサイクル品利用でモータ、扇風機を作ろう

(1) テーマ概要（募集時の内容）

内容：身近にある廃材を利用し、乾電池で回る2極モータを自作する。さらにこれも廃材利用のファンを付けて扇風機とし、風力を競う。

作る物：モータ（軸、軸受け、回転子、整流子、ブラシ、界磁など）、羽根。

手順：

- ① モータの基本構造を理解し、概念設計を行う。この段階でどのような材料が必要か、大まかな方針を決定する。アイデアが勝負。
- ② 材料となる廃材の収集。ただし、エナメル線は支給。
- ③ 集めた材料を基にした実機的设计、製作。
- ④ 扇風機の風力測定方法の検討、およびそれによるコンペ。

その他：接着剤、ハンダ付け、各種工作機器類（旋盤、ドリル、糸ノコ、はさみ等）は自由に使用してよい。

(2) ねらい

一人の手で企画、材料調達、設計、製作、調整、（必要ならば設計変更、再調整）、完成という実物と同じものづくりのプロセスを体験することにより、その難しさ、楽しさ、動いた時の喜びなどを体感してもらうことをねらった。材料調達をリサイクル品の活用という形とし、併せて環境問題に対する関心を持たせることもねらいの一つとした。

動くものを製作して、それが実際に動いた時大きな感動が得られると考え、題材として小学校の工作で行われているモータ作りを選び、見本として学生に提示した。モータの出力を数値化する意味で、ファンを付けた扇風機という形にし、風力を競わせることとした。

(3) テーマの詳細（ガイダンスで学生に提示した内容）

(1) 詳細ルール

- 1) モータの大きさは最大150mm程度とする。
- 2) 原則材料は廃材のみとし、実習室内や大学構内にある廃材置場にて材料を収集する。各自の不用品を利用してよい。
- 3) エナメル線は10m/人程度支給する。これを回転子と界磁用に半分ずつ使用する。
- 4) 扇風機の羽根は特に制限しない。
- 5) 設計図（概略図でも可）を作成してから製作に入る。製作開始後の設計変更は随時可とするが、その場合にも修正図面を描くこと。
- 6) 工作機器類は何を使用してもよい。必要な機材は申し出ること。各自所有の工具も可。
- 7) 接着剤の他、ねじ、釘、テープなども使用可。
- 8) その他、不明な点などがあればいつでも質問すること。
- 9) 余力のある場合はエナメル線を支給するので2台以上製作してもよい。

(2) 概略スケジュール

- 1日目（2/26）モータの基本構造に関する説明
学内廃材置場の探訪および材料収集
モータ、羽根の概念設計
- 2日目（2/27）モータ、羽根の詳細設計

製作開始

3日目（3/1）製作

4日目（3/2）扇風機完成、風力測定コンペ、
成果発表会

(3) 提出物

詳細設計図、レポート（製作方針、製作方法、感想など）

(4) 成績の判定基準

1) アイデア（40%）

既成概念にとらわれないユニークな構造
廃材のうまい利用のしかた

2) 作品の出来具合（20%）

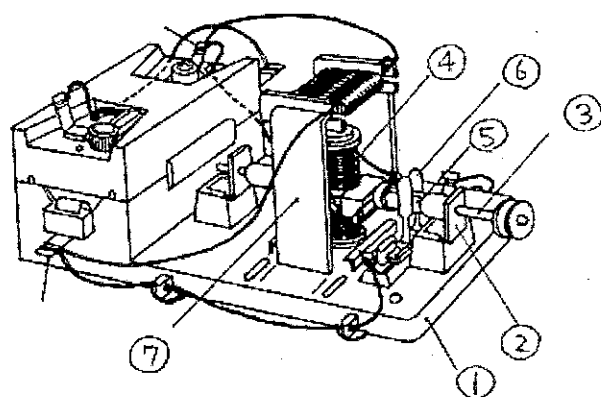
扇風機としての性能（モータ、ファンの性能）
見てくれ

3) 取組み方（40%）

出席、受講態度、レポートなど

(5) モータの構造

- ①ベース ②軸受け ③軸（シャフト） ④回転子（アマチュア） ⑤整流子（コンミテータ） ⑥ブラシ ⑦界磁（フィールド）



配線図

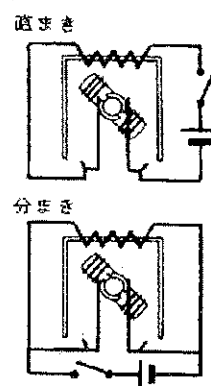


図10 モータの構造および配線図

(4) 実習結果

① 材料収集

水戸キャンパスの廃材置場（図11）にて廃品を分解するなどして材料となりそうな部品、素材を収集した。この他実習室内にある金属、プラスチックなどの残材も利用した。見本のモータを基に各自の製品を頭に描き、それに合った材料を探すよう指示した。また、製作に入ってから材料不足の場合適宜収集を行わせた。

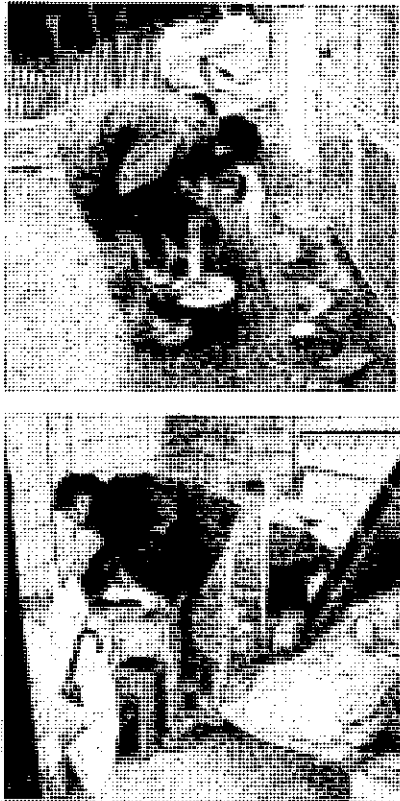


図11 材料収集風景

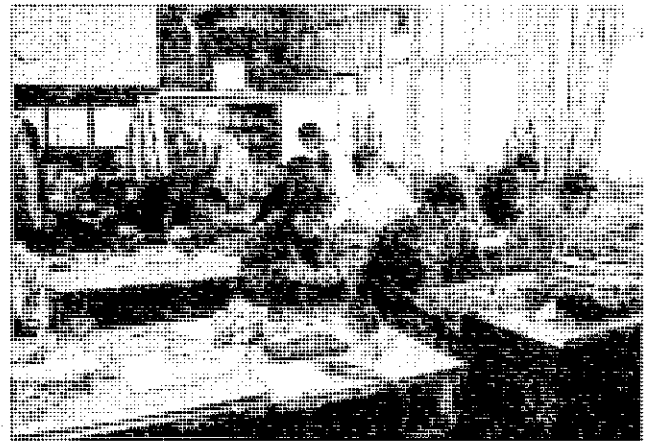


図12 製作風景

③ 完成

完成後実際にモータが回ったのは受講者12名中4名であった。このため当初予定の風力を競うところまでには至らなかった。図13に作品の一部を示す。

(5) 学生の反応

提出されたレポートより学生の反応を調査した。因みに、受講者12名中本テーマを第1希望とした者5名、第2希望5名、第3希望1名、第4希望1名である。まず当初のねらいである以下の項目についての感想を持った学生数を示す。ただし、複数の項目にまたがる感想を書いた者もいる。

1) ものづくりの難しさがわかった：5名

2) 楽しさ、喜び、達成感を味わった：6名

3) 貴重な体験で今後のためになった：5名

4) リサイクルに対する関心が深まった：3名

次にテーマ内容に関しては以下のような意見があった。

1) ゼロからのスタートという点がよかった：2名

② 設計、製作

収集した材料をもとに設計図を描き、それに従って材料を加工する。製作している様子を図12に示す。すべての学生は熱心に製作に取り組んでいた。一部の学生を除き工作経験に乏しく、初めのうちは各種工具の使い方など実際にやってみせる必要があったが、最終日には、かなり慣れてきたようである。

指導方針としては学生の主体性を重んじ、製作方法のアドバイス程度に留めた。すなわち、構造的にこれでは回らないかもしれないと感じてもあえてその場で作り直させることはせず、一度形にさせてからなるべく自分で考えさせるようにした。

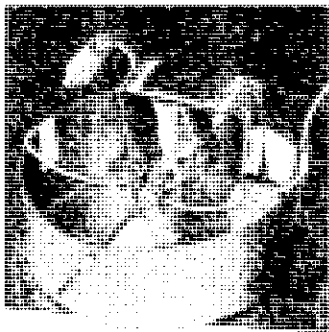
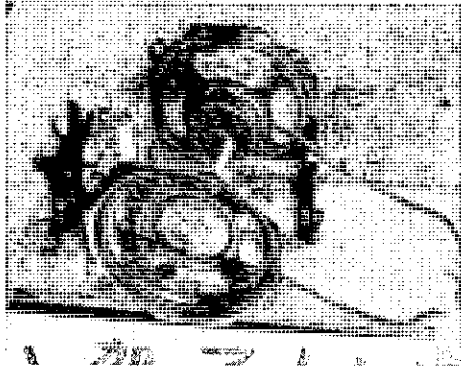
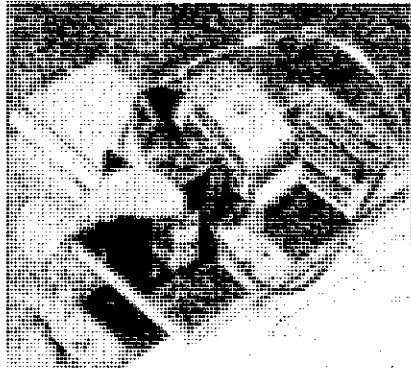


図13 作品例

- 2) 自分の思うままに作れてよかった
- 3) 皆が違う形になったのが面白かった
- 4) 機械工学科では必修にすべき
- 5) 他のテーマに比べて予算が少ないのは納得かない

このうち5)は否定的意見と言えなくもないが、この意見を書いた学生も結果には満足していた。最終的に2/3の学生のモータは回らず、残念、悔しいという感想もあったが、上記のようにものづくりの何たるかは感じ取ってもらえたようで、特段不満は聞かれなかった。

(6) まとめ

結論を一言で言えば、すべての学生がためになったとの感想を抱いていることから、本講義の目的は一応

達成できたものとする。リサイクルについてもレポートに記載した人数は少なかったが、発表会では多くの学生が口にしており、関心が高まったものと思われる。以下に反省点を記す。

当初、経験の無い学生が4日間でどれだけのことができるのかが見えずテーマ設定に苦労したが、1/3の学生しか回るモータを作れなかったということは、結果としてテーマが難しかったのかもしれない。先に述べた学生の主体性を重んじた指導法(勝手にやらせてみる)にも原因はあろう。ガイダンス時には見本のモータを見せて原理の説明をしたのみで、構造に関してはよく観察するよう指示しただけであった。自分の作ったものとどう違うのか自身で考えさせるねらいではあったが、少なくともスタート時点でポイントとなる事柄、例えば回転抵抗を極力小さくする必要があり、そのためにはどうすべきかなど、十分に解説し理解させてから始めるべきであったと考える。

全員回って感動を味わってもらいたいというねらいは達成できなかったため、アフターケアとして再チャレンジしたい者がいれば受け付けることとした。1名申し出があり、回すことに成功したことを付け加えておく。

4. 考 察

この授業に対するアンケート集計結果によれば、評価点は4.24(回収率70.8%)であり、全体としてよかった・ややよかった81.4%、大変よく理解できた・よく理解できた72.2%、知識・教養や技能・技術が大変向上した・やや向上した91.8%、出席状況80%以上93.8%、総合科目として適切であった・ほぼ適切であった70.1%と学生の評価は大変高かった。改善すべき点として10%以上の項目は、解りやすい説明17.5%、授業の進捗10.3%のみであった。意見として作業環境の改善などが挙げられていた。

学生の参加姿勢や授業アンケートから判断すると、本授業は、「学生が実現したい課題を自分で発見・発想し、調査し、設計し、作り、結果を評価する、一連の作業を基本的には個人に実践・体験させ、失敗と試行錯誤を通してある程度の到達度・満足感を体験させる」ものづくり創造教育の主旨を実現することができ

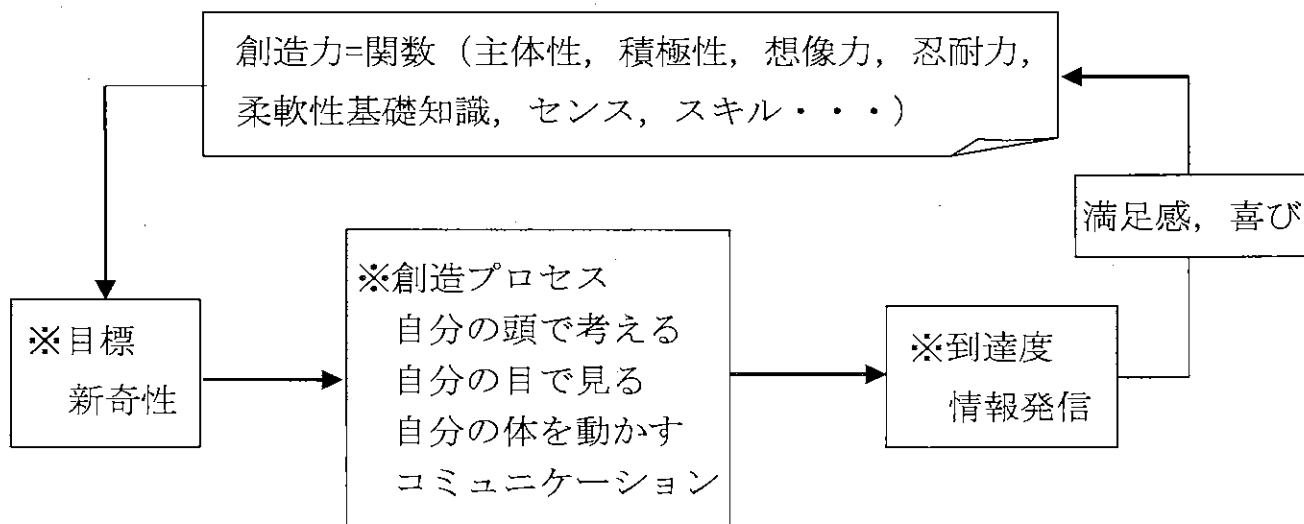


図14 ものづくり教育による創造力育成プロセス

たものと、概ね判断される。

一方、課題もいくつかある。まず、体験型授業の規模として、担当者一人当たり10名以下の小グループが望ましい（今回は20名を越えるテーマがあった）。多数の履修希望者を受け入れるためには授業担当者の増員、TAの確保、教材費補助の増額などを図る必要がある。また、履修希望者は、工学部と教育学部の学生だけではなく、人文学部、理学部、農学部の学生も多かったため、それぞれの学部から授業担当者の参加が理想的である。授業形態として、集中講義形式での実習に問題はないが¹、実施時期については検討を要する。年度末よりは夏期休業の開始時（0.5日）と終了時（3.5日）が適当と考えられる。最後に、実習工場が設置されていない水戸キャンパスでは、作業場所が狭く、また設備も不十分である。このような体験型授業をさらに充実させるためには、施設整備が必要である。

ものづくり創造教育実践では、学生がこれまでの授業やものづくりの体験を応用して、自分のアイデアを形にするので、アイデアの具体化、設計や製図、製作方法の検討、材料の手配、加工と組立、性能や機能の評価、成果のプレゼンテーションなどの総合的な活動が求められる。これによって、学生は自分の発想が現

実の形になって現れるという喜びを体験できる（図14）とともに、チーム作業による役割分担、グループ討論、チームワークの重要性についても学ぶことができる。

このような体験型学習では、テーマの設定が最も重要である。新奇性と適度な難しさを組み込むことによって、挑戦意欲を高めることになり、その課題を達成した満足感や喜びは、次の挑戦へのインセンティブとなるにちがいない。また、自分が勝ち得たことは、他者への情報発信となって満足感や喜びをさらに増すことになる。一方、失敗に学ぶ姿勢を育むことも重要である。学生が躓いているときに一緒に考え、的確なヒントを与えることができるかどうか、担当者のコーチング技量がここで問われる。また、チーム作業の必要性も見逃せない。グループ内での適切な役割分担とコミュニケーションによって、一人では達成できないようなことができるようになれば、満足感や喜びはさらに高まる。要するに、ものづくり教育による創造力育成のプロセスは、スポーツの上達のそれと類似している。

最後に、学部初年度生にこのような体験型授業を実施することの意味を考えてみよう。受講生の意見に多く見られるように、この授業は彼らにとって新鮮な驚きであったにちがいない。「勉強＝公式の丸暗記」の受験勉強にどっぷりと染まっていた学生達にとって、自分の頭で考え、目で見て、からだ全体を使って、しかも仲間と協力しながら課題を解決することができる。それには大きな満足感と喜びが伴う。これは、彼らに

¹むしろ、担当者にとっては所属キャンパスが離れているので、一ヶ所で実施する場合には、この方が効率的である。また、学生にとっても、集中して作業が行えるので授業効果は高い。

表3 最終的な授業計画

授業科目	文明・技術系科目（総合科目）
授業題目	ものづくり創成実践（K1682）
授業単位数	2単位
対象学年	1年以上全学共通
学生数	60名
実施方法	<ul style="list-style-type: none"> ・1グループ3～4名で、グループ単位で課題を遂行する ・年度末の2月26日、27日、3月1日、2日に午前2コマ、午後2コマの集中授業 ・場所は共通教育棟および教育学部技術教育関連施設
実践テーマ	<p>「自走マシンでラビリンス（迷宮）を攻略せよ!」「飛べ!プロペラ模型飛行機。昭和の中学生に挑戦だ!」「マイデザインによるマシン彫刻への挑戦」「オリジナル木製品の製作に挑戦」「幼児が喜ぶ世界で一つのトミカの製作」「リサイクル品利用でモータ、扇風機を作ろう」「接着剤を作って何でもくっつけよう」「電波時計を製作しよう!」「これが「ものづくり創成実践」だ!—授業を映像化しよう—」「超小型電動ウインチを作ろう!」</p>
授業の構成・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマ説明および安全教育（各2回）、グループを単位とする学生自らの創作活動（課題の理解、アイデアの具体化、製作方法の検討、工作と組立、改良・工夫、性能や機能の評価など計12回）、成果発表会（1回） ・成績評価は創作活動への係わり方50%、プレゼンテーション25%、作品25%

とって「勉強」から「学び」へのパラダイム・シフトの体験を意味する。「ものづくり創成実践」の授業を通して、創造性を育む以前に、真に学び、そして「わかる」ことの楽しさに気づいてもらいたいのである。

5. まとめ

この授業は平成15年度茨城大学教育・研究支援経費プロジェクトの一環として実施され、ものづくりの体験を通して創造性を引き出すような実習教育、すなわち、創作活動での失敗を通して、理由を考察し、改良工夫を重ねることによって創造性を育成するためのカリキュラム開発と授業実践を行った。

まず、カリキュラム開発では、現在、教育学部および工学部において開講されている関連科目をベースに、上記の目標を盛り込んだ教育内容と指導方法を検討し、表3に示すような授業計画を立案した。

次に、開発した授業内容を実施してその教育効果を見極め、課題を洗い出し、次のステップへ繋げるための検討を行った。その要点をまとめると次の通りである。

(1) 募集人数60名に対して156名もの申告票の提出

があり、第1希望テーマを優先して143名（人文25、教育7、理14、工91、農6）の履修者を受け入れた。単位取得者は103名（A+20、A81、B2）であった。

- (2) この授業に対するアンケート評価点は4.237（回収率70.8%）であり、全体としてよかった・ややよかった81.4%、大変よく理解できた・よく理解できた72.2%、知識・教養や技能・技術が大変向上した・やや向上した91.8%、出席状況80%以上93.8%、総合科目として適切であった・ほぼ適切であった70.1%と学生の評価は大変高かった。
- (3) 改善すべき点として10%以上の項目は、解りやすい説明17.5%、授業の進度10.3%のみであった。意見として作業環境の改善が挙げられていた。
- (4) 学生の参加姿勢と授業アンケートから判断すると、本授業では、「学生が実現したい課題を自分で発見・発想し、調査し、設計し、作り、結果を評価する、一連の作業を基本的には個人に実践・体験させ、失敗と試行錯誤を通してある

- 程度の到達度・満足感を経験させる」ものづくり創造教育の主旨を実現することができた。
- (5) 指導方法として、教え込むティーチングではなく、潜在能力を引き出すコーチングの技量が必要である。
 - (6) 体験型授業の規模として、担当者一人当たり10名以下の小グループが望ましい。多数の履修希望者に応えるためには授業担当者の増員、TAの確保、教材費補助の増額などを図る必要がある。
 - (7) ものづくり実習への興味は工学部と教育学部の学生だけではなく、人文学部、理学部、農学部の学生にとっても高いので、それぞれの学部から授業担当者の参画が望ましい。
 - (8) 集中講義形式での実習に問題はないが、実施時期は検討を要する。年度末よりは夏期休業の開始時（0.5日）と終了時（3.5日）が適当と考えられる。
 - (9) 水戸キャンパスは実習作業場所が狭く、また設備も不十分であるので、このような体験型授業をさらに充実させるためには、施設整備が必要である。
5. 上田邦夫・山下晃功・竹野英敏他11名：『中学校技術・家庭学習指導書技術分野技術とものづくり編』、開隆堂出版(株)、pp.5-9, 124, 158-168, 187-189, 192-195, 202-206, 221-223, 227-234, 237-244, 249-257, 2002.
 6. 前川克廣ほか：ものづくり創造教育プログラムの開発と学部初年度開講に向けたフィージビリティ調査、平成15年度茨城大学教育・研究支援経費報告書、2004。（CD-ROM版で配布可能）

謝 辞

本プロジェクトの実施面でご協力いただいた学生課教養教育係、TAの田村政司君と中村俊一君に感謝いたします。

参考文献

1. 西田 靖、鏡重次郎、横田和隆：宇都宮大学工学部ものづくり創成センターの概要、日本機械学会関東ブロック合同講演会、pp.3-4、2002.
2. 柴田隆行ほか：文部科学省「平成13年度ものづくり教育推進経費」成果報告書、2002.
3. 柴田隆行ほか：文部科学省「平成14年度ものづくり教育推進経費」成果報告書、2003.
4. 竹野英敏・田村俊之：技術科における「情報システム構築力」を育成する授業モデル開発、『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』52, pp.127-138, 2003.

茨城大学新入生の実態に関する調査研究第二報（資料）

茨城大学新入生の実態に関する調査研究第二報 (資料)

Things disclosed by questionnaires to fresh students in Ibaraki University (Part 2).

大辻永・尾崎久記・鈴木敦・竹野英敏・戸塚茂則・鈴木定夫

Hisashi OTSUJI, Hisaki OZAKI, Atsushi SUZUKI, Hidetoshi TAKENO, Shigenori TOZUKA & Sadao SUZUKI

文部科学省地域貢献特別支援事業・茨城大学高大連携推進プロジェクト

Project Group for Promotion of High School-University Partnership, Ibaraki University.

はじめに

本学は、平成14年度から文部科学省「地域貢献特別支援事業」の指定を受け、幅広い領域で地域貢献を行ってきている。その一つに「高大連携推進プロジェクト」があり、これまで活発に活動してきた(尾崎 2003; 鈴木 2003)。その中で、新入生の実態を知り、高大連携を含む大学教育の改善に役立てるため、平成15年4月の入学生を対象に実態調査を行った(大辻 2003; 大辻他 2004)。本報告はその続報であり、平成16年4月入学生を対象にした調査結果を中心に、前年度の結果を織り交ぜて報告するものである。主な主張は前報で示したとおりであるので、ここでは省略する。

調査の概要

(1) 調査対象

平成16年度入学生は1,766名であるが、調査内容から留学生35名を除き、1,731名を対象とした。

(2) 調査内容

調査内容を表1に示す。前年度の調査項目に加えて、出身地、生年(年度)、大学で力を入れたいこと(学生生活への期待)を加えた点に特色がある。

表1 調査内容

問	調査項目	質問内容
1	一般的な質問	性別、生年(年度)、出身地、出身高校の学校種、入学に至った入試選抜
	大学に関する情報源と選択	大学の情報源、本学の志願・入学理由、学部・学科の志望理由、学生生活への期待
2	大学説明会等への参加状況とその有効性	
3	主要5教科の履修状況	高校で履修した科目
4	状況と受験科目	大学受験で入試科目として選択した科目
5	自由記述	本学への要望や提案等

(3) 調査方法

前年度と同様、マークシートを用いた。前年度は欄が0から始まるものを用いたが、誤記が散見されたため、今回は1から始まるマークシートを用いた。

結果・考察

(1) データの概要

1,731名の対象者のうち、1,710名から有効回答が得られた(回収率:98.8%)。前年度と今年度の学部別男女構成を図1に示す。記入漏れやマークの不鮮明さから、22名が性別不明である。この結果からは、5学部のうち農学部を含む3学部で女性数が男性数を上回っていることがわかる。参考までに、留学生を含む今年度の実際の入学生数を表2に示す。

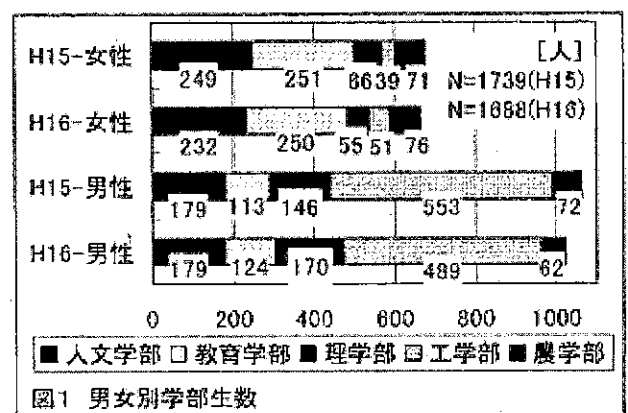
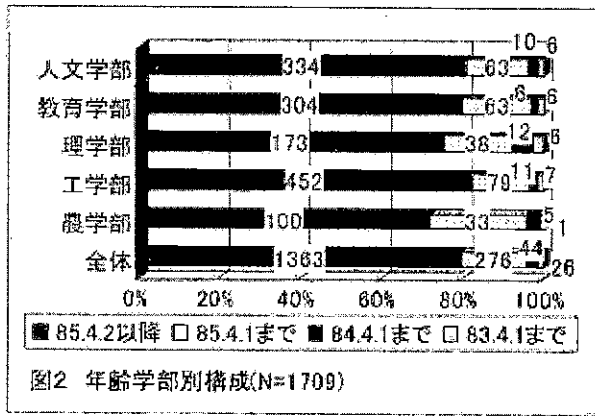


表2 平成16年度入学生(学部・性別)

	人文	教育	理学	工学	農学	計
女性	236	260	59	55	77	687
男性	186	136	176	517	64	1,079
計	422	396	235	572	141	1,766

但し、表2については留学生数を含む



前年度の反省から、誕生日によって対象者を4段階に区分して問う項目を置いた。その結果、いわゆる現役生は79.8%、1浪生は16.1%、それ以上がおよそ4%であった(図2)。

出身地別にみると、茨城県出身者が39.5%であった(図3)。また、県央が11.9%なのに対し、県南が12.2%とこれをしのいでいる。「その他」は41.8%であるが、本学のPR戦略を立てる基礎資料とするためにも、今回の調査では「浜通り」、「それ以外の福島県」といった選択肢を設ける必要がある。

表3は出身学校種を表している。全体のおよそ93%が普通科出身である。農業科出身者はすべて農学部に進んでいる(理学部18、工学部15、農学部9)。しかし、残りの約2割は非理工系学部に進み、人文学部へも9.4%が進学している。高等学校における理数科の存在意義が問題になっているが、進学先の立場から見たこのデータも、そのような議論の基礎データになるであろう。

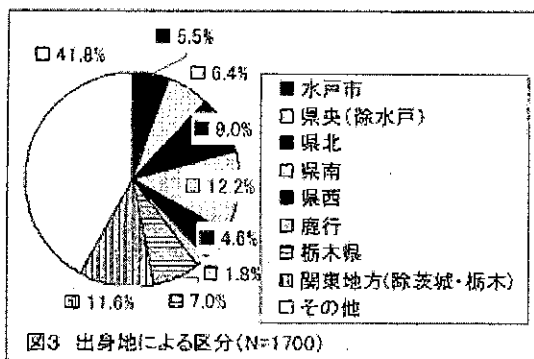


表3 学校種別構成 (N=1739<H15>、1700<H16>)

科	普通	理数	総合	工学	農学	商業	他
H15	1593	70	6	20	5	3	39
H16	1593	53	13	12	6	0	31

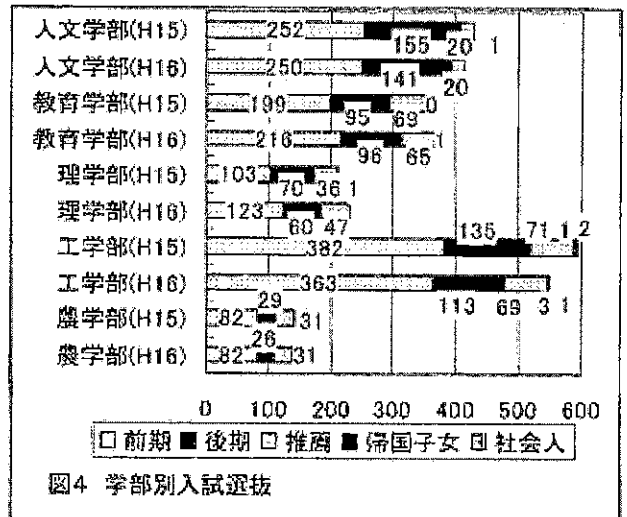


図4 学部別入試選抜

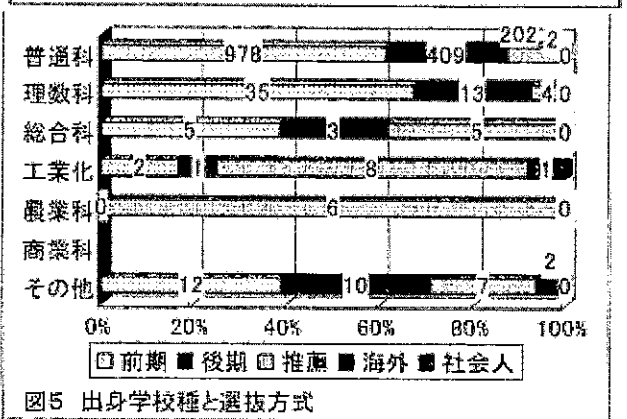


図5 出身学校種と選抜方式

図4に、入学に至った選抜方式を、学部別に示す。平成15、16のいずれの年度ともほぼ類似しており、大きな変化は認められない。

図5は、これを出身学校種別に表したものである。先の農業科出身者はすべて推進入学で入学していることがわかる。職業科高校出身者は実数こそ少ないが、推薦入試によって多く入学しており、性別では、推薦入試による入学者で、女性が若干多くなっている(図6)。

年齢と選抜方式では、前期日程で入学した学生についてみると、いわゆる現役学生が59.0%であったのに対し、1浪、2浪で66.5%、65.9%、それ以上で73.1%と、前期日程で入学する割合が高くなる(図7)。

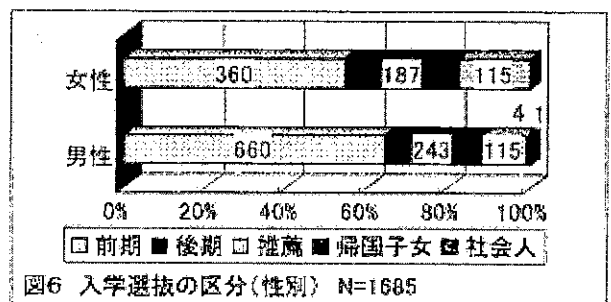
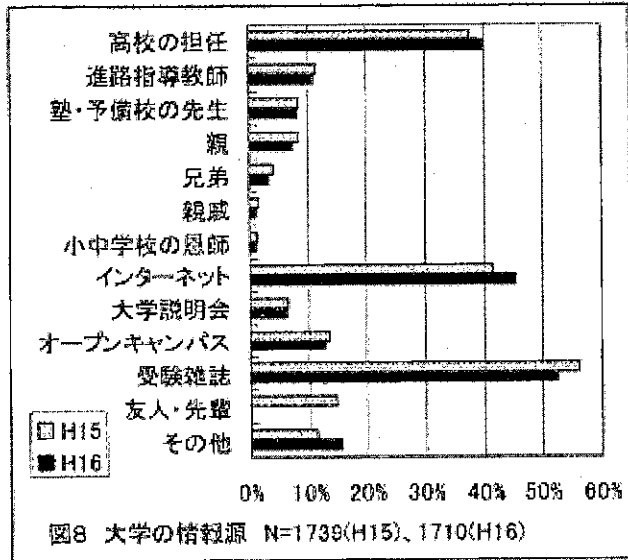
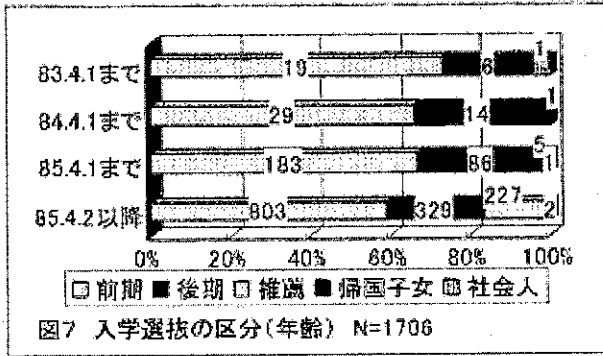


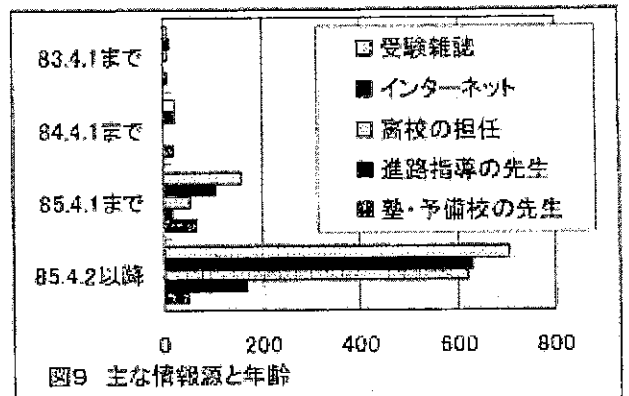
図6 入学選抜の区分(性別) N=1685



くれる人に信頼を寄せる、と言えるだろう。

主な大学情報源と入学生の年齢を表したのが図9である。いわゆる現役生が1,363名、1浪276名、2浪44名、それ以上26名という数字を考え合わせると、浪人生と高校教師との関連が希薄であることがわかる。前述のとおり、浪人生は入学生の2割であるが、彼らの情報源を考えれば、インターネットや受験雑誌の重要性はさらに高まる。

進路指導の教師に相談した入学生188名のうち、53.7%は女子であり、全体の女性比39.3%からすると多い。高校の進路情報室に、積極的に足を運ぶ女子生徒の光景が思い描かれる。



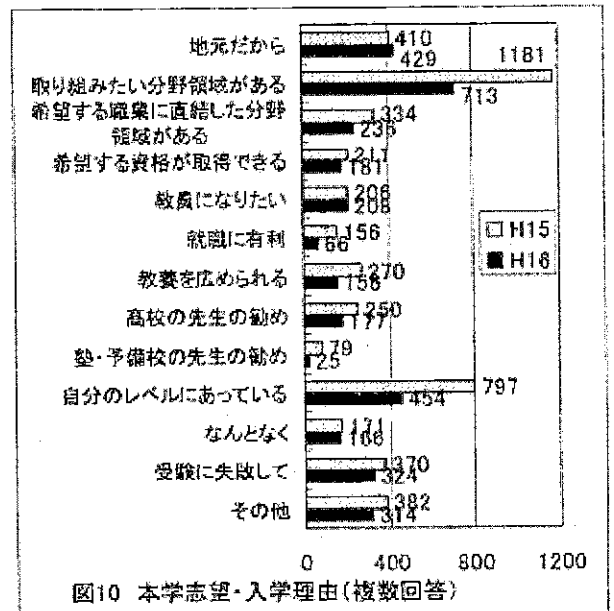
(2) 大学の情報源

複数回答によって集計した、平成15年度と16年度の比較を図8に示す。なお、平成16年度については「友達・先輩」の選択肢が省かれたため、この項目の回答はない。

前報と同様、受験生にとっての大学3大情報源は、受験雑誌、インターネット、高校の担任であることがわかる。両年度を比較すると、受験雑誌と答えた人数がやや減少し、インターネットが増加しており、今後ホームページを充実させることがますます重要になってくると思われる。

7月のオープンキャンパスに来た者は、新入生全体の8分の1程度(H15年度:13.7%、H16年度:12.8%)と思われる。受験生へのチャンネルを考慮すれば、オープンキャンパス等においては、高校教師や一般向け(塾・予備校など受験産業従事者)のセッションを別に設けることにより、事後に、受験生へ情報が流れることを想定するのも一つの手立てであろう。

大学の情報源として高校の担任を挙げている者が、進路指導の教師や塾・予備校教師の3倍になる点もユニークである。情報を持つ人よりも、自分をわかって



(3) 大学志望・学部学科選択理由

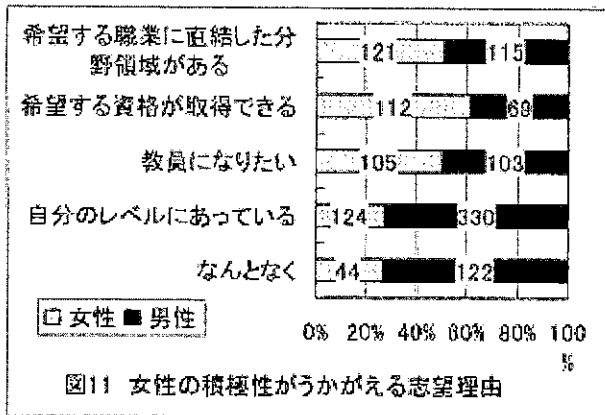
図10は、本学の志望・入学理由である。前年度の同問と、学部・選択の志望理由についての質問とをあわせて作図した。

全体的に、取り組みたい領域があり、自分のレベルにあっていて、地元であるということが本学の志望理

由として見えてくる。

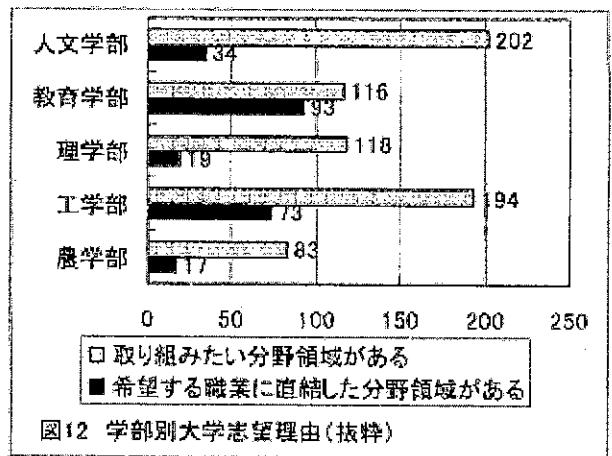
受験に失敗したとする入学生は平成16年度で18.9%に及んでいる。しかし、現役合格者が8割であることを踏まえれば、それほど高い数値とも言えないであろう。

志望理由の回答パターンでは、性別による違いが顕著であった(図11)。本来女性が4割程度を占めるはずであるが、志望理由によって様相は異なっており、「希



生数を、学部別に表したものである。前者は人文学部と工学部で多く、後者は教育学部と工学部が多い。

注意したいのは、両者のギャップである。自明ではあるが、両者の差が小さい教育学部は、職業に直結していることを多くの学生も意識していると捉えられる。逆に、両者の差が大きい人文学部と理学部では、将来像が必ずしも十分描ききれていないのではないだろうか。



望する職業に直結した分野領域がある」を選択した236名のうち121名(51.3%)、「希望する資格が取得できる」とした181人のうち112名(61.8%)、「教員になりたい」を選択した208名のうち105名(50.1%)が女性であった。逆に、「自分のレベルにあっている」を選択した454名中女性は124名(27.3%)、「なんとなく」を挙げた166名中女性は44名(26.5%)のみであった。目的意識をもって大学を選択、入学している者の割合が、女性の方が高いと言えよう。

「教員になりたい」を挙げたのは、全学で208名であり、そのうち教育学部生は146名(70.2%)であった。これは、教育学部新入生379名に対しては、38.5%にとどまる。しかし、教員免許状取得を卒業要件にしている課程に入学した学生では、232人中126人(54.3%)、そうでない課程に入学した学生では、147人中20人(13.6%)と大きな差がある。前報でも触れたとおり、教員就職率はこの54.3%という数字を土台にして見るべきであり、平成16年3月卒業者の「教員就職率」は、全国平均55.5%のところ、本学教育学部は、57.9%となっている(文部科学省 2004)。

図12は、「取り組みたい分野領域がある」及び「希望する職業に直結した分野領域がある」を選択した学

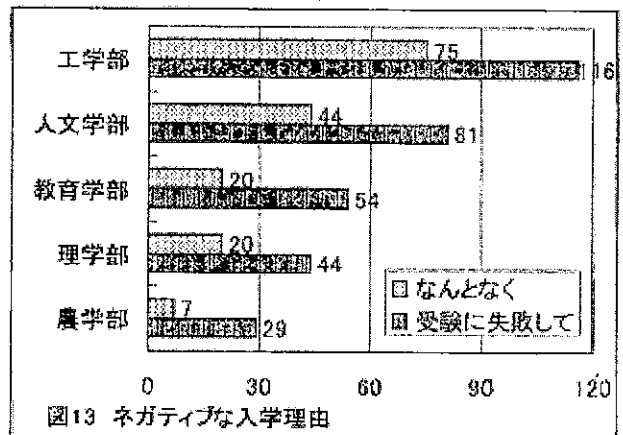


図13は、ネガティブな入学理由を選択した学生数について、学部別に表したものであるが、これについては学部ごとの入学者数を考慮する必要がある。「なんとなく」と「受験に失敗して」とでは意味的には異なるが、両者の間に相関が見られる。「なんとなく」を選択した総計166名の入学生を念頭においた、具体的なケアが求められる。

(4) 大学生活への期待

前年度にはなかった設問で、「これからの4年間、どのようなことに力を入れたいですか(複数回答可)」としてきいた。選択肢は、表4のとおりである。この

設問により、新入生が大学及び大学生活に何を求めているかに迫ることができる。

表4 大学生活への期待に関する選択肢

[1]勉学	[2]研究	[3]自分にあった職業（進路）を見つける
[4]資格を取得する	[5]就職準備	[6]教員採用試験に合格する
[7]教養を広める	[8]大学院進学に備える	[9]在学中に留学したい
[10]語学力の向上	[11]専門的知識・技能を高める	[12]サークル・クラブ活動
[13]ボランティア活動	[14]アルバイト	[15]実家のサポート
[16]生涯つきあえる友人を見つける	[17]その他	

図14は、有効回答数1,710に対する、それぞれの回答者の割合を、多い順に示したものである。数字は表4の項目に対応する。

「勉学」を選択した者が6割以上の支持者を得て第一位となった。続いて、「専門的知識・技能を高める」や「サークル・クラブ活動」が4割以上で第2グループを形成している。次いで、「自分にあった職業（進路）を見つける」、「生涯つきあえる友人を見つける」、「資格を取得する」、「アルバイト」、「教養を広める」が続いており、これらは、大学が新入生に準備すべき重点としても捉えられる。

図15は、勉学に関連した項目を学部別に示したものである。「専門的知識・技能を高める」や「研究」、「大学院進学に備える」は理工系学部で高い。特に、農学部新入生で「大学院進学に備える」を選択したのが29.0%に達したことは注目に値する。一方へ、「教養を広める」や「語学力の向上」は人文学部に多い（それぞれ37.2%、29.4%）。

女性の方が多く選択した項目は、「教養を広める」、「語学力の向上」、「在学中に留学したい」であり、「大学院進学に備える」は男性に多かった（図16）。学部別、年齢別、性別にまとめたものを表5に示す。

(5) 大学説明会など

問2は、「大学で行われた説明会や大学教員による講演会などに参加したことはありますか?」というものである。さらに、「参加したもので、進路選択などに役立つものはありますか?」ときいた。基礎資料を表6に示す。入学生にはわかりにくい用語もあるため、それぞれ簡単な説明を加えた（表7）。

入学者の中で参加率が高いものは「説明会」や「大

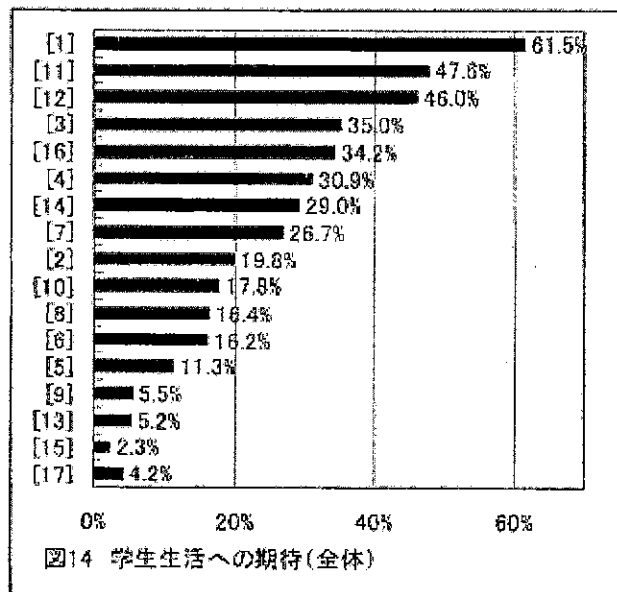


図14 大学生活への期待(全体)

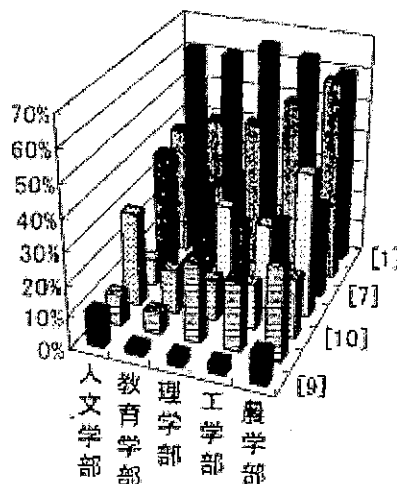


図15 大学への期待(勉学関連 学部別)

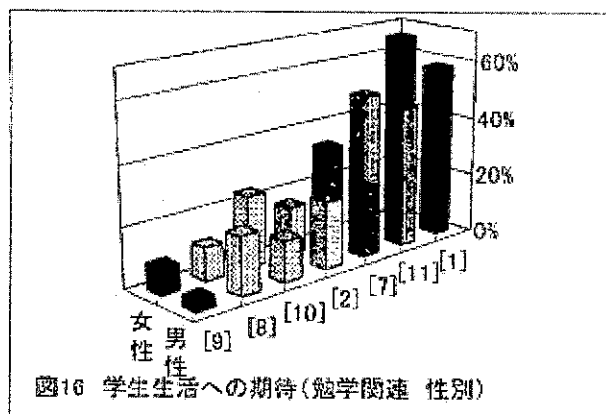


図16 大学生活への期待(勉学関連 性別)

学公開」である。それぞれ13.8%と17.5%で、これは前年とあまり変わらないが、本学の催しに参加した実数は、多少増加している。

本学の「大学公開」にも他大学によるそれにも、両方参加したことのある学生は、64名(3.7%)しかい

ない。

表7 用語の説明

説明会：受験者を対象にした大学案内・入試説明会
大学公開：オープンキャンパス
出前授業：大学教員が高校に出向いて授業を行うもの
公開講座：大学教員により複数回行われる講座
講演会：大学教員により単発的に行われる講演

本学の「大学公開」に参加した入学生300人のうち、前の問いで「受験に失敗した」と回答しているのは22名(7.3%)であり、「なんとなく」を選択しているのは16名(5.3%)に過ぎない。本学の「大学公開」に来た上で入学した学生は、本学を志望して「大学公開」に来ていたことがうかがえる。事実、「役に立った」とする率も高い。

無論、本学の「大学公開」に来て本学に入学しなかった者は考察の対象外である。他大学の「大学公開」に

参加した281名のうち、「受験に失敗した」と回答しているのは71名(25.3%)であった。

「大学公開」に来た入学生は、12.8%と17.5%の違いはあるが、昨年に引き続き2割に満たなかった。「大学公開」自体の参加者数が1,000名を超えることを考慮すると、結果的に入学するには至らなかった率も相当高いことが予想される。暑い時期に1回だけ行われる「大学公開」のあり方や、大学そのものの魅力作り、そして日頃からの情報発信の体制を、再度検討すべきではないだろうか。

(6) 高校での履修状況と受験科目

高等学校で履修した科目と「大学受験にあたって入試科目として選択した科目」とを複数回答可として回答してもらった。前年度と比較した基礎データを表8に示す。

全体的に大きな変化は認められない。ただ、「総合各項目の全数に対する割合[%]」

表5 大学生生活への期待(複数回答)

	人文 学部	教育 学部	理学 部	工学 部	農学 部	85.4.2 以降	85.4.1 まで	84.4.1 まで	83.4.1 まで	女性	男性
勉学	61.3%	61.0%	65.3%	63.3%	60.1%	61.0%	63.0%	61.4%	73.1%	66.0%	58.4%
研究	8.5%	7.8%	30.2%	26.7%	44.9%	19.5%	17.8%	40.9%	19.2%	16.1%	22.5%
自分にあった職業(進路)を見つける	41.1%	24.1%	30.7%	41.5%	34.1%	36.5%	30.1%	34.1%	15.4%	34.5%	35.8%
資格を取得する	36.5%	35.8%	28.9%	26.9%	25.4%	31.8%	27.9%	18.2%	42.3%	38.7%	26.2%
就職準備	15.1%	7.8%	5.3%	13.9%	10.9%	11.7%	9.1%	13.6%	11.5%	11.9%	11.0%
教員採用試験に合格する	8.5%	48.1%	18.7%	2.2%	5.8%	15.5%	18.8%	18.2%	23.1%	23.5%	11.5%
教養を広める	37.2%	28.1%	18.7%	21.7%	29.0%	27.2%	23.6%	29.5%	30.8%	33.3%	22.9%
大学院進学に備える	9.7%	7.0%	24.9%	21.9%	29.0%	15.6%	18.1%	29.5%	15.4%	11.3%	19.6%
在学中に留学したい	10.9%	2.9%	2.7%	3.5%	9.4%	5.4%	6.2%	6.8%	3.8%	8.7%	3.5%
語学力の向上	29.4%	13.6%	12.9%	14.3%	18.8%	16.8%	22.1%	22.7%	15.4%	23.9%	14.0%
専門的知識・技能を高める	39.9%	44.9%	45.8%	54.3%	62.3%	47.5%	47.5%	47.7%	57.7%	48.5%	47.3%
サークル・クラブ活動	47.9%	45.5%	40.9%	46.9%	53.6%	47.3%	42.8%	36.4%	23.1%	47.9%	45.2%
ボランティア活動	6.8%	8.6%	3.1%	2.8%	5.1%	5.4%	4.0%	4.5%	11.5%	8.6%	3.0%
アルバイト	33.1%	30.5%	25.3%	27.8%	28.3%	28.8%	31.5%	18.2%	26.9%	31.8%	27.4%
実家のサポート	2.7%	3.2%	0.9%	1.9%	3.6%	2.1%	2.9%	2.3%	7.7%	3.3%	1.7%
生涯つきあえる友人を見つける	35.5%	39.6%	28.0%	29.8%	48.6%	35.7%	30.8%	20.5%	19.2%	44.9%	28.0%
その他	5.4%	3.2%	3.6%	4.4%	4.3%	4.0%	4.7%	6.8%	3.8%	4.1%	4.3%

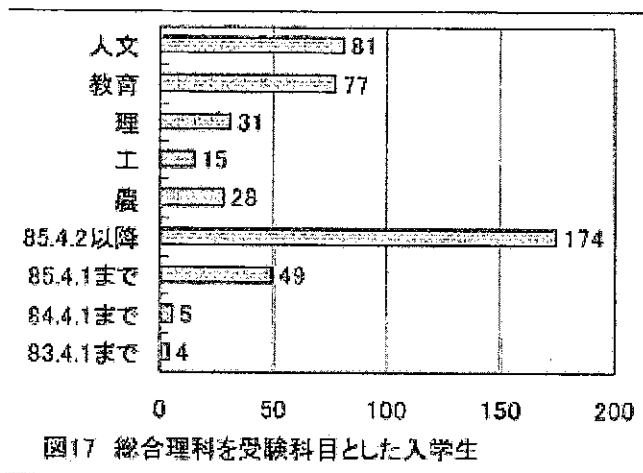
表6 大学説明会等への参加状況とその有効性

	茨城大学(の教員)によるもの					他大学(の教員)によるもの				
	説明会	大学 公開	出前 授業	公開 講座	講演会	説明会	大学 公開	出前 授業	公開 講座	講演会
参加した もの(a)	236	300	69	66	14	239	281	94	33	47
役に立っ たもの(b)	188	247	47	40	9	125	175	56	23	28
b/a	79.7%	82.3%	68.1%	60.6%	64.3%	52.3%	62.3%	59.6%	69.7%	59.6%
a/N	13.8%	17.5%	4.0%	3.9%	0.8%	14.0%	16.4%	5.5%	1.9%	2.7%
H15の(a)	229	280	44	62	15	214	265	70	35	42

理科」を受験科目とした者が大きく増加している。これを、学部別と年齢別に表したものを図17に示す。

「総合理科」は文系に多いことは言うまでもない。

6教科7科目になる平成17年度入試を見越し、高等学校がカリキュラムを変えたと考えるには、高校で履修したとする学生が18名（1.1%）と少ない。受験生が独自に準備したと言うことか。いずれにせよ、いわゆる現役生が「総合理科」に動いていることは確かであ



(7) 自由記述

最後にマークシートカードの裏面に自由記述で大学への要望等を求めたところ、22名から回答が寄せられた。その抜粋を表9に示す。

全体的に、大学経営としては着手可能かつ早期改善が可能なものが多い。入学直後の学生であることから、「目につく」改善点を指摘してくれている。逆に、「茨大」に住み慣れてしまった者には新鮮な指摘もあれば、フレッシュマンらしい誤解もある。真摯に受け止め、可能なものは改善していくことが必要と思われる。

おわりに

文部科学省から指定を受けた事業は、平成16年度いっぱいまで終了し、本プロジェクトも解散する。前報は様々な部局から反響を受け、本学の指針を示す基礎データとして活用されつつある。本調査は、今後、在学生を対象とした継続的調査や卒業時の調査にも発展し、本学改革の基礎データを提供することが期待される。

特に、本学は平成17年度入学試験より、試験科目を大きく変更した。その結果、志願者数が軒並み減少したが、多くの科目を受験科目として学習してくる学生

が入学してくる。これまで実施された2回の調査とあわせ、実態の変化を克明に追跡していくことは、ますます重要になると思われる。

表8 高校での履修状況と受験科目

(N=1773<H15>, 1710<H16>) 人数 (%)

H15.4入学生			H16.4入学生	
高校での履修科目	大学入試での受験科目		高校での履修科目	大学入試での受験科目
1463 (82.5)	1229 (69.3)	国語I	1400 (81.9)	1202 (70.3)
1418 (80.0)	1227 (69.2)	国語II	1378 (80.6)	1253 (73.3)
114 (6.4)	22 (1.2)	国語表現	95 (5.6)	24 (1.4)
1186 (66.9)	413 (23.3)	現代文	1121 (65.6)	415 (24.3)
78 (4.4)	24 (1.4)	現代語	82 (4.8)	28 (1.6)
1313 (74.1)	491 (27.7)	古典I	1225 (71.6)	503 (29.4)
1052 (59.3)	425 (24.0)	古典II	1019 (59.6)	443 (25.9)
100 (5.6)	21 (1.2)	古典講読	107 (6.3)	27 (1.6)
385 (21.7)	14 (0.8)	世界史A	326 (19.1)	22 (1.3)
799 (45.1)	250 (14.1)	世界史B	796 (46.5)	238 (13.9)
121 (6.8)	14 (0.8)	日本史A	122 (7.1)	33 (1.9)
604 (34.1)	372 (21.0)	日本史B	614 (35.9)	404 (23.6)
116 (6.5)	34 (1.9)	地理A	97 (5.7)	35 (2.0)
861 (48.6)	542 (30.6)	地理B	784 (45.8)	569 (33.3)
626 (35.3)	735 (41.5)	現代社会	692 (40.5)	883 (51.6)
814 (45.9)	123 (6.9)	倫理	713 (41.7)	188 (11.0)
963 (54.3)	167 (9.4)	政治・経済	972 (56.8)	230 (13.5)
1720 (97.0)	1583 (89.3)	数学I	1687 (98.7)	1543 (90.2)
1697 (95.7)	1276 (72.0)	数学II	1674 (97.9)	1312 (76.7)
970 (54.7)	563 (31.8)	数学III	952 (55.7)	570 (33.3)
1687 (95.1)	1525 (86.0)	数学A	1665 (97.4)	1487 (87.0)
1609 (90.8)	1217 (68.6)	数学B	1595 (93.3)	1222 (71.5)
887 (50.0)	376 (21.2)	数学C	891 (52.1)	361 (21.1)
19 (1.1)	9 (0.5)	工業	10 (0.6)	11 (0.6)
7 (0.4)	3 (0.2)	簿記	3 (0.2)	7 (0.4)
11 (0.6)	3 (0.2)	情報	11 (0.6)	1 (0.1)
1 (0.1)	1 (0.1)	その他	1 (0.1)	1 (0.1)
13 (0.7)	41 (2.3)	総合理科	18 (1.1)	232 (13.6)
95 (5.4)	40 (2.3)	物理IA	50 (2.9)	24 (1.4)
161 (9.1)	49 (2.8)	化学IA	117 (6.8)	57 (3.3)
66 (3.7)	23 (1.3)	生物IA	58 (3.4)	44 (2.6)
21 (1.2)	17 (1.0)	地学IA	20 (1.2)	19 (1.1)
905 (51.0)	660 (37.2)	物理IB	855 (50.0)	654 (38.2)
1385 (78.1)	579 (32.7)	化学IB	1392 (81.4)	830 (48.5)
923 (52.1)	685 (38.6)	生物IB	935 (54.7)	744 (43.5)
126 (7.1)	94 (5.3)	地学IB	131 (7.7)	104 (6.1)
725 (40.9)	404 (22.8)	物理II	665 (38.9)	399 (23.3)
684 (38.6)	221 (12.5)	化学II	664 (38.8)	266 (15.6)
310 (17.5)	80 (4.5)	生物II	299 (17.5)	82 (4.8)
24 (1.4)	9 (0.5)	地学II	23 (1.3)	9 (0.5)
1572 (88.7)	1339 (75.5)	英語I	1547 (90.5)	1259 (73.6)
1559 (87.9)	1387 (78.2)	英語II	1549 (90.6)	1369 (80.1)
573 (32.3)	88 (5.0)	ACA	579 (33.9)	82 (4.8)
635 (35.8)	93 (5.2)	ACB	655 (38.3)	102 (6.0)
94 (5.3)	25 (1.4)	ACC	101 (5.9)	31 (1.8)
1268 (71.5)	473 (26.7)	Reading	1201 (70.2)	388 (22.7)
1347 (76.0)	488 (27.5)	Writing	1295 (75.7)	397 (23.2)
19 (1.1)	4 (0.2)	独語	8 (0.5)	1 (0.1)
16 (0.9)	5 (0.3)	仏語	14 (0.8)	1 (0.1)
4 (0.2)	4 (0.2)	中国語	3 (0.2)	0
6 (0.3)	1 (0.1)	韓国語	5 (0.3)	0

注) AC: オーラルコミュニケーション

卒業時までの追跡調査を念頭におくのであれば、入学時に大学入試センター試験の各科目の自己採点結果を申告してもらうのも一つの手立てである。また、大学の情報を効果的に受験生に提供する方法を探る上では、塾や予備校の名称をアンケートする方法もある。

具体的には、関係部局で継続して本調査を行い、大学改革の具体的な指針を得ることが期待される。

- r 教員志望なので、教員になるにはどうしたらよいか指導してほしい。
s 法科大学院に進学するためにはどうすれば最善か？

付記

本研究にあたっては、平成15-16年度文部科学省「地域貢献特別支援事業」の助成を受けている。

参考文献

文部科学省、平成16年3月卒業者大学別就職状況（教員養成課程）、2004.

大辻永、新入生アンケート調査結果から『高校-大学間の接続教育を考える-人文系分野の場合』茨城大学高大連携推進プロジェクト、pp.5-13, 2003.

大辻永・尾崎久記・鈴木敦・竹野英敏・戸塚茂則・皆川善廣「茨城大学新入生の実態に関する調査研究（資料）」茨城大学大学教育研究開発センター年報8、pp.121-128, 2004.

尾崎久記、はじめに『高校-大学間の接続教育を考える-人文系分野の場合』茨城大学高大連携推進プロジェクト、p.1, 2003.

鈴木敦編、『高校-大学間の接続教育を考える：人文系分野の場合』茨城大学高大連携推進プロジェクト、2003.

表9 自由記述（N=22から抜粋）

<入学に関して>

- a 入学式の日、母が観覧に来たのですが、保護者席が明確でない等、行き届いていない部分があり、がっかりしていました。そのあたり連絡をはっきりさせていただきたいです。
b センター試験の得点を割合を減らすべきだと思う。

<安全に関すること>

- c 水餃寮周辺に電灯を多くすること。
d 茨城大学周辺に派出所を1つ置くこと。

<施設・設備関連>

- e 図書館に、もっと一般大衆向け(?)の本を入れてほしい。(小説とか)
f 学生証をカードサイズにしていただきたい。
g 女子トイレを増やしてほしい。
h 日立多賀に女子寮を設けてください。
i 日立の女子寮を作ってほしい。
j 駐輪場を広くしてほしい。
k せめてクーラーくらいはもう少し増やしてほしいです。

<不潔感漂う大学像>

- l 清掃する人を雇ってほしい。
m 寮をきれいにしてください。

<カリキュラム関連>

- n 阿見のキャンパスでも単位が取れるような制度があったらいいと思います。
o できるだけすべてのキャンパスでどの外国語も6単位(教養)取れるようにしてほしい。
p 日立・阿見地区でも受講できる講義数を更に増やして頂けると僕も嬉しいです。特に必修科目と未修外国語に関しては。
q 未修外国語も授業を選びたい。

<卒業後の進路>

教養科目推奨授業選定の経過及び結果

平成15年度後期推奨授業選定の経過および結果

大学教育研究開発センター推奨授業選定委員会

1. 選定委員名簿

大学教育研究開発センター長	曾我日出夫 (委員長)
同副センター長	永井 典子
同副センター長	阿久津克己
人文学部併任教官	古屋 等
教育学部併任教官	小野寺 淳
理学部併任教官	堀 良通
工学部併任教官	栗原 和美
同	横田 浩久
農学部併任教官	安藤 光義

2. 選定の方針等

選定方針や作業については、以下の通り、基本的には前回までと同じ方針で行った。

「推奨授業選定のための申し合わせについて」(平13.12.11 当センター運営委員会)

選定の実施について

- (1) 表彰は各 Semester 毎に選定し、次期 Semester 内に表彰する。
6 カ月毎に選定 (4 月～9 月・10 月～3 月)
- (2) 選定数は、各 Semester 毎に、5 件程度とする。
分野への偏りのない選定 (科目区分制) を考慮する。
- (3) 同一授業を複数回選定することも可能とする。
- (4) 選定後の 1 回の授業公開 (授業参観) は、必須条件である。
参観は、次年度の授業 (シンポジウムでの公開を含む。) に実施する。
- (5) 複数教員による授業は、一括選定、一括表彰とする。
- (6) 選定内容および結果は公表する。
公表は、学報等で行う。

選定方法について

- (1) 推薦された教養科目授業の中から選定する。
- (2) 判定に用いる資料は、推薦書・シラバス・授業アンケート・成績評価に関する資料・履修学生への面談結果等とする。
- (3) 優良の基準は、上記資料に基づく基準と同時に、教養教育に効果的であるかの観点からの基準も加える。

- (4) 各資料の判定に基づき、委員の合議で選定する。
- (5) 選定された授業については、当該教員の承諾書を得る。
- (6) 選定委員の担当する授業は、委員の任期中は推薦の対象としない。

上記の方針内のことではあるが、平成14年度後期分以来と同様に、「授業内容にどの程度工夫があるか」を重視するとともに、「将来的に教養科目の見本として相応しいかどうか」を意識しながら選定することとした。

さらに、平成15年2月6日大学教育研究開発センター運営委員会で申し合わせた作業手順に沿って選定した(参考資料1参照)。

3. 選定の経過について

期日までに7件の授業について推薦があった。内訳は、外国語科目1件、情報関連科目1件、分野別科目(人文系)1件、分野別科目(社会系)1件、分野別科目(自然系)2件、総合科目1件である。この内、4件が当該専門部会長(又は前部会長)の推薦、3件がその他の推薦であった。これらについて以下のような経過で選定した。

事前選定作業

メール等により、前回(平成15年度前期分)と同様の方針で選定することおよび具体的な作業は、平成15年2月6日大学教育研究開発センター運営委員会で申し合わせた手順に沿って行うことを確認した。

これらの確認の下で、各人が送付された必要書類を閲覧し、候補者全員について「判定資料」(参考資料2参照)を作成した。

選定委員会(平成16年6月17日)

各人が作った上記の「判定資料」を集約し、(a)概ね全員が表彰を支持している候補者(1件)(b)多くの委員が表彰を支持しない候補者(2件)(c)これら以外の候補者(4件)とに分類した。(a)の各候補者について、支持の理由を確認し合った。その結果、全員を選定することで意見が一致した。さらに、(b)の候補者を選定の対象から外すことも意見の一致をみた。

次に、(c)の各候補者について、各委員の支持不支持の理由を確認し合い、候補者ごとに選定非選定の検討を行い、2件のみ選定とすることを全会一致の形で決定した。あわせて、選定された3名全員の選定理由を再確認した。

また、今回の選定結果の報告書については文書で確認しあうこととした。さらに、作業全体について反省し、次のことを確認した。

- ・前々回から取り入れた新しい作業手順は、合理性や作業効率からみて適当である。ただ、「判定資料」(参考資料2参照)の様式内容は少し検討した方がいいかもしれない。
- ・推奨授業制度を今後どのような方針で実施するのか、少し抜本的に再検討する。

事後の確認作業

委員長が選定結果の報告書の素案を各委員に配布し、各委員の修正意見を集約した。それをもとに報告書(案)を作成した。

4. 選定結果および理由

平成15年度後学期推奨授業として、次の授業を選定する。

外国語科目	英語 I	上田敦子 (人文学部)
分野別科目(自然系)	地球科学	伊藤 孝 (教育学部)
総合科目	文明・技術系科目	前川克廣 (工学部) 佐藤英雄 (教育学部)
		安田健一 (教育学部) 榊 守 (教育学部)
		竹野英敏 (教育学部) 熊沢紀之 (工学部)
		柴田隆行 (工学部) 大島郁也 (工学部)
		伊藤伸英 (工学部)

それぞれの選定理由等は以下の通りである。

推奨授業科目名	英語 I (英語 I B T R)	コード番号 K0058	1 単位
担当教員名	上田敦子 (人文学部)		
推薦者	福田浩子 (人文学部)		
履修者数	43名		
選定理由			

実用的な英文読解方法を具体的に示し、量の多い英文テキストが読み進められる多読の能力を身に付けさせようとする授業である。基本的なスキルの練習の後、学生が受け身的にならぬように、いろいろな分野から各人のレベルや嗜好に合った題材を選ぶこと、各人に読書の達成感を確認させるための読書記録用紙に記入させることなど、さまざまな工夫をしている。グループのプレゼンテーションなども盛り込んでいる。授業アンケート結果から、学生が自主的に楽しんで読むという担当者の意図が実現していることが窺える。

よって、本授業を推奨授業として選定する。

推奨授業科目名	地球科学(地球表層の環境とその変遷)	コード番号 K1579	2 単位
担当教員名	伊藤孝 (教育学部)		
推薦者	金子正夫 (理学部)		
履修者数	157名		
選定理由			

地球環境問題を、単に現在の視点からだけでなく、はるか過去からの地球環境の変遷を概観解説し、このことを背景として、授業の後半で現代の地球環境問題に言及していくという授業である。さまざまな視覚教材を用意したり、非常にていねいな授業進行スケジュールを作成したり、授業展開にいろいろな工夫がなされている。これらの工夫により、学生の意欲や題材への親近感を引き出したことが授業アンケート結果からも窺える。さらに、学生からも高い評価を得ている。

よって、本授業を推奨授業として選定する。

推奨授業科目名	文明・技術系科目(ものづくり創成実践)	コード番号 K1682	2 単位
担当教員名	前川克廣 他 8 名 (工学部 他)		
推薦者	木村 競 (教育学部)		
履修者数	137名		
選定理由			

工学系のものづくりによって、創造性や問題解決力の育成、さらにチーム作業能力の育成を目指した授業であ

る。いくつかの製作テーマを与え、それぞれにグループ分けし、グループで課題の理解、アイデアの具体化、製作方法の検討、実際の製作、性能評価などを体験させている。成果発表のプレゼンテーションも行っている。学生の自主性を促す配慮をしながら、周到な準備のもとで実施されている。ものづくりに期待される教育効果をあげていることが授業アンケート結果からも窺える。さらに、学生からも高い評価を得ている。

よって、本授業を推奨授業として選定する。

平成16年度前期推奨授業選定の経過および結果

大学教育研究開発センター推奨授業選定委員会

1. 選定委員名簿

大学教育研究開発センター長	曾我日出夫 (委員長)
同副センター長	永井 典子
同副センター長	阿久津克己
人文学部併任教員	古屋 等
教育学部併任教員	小野寺 淳
理学部併任教員	堀 良通
工学部併任教員	栗原 和美
同	横田 浩久
農学部併任教員	安藤 光義

2. 選定の方針等

選定方針や作業については、以下の通り、基本的には前回までと同じ方針で行った。

「推奨授業選定のための申し合わせについて」(平13.12.11 当センター運営委員会)

選定の実施について

- (1) 表彰は各 Semester 毎に選定し、次期 Semester 内に表彰する。
6 カ月毎に選定 (4 月～9 月・10 月～3 月)
- (2) 選定数は、各 Semester 毎に、5 件程度とする。
分野への偏りのない選定 (科目区分制) を考慮する。
- (3) 同一授業を複数回選定することも可能とする。
- (4) 選定後の 1 回の授業公開 (授業参観) は、必須条件である。
参観は、次年度の授業 (シンポジウムでの公開を含む。) に実施する。
- (5) 複数教員による授業は、一括選定、一括表彰とする。
- (6) 選定内容および結果は公表する。
公表は、学報等で行う。

選定方法について

- (1) 推薦された教養科目授業の中から選定する。
- (2) 判定に用いる資料は、推薦書・シラバス・授業アンケート・成績評価に関する資料・履修学生への面談結果等とする。
- (3) 優良の基準は、上記資料に基づく基準と同時に、教養教育に効果的であるかの観点からの基準も加える。

- (4) 各資料の判定に基づき、委員の合議で選定する。
- (5) 選定された授業については、当該教員の承諾書を得る。
- (6) 選定委員の担当する授業は、委員の任期中は推薦の対象としない。

上記の方針内のことではあるが、平成14年度後期分以来と同様に、「授業内容にどの程度工夫があるか」を重視するとともに、「将来的に教養科目の見本として相応しいかどうか」を意識しながら選定することとした。

さらに、平成15年2月6日大学教育研究開発センター運営委員会で申し合わせた作業手順に沿って選定した(参考資料1参照)。

3. 選定の経過について

期日までに5件の授業について推薦があった。内訳は、外国語科目1件、健康・スポーツ科目1件、情報関連科目1件、分野別科目(自然系)1件、総合科目1件である。この内、4件が当該専門部会長の推薦、1件がその他の推薦であった。これらについて以下のような経過で選定した。

事前選定作業

メール等により、前回(平成15年度後期分)と同様の方針で選定すること、および具体的な作業は平成15年2月6日大学教育研究開発センター運営委員会で申し合わせた手順に沿って行うことを確認した。

これらの確認の下で、各人が送付された必要書類を閲覧し、候補者全員について「判定資料」(参考資料2参照)を作成した。

選定委員会(平成17年1月7日)

各人が作った上記の「判定資料」を集約し、(a)概ね全員が表彰を支持している候補者(1件)、(b)多くの委員が表彰を支持しない候補者(2件)、(c)これら以外の候補者(2件)とに分類した。(a)の各候補者について、支持の理由を確認し合った結果、選定することで意見が一致した。さらに、(b)の候補者を選定の対象から外すことも意見の一致をみた。

また、今回は「大人数クラスへの工夫」または「予習復習を促す工夫」で優れたものをいくつか選定する予定であったが、該当者はいないと判断した。

次に、(c)の候補者に含まれる前表彰者の扱いについて検討した(申し合わせでは、複数回表彰されることを許している)。その結果、一応内容を評価するが、なるべく再選定はさけることとした。このことを考慮した上で、(c)の各候補者について選定非選定の検討を行い、2件とも選定しないことを全会一致で決定した。さらに、選定された1名の選定理由を再確認した。

今回の選定結果の報告書については文書で確認しあうこととした。

最後に、作業全体について反省した。その中で次のような意見が多く出た。

- ・推薦の仕方および選定方法を見直した方がいいのではないか。例えば、アンケート結果などで1次選考し、その中から推薦依頼の後、詳しく2次選考する。
- ・選定件数が多すぎるのではないか。例えば、1年に1回2～3件程度にする。(現行は、各セメスター毎に5件程度としている)
- ・もう少し学生向きの教育イベントにしてはどうか。例えば、アンケート結果などで1次選考した候補者から、学生主体の選考をし、学生のイベントとする。

事後の確認作業

委員長が選定結果の報告書の素案を各委員に配布し、各委員の修正意見を集約した。それをもとに報告書(案)

を作成した。

4. 選定結果および理由

平成16年度前学期推奨授業として、次の授業を選定する。

外国語科目 総合英語（レベル2） 担当教員 桑原秀則（非常勤講師）

選定理由等は以下の通りである。

推奨授業科目名 総合英語（レベル2） コード番号 K1204 2単位

担当教員名 桑原秀則（非常勤講師）

推薦者 福田浩子（人文学部）

履修者数 28名

選定理由

総合英語は統一シラバスで、プレースメントテストによる習熟度別クラスの授業である。そのため他の授業と比べると大枠的なことが予め定まっている。しかしながら、各学生の特性に合わせて具体的な学習教材を作成するとともに、学生の自律的学習を促す工夫をするなど、担当者の独自の努力が期待される部分は大きい。特に、このレベルの授業では、英語への学習意欲を引き出す工夫が重要と考えられる。この授業は、このような要求に応え、満足いく成果を出していると判断される。授業アンケート結果および成績評価資料（試験は統一テストである）からもそのことが窺える。

よって、本授業を推奨授業として選定する。

ニュースレター「ローザ・プルムラ」の軌跡

No.13~17号

Rosa Plumula

ローザ・プルムラ



●茨城大学・大学教育研究開発センター

ニュースレター No.13

目次

巻頭言	1
私たちが改革します！ —新センター長就任—	1
これからの教養教育は？ —FD研修会を終えて—	3
キャンパス情報	4
大学生活に慣れた？慣れない？ —入学して思ったこと—	6
Voice	
—初めての試験、 私のアドバイス—	7
教養教育古今東西	9
掲示板コーナー	10

(平成11年7月発行)

今私達の周りは、新緑から初夏へと移り変わり、眩しいばかりの日の光の輝きが目にしみる季節となっています。

日本語には目(眼)にまつわる言葉が多くあります。例えば「目は口ほどに物を言う」、「目は心の鏡」などは目を通して人の心の状態が表されることを表現している言葉ですし、「眼光鋭い」とか「眼光紙背に徹する」などは眼の輝きが人の能力を示すことの表現であります。今から20年以上も前になりますが、「君の瞳は百万ボルト」と言う題名の歌がヒットしました。この曲は日本で第1号のTVコマーシャルソングとして登場した歌のようですが、人の目の表現力を示すのにこのような言い方もあるのかと驚いたものでした。この春、新入学生の諸君と初めて教室で目を合わせた時、たくさんの目から発せられる光に強い力を感じ取ることができました。きっと、これから始まる大学生活への希望と期待に満ちた心から発せられる眼光であったと思います。

今社会は21世紀を目前にして、その価値感が大きく揺れ動いています。自分たちは何を学び、社会に出て何をなすべきかをこの大学生活の中で常に考え続けて貰いたいと思っています。本誌が発行される頃は、夏休みも近く、新入生の諸君は大学生として初めての長期休暇であり、いろいろ計画を練っているのではないかと思います。一年前、受験準備に明け暮れた夏とは異なり、心にゆとりを持って社会を見る絶好の機会でもあります。夏休みの計画の中に多くの知的社会行動に関わるプログラムを入れ、目を肥やしてみたらどうでしょうか。(高原)

私たちが改革します！ —新センター長就任—

「教養教育と専門教育との有機的連携」を一步すすめたい！

茨城大学大学教育研究開発センター長
田村 武夫

5月から大学教育研究開発センター長に就任しました。

大学教育研究開発センターは、実際の機能からすると本学における教養教育の計画・実施組織といえます。卒業単位数に占める割合からみると学部に対して比重は小さいとよくいわれるが、昨今の「21世紀の大学像」論議をまつまでもなく今後はその役割がきわめて重要かつ大きなものになると考えています。

周知のとおり、こんにちの大学は、多くの社会人・留学生を迎え入れ、そしてなによりも高校教育の「広範な選好による授業科目選択制」により学生の学習経験・授業観・指向などに「多様化」現象が起こっており、はたまた、18才人口減による入り口チェックの緩和、他方で出口チェックの厳格さの要請など、学内外

の環境変化への対応にも一汗も二汗もかかなくてはならない実情にあります。4～5年先に独立行政法人化に移行していく可能性も高くなっており、「大学サブイバル策」「大学活性化策」の development はまったなしといえます。

4年間の学生教育の目標を再確定して、その目標達成のための役割分担として自学部の専門教育のみならず他学部の教育資源も、さらにセンターの教養教育も位置づける構想；いわれるところの「教養教育と専門教育との有機的連携」こそが鍵であります。連携の創造的、効率的な内実づくりにむけて、各学部のイニシアティブを尊重しながら本学ならではの大学教育改革をすすめていきたいと願っております。

就任に際して

大学教育研究開発センター

副センター長 服部 恒明

大学というところは、学生が主役であるといつも思っている。当たり前のことであるが、大学の管理や運営は、直接的には文部省による基本方針に基づいて事務官や教官によって行われている。また大学は研究機関としての役割も担っており、知的遺産の発展と継承は、大学における重要な機能である。研究は、教官を中心にすすめられる。このとき教官の「研究者」としての顔が現れる。そこで大学における実質的な主役は事務官や教官であるように教官側も学生側も錯覚がちである。かつて大学に紛争があったときに求められた反省は、次第に色褪せて、キャンパスに映る学生の影は今こころなしか薄く感じられる。大学教育に対する自己点検評価の試みは、「学生からのアンケート」などによって、毎年型どおりになされている。しかし

それはまさに「型どおり」であって「誰のために」「何のために」という視点が見え難いことも少なくない。従来実施されたアンケートの結果を外観すると、学生が大学に対して期待していることは「University」への期待であると読み取れる。世の中の仕組みの中の「歯車」としての「専門」が、「全体システム」とどう関わるのかについて展望したいという想いであろう。教養教育の役割は、この困難ではあるが重要な問題を解くためにあるといっても過言ではないだろう。開発センターの一員として、もしやれることがあるとするならば、少しでも学生の立場にたつてものを云うことであるだろう。「何が学生のためなのか」は、「一概には言えない」という「研究者」の詭弁が聞こえてきそうである。最も大事なことは学生自身が「自分たちが主役である」という確信を抱くことである。そして同時に舞台の真中で「主役として」演技しなければならない。

前途茫茫

大学教育研究開発センター

副センター長 山中 一雄

副センター長（研究開発部長）の任期半ばにしてセンター長に就任なさった田村教授の身代わりとして、副センター長の残任期間を全うする役目を私がおおせつかりました。未熟者ゆえよろしくご指導願います。

一般教育と専門教育を分けていた課程区分を解消してから5年、現行の4年一貫教育を全学的に導入してから3年が経過した今、この間蓄積された資料や経験をもとに新たな教育改革論議が現在進行しており、当センターにも改革にむけて応分の役割が期待されているようです。すでにさまざまな議論が行われてきているとはいえ、議論の余地は依然として大きく、その行方は茫茫として見当もつきません。

私もおよばずながら愚考していたら、分らないことがたくさん出てきました。教養部を解散したことで、曾て教養部が担っていた一般教育を事実上存続していることとは相矛盾しないのだろうか？学生が自分の専攻と異なる分野の専門知識を齧るとどのような教養が身につくのだろうか？教養教育と専門教育の融合という表現には、それらを互いの相補概念とする前提が見て

とれるが、大学教育から教養を取り去った残りが専門ということなのだろうか？等等。書きはじめたらきりがありません。

さしあたり、これらの疑問を解消するところからはじめたいと考えているところですが、愚考ついでに、「教養がある」ことの究極の姿を私なりに想像してみました。それは、これまでに人類が獲得した全ての知識を保有し、なおかつそれらの知識が合理的に体系化されている状態ではなかろうかと思えます。現実には不可能なので、「全ての」というところを放棄して知識を適当に限定せざるを得ません。この限定された知識は開放的に体系化されなければならず、そのことを念頭においた知識の選択が重要になります。これこそが、4年一貫教育の意味ではないかと思えます。誰がそれをやるのかということについては、現在の大学の組織とその運営形態を前提とするなら、知識の選択と教授に関する責任を各学科におき、全学的協力体制をもってこれを補うのが最善のように思えます。

浅学を顧みず分ったような物言いをしましたが、これからはじまる本格的な議論のなかで、与えられた役目を果たして行きたいと考えています。いろいろご教示いただければ幸いです。

これからの教養教育は？ — F D研修会を終えて —

大学改革，教養教育について共通理解深まる！

— 第1回教養教育F D研修会報告 —

今年(1999)3月8～9日霞ヶ浦湖畔の国民宿舎「水郷」で第1回教養教育F D研修会が催された。

茨城大学におけるはじめての全学的なF D (Faculty Development) 研修会は，参加者48名の教・職員に様々な印象をあたえたようであるが—参加者アンケートによる—，「今後の教養教育はどうであるべきか」という点についてはほぼ共通のイメージあるいは問題認識をもたれたようにみうけられる。それへのインパクトはとくに，広島大学の総合科学部長・生和秀敏教授の記念講演—「広島大学における教養教育改革とF Dの試み」—が，いま大学の生き残りのために何をしているか，何をなさねばならないか，という視角から大学改革のひとつのすさまじい実情を示し，重たい提起をされたことにあるように思える。「広島大学型の改革は，茨城大学では無理。モデルにならない」との感想もだされているが，「大学改革は目的意識的に構造化し，方向性をはっきりすることである」「教養的教育を踏まえた学部教育，さらには大学院教育の見直しおよび充実」「教養的教育の改革と充実がなされなければ，いかに壮大にして細密な学部，大学院の改革を計画立案しても，いまや誰もどこも相手にしてくれないことを肝に銘ずべき」との説示は，多くの人に印象的だったようである。

宮田学長の講話のひとつの論点である「茨城大学の総合力という特徴を活性化すべき」という説示も本学の教養教育および学部教育の改革方向について改めて考えさせる契機をもつものであった。

F Dの適切な訳語がないのでとりあえず「教授（専門）集団の資質向上」と表示しておくが，その狙いは，特定課題についての共通理解・共通認識を目的意識的に促し専門集団の連帯と共同を形成する，ということである。S D (Staff Development) 研修とともにF D研修の成否が大学組織体の今後の命運を左右すること

は間違いのないであろう。なぜなら，大学にあってはとりわけ意識改革が必要とされているからである。

F D研修のもち方は多様であって泊り込みの「研修会」が唯一ではない。関係部局で集まりやすい効率的な実施形態が当然に図られてよい。今回のF D研修会については，場所・時間不足・討論の焦点不明・分科会の人数過剰などの批判がだされている。

しかし，普段互いに話をする機会のない他学部教官との議論，それをとおして予想外の考えを知ることができたことは，相互理解の一步であり，共通の土俵づくりにむけての貴重な布石となるものである。茨城大学の構成員であり，教育研究の同僚・担い手であるとの相互信頼を築いていくことから，改革にとってもっとも重要な学内意志の共通形成がもたらされるのである。「知らない先生と話ができたことがよかった」と，参加者の多くが異口同音に評価している点がF D研修会の成果といってよいであろう。

今年度は，日立市ないし周辺で開催する予定である。しっかりした企画のもとにより充実した研修会を期したい。

大学教育研究開発センター・前年度研究開発部長

(第1回F D研修会実施責任者) 田村 武夫

キャンパス情報

人文学部から

この原稿を書いている日（5月11日）は、前日までとは異なりとても肌寒く、雨降りのためかこれから冬へと向かう季節を思い出しました。新入生の皆さんが入学以来の疲労で体調を崩す時期と天候の不順が重なってしまったようです。健康に十分注意して下さい。

人文学部での前期試験は7月21日からです。高校とは違う大学での授業形式や内容、慣れない間にもう試験かといった感じだと思われまます。でも高校生のころ

よりも時間には余裕があるでしょうから、その使い方さえ間違わなければ試験は恐るるにたらずです。とはいえ、最初の試験ですから不安があるのは仕方のないことと考えます。そこで、試験のノウ・ハウを若干示しておきます。

講義のあったその日の内に、ノートを見て講義内容を思い出して復習すること。頭の中でその日の講義を整理し全体像を描き、これを簡素にメモしておく。こうした作業は、せいぜい15分程度で可能だと思われるので実行してみてください。（梅田）

教育学部から

— 教育学部の新入生の皆さんへ —

ゴールデンウィークが終わり、大学生活にも少し慣れてきたことと思います。教育学部は、昨年の教員免許法の改正と学部の改組のために、他の学部在先駆けでいわゆる課程認定を新たに受け直し、今年度からカリキュラムを大幅に変えました。そのため、卒業に関するさまざまな条件などが、上級生の場合とかなり異なっています。必修の授業や教員免許の取り方などが先輩たちと違いますので、彼らの助言などを鵜呑みにしないで、疑問点は学務係や教務委員の先生などに尋ねて下さい。

もう一つ皆さんにぜひ伝えたいことがあります。それは、皆さんはまだ知らないでしょうが、我が教育学部には研究面でも教育面でも優れた先生が大勢いらっしゃるということです。私が知っているごく狭い範囲

でも、研究面では、たとえば、理科や科学を学ぶことの意味や価値について研究をされ、国際的な共同研究やシンポジウムにも数多く参加されているO先生、菌学と植物病理学が専門で外国の専門雑誌に多くの論文を書かれているO先生、ドイツ教育哲学の権威でドイツの専門雑誌の編集委員になられているT先生、近代日本美術教育史に関して高く評価されている大部の著書を書かれたK先生などなど、枚挙にいとまがありません。また、教育面でも優れた授業をされている先生がおられます。自分の興味のある分野ではどなたが優れた先生か、先輩や他の先生に伺ってもいいですし、自分で見つけるのもいいでしょう。

大学生活が有意義なものになるかどうかは、そのような素晴らしい先生を見出せるかどうか大きく依っていると、自分の個人的な経験に基づいて、私は確信しています。教育学部だけでなく、茨城大学全体に目を向け、さらには他の大学にも目を向けて、探してみてください。（竝木）

理学部から

— 基礎学力の充実を —

前期試験を目前に控え勉学の時間も多くなっていることと思います。理学部は今年から専門基礎科目の単

位数を10単位に減らしましたが、これは決して基礎科目を軽く見たわけではありません。むしろ教養科目の分野別自然の科目と連動して基礎学力を充実させ専門科目の勉学に備えようとするものです。

最近の学問の発展は目覚ましく、総合化、学際化の方向に進み幅広い分野の知識が必要になってきていま

大学生生活に慣れた？慣れない？ — 入学して思ったこと —

岩田 真実子 (人文学部 1年)

大学に入学して1ヵ月以上が過ぎました。私は茨城出身なので、大学には知人も何人も入学しましたが、学科は知らない人ばかりで、入学式はとても心細く不安でした。でも、すぐに友達もでき、どんどんその輪は広がっています。高校と違い、大学には全国から人が集まってくるので、おもしろい方言を使う子がいたり、とても楽しいです。

そして、私が大学に入る前から楽しみにしていたのがサークル活動です。中学や高校の部活とは違って、気軽に活動できるのが魅力です。私もいくつか回ってみたり新歓に参加してみたりしました。先輩達は口々に「一年のうちにはいろんなサークルに入った方がいいよ。友達作りにもなるから」と言っていたので、その助言通り私もいくつか入る予定です。ただ、私は自宅生なので飲み会などで盛り上がってきたところで、最終の電車に間に合うように帰らなければいけないので

服部 優子 (農学部 1年)

このような感じ方は少し変かもしれませんが、気が付けば五月で、身の周りの緑は濃くなっていて、「そうだ、私は大学生になっていたんだ」と思うのです。

大学生生活が始まり、しみじみと「大学生」をかみしめる瞬間は、「飲み会」という言葉が飛び交っていることなどを筆頭に様々あるのですが、私にとって一番の変化は何と言っても講義でした。今までとは大きく異なり、自分の好きな学問が学べるのです。私は農学部ですが、経済学、法学、歴史学、心理学と、農学とはおよそ関係のないような分野を学んでいます。高校の時のように、受験に必要なだからと、選んだのではないのです。私自身が学びたくて選んだのです。

毎日の講義は、真剣に聴かなくても大丈夫という側面を持っています。出席の確認をとらない授業ならばサボることも可能です。だけど、と私は考えました。もし、仮に私が経済学に興味を持ち、もっとよく知り

少し辛いです。

次に授業についてですが、私にとっては授業を決めるまでが大変でした。“履修案内”や“シラバス”をみて、とりたい科目の教室に行けばその授業がとれると思っていたのに教養科目で選択したものの半分以上が定員オーバーでした。そしてすぐに抽選です。はずれた人の名前が呼ばれていく時の緊張感はすさまじいものでした。私も1教科もれてしまって次を探すのに走り回りました。登録が終わった今は、ひたすら講義に出る毎日です。できれば早く教養科目を終えて専門科目をその分やりたいです。それから、早くコンピュータの使い方を覚えて大学で利用したいなあと思っています。大学は思っていたよりもずっときれいだし、特に人文C棟は新しく設備も抜群で、とても過ごし易いです。最近ではお昼の生協や学食の混雑ぶりにも慣れました。そんな少々慣れ始めた今だからこそ、緊張感をもって何事にも頑張りたいと思います。

たいと思った時に、私は専門書などを読むと思います。しかし、専門書は分厚く(薄いのもありますが)難しい用語ばかりで、ちっとも楽しく読めません。そして最後には経済学そのものがつまらなく思ってしまうのです。その点、大学の講義は、専門書を執筆するような専門家(教授)の方がその学問を分かりやすく、またおもしろく解説してくれるのです。そのような話を聴くと、今まで遠くにあったその分野が急に身近に感じたりします。つまり、大学の講義とは、「学問への案内窓口」のようなものなのです。それに、毎回講義を聴いて、知識が増えていくのは脳のシワが1本、また1本と増えていくようで、なんだか得した気分になります。(こんなことを考えているのは私だけでしょうか……)

大学4年間を終了した時に、農学だけしか知らない学生になっていないように、毎日真剣に講義を聴こうと思っています。

す。それに合わせ理学部も3学科に編成されすでに4年を過ぎました。しかし、最近の新生は高校で理科を2科目しか履修してこない学生が増えてきました。理学部の専門科目を履修するためには理科4科目の最低限の知識は必要となります。今年は特に一部の科目で高校での未履修者を対象にした講義も用意しました。

工 学 部 か ら

『1年次学生』の皆さんは、入学式当日の慌ただし履修ガイダンスと大混雑の申告手続きを経て、早くも3ヶ月が過ぎました。今度は前期試験です。正しい試験に堂々と立ち向かって下さい。くれぐれも、不正もどきの行為などによって、周囲の人たちに思いもかけぬ重大な迷惑をかける事の無い様に心得て下さい。来春から予定通り、日立キャンパス専門系に移れる様に祈っております。

『情報関連科目』2単位は教養の必修科目です。コンピューター関連のこの科目が1～2年次に組まれて

来年度はそのような講義ももっと増えるでしょう。特に1, 2年生の間に得意な分野の科目だけ履修するのではなく数学はもちろん理科4科目をバランスよく履修して基礎学力を充実させ専門科目の履修に備えるようにしてください。(三輪)

います。この4月から日立地区を本部としてスタートした「茨城大学総合情報処理センター」を核にその機能が拡充強化され、一段と良い環境での情報関連教育が実現される様になりました。これらの施設を活用し、大いにパソコン実力をつけて専門課程に進んで下さい。

『多賀工業会館』という小さな建屋が日立キャンパス南東の角にあります。ここに工学部卒業生の同窓会「多賀工業会」の本部事務室があります。1年次の皆さんには入学時に会費納入の上、「準会員」として入金して頂きました。同会のホームページが仮設置されていますので覗いてみて下さい。

(<http://www-taga.admt.ibaraki.ac.jp>)

(市村)

農 学 部 か ら

このニュースレターが出る頃はもう前期の終盤で、毎日暑さと眠さとの闘いになっていることでしょう。

この時期(6月から)、国や県の公務員試験が行われるので、農学部では4年次生や大学院(修士課程)2年次生の多くがこれに挑戦してがんばっています。公務員試験の内容は教養と専門に分けられ、どちらかといえば教養試験の結果によって合否が左右される傾向があると聞きます。ペーパーテストで本当の教養が分かるかどうかには大いに疑問もありますが、直前になってあわててもダメなことだけは確かなようです。

ところで、就職のことを考えるにはまだ時間があると思っている学生にとっては、時間とエネルギーのある今が、自分の可能性に挑戦し、新しい自分を発見してみる好機ではないでしょうか?人から与えられたものではない何かを、自ら工夫して獲得していくことが、将来の自分を創るために必要だからです。

さて、農学部の新しいグラウンドがこの春からやっと使えるようになりました。たぶん8年ぶりです。周囲にネットが張られたので、今度は思い切りボールを蹴っても大丈夫です。

期末試験が終わる7月末には、今年もこのキャンパスで生協主催のビアパーティが開かれることでしょう。そして、8月上旬の週末には、恒例の阿見町を挙げての祭り「まい・あみ・まつり」が農学部前の通りを歩行者天国にして盛大に行われます。(軽部)



恒吉 雄三 (工学部Bコース 1年)

高専を卒業し社会人となり早いもので6年が経った。卒業する時は、もう学生生活も終わり、これからずっと社会人としての生活が始まると思っていた。

会社に入社して自分自身の勉強不足、学歴社会というものに直面し、初めて自分から勉強をするため大学へ行きたいと思い入学することを決めた。

高専時代は、“卒業さえすればいい”とっていて、テスト前だけ猛勉強し単位を落とすことなくインスタント勉強法でなんとか卒業することができた。

今、会社で仕事をしていて知識不足に痛感させられる。私の担当業務は、構造物の開発・強度設計をしている。開発・強度検討をする際は、有限要素法解析プログラムやパソコンを使い検討・評価を行っている。パソコンを使えば計算できるのだが、いざ簡易手計算をし結果の妥当性を確認しようとするると計算力不足・知識不足である為、容易に簡易モデルに置きかえるこ

とができない。よく上司が、“計算機が無い時代から飛行機は空を飛んでいるんだぞ!!”と言われる。

もう一つ、会社というのは実力主義で評価しているが、本音は未だに学歴社会であるような気がする。最終学歴が大きく左右される。高専卒と学部卒では当然のように違い、学部卒でも何処大学かで違ってくる。

入学し講義を聴いていると、学生時代には覚えていたはずの公式等すっかり忘れていたことが分かった。真剣に一から復習のつもりで授業に出席し、インスタント勉強法ではなく自分自身の身につけていきたいと思う。欲を言うなら学部卒に終わらず、もっともっと高いものを目指して行きたいと考えている。

向上心をもって頂き快く承諾してくれた会社の方々、茨城大学工学部の先生・事務の方々、私を一番支えてくれる妻に感謝するとともに、また十二分期待にこたえられるように妥協することなくこれからも精進して行きたいと思う。

Voice — 初めての試験、私のアドバイス —

神代 知亜紀 (教育学部 2年)

7月末の前期試験。考えれば考えるほど憂うつになり、夏休み前の胸躍る期待にまで暗く影を落とす大問題です。1年生のみなさんは、初めて臨む定期テストに少なからず不安を抱えていることでしょう。そこで定期テストについて私が学んだ知恵をここで少し紹介します。

前期試験を無事にクリアーするため、以下の3点をおさえましょう。①テスト形式を事前に調べておく②レポートはためない③自分の考えを持ち、納得させる文章を書く、ということです。まず始めに①について。授業によってテストの形式が異なり、レポートのみの場合や試験のみの場合など様々です。また、記述式か出題される中心的題材は何かなど、早めに知っておくと対策を立てやすいので、先輩に聞いたり、シラバスで調べたりして、事前に確認しておきましょう。次に②について。レポートには、事前に準備ができるのでよいものが書けるといいうメリットがあります。しかし

ためすぎると徹夜でレポートを書くという地獄の日々が待っているので注意しましょう。やるべきことはすぐに片付ける、やはりこれが鉄則ですね。最後に③についてです。大学のテストは高校までのものとはかなり異なります。高校までのテストは、いかに覚えているか、を試すものでしたが、大学のテストは、いかに考えているか、を試すものとも言えるでしょう。ですから、毎日の授業を大切に、授業で扱う問題を自分はどう受け止めるか、どう発展させるかなど、問題意識を常に持つことが大切です。考えを書くような問題には、はっきりした答えがないものも多いので、たとえまちがっていたとしても、自分の考えをきちんと書けるということが重要視されます。ここで大切なのが、自分を相手にどう理解させるかということです。大変難しいことですが、必ず武器になるので、在学中にマスターしたいものです。みなさんの健闘を祈ります。

樋口 岳彦 (理学部 2年)

1年生にとって今度の前期試験が大学に入って初めての試験となりますが、そんなに気負いすることはありません。しかし、通年の授業や教養の授業の単位はしっかりと取っておいてもらいたいと思います。1年生の今の時点では私がそうであったように、まだ自分がやりたいことや、進路をみつけない人が少なからずいると思います。2年生となった今は、自分の進みたい道が少しずつみえてきました。それにつながる授業に専念してがんばりたいのですが、1年生のときに通年や教養の授業の単位を取らなかったの、それらに追われるばかりで自分の勉強したい授業に専念することができません。それがとても残念です。まだ自分の目標や進路をみつけない人は早く見つけてほしいと思います。そうすればやる気もでると思います

茂木 高志 (工学部 2年)

長く、苦しかった受験時代を経て、一年次学生の皆さんは心機一転新たな気持ちでキャンパスライフを満喫していることと思います。大学では、自由な時間が豊富にあるため、サークル活動やアルバイトに力を入れたり、趣味や娯楽を享受したり、或いは勉学にいそしんだり、皆さんそれぞれに時間の使い道というのは異なっていることでしょう。

さて、この半年間の締めくくりとして、いよいよ前期試験が始まろうとしています。試験の形式、評価の仕方は、各教官毎に大きく異なることはご承知かと思えます。ぶっつけ本番のペーパーテストのみ、或いはレポートのみ、又それらを合わせたもの、テストの際のノート・プリント等の持ち込みの可・不可、出席を重視する教官など様々で、それらは教養・専門教育の特色の現れとも言えます。一年次の内は主として教養科目が多いため、自分の学びたい分野を学べないことに不満や疑問を抱かれる方も或いは居るかもしれません。けれども、多岐に渡る幅広い見方と、異なった考え方に触れることによって、自分を高め視野を広げるのが教養教育の目的ですから、興味がなくともきち

し、ちょっとつまずいても上手く乗り越えていけると思えます。もし、すぐにみつからなかったとしても単位さえ取っておけばいつでも余裕をもって探すことができると思います。

次に勉強の仕方ですが、自分の興味のない授業だけどうしても単位が必要な授業については、試験のための勉強だけすればいいと思います。その授業の先生の過去問を手に入れたり、自分なりにその授業の大纲をまとめてみるといいでしょう。自分の興味があり、また興味がなくてもこの先必要だと感じた授業は試験のために勉強するのではなく、自分のための勉強をしてもらいたいと思います。知りたいことは自分で調べたり、教官や先輩たちに聞いてください。

最後に、1年生のみなさんが頑張って前期試験にいい結果を出して、大学生活初めての夏休みを楽しんでください。

んと聴講することが望ましいと思います。そうすることで、試験への不安といったものは自ずと消えて行くことでしょう。

単位については、教養科目ならば、講義を聴いて人並みに学習をして試験に臨めば、さほど心配することなく修得できると思いますが、専門科目はそうはいきません。特に、工学部・農学部の人で、今迄講義をおろそかにしていた人は、友人や先輩に頼るなどして、二次次に「水戸通い」とならないように心して試験に臨んで下さい。

最後に、卒業する為には単位が必要となりますが、単位を修得するばかりが大学生活の全てではないので、後々悔いが残らないような様々なことに積極的に挑戦して行きましょう。そして、自分は一体何をするために大学へきたのかをしっかりと見据え、学生として節度のある行動をとられることを皆さんに期待しています。ということで、夏休みはめいっぱい楽しみましょう！

教養教育古今東西

私は昨年赴任した新米教員であるが、以前フランスのボルドー政治学院に留学していた経緯もあるので、ここでは、そこで見た大学生の姿を少し記してみたい。

フランスではバカロレアという高校卒業兼大学入学資格試験に合格すれば、基本的に自分の希望する国立大学に入学できる。18歳人口における大学進学率は日本よりもまだ低いが、最近では試験の敷居が下がり、進学志望者の6割程度が大学入学を果たしている。

学生数が増えたため、特に教養部ではマस्पロ化と施設・条件の悪化が急速に進行している。しかし、教員側が求める教育レベルには妥協がないため、単位を取れない「落ちこぼれ」と落第者の大量発生（入学者の15%程度）が問題となっている。大学が上級生をアルバイトのティーチング・アシスタントとして雇い、履修の指導や授業の補習を行うなどのフォローを行っているほどである。

学生は授業に出るのみならず、過酷なレポート生活と試験勉強を日々強いられる。様々な科目の度重なる、相当な分量のレポートを出し終え、ようやく最終試験を受ける権利を得られるという場合も少なくない。試験についても、数時間にわたって缶詰で「書きまくる」のが常道である。とにかく舐めてかかっているのは、「落第→退学」コースは必至である。

これと比すると、一般に日本の大学生は勉強面では大変だとは言えないだろう。「大学審」あたりから「単位を取りにくくせよ」という声があがってくる所以である。しかし、事はそう単純ではない。それは「学ぶ」意欲を持って入学してきた学生の、その意欲にいかに応え、それをいかに発展させるかという我々教員に突きつけられた問題でもある。半期の授業で会う学生との関係は、一期一会に近いものがあるが、何とかして、彼らに何らかの「学ぶヒント」「生きるヒント」を与えたいものである。

佐川 泰弘 (社会科学科)

以前、ビデオに撮ったTV番組、「金曜フォーラム：知の創造と大学の未来像」（1997年12月5日、NHK教育TV）をもう一度見た。それは、京都大学100周年の記念シンポジウムを収録したものである。シンポジウムの中で、思わず聞き入ってしまった議論があった。ここでは、そのことについて述べてみたい。議論の始まりは、シンポジウムのコメンテーターである佐藤幸治氏が述べた「大学が担うもの」の内容であった。佐藤氏は、大学が担うものとして、「知ることの喜びを阻んではならないこと（もっと積極的に解釈すれば、知ることの喜びを育むことかもしれない）」と「生きる知恵を大事にすること」をあげた。一般論としてこの考えに異論を唱える人はいないだろう。しかし、シンポジストである森嶋通夫氏は、「大学進学率が約40%にまでなってしまった日本の状況で、知ることはいいことだというドグマは捨てなければならない」と言い切った。森嶋氏は、中国での経験をもとに、進学率5~6%の国で見られた大学生の知に対する熱意を、同様に、進学率40%の国の大学生の求めることに疑問を示した。残念ながら、シンポジウムの議論はこれ以上展開しなかった。

森嶋氏の問いかけは、大学進学率40%という社会状況が何を意味し、そのような社会での大学のあり方は何かを議論することの必要性を説くものであろう。この議論の中で聞いたかったことは、大学進学ということが、「知ることの喜び」や「生きる知恵」を求める心がすでに備わったと見るのか、それとも、それらをいかに育むかという一つ前の段階を考えるかということであった。私は、後者の見方で仕事をしたいと思っているし、それは教養教育に通じるものではないかと思っている。こう考えるに至って、ようやく本学の教養教育が目指すものを知りたくなってきた。この純さ、転任2年目ということでお許し願いたい。

太田 寛行 (資源生物科学科)

掲 示 板 コ ー ナ ー

前学期定期試験について

実施期間：7月21日(水)～27日(火)

試験期間以外に試験を実施する場合もあるので、試験関係の掲示には注意すること。

受験資格：総授業時間数の3分の2以上（健康・スポーツ科目については4分の3以上）出席していなければなりません。

受験上の注意

- ・受験の際は、学生証を机の右上に置いて下さい。学生証のない学生は受験できない場合もあります。
- ・答案用紙には、学部名、学科（課程）、学生番号、氏名を必ず明記して下さい。
- ・試験開始後20分以上遅刻した場合は受験することができません。
- ・試験開始後30分間は退席できません。
- ・試験中に監督者の指示、注意事項を守らない者は退席させることがあります。

不正行為の禁止：試験及び追試験で不正行為をした者及びこれを幫助した者は、その行為が発覚した時点で謹慎処分となり、学則に基づき懲戒処分を受けます。

追 試 験：受験資格を有する学生が定期試験を受験できない事情がある場合は、本人の願い出によりその事情が真にやむを得ない事情と認められた場合に限り、追試験を行うことがあります。

追試験願い出の手続き

- ・事前に追試験願に所定事項を記入署名し、受験することのできない事情を証明する書類を添付し、授業担当教官の承認を得てから、1年次は企画室教養教育係に、2年次以上は所属学部の学務係へ提出して下さい。
- ・事前に手続きを行うことが不可能な場合は、企画室教養教育係に連絡し、所定の手続きを行って下さい。この場合の追試験の提出は、当該学期試験期間の終了後1週間以内に行わなければなりません。

教養科目後学期予備登録について

6月25日(金)までに申告を済ませた学生諸君の結果は9月21日(火)に企画室教養教育係において発表しますので、後学期が始まる前に各自結果を確認するようにして下さい。

なお、選考の結果受講可能となった学生は、第1回目の授業に必ず出席し、担当教官に教養科目履修申告票を提出して下さい。第1回目の授業に欠席した場合は、受講の意志がないものとみなし権利放棄したものとしますので、注意して下さい。

つ ぶ や き

新入生のみなさん、キャンパスライフは充実していますか。入学してあつという間の3ヶ月、待ちに待った夏休みは目前です。しかし、その前に試験があることをお忘れなく。今号のVoiceに寄せられた先輩のアドバイスをよく聞いておくように……。

ところで皆さん、茨城大学では平成13年度へ向けて教養教育の改革が進められていることをご存知でしょうか。皆さんが「茨城大学に入学して本当によかった」といえるような教育体制を創っていくことが我々

の仕事です。「教養教育って何だろう？」皆さん、一緒に考えていきませんか。(S. N)

発 行 日 平成11年7月

発 行 者 茨城大学

大学教育研究開発センター

水戸市文京2-1-1

029(228)8416(企画室教養教育係)

Rosa Plumula

ローザ・プルムラ



●茨城大学・大学教育研究開発センター

ニュースレター No.14

目次

巻頭言	1
「専門馬鹿」にならないために	
- 大学での教養教育の意義 - ...	1
キャンパス情報	3
聞いてほしい私の意見	
- 教養教育の	
ココがオカシイ! - ...	5
Voice	
- 今年の夏休みはコレだ - ...	7
教養教育古今東西	8
掲示板コーナー	10

(平成11年10月発行)

長い夏休みが終わりました。本号には休み前に学生諸君に綴ってもらった夏休みの計画が掲載されています。皆さんはどんな夏休みを過ごされましたか?自由な時間を十分楽しめましたか?1年生は初めての長い休みを解放感に浸ってのびのびと満喫されたことでしょうか。サークル活動,旅行,長い小説の読破,アルバイト等,記憶に残る体験があったと思います。悪いことさえしなければ,誰からの強制もなく自分の好きなように過ごせる生活は快適で,十二分に充電できたことでしょうか。

新学期が始まりました。ここで,「気持ちの切り替え」が大切です。新学期からはもっと主体的・能動的に学習に取り組んでみませんか?「教室に座っていれば力がつく。力がつかないのは教官の教え方や内容が悪いからである。」と考えると間違いです。現在,社会で大活躍している諸君の先輩達が実証してくれています。「自分で学習を進める。そのために教官を利用する。」のです。これは,高校までの学習とは異なる大学での学習方法の特徴だと思います。もっと質問し,自分の知りたい課題を提起して議論をしましょう。「受動態から能動態への変身」が皆さんの充実した将来への鍵だと思います。(友田)

「専門馬鹿」にならないために - 大学での教養教育の意義 -

はじめに

大学に入学した直後にあわただしく行われたオリエンテーションの中で学生諸君は4年間の教育内容が教養科目と専門科目によって構成されていることを初めて知ったのではなからうか。専門科目については入学の志望を決定するときからおおよその見当はつけていた。しかし,教養科目についてはなじみのない言葉であり,授業を聞き始めて以後も教養教育って何だろうかと悩みは続いているのではないだろうか。

大学でなぜ教養教育が必要かについていねいに述べるためには多くのことを語らなければならないが,以下,日頃考えているポイントに限定して整理してみようと思う。

学生諸君の不満

昨年の暮れに行われた教養教育についてのアンケート調査の結果から見てみよう。(なおこの調査結果は『茨城大学教養教育に関する自己点検・評価報告書』として公表されているので参照して欲しい)

全部の質問項目をたどることはできないので二つだけに限定しよう。教養科目が外国語,健康・スポーツ,情報,分野別,総合,主題別ゼミの6種類の授業科目から構成されていて,すべてが必修になっていることに関して,その是非を尋ねた項目(問6)においては,18.5%の諸君が「変更の必要がある」と回答している(61.4%の諸君が「現状のままでよい」と回答)。そして,「変更の必要あり」とこ答えている諸君に対して「どのように変更したらよいですか具体的に書いてください」という問いかけをしている(問7)。

その間に答えている沢山の自由記述の中で以下のような表現に関心を引かれた。いくつか引用してみよう。

- *文系学部は文系の科目を、理系の学部は理系の科目を多くとれるようにして欲しい。
- *教養科目（英語を除く）は理系には全く必要がないので除外する。
- *専門と全く関係のない教養科目はいらない。
- *…他学部系統の学問を修めるよりは、自学部で専門への連携を考えるべき。
- *学科に適した科目選択を、もっと考慮すべきだと思います。
- *現在、各学科ごとに必要性の感じられないものまでが必修となっている。それらを選択にする。

これらの回答に共通するのは、自分の専門教育と関わりのない科目まで必修ということになっていることを改めるべきであるという主張である。学生諸君の大学教育に対する期待は自分が選択して入学したこの学部、この学科、この課程における教育すなわち専門教育の分野に向けられているのであって、しかもそれこそが大学にふさわしい教育であると思っている。だから、教養科目の中で自分の専門領域から離れている授業にはなかなか意欲が湧かないし、「よけいな授業だ」という意識をもつことになってしまっているのである。十分に理解できる不満である。

「専門馬鹿」ということ

今日まで教養教育のねらいということについて様々な形で議論されていたし、上で述べたような学生たちの不満は続けられていた。そして、その不満を説得する時にしきりに「専門馬鹿になってはいかん」という表現が繰り返されてきた。

大学における専門教育という言葉は広い内容を含んでいるが、大まかに整理すれば、特定の職業分野において求められる専門的な知識や技術の習得を目指す教育（高度の職業教育）と、現実の職業分野からは比較的独立して、特定の学問領域における探求を目指す教育（専門科学の教育）とに分けられよう。しかしまた、いずれの専門教育においても、学問的な探求の姿勢や技術を修得すること、そしてそのために長期の知的な訓練が必要とされること、さらにそれらによって専門

的な能力や態度を養成することといった共通の特徴も有している。

ところが、このような専門教育においては、専門職業教育に重点を置くものであってもまた専門科学に重点を置くものであっても、特定の分野に限定された教育内容にならざるを得ない。したがってそこでの教育は狭く限定された学問領域についての知識や技術、能力や態度の教育ということになる。しかも、いっそう専門化を進めようとするとはいっそう細分化された内容の教育の進行ということになってしまう傾向が強い。そういう状況が進むと、特定の専門領域については知識、能力、技術、態度が形成されるが、そこから外れた（専門に関係のない）ことがらについては無知であるといった状況が必然的に生み出されてしまう。

ところが、一人の人間として世の中を生きていこうとするとこのような専門教育の広がりよりももっともっと広い分野におよぶ知識や判断力やさらには態度や行動力が必要となる。毎日の生活の中で、専門とする学部や学科での勉強をしっかりとやってもそれだけでは絶対に足りなくって、それを越えたもっと高度のしかも広範囲のことがらが必要とされるという場面に出会うことは多いであろう。さらには、自分自身の内面的な生活、たとえば自分は何なのか、どのような生き方を求めていったらいいのかといったことについて真剣に悩むとき、たくさんの能力や知識さらには智慧が必要とされるという場面も、多くの学生諸君が経験していることであろう。

このことは、特定の職業生活という場面においてもまったく同様である。

「専門馬鹿」にならないためには、大学における専門教育をどんなに誠実に勉強したとしても、それだけでは決して一人前のあるいは優れた社会人としては狭すぎるということを十分に自覚しておかなくてはならない。そして、専門教育以上の勉強を大学においてしておかなくてはならない。おそらく、教養教育は、このような自覚を得ること、そして広い分野におよぶ知識や判断力を身につけることが大きな目標になるのではないか。もっといえば、先に紹介したような「専門の授業以外は余計物だ。エネルギーの無駄だ。」といった認識を克服することが目標なのではないか。

（江幡）

キャンパス情報

人文学部から

10月1日から後期の授業です。社会科学科では、1年生対象の主題別ゼミナールを火曜日1講時と木曜日2講時に、コミュニケーション学科では月曜日5講時に開講します。掲示をみて所属等の確認をし履修して下さい。

長い夏休みと思っていたのが、終わってしまうとたいして長くもなかった、という感じでしょうか。大学4年間というのもこれと同じで、アッという間に卒業です。高校3年間よりも、大学4年間の方が短く感じる、というのがこれまでの学生諸君の声です。残念なのは、こうした実感は大学生活が終わりに近くならな

いと理解できないという点です。したがって、殆どの学生は、卒業間近かになって何もしないうちに経過した4年間を反省的に顧みるのですが、そのときはもう手遅れというわけです。

より深く考察すれば、現時点でもこの時の流れの速さを理解できると思いますが、1年生を終えた段階で目的意識的に振り返れば必ず実感できると考えます。その意味ではまだ余裕があります。後悔しないように頑張ってください。

秋風が吹くとともに、夏の疲れが出てきます。特に健康に留意して、後期の講義を受講するようにして下さい。健康を害すると学問・研究もできません。

(梅田)

教育学部から

— 卒業後の準備はどうですか —

ご存じのように、教育学部4年次にとって不況のため教員採用数の減少を含め、就職がとても難しい状況が続いています。教育学部の就職委員会では、この状況を少しでも改善するため、さまざまな支援活動を行っています。この夏休みに開催された公務員採用試験のための公開講座もその一つです。年末から春休みにかけて、企業の説明会や教員採用試験向けの講習会など新しい企画を準備中です。

就職試験では、筆記試験、面接、作文など観点を交

えて応募者が判定されます。試験準備として、皆さんは筆記試験に多くの時間を割いているようですが、実は就職してからどのような活動をしていくのか、そのために何を準備してきたのかなど将来への考え方や意気込みが重視されてきています。自分の専門性を高めるために毎日の授業も大切ですが、友人との交流、読書、アルバイト、自分自身の個性の把握、人生観の形成、文章や口頭による発表能力の開発などこの4年間にやっておいて欲しいことは数えきれません。

充実した夏休みだったことを期待し、願っています。

(牧野)

理学部から

— 新棟建設始まる —

理学部の中庭に新棟の建設が8月から始まっています。古くなった理学部棟を建て替えるための第一期工事で、来年夏には7階建て総面積3880㎡の新棟が完成の予定です。1階と2階は情報処理の教室で、3階は

理学部の図書館になります。今までばらばらになっていた図書室が一箇所に統合され便利になります。4階以上は自然機能科学科13名の教官の研究室や実験室、セミナー室などが入ります。全館空調設備も整い、快適な環境の下で研究教育が行われることでしょう。さらに第二期工事として自然機能科学科の残りの教官や

地球生命環境科学科の教官の研究室や実験室、大教室などを含めた計画も概算要求されています。

理学部は建物を新しくして21世紀を迎えようとしています。しかし、建物ばかりよくなっても中味が伴わ

なければ話になりません。教官も先端的研究をより一層推進するよう努力していますが、学生の皆さんも基礎学力を蓄え、新しい分野の研究にチャレンジして、理学部をともに発展させていきましょう。(三輪)

工 学 部 か ら

学生の皆さんは久しぶりに暑い夏を満喫されたことと思います。後学期では前学期での経験を忘れずに受講・学習を行なって下さい。前期試験で感じたと思いますが、大学の勉強では日頃の自習、特に復習が重要です。授業の内容を復習し理解する習慣を身につけるように努力して下さい。

工学部システム工学科には、主として社会人や勤労学生を対象にした夜間に授業が行われるBコースがあります。授業時間は午後5時35分から午後8時40分までですが、実験の授業では夜遅くまでかかることもあ

ります。このため日立キャンパスでは、Bコースの授業時間に合わせて事務、生協、図書館の業務も夜遅くまで行われていて、Bコース以外の学生にとっても好都合です。

Bコースでは社会人でも昼間のコースと同様の知識を身につけるための学習ができるようにカリキュラムが組まれています。しかし、時間の関係上授業本数が少ないという問題があり、そのためBコースの学生は効率的な学習をするように努力しています。

Bコースに関する質問や意見があれば工学部教官に声をかけて下さい。(山内)

農 学 部 か ら

学生および教職員待望の「多目的グラウンド」が完成しました。新キャンパス整備の一環として8年ほど前より整備が進められていましたが、昨年より雨水の排水工事および芝生の張り付けが始まり1年間の養生の後、立派な天然芝のグラウンドが完成しました。今年は道路側に高さ約10メートルのネットが張られ、安心して使えるようになりました。広さは横100メートル、縦50メートル以上ありサッカーの試合場としても十分に使用可能です。今まで学外のグラウンドで練習していた農学部サッカー部はさっそく使い始めていま

す。またソフトボール同好会も作られ活動しています。その他野球やラグビーをしている姿も見かけます。7月17日には、「グラウンド開き」の記念行事として、国際協力事業団(JICA)筑波国際センターの研修生サッカーチームとの親善試合が行われました。南米、中近東、アフリカのサッカー強国出身者をそろえた国際色豊かなJICAチームは、随所に華麗なテクニクを披露し、楽しいひとときを過ごしました。今後は「多目的屋内活動施設」と「テニスコート」の整備に期待が高まっています。(森)

聞いてほしい私の意見 — 教養教育のココがオカシイ! —

小倉 寛子 (理学部 2年)

私たち学生にとって教養教育の位置付けは、他の方々の思惑とは別にあると思う。科目に関して、今まで学ぶ機会のなかった内容を選択することができ、それなりに意欲や目的を持っていたと思うが、一概してそれは新しいものに対する興味や憧れからくるものだったろう。教官の方々が考えて下さっている、幅広い知識、ものの見方、視野などを養ってほしい、そして豊かな人間性を培ってほしい……そういった考えは残念ながら学生に浸透していないように感じる。あくまで講義は「受ける」もので、取り組みも消極的だ。

正直なところ、授業を選択する際に「単位を取りやすい授業」というものが「内容」と同じ位に大きな位置を占める。教養科目は、卒業に必要な単位が得られれば良いと考えてしまうことがあるのではないかと。内容に関して、学生はシラバスを参考に選択するが、理解しにくかったり、いざ受けてみて内容が違ったりすることがある。それが履修を取り消す原因となる時もあるようだ。登録確認中ならまだしも、その後に取り止めることができるのは問題ではないか。学生の自主制で、大学側が管理するのは困難だと思うが、何らかの制約をつけることができれば、少しは変わるかもしれない。

そして単位の取り方だが、1年次のうちに単位の殆どを取ってしまうのは問題だと思う。1科目に対して予習、復習、補習などを考え、かつ睡眠時間などを標準的にとるとすると、履修可能なコマ数は1日に2、3。週に12程度だときいた。であるのに、履修する気になれば週に20以上取ることができる。それでは1つに十分な時間が割けない。教養だけではないが、履修可能な数を制限する必要があると思う。それでいて、学部ごとに履修できる授業が制限されているのが分からない。2年次以上は全学部共通となるものが殆どだが、それを1年次で制限する理由は？授業体系や運営を円滑化する為など理由はあると思うが、納得できな

い面もある。特に、2年次以上が問答無用で弾き出される場所は。

また、理学部の場合、自然の分野に関しては学部の科目と重複するものも多く、教養の方が難しいという時もある。専門科目の中にこそ、教養的に捉えられるものも。理数系の科目は高校時の履修状況が人によって異なるので一括して考えるのは難しいかもしれないが、教養と専門の科目をバランスよく組み立てていけば、混乱は緩和されるように思える。

最後に、何と言っても一番問題なのは学生の受け止め方のように思う。アンケートの回答を見ても、あたり障りのない答えや意見が多く、一部の学生しか真剣に答えていないように見えた。最初から考えていないという見方もできるが。

鈴木 真理 (工学部 2年)

教養科目を選ぶために、まず目を通すのがシラバスだった。大学は素晴らしい！自分の学びたい授業を自分で選ぶことができるのだ。こんなに沢山の科目がある、さあどれにしよう……とまあ、期待に胸いっぱい開いたシラバス。ところが、選択の幅というものは意外に狭かった。最初に、これは絶対にとりたいと思う授業を選ぶ。次に、これならとってもいいかと思うものを選ぶ。最後には「……これで妥協」を選ぶ。この妥協の多いこと。選択したくても受講不可だったり、やりたくないものまで選択しなければならなかったりという現実、なかなか厳しかった。

1年のうちは教養だから、楽だから。車の免許をとったり、思いきり遊んだりしておくべきだよ、と言われた。学部の差もあるかもしれないが、とにかく工学部は進級するに従ってどんどん忙しくなる。1年のうちが華だ、と。まったくもってその通りだった。高校生の時、内職の時間だったいくつかの授業。その再来かと思うような退屈な授業が多い。特に、妥協で選択した授業の殆どがそうだった。やる気がでないのだ

から、眠くなって当たり前。ああ、この授業に親の給料から払われた授業料があてられていると思うと、勿体ない！

2年以降になると、語学はともかくとして他は全て専門に関連した授業になる。これでもか、というくらい数学やら物理やらばかりだと、退屈だった1年がどれだけ気楽だったか、懐かしい気もする。数学が苦手なくせに、夢のまた夢のような希望を抱いて工学部を選んでしまった私としては、なかなか地獄のような思いを味わうこの頃である。しかし、勉強をしているなあという充実感も同時にあるのが嬉しい、訳ではないが有り難い。

教養教育には、充実感が薄い。やりたくもない授業を、それが今後専門として役立つというならばともかく、ただこれの単位がないと卒業出来ないからという理由だけで受けて、どれだけ身につくだろうか。

私は、選択の幅を広げることがもっともいいことだと思う。これが教養。これが専門。さあ、これらをひくくめて○単位分選びなさい、という形。選択のしよようによっては、全てが専門でも大丈夫。専門には必修があるけれど、教養には必修がない（主題別ゼミとか情報は、専門で必修もしくは選択にする）。それぞれ何かの学問をするために大学に来た学生たち、これで文句は言えまい！私も言えない！

教養が悪いとは思わない。専門ではないけれど興味のある科目、専門への準備となる科目を受講出来るのは素晴らしい。大学とはそもそも、自分の将来の大きな足掛かりとして、親のすねをかじりまくって（一部苦学生もいらっしやるだろうが）来る場所である。それなら、授業料の無駄と思えるような中途半端選択制は、オカシイと思って当たり前だろう。

高沢 慎（農学部 2年）

現在の教養教育は、その目標である「豊かな人間性の創造」や「総合的な判断力の確立」からはずれて、単に「卒業のための必修単位」となっているように思える。自分がこのように考えるのは、1年間実際に教養教育を受けた中で感じたからに違いない。

農学部生の場合、2年になると阿見キャンパスへ移るため、教養の単位の大部分を水戸で取らなくてはな

らず、1年は「教養漬け」といっても過言ではない。大学側では四年一貫教育を打ち出しているが、現実には1（教養科目）+3（専門科目）=4となっているような気がする。

さて、現在の教養教育の中で最も問題だと思うことは、学生の興味を引き出せない教養教育かもしれない。

例えば、講義の内容が高校のものに少し毛が生えたものがあると思えば、深く狭い範囲を扱うものもあり教官によって差が大きい。前者は何とかがついていけるものの、後者は理解しようと努力しても、大学の専門的な知識が無ければわからないようなものもある。また、シラバスの内容を頼りに履修してみると、教官が途中で勝手に内容を変更するケースもあったと聞いたこともある。おもしろくなかったり、興味がわからない講義を取っても、ただ単に出席してテストを受けたり、レポートを書くだけで終わってしまい、後には何も残らないと思う。これが続くと、教養教育の目標が達成されないばかりではなく、今世間で騒がれているような「大学生の学力低下」へとつながっていくかもしれない。このようなことを防ぐために、シラバスの充実や時代に合った講義内容に変更したり、学生側にも「何でも吸収してやろう」といったどん欲な姿勢も重要であると思う。

これ以外にも、自分が1年の時に教養科目の時間割を作っていて、指定クラスの壁に悩まされ、取りたい講義がとれなかった。クラスの指定は自然の分野で、特に農・工学部に顕著に見られ、キャンパスが移動するため教養を水戸でできるだけ多く取れるような大学の配慮や教養教育と専門教育の有機的連携からだと思う。しかし、教養教育の時から専門的な分野を勉強することは、教養教育の専門教育化の何ものでもない。そのため、十分専門基礎科目などで捕える範囲では、指定クラスを取り除いて、できるだけ多くの学生が受講できるようにして欲しい。

現在阿見キャンパスに移ったが、人文や社会といった分野が少ししか開講されておらず、教養科目の水戸キャンパスとの均等化を計って欲しい。農学部は筑波大と距離的に近いため、非常勤講師として招いて、環境に関する法学などを開講すれば良いと思う。そうすれば、教養科目と専門科目の一体化のため、有意義な教養教育が行えるに違いない。

聞いてほしい私の意見 — 教養教育のココがオカシイ! —

小倉 寛子 (理学部 2年)

私たち学生にとって教養教育の位置付けは、他の方々の思惑とは別にあると思う。科目に関して、今まで学ぶ機会のなかった内容を選択することができ、それなりに意欲や目的を持っていたと思うが、一概してそれは新しいものに対する興味や憧れからくるものだったろう。教官の方々が考えて下さっている、幅広い知識、ものの見方、視野などを養ってほしい、そして豊かな人間性を培ってほしい……そういった考えは残念ながら学生に浸透していないように感じる。あくまで講義は「受ける」もので、取り組みも消極的だ。

正直なところ、授業を選択する際に「単位を取りやすい授業」というものが「内容」と同じ位に大きな位置を占める。教養科目は、卒業に必要な単位が得られれば良いと考えてしまうことがあるのではないかな。内容に関しても、学生はシラバスを参考に選択するが、理解しにくかったり、いざ受けてみて内容が違っていたりすることがある。それが履修を取り消す原因となる時もあるようだ。登録確認中ならまだしも、その後に取り止めることができるのは問題ではないか。学生の自主制で、大学側が管理するのは困難だと思うが、何らかの制約をつけることができれば、少しは変わるかもしれない。

そして単位の取り方だが、1年次のうちに単位の殆どを取ってしまうのは問題だと思う。1科目に対して予習、復習、補習などを考え、かつ睡眠時間などを標準的にとるとすると、履修可能なコマ数は1日に2、3。週に12程度だときいた。であるのに、履修する気になれば週に20以上取ることができる。それでは1つに満足な時間が割けない。教養だけではないが、履修可能な数を制限する必要があると思う。それでいて、学部ごとに履修できる授業が制限されているのが分からない。2年次以上は全学部共通となるものが殆どだが、それを1年次で制限する理由は？授業体系や運営を円滑化する為など理由はあると思うが、納得できな

い面もある。特に、2年次以上が問答無用で弾き出されるところは。

また、理学部の場合、自然の分野に関しては学部の科目と重複するものも多く、教養の方が難しいという時もある。専門科目の中にこそ、教養的に捉えられるものも。理数系の科目は高校時の履修状況が人によって異なるので一括して考えるのは難しいかもしれないが、教養と専門の科目をバランスよく組み立てていけば、混乱は緩和されるように思える。

最後に、何と言っても一番問題なのは学生の受け止め方のように思う。アンケートの回答を見ても、あたり障りのない答えや意見が多く、一部の学生しか真剣に答えていないように見えた。最初から考えていないという見方もできるが。

鈴木 真理 (工学部 2年)

教養科目を選ぶために、まず目を通すのがシラバスだった。大学は素晴らしい！自分の学びたい授業を自分で選ぶことができるのだ。こんなに沢山の科目がある、さあどれにしよう……とまあ、期待に胸いっぱい開いたシラバス。ところが、選択の幅というものは意外に狭かった。最初に、これは絶対にとりたいと思う授業を選ぶ。次に、これならとってもいいかと思うものを選ぶ。最後には「……これで妥協」を選ぶ。この妥協の多いこと。選択したくても受講不可だったり、やりたくないものまで選択しなければならなかったりという現実、なかなか厳しかった。

1年のうちは教養だから、楽だから。車の免許をとったり、思いきり遊んだりしておくべきだよ、と言われた。学部の差もあるかもしれないが、とにかく工学部は進級するに従ってどんどん忙しくなる。1年のうちが華だ、と。まったくもってその通りだった。高校生の時、内職の時間だったいくつかの授業。その再来かと思うような退屈な授業が多い。特に、妥協で選択した授業の殆どがそうだった。やる気がでないのだ

から、眠くなって当たり前。ああ、この授業に親の給料から払われた授業料があてられていると思うと、勿体ない！

2年以降になると、語学はともかくとして他は全て専門に関連した授業になる。これでもか、というくらい数学やら物理やらばかりだと、退屈だった1年がどれだけ気楽だったか、懐かしい気もする。数学が苦手なくせに、夢のまた夢のような希望を抱いて工学部を選んでしまった私としては、なかなか地獄のような思いを味わうこの頃である。しかし、勉強をしているなあという充実感も同時にあるのが嬉しい、訳ではないが有り難い。

教養教育には、充実感が薄い。やりたくもない授業を、それが今後専門として役立つというならばともかく、ただこれの単位がないと卒業出来ないからという理由だけで受けて、どれだけ身につくだろうか。

私は、選択の幅を広げることがもっともいいことだと思う。これが教養。これが専門。さあ、これらをひくくめて○単位分選びなさい、という形。選択のしよによっては、全てが専門でも大丈夫。専門には必修があるけれど、教養には必修がない（主題別ゼミとか情報は、専門で必修もしくは選択にする）。それぞれ何かの学問をするために大学に来た学生たち、これで文句は言えまい！私も言えない！

教養が悪いとは思わない。専門ではないけれど興味のある科目、専門への準備となる科目を受講出来るのは素晴らしい。大学とはそもそも、自分の将来の大きな足掛かりとして、親のすねをかじりまくって（一部苦学生もいらっしやるだろうが）来るところである。それなら、授業料の無駄と思えるような中途半端選択制は、オカシイと思って当たり前だろう。

高沢 慎（農学部 2年）

現在の教養教育は、その目標である「豊かな人間性の創造」や「総合的な判断力の確立」からはずれて、単に「卒業のための必修単位」となっているように思える。自分がこのように考えるのは、1年間実際に教養教育を受けた中で感じたからに違いない。

農学部生の場合、2年になると阿見キャンパスへ移るため、教養の単位の大部分を水戸で取らなくてはな

らず、1年は「教養漬け」といっても過言ではない。大学側では四年一貫教育を打ち出しているが、現実には1（教養科目）+3（専門科目）=4となっているような気がする。

さて、現在の教養教育の中で最も問題だと思うことは、学生の興味を引き出せない教養教育かもしれない。

例えば、講義の内容が高校のものに少し毛が生えたものがあると思えば、深く狭い範囲を扱うものもあり教官によって差が大きい。前者は何とかついていけるものの、後者は理解しようと努力しても、大学の専門的な知識が無ければわからないようなものもある。また、シラバスの内容を頼りに履修してみると、教官が途中で勝手に内容を変更するケースもあったと聞いたこともある。おもしろくなかったり、興味がわからない講義を取っても、ただ単に出席してテストを受けたり、レポートを書くだけで終わってしまい、後には何も残らないと思う。これが続くと、教養教育の目標が達成されないばかりではなく、今世間で騒がれているような「大学生の学力低下」へとつながっていくかもしれない。このようなことを防ぐために、シラバスの充実や時代に合った講義内容に変更したり、学生側にも「何でも吸収してやろう」といったどん欲な姿勢も重要であると思う。

これ以外にも、自分が1年の時に教養科目の時間割を作っていて、指定クラスの壁に悩まされ、取りたい講義がとれなかった。クラスの指定は自然の分野で、特に農・工学部に顕著に見られ、キャンパスが移動するため教養を水戸でできるだけ多く取れるような大学の配慮や教養教育と専門教育の有機的連携からだと思う。しかし、教養教育の時から専門的な分野を勉強することは、教養教育の専門教育化の何ものでもない。そのため、十分専門基礎科目などで捕える範囲では、指定クラスを取り除いて、できるだけ多くの学生が受講できるようにして欲しい。

現在阿見キャンパスに移ったが、人文や社会といった分野が少ししか開講されておらず、教養科目の水戸キャンパスとの均等化を計って欲しい。農学部は筑波大と距離的に近いので、非常勤講師として招いて、環境に関する法学などを開講すれば良いと思う。そうすれば、教養科目と専門科目の一体化のため、有意義な教養教育が行えるに違いない。

杉渕 雅祥 (人文学部 1年)

大学へ入学して1年目の夏休みがやってきた。僕にとっては久しぶりの夏休みという感じである。夏は受験生にとっては“天王山”と言われて、現一年生は昨年の今頃は受験戦争に苦しめられていたと思う。僕自身も高校生時代、浪人生時代とここ二年間夏休みらしい夏休みをおくっていなかったのが、今年の夏休みにかかる期待は大きく胸をはずませている。大学の夏休みは高校とは違い8月から10月までの2ヵ月間もあり特別な課題も出されていないので、割と自由に過ごせるというイメージがある。しかし、時間の流れは早いもので何も計画をたてなければアツという間に終わってしまうのが現実。そこで夏休みを有意義に過ごすため計画を立ててみた。それを紹介しよう。

まず、夏休みが始まったら早速水戸を脱出、故郷のある東北地方へ進入する。八月上旬は東北地方では各地でたくさんの夏祭りが行われるので見物するには絶好のチャンスだ。僕はこの時期に高校時代や浪人時代の友達の家にお邪魔して、青森、仙台と行く予定になっている。青森ではねぶた祭りや弘前ねぶた等が行われ、仙台では七夕祭りが行われる。どちらも東北では有名な祭りなので見に行ったついでに参加できたら幸いである。また僕は大学で写真部に所属しているので良い写真を撮ってきたいと思っている。このように八月上旬は結構移動が多く、行く先々で地方の祭りを楽しんでくる予定だ。

では8月の中旬は？というと、僕の故郷ではなんと夏に成人式があるのだ。大半の人は冬の1月にやるのだと思うけれども、僕の地方は雪が降るため帰ってくる人が少なく、そのため夏に行われる所が多い。8月の14日に行われ、その日はちょうど僕の20歳の記念日。10代にピリオドです。成人式が終わったら中学校の同窓会。その時はお世話になった先生や級友たちと昔を思い出して語りあってこようと思っています。その日がくるのが今からとっても楽しみです。

このように夏休みは超多忙になる予定です。イベン

トばかりでうっかり気が緩んでしまいそうですが、今できることはしっかりやらなければいけないことは承知の上の夏休み。勉強も忘れてはいけません。前学期は入学した勢いでハメをはずしすぎました。遊びすぎてテストの直前まで勉強をしなかったばかりにその結果がもろにテストで出てしまったと思います。大学に入学して特に強く感じたことは、何もしなければ、何も得ることなく終わってしまうということです。何事に関してもそうなのですが、自分が行動をし始めなければプラスになることは少ないと思います。勉強も同じで、やらなければ忘れてしまうことばかりです。人間は物事を覚えるのに難しさをおぼえますが、忘れることに関しては天才です。そのことは浪人時代、痛く感じたことです。このような反省をし、さらに充実した夏休みだったと思えるよう、学問の方にも精を出したいと思いました。

夏休みはついついハメをはずしがちですが、健康と安全には気をつけようと思います。様々なイベントを通してプラスになることを学んできたいと思います。

小林 寿来 (教育学部 1年)

主婦体験にチャレンジ！(主夫というのは、男性が家庭に入り家事等を行うことで、主婦に対して使う言葉)なんとも無謀な計画を立ててしまったと、後になって悔やんでいます。一週間限定のこの計画に多くの人が、「ふんっ、大したことじゃないな。」と鼻で笑うと思いますが、いざ家族五人分となると、どうしたらいいものか戸惑ってしまいます。一人暮らしで、自炊、掃除等しているのだから、わざわざそんなことしなくてもと言う意見も耳にしました。確かにその意見にはごもっともであるわけですが、男性が家庭に入ってどこまで家族全員の世話ができるのか試してみたかったです。日本では「主夫」の存在が薄く、定着していませんが、日本以外の国では「ハウスハズバンド」

(主夫)の存在が抵抗なく認められていると聞いたことがあります。家庭を育てることに男性が参加すれば、

さらに良い暮らしができるのではと思いました。そこで一人の男であります僕が、実家で体験しました。そして、この夏休み一週間限定主夫体験を紹介したいと思います。先に言っておきますが、未だに三日坊主癖が抜けてません。

体験日記 8月10日 母親にこの計画の話をした。家事はすべて任せてもらえると思っていたが、そう簡単には任せてくれなかった。母親の意地を感じた。しかし、初日からやらなくて、ほっ、と一安心。まずは掃除から。確かに何を始めるにも掃除が基本と言われている。板前、坊さん、花屋さん、確かに掃除からだ。母親がそこまで考えて言ったとは思わないが、僕はそう思って掃除をした。でも、掃除は嫌いだ。どこまでがきれいか、基準がない。きれいになったと自分に言い聞かせながら、ひたすら汗を流す。

体験日記 8月11日 今日無事一日が終わろうとした時、母親から一言、「これで拭き掃除したの？」げ、げっ！やってない。肝心なことを忘れていた。その場ではうなずいて、きれいの基準の価値観の違いを言い訳にして逃げたけど、明日はしっかりやろうと心に誓った。

に誓った。

体験日記 8月12日 この日は完璧だ。昨日、問題となった拭き掃除も見事クリア。特に変わったこともなく花の水やりや、犬の散歩をこなした。良く考えてみると、小学生の宿題「夏休みに挑戦しよう！お母さんのお手伝い！」のような気がしてならないのは、僕だけだろうか？少し疑問に思う。

見事にこの日以降、日記はつづられていません。冒頭で偉そうな事を言っていますが、結局続きませんでした。家族全員分となると一人暮らしとはまた違います。現役で働いている主夫・主婦の辛さが3日だけ、しかも掃除と雑用だけでわかりました。張り切った割りには腑甲斐ない結果になってしまって情けなく思います。しかし、すべて一人でやるのではなく、家族で協力し、個人にあった仕事を分担しながら、家事をするのがベストだと分かりました。恥かしい結果でしたが、この体験から家族のあり方、家庭でする仕事の構成の仕方がわかった気がします。夏休みならでは??の体験でした。

教 養 教 育 古 今 東 西

茨城大学教養教育に関する自己 点検・評価報告書を読んで

アンケート調査は、混沌としてわかりにくい現実をいくつかの視点の枠組みによって、より理解しやすくしようとするものです。今回の調査の回収率は50~60%ということですから、母集団の性格からみてほぼ全体的な傾向を示していると理解してよいでしょう。多岐にわたる質問項目について詳細な分析をされた方々のご苦勞に敬意を表します。特に資料の中で自由記述の内容がほぼ網羅されているので、単純に集計された数字の持つ意味をさらに深く理解するのに大変役に立ちました。

このようなアンケート調査を実施した場合、一般的にはまず不平・不満が浮き彫りにされます。それは、人間がより善く生きようとした場合、現状に対する不平や不満を感じることから出発するからです。逆に言

えばこのようなアンケート調査で読みとりにくい部分は、好意的で満足している状態です。たとえば7~8割が満足している場合でも、自由記述に書かれる内容は、2~3割の人の不平不満です。この場合、「少数意見を尊重し、不満な部分には素直に耳を傾け、改善していくべきである」と判断するのか、「100%の満足を望むことは不可能だ。少数意見を尊重すると逆に不満を感じる人が増えるかもしれない」と判断するのか、微妙なところでは。

私としては、少数でもよいから「どのような良い点があったのか、どのようなことに満足しているのか、それをさらにどうすればもっと良くなるのか」といった意見をうまく引き出せるような質問項目があれば、全体像がもうすこし明確に浮き彫りになったのではないかと感じました。「自己点検・評価」という性格から、ネガティブな部分にどうしても目を向けてしまい

がちですが、アンケート調査という形式にとらわれず、ポジティブな部分をもっとうまく引き出して、肯定的に評価すべき内容はきちんと評価する姿勢も必要なのではなかったかと思います。

学生のアンケート結果に掲載されている自由記述をくまなく読んでみると、学生諸君が高等学校までの受験勉強の矛盾を十二分に感じ、大学の授業に対して大いに期待していることを感じ取ることができました。また、オウム事件やハイジャック事件を引き起こした人物が高学歴であったことなどの社会的背景を踏まえて、教養教育の重要性を十分に認識していると思います。私たち教官はこうした学生諸君の期待に応えられるよう不断の努力をする必要があります。

ただ一つだけ気になったこともあります。学生諸君がそれぞれの権利を主張することは大いに結構ですが、お互いの権利を保障するためになさなければならない義務と責任について、もう少し意識してもらいたいと感じました。私は「教養教育」として、「それぞれ異なった意見や感じ方をする人間が集まっているときに、それぞれの権利を保障するために、お互いになさなければならないことは何なのか？」を学生諸君と一緒に考えていけるような授業を展開したいと願いつつ実践しています。

加藤 敏弘 (教育学部)

未履修者のための教養科目

4年一貫教育の中で、教養教育をどのように位置づけるか？理学部では、専門基礎科目との役割上の区分をより明確にする方向で、検討が進められています。現在の高等学校のカリキュラムでは、履修する理科の科目数が減少してきており、こうした未履修科目を教養科目（自然分野）として履修させ、専門基礎科目は従来の大学初等程度の内容で、専攻科目への橋渡しとして設定しようというのが、理学部の基本的な考え方です。

未履修科目への対応という試みとして、今年度前期に3名の教員による分担で新しく生物学（理系の生命科学概論）を開講しました。私にとって、教養科目を担当したのは、今回が初めてでした。期末試験の採点結果は、残念ながら大変悪いものでした。受講生の学

習到達度が低かったという観点からいう限り、私のやり方には、問題があったことになります。反省と自戒の念を込めて、今回感じたことを以下に述べさせていただきます。

当該科目の授業は、教科書の内容に沿うかたちで進めました。私の担当は、3人のうちの最後でしたが、主として、「バイオテクノロジー」と、「免疫」についての講義を行いました。教科書の後半部分ですから、どちらかといえば応用的であり、シラバスに記載しておいた事項だったとはいえ、より基礎的な内容を望んでいた受講生にはそぐわなかったかもしれません。

授業中には、70名程度の受講生に対し、できる限り、多くの簡単な質問をしてみわり、知識習得の程度を確認しながら、講義を行いました。そして習得程度が不十分と思われた部分については、改めて説明を付しました。このため、授業の1回分は、実質的に復習の時間になりました。念のため、授業の最後の回に、要点をメモとしてA3用紙一枚にまとめたものを配布し、これを試験範囲にしました。

試験問題は、バイオテクノロジーや免疫学の分野で重要な生体物質（専門用語）を挙げさせ、その性質などを記述させるものでした。多くの生徒が、このような記述式の解答法に不慣れだったのかも知れませんが、ほとんど解答できていませんでした。あるいは、授業の内容が、受講生の知識や理解の程度とかけ離れていたのでしょうか。もしそうだとすると、簡単な教科書であっても、受講生はこれをほとんど読みこなせないということになってしまいます。

「基礎ができていないから……」という生徒のコメントをしばしば耳にし、目にします。高等学校での未履修ゆえに、その分野の知識が中学生のレベルで止まっているばかりでなく、高等学校における空白が、かなりの退行をもたらしているという印象を払拭できません。受験科目以外は履修しないという現状は、基礎知識、基礎学力が無いという、回復するのが非常に困難な自信の喪失を生み出しています。

未履修科目への対応は、これだけの現実を踏まえたものであるべきで、今まで一般的と考えてきた授業形式をも見直さなければならないようです。レポートの提出や演習により重点を置いて、基礎的事項を習得す

るまで反復し、筋道を立てて表現（記述）できるような訓練を行うことが必要です。問題は、大学生が、このような授業形態についてきてくれるかということで、常にその分野に対する興味を喚起するような、より一層の工夫が不可欠であると思います。

今回の期末試験において、十数名と少数ながら高得点の者がいたことを付記します。受講生各人が、生物学における興味を一点でも抱いてくれたことを願いつつ、この教訓を今後に生かそうと考える次第です。

鈴木 英治（理学部）

掲 示 板 コ ー ナ ー

「教養教育シンポジウム」の開催

大学教育研究開発センターでは、平成11年度の教養教育シンポジウムを、以下のとおり、開催の予定をしています。

今年は、「主題別ゼミナールに関する諸問題」を主題とした企画を検討中ですが、プログラム等詳細については、後日掲示によりお知らせいたします。

教職員、学生の皆さんの積極的な参加をお願いいたします。

開催期日 平成11年12月1日(水)午後の予定

開催場所 茨苑会館

「ローザ・プルムラ」への投稿

大学教育研究開発センター発行のニュースレター「ローザ・プルムラ」への自由投稿を歓迎しますので、教職員・学生の投稿をお待ちしております。

【投稿先】

庶務部企画室教養教育係（共通教育棟1号館）

つ ぶ や き

サーみなさん、夏休みは終わってしまいました。充実した休みを過ごせた諸君……その充実感をもって、後学期開始ですね。不満足だった諸君……反省ばかりでなく、後学期こそは充実した生活を取り返すべく、立て直しですね。

「ローザ・プルムラ」の14号をお届けします。大学教育研究開発センターと学生諸君とを繋ぐニュース・レター（情報誌）として発行を続けてきました。「バラの若芽」というタイトルにふさわしく若さと可能性に満ちた学生諸君の学園生活を、教養教育という側面から支援をしていこうということを編集のねらいとしてきました。

この14号も、これまでたびたび特集しているように、教養教育について特集してみました。私たちとしては、学生諸君にもそして教員諸氏にも、何度も何度も考えたり議論したりして欲しいと願っているテーマです。「またか」と思わずに記事を読んでください。そして、考えたり議論したりする際の手がかりにして欲しいと願っています。

皆さんからの読後感想、提案、批判などなど共通教育棟一階廊下にある「教養教育Q & A」ボックスへ、気軽に投函してください。（Ebahiro）

発行日 平成11年10月

発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター

水戸市文京2-1-1

029(228)8416(企画室教養教育係)

Rosa Plumula

ローザ・プルムラ



●茨城大学・大学教育研究開発センター

ニュースレター No.15

目次

巻頭言	1
教養教育改革について	
－検討小委員会の中間報告－	1
キャンパス情報	2
聞いて欲しい私の意見	
－教養教育こうして欲しい－	4
Voice	
－大学生活ココがガッカリ－	6
教養教育古今東西	7
教養教育NOW	10
投稿！	10
掲示板コーナー	11

(平成12年1月発行)

臨界事故についての国の責任

ウラン燃料加工会社JCOの東海事業所における臨界事故（9月30日発生）は、甚大な災禍・被害をもたらし、同時に種々様々の検討すべき問題を浮上させた。そのなかで、いつにも増して注目すべきは以下の問題であると考えられる。

事故原因が明らかになるにつれて、通常ありえない操作ミスあるいはマニュアルから逸脱した作業手順、はたまた従業員の不注意、などといった現場の杜撰な作業状況に批判が集中し、問責もそこに的が絞られている。しかし、今回の事故でもっと重要なのは（原子力産業が国の完全な規制下に置かれているので）、国の住民に対する安全保障（生命・健康保全）義務の不履行責任であるということである。

経済活動が高度に複雑になっている現代社会では、隣地ないし近辺に危険施設があることを知りえない住民、また、知っていたとしても危険管理＝安全は大丈夫だろうと安心しきっている住民にとってその生存・生活基礎はひとえに、危険施設の設置および運営管理が国等による厳格審査のうえで許可され、（許可した責任上）綿密に常時監視されているであろうとの国等公的機関への信頼である。

法的な倫理としても、原子力施設の設置のばあい、許可権者（国）が事業者に設置許可をあたえることは、施設設置・施設稼働で影響を被る可能性のある住民（第三者）に対して安全配慮義務の責任を負うことになるのである。つまり国が住民に安全保障の手形をきるわけである。

事故発生は事実上空手形になったことを示している。再発防止のためにも、国の責任の所在はもっと厳密に究明されるべきであると考えられる。

(田村)

教養教育改革について — 検討小委員会の中間報告 —

大学の授業について学生諸君に尋ねると、「何で勉強するのか分からない科目がある」という答が必ずといってよいほど返ってきます。このように、特定の科目についてそれを履修する意義を問われたとき、大学は何と答えたらよいのでしょうか。「面白いからとにかくやってみよう」と励ますことで済むこともあります。しかし、ときにはもっと基本的なことが問題になっているかも知れません。それは知の体系です。音楽を聴く人が味わうのは、部分的な旋律の美しさやリズムの心地よさだけでなく、それらと作品全体との係わりを認識して感じる構成的な美しさであると思います。4年間の学びの後に獲得されるであろう知の体系の美しさに関心をもつ学生なら、個々の科目のむこうにどのような体系が意図されているか知りたがるのは当然です。これに答えるのは、教育システムの設計図ともい

うべきカリキュラムです。そのカリキュラムを誰がづくり、それが意図するものをどのように実現すればよいか？今回の教養教育改革もこの問題と無関係に語ることはできません。

何が問題なのかを明らかにするために、大学設置基準の緩和以来、大学教育が辿ってきた変遷をおさらいしてみます。以前は、大学教育はふたつの課程からできていました。一般教育課程と専門教育課程です。単純化していえば、学生はまず一般教育課程に入り、そこを修了してから専門教育課程に「進学」したのです。前者を教養部が、後者を各専門学部がほぼ独立に担っていました。これに対して平成8年度入学者から、教育課程は学部毎に「4年一貫教育課程」として一本化され、各学部がこれを担うことになりました。そして、一般教育課程の担い手であった教養部は解散しました。

ところが実態は見てのとおり、一般教育が教養教育と名を変えただけでそのまま専門教育と共存し、授業内容や履修基準について両者の間に画された一線は残ったままになっています。これで4年一貫教育といえるのでしょうか？これでは教養科目の中に何で勉強するのかわからないものがあって当然です。これを是正するためには、各学部がそれぞれの教養科目の内容や履修基準を見直し、本来の4年一貫教育を実現できるようにしなければなりません。これが昨年度から引き継がれた改革検討課題の第一項目でした。もうひとつの重要課題は、教養科目の授業を誰が担当するかということです。カリキュラムは各学部がつくれますが、そこにはその学部の教官にとって専門外の科目が含まれることもあり得ます。そのようなときは、学部の垣根を越えて担当者を確保します。これが全学出動体制と呼ばれるもので、茨城大学のような総合大学にしてはじめて可能な方法です。しかしこれが、「何で私がこれを教えるの？」といった、教員の側の不満を招き、授業の質の低下につながるものが懸念されています。第一の課題とあわせて早急な解決が求められる所以です。

ところで教養教育とはいったい何でしょうか？専門馬鹿にならないために必要なものだという人がいます。それでは専門馬鹿とは何でしょうか？おそらく人それぞれの解釈に委ねられているのが実情ではないかと思えます。私の勝手な定義を試みれば、専門知識をいろいろもっていても組み合わせて使うことを知らない人、

あるいは己の専門知識と外の世界との係わりを知らない人が専門馬鹿ということになります。知識の範囲は広くなくても、専門知識を組み合わせることを知り、己の専門知識と外の世界との係わりを知る人は専門馬鹿ではないのです。教養ある専門家という呼びかたもできると思います。教養教育とは、何でもいいから知識を広げる教育のことでなく、知識を体系づける工夫をともなった教育だと思います。この意味からすれば、専門も含めた大学教育そのものが正に教養教育であるべきではないでしょうか？

以上、私見を交えつつ、改革の課題をふたつだけ紹介しました。改革小委員会のすべての委員が私のように考えているわけでは勿論なく、改革推進論もあれば反対論もあり、また慎重論もあります。上に述べた課題については、解決のためにどのような方法が可能か、とにかく試しに実施案をつくってみようというところまでやっとなげつけ、現在その作業が進行中です。ただし、これが何らかの全学的合意に辿りつけるかどうか、今はまだ何もいえません。制度の改革はゆっくり時間をかけてやるべきだという論があります。正論に見えます。しかし、うまくいっているものをより良くするための改革と、不具合を解消するためにする改革の違いを「分かる」ことも大切と思う昨今です。皆さんがこのローザブルムラを手にする頃までに何らかの展開があることを期待したいと思います。（山中）

キャンパス情報

茨城大学と韓国忠北大学校との学生交流

現在、茨城大学は海外の大学との交流が盛んですが、その中で茨城大学と韓国の国立忠北大学校との交流はほぼ10年になります。この間、大学内外の多くの方々の努力により教職員の学術交流とともに毎年夏季休暇を利用して両校の学生研修団の相互訪問が続いていますし、また1年間の短期留学生の相互受け入れ制度によって毎年2～5名ほどの両校の学生が相手校に交換留学しお互いの文化を体験的に学んできています。ここでは夏季研修学生相互訪問団について紹介します。

私自身今年度忠北大訪日団の受け入れにたずさわるとともに8月の茨大訪韓団に同行しました。

1999年度は6月23日から7月6日までの日程で忠北大学校の学生10名と引率教職員3名が訪問しました。韓国の学生たちは水戸・日立・土浦での学内見学や「講義」・「日本事情」そして茨大生といっしょの施設見学、さらには茨大生といっしょに常磐線を利用して東京日帰り自由行動も体験しました。韓国の学生ははじめて日本にきた学生が多く最初はかなり緊張気味ですが、大学主催の歓迎会で友だちになった茨大生たちと夜の自由時間に大学近くの宿泊先で大いに飲み食べ

しゃべることをかさねるうちに、お互いの気持ちもわかりあい、日本人に対する見方も変化してゆきます。そして2泊3日の日本の家庭でのホームステイも体験して多くの思い出とともに帰国のため水戸をバスで出発する朝には、見送りの茨大生たちと涙を流して8月の韓国での再会を誓いあっていました。

この韓国からの訪問団学生と親しくなった茨大生の多くは、5月に学生部で募集した茨城大学韓国研修学生訪問団に決まった人たちです（昨年までの訪問団員だった人や純粋に韓国に興味のある人も含まれますが）。今年の韓国研修学生訪問団は8月2日から13日の日程で学生10名と引率教職員5名で訪問しました。宿舎は、ホームステイ時の1泊と温泉旅館の1泊以外は忠北大学校の学生寄宿舎でした。茨大生のほとんどが韓国はじめてでした。今年、忠北大生がつねに同行した公式日程のいくつかをあげてみますと、忠北大学校博物館・図書館見学、総長主催歓迎晩餐会、百済の古都・扶余見学、新羅の古都・慶州見学、俗離山・法住寺見

ローレンシアン大学短期留学

ローレンシアン短期留学は、12年前から茨城大学とカナダのローレンシアン大学との間で、毎2年ごとに実施している単位認定科目である。7月下旬から約3週間、カナダ・オンタリオ州・サドベリー市にある森と岩と湖に囲まれた広大な敷地をもつローレンシアン大学の野外活動のプログラムに参加し、ロッククライミング、カヌー、カヤック、プリミティブライフ、キャンプ、ハイキング、乗馬などの野外での身体活動や、カナダの自然・社会・文化・教育に関する概論、文化施設見学・研修、ホームステイ、各種ミーティングなどの文化的活動を主とした全生活にわたる「身体活動を通じた比較文化学習」である。

経験豊かな現地の教官スタッフ2名、茨城大学の指導教官2名、専門的技術をもつインストラクター4名、そしてそれら全体のコーディネーター1名の指導スタッフが、学生とともにさまざまな活動体験（自然体感、人間としてのコミュニケーション、文化的交流など）を共有する。

なかでも、ロッククライミングは、日常とはまった

学、韓国独立記念館見学、韓国の家庭にホームステイ、修徳寺・徳山の温泉体験、温陽の民俗博物館見学、韓国陶磁器工場見学、忠北大総同窓会歓迎夕食会、韓国民俗村体験、そして最後にソウル自由時間（2泊）です。これ以外にも、移動中の車内でのゲームや景色、3度の食事の多様さそして毎晩あったお酒を飲みながらの日韓学生交流会などなど。最後に別れるソウル金浦空港での涙、涙、涙。

夏の暑さとともに韓国で過ごした日々は、じつは茨大生にとっては新たな出発でもあります。とにかく韓国が気になり、すでに大学でハングルを学んでいる人はある種の目的をもつでしょうし、またそうでない人もこれを機会にハングルや韓国について学んでみようと思うかもしれません。さらに交換留学生として忠北大学校で1年間学んでみるのもよいと思います。どうか、さまざまな出会いにチャレンジしてみてください。

糟谷政和（コミュニケーション学科）



く違った山登りの初歩的実技で、学生の体力と能力に見合ったすばらしい「達成経験」を、カヌーは、広大な湖を仲間とともにゆっくりと漕ぐ、水面からの「身近な自然体感」を、プリミティブライフは、カナディアンインディアンの生活の知恵や技術をふんだんに取り入れた「近代文明以前の豊かな自然体験と文化実践経験」を与えてくれる。いずれも、最新の考慮によって計画されたカリキュラムと周到な安全管理のもとに行われ、カナダの自然を心置きなく満喫できる。

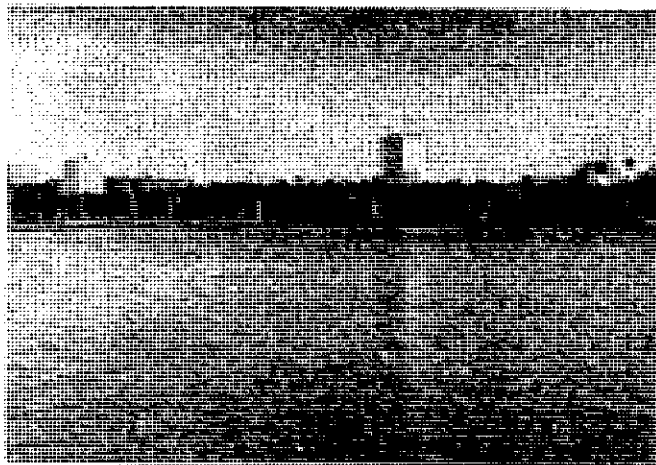
一方、ホームステイ、授業、ミーティングをはじめとするカナダ人との人間的交流は、言語や文化の違いを肌身で感得させられるとともに、異人種・異文化を超えた人間としての共通部分を考えさせてくれる。特に、思いやりのある人間関係のなかで、「自分の心が通じた」「相手の心がわかった」「気持ちを通じ合えた」という実感は、たとえそれがほんのささいなことであっても、人間とは何か、日本に生まれ育った自分とは何か、世界のなかでの私たちの生き方とはいかに、といったグローバルなテーマを与えてくれる。

だがそれらは、決して「楽しい」経験ばかりではない。むしろ、苦しい身体運動やストレスのかかる英会話の実践の方が多い。むしろ、そうした「苦楽の共有」が全体を「チーム」にしてくれる。今回の私たちの交流で得たものは、『信頼』と『友情』であった。

ローレンシアン大学でのすべての経費は、日本で生活するよりもはるかに安い。

全プログラムを無事終えた学生には「修了証明書」が与えられ、学生はそれを、茨城大学「総合科目」「人間文化論：身体活動を通じた異文化理解」(4単位)に替える。

日下裕弘 (教育学部)



聞いて欲しい私の意見

—教養教育こうして欲しい—

富並千佳子 (人文学部 2年)

教養教育の真の目的というものは、視野を広げ幅広い知識を養うことであり、また、新たな興味や関心を発見することである。しかし、それに関して言うならば、現在の教養教育にはやや不満な点がいくつかある。

まず、幅広い知識が必要とされるならば、当然その源となる教育、つまり教育する側の多様性も同時に要求されるはずだ。たとえ学生自信が関心を持たない内容であっても、それは一般教養として、社会で生きていく中で必要となる事柄であるとされている。自分の好きな分野だけに重点を置くのではなく、自分がこれまで関わってきたものは異なる分野にも踏み込んでいくという考えには大いに賛成である。が、それにしても、あまりにかけ離れすぎた内容のものを嫌々ながらにうけなければならないというのはどうかと思われる。

そこでやはり、授業の内容の幅を広げることが要求される。多種多様な分野に関しての豊富な中身の中から選んでこそ、教養教育の目的が達成され得るのだ。

学生が何を望んでいるのか、それにどう対応して行くべきなのをつかんで欲しいと思う。

もう一つ不満な点と言えば、授業を選ぶ際の問題である。学生であるからには、当然、皆教育を受ける権利を持っている。そして、それぞれ皆異なった関心を抱いている。それら全ては皆平等に教育を与えられなければならないはずなのだ。しかし、その点に関して、しばしば不平等が見受けられる。自分でも、何度も経験していることだが、ある授業に定員を上回る学生が押し寄せてしまった時の対応には納得いかない点がある。いくら公平な教育とは言ってもやはり限界があるのはよく分かるが、学生の採用の方法について、何かもう少し検討してもらいたいものだ。明らかに人気の高そうな授業に関しては例年のことで、既に把握されているはずなのだから、場所を広くして、多くの学生を受け入れられる教室に変えるなど、何らかの対策をとっていただいても良いのではないと思われる。その点が改善されれば、学生側もさらに充実できるはずであり、教育そのものも発展するだろう。

最後に、学生は学生であって、教育を受ける立場に

ある。ただし、それは単に与えられるだけでも受身的な意味ではない。話を聞いて、それを受け入れると同時に、自分達もそれに対して何らかの反応を示さなければならない。ただ座って、耳を傾けているだけという所にも、教養教育への不満の原因があるのかも知れない。学ぶということは、すなわち、考えるということでもある。授業を聞くことによって何かを得て、そして自分自身がそれを何らかの方法で掘り下げ、発展させていく、ということが重要であり、教育の面白い点でもある。

以上の点をこれから見つめ直していかなければならない。

大越祐美子（教育学部 4年）

教養教育の魅力としては、講義内容が幅広く多彩で学生がそれぞれの興味に応じて選択できるということが挙げられると思います。しかしこれは、私たちにとっては悩みの種でもあります。

まず、講義内容が事前によくわからないということがあります。シラバスはもちろん参考にするのですが実際に授業を受けてみて、想像していた内容と違っていたり、逆に第1希望が通らず、第3希望くらいで取った授業がおもしろかったりすることがありました。

シラバスに載せられる内容には限りがあると思います。どんなにわかりやすく書いてくださっても、実際に受けてみないことにはわからない面もあると思います。普通の教育学部の授業などは、1度授業を受けてみて、申告するかどうかを決めることができます。しかし教養の場合、1度目の授業で申告しなければ、希望の多い授業は人数オーバーになってしまいます。

教養は、自分の興味に応じて受けられる授業だからこそ、ゆっくり考えられればよいと思います。

私が受けた教養の授業で、様々な分野で活躍している方々が、リレー形式で講義してくださるという内容のものがありません。それぞれの分野で頑張っている方々は、人生哲学のようなものを持っていらっしゃる、今まで全く知らなかったり、関心なかった分野の話も聞いていても、共感する部分があり、興味深かったことを覚えています。

今は、小学校や中学校においても、地域の方を学校に招いたり、ある分野で活躍している方からお話を聞いたりする機会が増えてきています。しかし私たちの頃は、そういう機会があまりありませんでした。

実際に生活している方のお話には、深みがあり、学ぶところが多くあります。このような授業がたくさん開講されると嬉しいです。

また、教養の授業で私が印象に残っているのは、未修外国語の授業です。私は中国語を履修していました。1年間しか受けていなかったのに、語学の力としてはあまり身に付かなかったかもしれませんが、中国人の先生から中国語を学ぶことは、中国の話も聞いたり、日本と比較して考えてみたり、異文化を知るという面で勉強になったように思います。

語学ということに関して言えば、1年や2年学んだところで、実際に使えるようになるのは難しいかもしれません。しかし、せっかく大学という場で外国語を学ぶことができるのですから、私はもっと異文化について学習したいと思いました。語学力についても、その国について関心があれば、自分から学ぼうとしたいと思います。大学の未修外国語では、そのような異文化への窓口となる授業を展開してほしいと思います。

中森 英隆（理工学研究科 1年）

大学では、自分の専門分野を追求し専門家として自信の持てる自分を創るとともに幅広い学習を通して知性と感性を磨くことが必要です。専門分野に関しては誰にも負けませんが、専門以外は何も分からないというのでは社会に通用しません。このため大学で用意されているのが、幅広い分野から個人の希望する科目を選択し受講できる教養科目です。工学部では、卒業に必要な単位のうち、教養科目は約3割（自由履修単位を含む）を占めています。これは適当なバランスだと考えます。しかし、現状は、工学部は1年次水戸キャンパスで教養科目を学び、2年以降日立キャンパスに移り、専門分野を深く学習することになります。日立キャンパスでは、「必修である共通基礎科目」を除くと週1コマ（年間2コマ）しか教養科目は開講されてい

ません。このため、自由履修単位を教養科目で取ろうと思っても困難です。さらに開講されている科目が毎年決まっており、幅広い選択ができない状況です。

日立キャンパスで開講される教養科目が限定されていたために不便さを感じたことがありました。工学部では、「高等学校教諭一種免許状（工業）」の課程認定を受けており、教職に就こうとする者は、卒業に必要な単位の他に、教育職員免許法で定められた単位を修得しなければなりません。教科に関する科目の同数の単位の修得を持って替えることができます。その一つに「日本国憲法」があります。1年次に受講しようと考えていたのですが、必修の授業と重なり受講できませんでした。そこで、2年以降日立キャンパスで受講することにし、開講されるのをまっていたのですが、結局開講されませんでした。水戸キャンパスにかようことも考えましたが、時間的に困難でした。その

ため、教職免許はあきらめることになり残念でした。教職免許を認定しているのだから、それに必要科目も考慮して日立キャンパスで開講される教養科目を選択して頂きたいです。

また教養科目の内容の面でも、さらに充実を望みます。工学部では、専門分野において、企業で最新の研究をされている方を客員教授として招き授業をしていただく制度があり、これはたいへん興味深い授業でした。こういった授業を教養科目にも取り入れていくべきだと思います。大学教授とは違った新しい視点からの授業が期待できると思います。

4年間という限られた大学時代に、専門分野と教養分野という2つの分野をバランスよく身につけることはたいへんなことです。教養科目の選択の幅が広がりさらに充実した内容になることを期待します。

V o i c e

— 大学生活ココがガッカリ —

北澤 直樹（理学部 1年）

大学に入って最初にガッカリしたのは、未修外国語の選択にあった。選択するにあたって、各々の教官が少し説明しパンフレットを一通り読むくらいの時間しか与えられなかった。高校時代、英語の先生から「大学で一番単位を落とし易いのは語学。」と聞いていたので、未修外国語の選択には細心の注意を払うつもりであった。しかし、このように、十分悩む時間も与えられず、結局後悔する結果となった。パンフレットがあるなら、入学手続きのときにシラバスと一緒に配っておけばよかったのに。せめて、オリエンテーション時にその場で選択するからよく考えておく旨の記述が何処かしらにされていれば良かったのに。何故？ どうして？ 以来、数多くのガッカリが私の脳裏に浮かんでくることになった。

授業全般についてもガッカリさせられることがある。不条理な選択制限やカリキュラム・シラバスの不備について挙げて不毛な個々の利害の衝突の域を脱しな

いので割愛するが、それにも増して残念なのは、代返や代筆という所謂「ずる」が公然とまかり通ることである。大学生ともなれば、ただ授業の勉強をしていればいいという訳にはいかない。将来のための技術・教養を身につけたり、やりがい求めてのサークル活動。自分の小遣いはともかく、経済的事情により生活費まで稼がなくてはならない人々にとっては文字通り死活問題のアルバイト。これらが欠かせない人達には有難いことこの上ない。しかし、理由はどうあれ、代返や代筆によって欠席を出席と偽るのは立派な「ずる」である。サークルやアルバイトをしていようと、友人と街へ遊びに出かけたりダベっていたりしようと。この「ずる」を活用すれば極端な話、一回テストを受ければ単位が貰えてしまうのである。実際、私の友人もこの方法でオイシク単位を得た。筆跡鑑定の特化がいて、代筆は不可能という噂を耳にしたことがある。真偽はともかく、この噂が出ること自体同じ茨城県の国立大学としての二校の知名度・人気の差を如実に表しているのではないのだろうか。しかし、最も残念に思うのは、この悪習慣を最大限に活用している

私自身である。

「他山の石」という言葉がある。言うまでもなく、他の山にあるものは、例えば石であっても良く見えてしまうという意味である。大学進学を目指す高校生の数だけ大学の理想像がある。見事合格し、入学してはじめてその理想とかけ離れた現実を目の当たりにする。然るに、多かれ少なかれ誰もがガッカリするのだ。しかし、いつまでもガッカリしてはいられない。時は止まってくれない。このガッカリを口実に情落するのは簡単だが、それは逃げでしかない。大事なはこのガッカリを全くなくすのは無理にしても、後輩のため、未来のため、そして何よりも私達自身のために少しでも少なくすることである。誰であろうと、好き好んでガッカリしようとする人などいないのだから。

— 学園生活における期待はずれと反省 —

梅原 済（農学部 一年）

待ちに待った学園生活！いやーそりゃあ大学には色んな期待を持って入学しましたよ。何しろ、マンガやドラマの学園なんて、登場人物は皆生き生きしてるし、それに何か大学生っていうと何だかこう、インテリジェンスでカッコイイ難しそうな研究もできると思って。

しかし、実際フタを開けてみるとコリヤマイッタ。これは最近の若者の特徴なんスカねー。身内の少人数の派閥に分れちゃって、学生同士のもっと深い交流というか、そういう「仲間の一体感」みたいなのが感じられないんスよね。何か無味乾燥というか。

あー、あと講義。これも難しいし眠いし、退屈なの

が多いんですよ。僕は実はこう見えても、普段から科学雑誌を読んじゃうような、そりゃあもう勤勉少年なんです。いやいやホントですぜ。農学とか科学についての興味は人一倍あるつもりなんです。しかしねえ、大学の講義って何て言うか……。確かに自分の興味ある分野に関する講義は聴いてて面白いんですけど、興味ない分野に関してはサッパリです。さらに辛いことには、卒業するためには、いくら興味がなくても眠くても槍が降っても、単位を稼ぐためには仕方なく講義を取らなくちゃいけないことですね。ハアー

今考えてみますと、自分の抱いていた学園生活のイメージと現実とのギャップに驚きあきれられるばかりです。いやいや何も僕だけじゃないと思うんですよ。恐らく僕ら新入生はこの時期、皆同じ心境なんじゃないですか。

でも最近僕思ったんです。思えば友人関係だって同じ学科内やアパートとか、友人を作る環境はちゃんあるのに、自分から友人を作ろうとしないから「友人の輪」がなかなか広がらない。講義についても、分からないことがあっても先生に質問することをせずに「難しい講義だった」の一言で片付けてしまう。だから、大切なのは自分のイメージとは異なってしまった現実を、coolに受け入れて、それを能動的に昇華していくことなんだって思うようになったんスよ。後悔ばかりして何も動き出さなきゃ「前進」できないですからねウンウン。良いこと言うなあ。

教養教育古今東西 — 東海村臨界事故と教養 —

臨界事故を契機に考えてみたい。あなたの意見は次の二つの説のうち、どちらに近いか。

その1。[A説] 10km圏に屋内退避勧告が出たが、茨大は12kmだから安全だった。もし原発で大事故が起きたら、今回の勧告のように家でじっとしていよう。

[B説] 10kmと12kmと、どう違うのか。チェルノブイリ事故では、風向きや雨の影響で、むしろ遠い所に高汚染地が生じた。それに、今回はこの程度ですんだか

ら屋内退避でよかったかもしれないが、大事故の時には一目散に逃げたほうがいい場合もある。屋内退避では逆に被爆者を増やす危険がある。

その2。[A説] 当局は機械で空中の放射線を監視しているし、農産物も安全だといったから大丈夫だ。

[B説] 今回の事故でそれほど神経質になる必要はないが、「安全宣言」の根拠を確認することが大切だ。呼吸もせず食料も食べない機械では体内被曝は測られ

ていないし、現に、ろくなデータもなしに「安全宣言」したあとで、ヨウ素のたれ流しが判明した。出されたデータも、測定地点や検出限界、採取日時がはっきりしないなどの問題があった。

その3。[A説] 政府は、レスキュー隊を作って一元管理を強めるという。ぜひやってほしい。[B説] そんな決死隊に誰がなるのか、人の身にもなるべきだ。到着には時間がかかるし、処理には現場熟知が必要だから、施設内に日常的に処理班を作っておいたほうがいい。それに、国が一元管理すればデータが隠されたり、地元の意向より国の判断が優先されて、避難が遅れたり地元民が見殺しにされる恐れが逆にある。

その4。[A説] 規定違反のJCOが悪い。事故は人為ミスや管理体制の不備によるから、その防止に努めつつ、原発を進めるべきだ。[B説] JCOが悪いのは当然だが、いくら慎重にやっても人間だからミスは起きる。ミスが許されない原発そのものに無理があると考えると、縮小をはかるべきだ。

その5。[A説] 原発は地球温暖化防止に有効な、石油にかわるエネルギー源である。[B説] 電力はエネルギー消費の一部でしかないし、原発も石油を使って作られるから、温暖化防止にさほど有効ではない。ウランの可採年数は石油より短く、増殖炉を用いてもプルトニウムの倍増には50年かかるから、石油の代替にはとてもなれない。現にアメリカでは過去20年間原発の発注はなく、欧米諸国でも原発は縮小傾向だ。日本はこうした点こそ、欧米に学ぶべきだ。

権力や権威をもった人のいうことが、必ずしも正しいとは限らない。日本人は戦前に苦い経験を味わったが、現代は違うといいきれのだろうか。「教養を身につける」というのは、権力や権威を盲信することなく、人々が自らの頭で情報を取捨選択し、正しく判断できる力を養うことである。原子力をめぐって、いま、日本人の教養の程度が鋭く問われている。

河野 直践 (人文学部)

事故のあとで、私は、総合科目「システムとは何か」(責任担当：関友作助教授)の中で、1回分を担当する機会を得た。テーマは「現代社会における科学技術系人材の育成・配置問題」であった。私たちの生きている社会では、科学技術というものが無視できないどころか、ある意味で、私たちの意思にかかわらず、私たちの生き方自体を決定する力を持ってきており、一人ひとりが、科学技術に関する情報の取捨選択をする力と、情報の入手ルートを確保する力を持たないと、自分が自分らしく生きることさえ困難になってきているという話と、科学技術関連情報が極めて高度化し、偏在化し、自律化しているから、個人のレベルですべての情報を日々更新することが不可能となり、社会全体としては、すべての情報を備えておいて、各個人は必要に応じて、必要のところから、必要な質の情報を自由に取り出せるような人材配置を伴った社会システムが確立される必要があること、そのような知識・情報のマネジメント能力が私たちに求められること、などを話すことになった。

この授業の後半で、「今回の臨界事故について、そ

れに関わっていたさまざまな人やエージェンシーを書き出して、それらの間にどのような情報の流れがあったのか、また、あるべきだったのか、を図示し、どのような「つなぐ人材」をどのようなところに介在させれば、社会全体に必要な情報が必要な時に流れるシステムとなるかを考えてみよう」といった具体的な作業を行った。そのレポートを眺めてみると、本学の学生さんたちのこの問題に関する意識は極めて高いこと、そして、情報の流れに関しても、かなり正確に把握していることがわかった。ただし、関連する科学技術専門知識を正確に理解できていると考えている学生さんは少ないようであった。

では、科学技術知識を各自、身につける必要があるのかということ、なかなか回答が困難である。私たちの身の回りには、じつにさまざまな高度な科学技術とその成果が溢れかえっている。関連知識量は、おそらく指数関数的な勢いで増加しているに違いない。だから、知識をもれなくカバーすることが本当の意味で、高い教養を持っていることを意味するかどうか、検討が必要だろう。むしろ、溢れかえる知識や情報を、自

分の主体性にしがって管理・経営する能力，知識経営能力を身につけることのほうが大切なのではなからうか。必要な情報をどのようにしたら入手できるか，情報の質を確認するにはどうすればいいか，配信される情報の背後にある発信者の見えない意図をどのように解読するか，自分なりの組み合わせで新しい独自情

報を生み出し，それを自己の意志決定にどう生かすか，そういったことのできる力もまた，現代的な意味での教養の一形態なのではないだろうか。そんなことをこの授業を通して改めて感じた。

小川 正賢（教育学部）

皆様もご存じのように，核燃料加工会社ジェー・シー・オーの東海事業所において，9月30日午前10：35分頃から，「臨界事故」が起きました。この臨界事故は，一般住民を含めて69人もの被爆者を出し，農・水産業および商業や交通に多大な損害を与えました。この大事故を引き起こした会社側および作業者の話を聞いていると，大学教育において，「専門教育」のみならず「教養教育」の重大さを痛感いたしました。

新聞報道によると，作業者は，「ウラン燃料と臨界について知らなかった。危険性の高い作業をしている認識はなかった。沈殿槽の攪拌装置を使用した方が溶液攪拌を効率良く短時間でできると思った。」等の話をしていました。また，会社側は，「溶解槽よりステンレス製のバケツ容器で攪拌した方が作業し易く時間短縮できると思った。従業員の安全教育および監督を行っていなかった。」等の話をしていました。私の個人的な意見としては，放射線業務従事者の「常識(教養)」とも言うべき「ウラン燃料と臨界」について知らなかったとは信じられないし，「国の認可を受けた作業行程」を無断で変更することなど到底考えられるものではありません。また，作業マニュアルを担当者が勝手に変更することや従業員の安全教育および監督を怠っていたことなども信じられないことです。「常識(教養)」ある人物が，どこかの時点でこれらの過ちを正

していたら，このような大事故は起こらなかったように思えてなりません。

我々，多少なりとも原子力に関連した教育研究をしている者は，「放射線管理業務従事者の教育訓練と健康診断」を，少なくとも年に1回は義務付けられており，「ウラン燃料がある一定以上集まると臨界に達し，核分裂連鎖反応を引き起こす。」ことは当然知っており，その安全教育を徹底して行っています。ジェー・シー・オーの会社側は，我々と同様に，従業員を教育監督し，安全を守る立場にあり，その義務を怠っていたことには，重大な責任があると言わざるを得ません。

現在，機械工学科では，①洞察力や倫理的思考ができ，物事に柔軟に対応できる基礎学力を身につける教育，②自ら問題点を探求し，解決する方法を思考し実践できる能力を身につける教育，③知的好奇心を刺激するインタラクティブな授業を有機的に組み合わせた教育，④学生に本物の学問を伝え，人を育てることを重視した教育等を目指して，「専門教育課程」の再編成を終了し，「教養教育課程」の再編成を行っています。近年中には，茨城大学全体として，新しい教育体系を確立することになります。茨城大学の卒業生が，「常識」を持ち，「個性と感受性」に富んだ「グローバルな社会人」に成長することを期待しています。

車田 亮（機械工学科）

教 養 教 育 N O W

国立大学が国立ではなくなる!?

最近、新聞でも報道されるようになってきたので知っている諸君もあるでしょうが、国立大学の在り方をめぐって大きな問題が論じられているので、このコーナーを利用して少しばかりの情報提供をしましょう。

政府は今、行政機構の大改革を行っていて、その一つとして、今までお役所がやってきた仕事のかなりの部分を切り離して、新しく作る「独立行政法人」に任せようとしています。そうするとお役所がスリムになって、行政が効率化されるとともに、人員もお金も切りつめることができるであろうということです。そのため去る7月には「独立行政法人通則法」という法律が制定されました。

そのような流れの中で、全国に99ある国立大学も今までの形を変えて、そのような「独立行政法人」に転換すべきであるのか、そうすべきではないのかについては2003（平成15）年度までに結論を出すということになっていました。

しかし、文部省はその結論を急がなければならない

ということで、去る9月20日に「国立大学の独立行政法人化の検討の方向」という方針を出しました。これは国立大学における研究とか教育とかの特性を考えたとき「独立行政法人通則法」に定めた通りにはできないので、特例措置をいろいろ考えなければならない、その特例措置を考えるとときのいくつかの基本的な前提や方向正をまとめたものです。この方針は国立大学を独立行政法人にするということを前提としており、しかも来年度の早い時期に結論を得たいと述べているところから、全国の国立大学に対して大きな衝撃を与えました。そして、今、あちこちで様々な形で「独法化問題」として論議されております。

この「独法化問題」は従来の国立大学の在り方に、したがって学生諸君の勉学や生活全般に対して大きな変更をもたらすものです。その内容について紹介する余裕がこの欄にはないのが残念です。今後いろいろな形で報道されたり、あるいは大学側から情報提供がされたりする機会を利用して、この「独法化問題」についていっそう理解を深める努力をされるように期待します。
(江幡)

投 稿 !

— 茨大生と外国人学生 —

國谷幸太郎（入社3年）

去る11月10日（水）に、国際交流会館（通称：留学生会館）で茨大生（日本人学生）と外国人学生の交流会を行いました。

現在、茨城大学には200名を超える外国人学生が在籍しています。しかし、その彼（女）らとの交流は余り行われていないようです。交流がないということは、我々茨大生にとっても、外国人学生にとっても非常にもったいないことです。

今回の交流会は、普通の茨大生が企画・運営しました。大学でも、サークルでもなく、ある講義（比較文

化論）の中から始まりました。モットーは『楽しく、気楽に、安く！』でした。企画・運営が仕事に感じないように進めていきました。結果的に、交流会には茨大生・外国人学生含めて70名を超す人が集まり、多少(!?)混雑はしたものの、帰る時には「楽しかった。また来たい！」の言葉を頂きました。参加者を募集する際には、ポスターと口コミで集めたのですが、ほとんどが口コミでの参加者でした。皆さんも『多国籍料理!!』などというポスターを目にしませんでしたか？興味があっても連絡はしづらいものです。

これからも、小規模ながらも交流会を行うつもりです。興味のある方、ポスターを見逃さないでください。今回、交流会を企画・運営した人は勿論のこと、参

加した人も良い経験ができたのではないのでしょうか。茨城大学で、このような活動が活発になることを願い、頑張っていきたい。

また、学内の留学生センターでも情報が入手できるので是非利用してもらいたい。

(E-mail:L27078@mcs.ipc.ibaraki.ac.jp 國谷幸太郎)

掲 示 板 コ ー ナ ー

企 画 室 か ら

1. 教養科目後学期定期試験について

教養科目の後学期定期試験が、2月1日(火)~7日(月)に実施されます。定期試験の時間割は試験の1週間前に掲示されますので、各自確認の上、受験上の心得に則り学生証を持参し、受験してください。

なお、学生証紛失等により再発行を希望する場合は、学生センター証明書関係窓口に申し出て下さい。

2. 後学期成績通知書の交付について

後学期に履修した教養科目の成績通知書は、4月初旬、各自の所属学部において交付されますので、所属学部の掲示板に注意してください。

3. 講義棟内の携帯電話の使用について

講義棟内や公共の場では、携帯電話の電源を切っておくか、マナーモードに設定しておくようにしてください。

掲 示 板 に 要 注 意 !

学生用掲示板は、学生諸君に連絡事項を伝達するための、唯一の方法です。

必 ず 掲 示 板 に 一 目

掲示板には、大学の行事、休講のお知らせ、教室の変更、学生呼び出し、試験及び授業に関することなど、学園生活に必要な事項が掲示されます。

掲示板を見ないことにより、所定の期日までに手続きなどができず、不利な取扱いを受けることもあります。

登校、下校、授業の合間の際に掲示に注意して下さい。

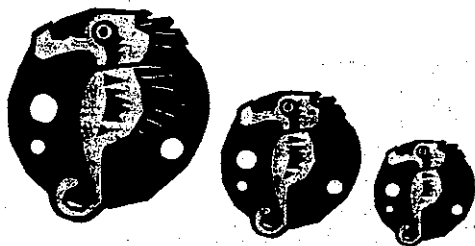
— 毎日1回は見よう —

自 転 車 の 駐 輪 に つ い て

現在、水戸キャンパスは種々の工事に伴い、学生諸君には大変ご迷惑をおかけしておりますが、大学教育研究開発センターとしては、臨時駐輪場を設定しました。

歩行者及び車輛等の通行に特に支障をきたしておりますので、自転車の駐輪に際しては、定められた場所に駐輪してください。特に道路上の駐輪については、事故の起こる可能性が非常に大きくなっています。指定された駐輪場及び臨時駐輪場に、他の人に迷惑のかわらないように駐輪してください。

学生諸君のご協力をよろしくお願いします。



つ ぶ や き

みなさん！明けましておめでとうございます！

古い年に対してどのようにさよならをしましたか。そして、今から始める新しい1年に対してどのような希望と努力を託しますか？

「青春時代の真ん中は道に迷っているばかり！」「青春時代が夢なんて、後からしみじみ思うもの！」というフレーズは、学生諸君にとっては全く古すぎるものかもしれませんが、イミシンなのではないでしょうか。どうぞこの1年は（も）道に迷うことを恐れず、夢を追いかけて精一杯努力して欲しいと思います。

ところで今回の「ローザ・プルムラ」の出来はどうでしょうか。久方ぶりに投稿が寄せられたので掲載することができました。うれしいことです。これからも共通教育棟の1階にある「教養教育Q&A」ボックスへ続々と投稿が続くことを期待しています。学生諸君からの投稿が多いので予定原稿を次号にまわそうか、それともページを増やそうかといった苦労は編集者の夢見る贅沢な悩みなのです。

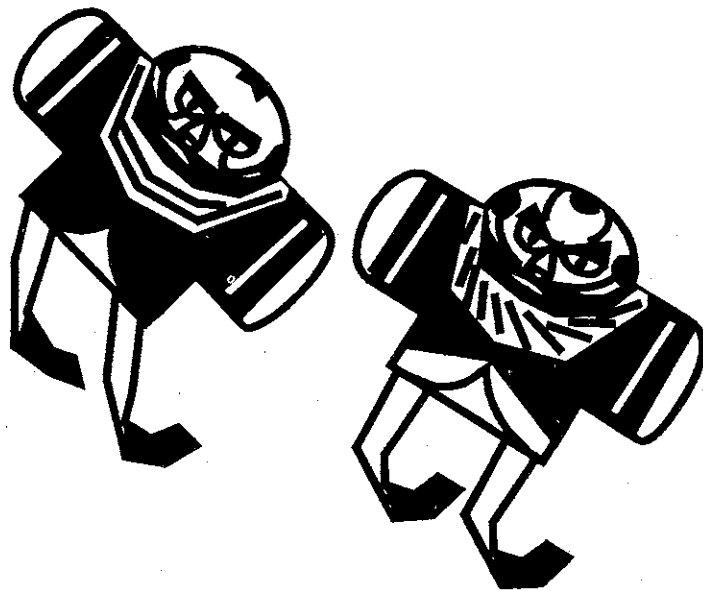
編集にあたっては毎号少しずつ工夫をしているつもりなのですが、なかなか認めてもらえないのでしょうか？他の号と比べて、あるいはまとめて読んでみたいと思った諸君はどうぞ、同じく共通教育棟の事務室を尋ねてください。（Ebahiro）

発行日 平成12年1月

発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター

水戸市文京2-1-1

029(228)8416(企画室教養教育係)



Rosa Plumula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター No.16

目次

巻頭言	1
センターから	1
専門部会から	2
キャンパス情報	5
教養教育一口アドバイス	
— 教養科目でこれやっちゃダメよ —	7
Voice	
— 私の出会った	
ステキな授業、ヘンな授業 —	9
教養教育古今東西	10
掲示板コーナー	11

(平成12年4月発行)

新入生の皆さん入学おめでとう。今年も奇しくも西暦2000年、20世紀最後の年、新千年紀の始まりの年に当たります。皆さんが卒業する時には、すでに21世紀が始動しており、まさしく世紀の転換期に大学生活を送ることになります。これまでの歴史を振り返ってみても、世紀転換期には、社会構造、技術、思想など多方面にわたって大きな変化が生じております。しかし、いかなる変化の大波が押し寄せようとも、大学の基本、教育の原点には失ってはならないものがあるはずで、19世紀末から20世紀前半にかけて活躍したドイツの建築家グーリット (Gurlitt, C) は、教育について次のような含蓄ある言葉を残しており、20世紀末の現在でも傾聴すべきものがあります。

「考える術 (すべ) を教えるべきで、考えたことを教えるべきではない。」

これは専ら教師が心すべきことではありますが、学生の側に裏返してみることでもできます。大学では考える方法を学ぶのであって、結果のみを学ぶのではない、と。学生は学問の単なる享受者ではなく、理解したことを踏まえて新しい考えを生み出す力を持った人材となることを期待されているのです。しかし、実際には「考える術」それ自体を教える科目は存在しません。教養科目であれ、専門科目であれ、いろいろな授業科目を付された授業の全てから、これを体得することが求められているのです。

(佐藤)

センターから — ようこそ新入生諸君! 「教養教育です」 —

新入生のみなさん御入学おめでとうございます。

いよいよ4年間の大学生活がスタートすることになり、多くの人にとっては新しい生活へ向けての期待と不安が交錯しているのが現実ではないでしょうか。

あわただしくガイダンスを受け、自分なりの時間割りを決めて、一息入れる間もなく、授業に突入し、あげくは学生としての心構え、茨城大学で学んだ成果を社会の中で明確なカタチで示すことが求められるなどといった、精神訓話も含めた、情報の嵐が無秩序ともみえるように襲ってきます。かつて、入学後の情報に圧倒されたか、情報の希薄さにショックを受けた学生の無気力状態を「五月病」などと呼んだ時代があります。今では入学直後の「無気力学生」はあまり問題にされていませんが、多くの方が大なり小なりのストレ

スを受けていることも事実です。たるまず、いきまず、まずは淡々としたスタートを切ることです。そして、あらゆるものには、多様な側面があり、「くだらない、つまらない」と思った授業も、見方によっては味わい深いものがあることを発見して下さい。授業の中身は半分以上あなた自身が決めるものですから。

落ち着いてきたら、4年間を充実して活かす工夫をしましょう。キャンパスライフは、むろん、勉強のみではなく、部活や様々な人との交友など、幅広い活動によって、成り立つものです。このような多様な活動の機会に恵まれるのは、学生時代の最も素晴らしい特権だと思います。この機会を存分に活かし、あなたの人生において最も恵み多き時代にしなければなりません。

勉学についていえば、皆さんは、それぞれの専門領域に志を持って入学をされたことでしょう。その専門の領域を早く極めたいという気持ちも理解できます。しかし、大学では専門以外の多くのことも同時に学ばなければなりません。専門以外の科目は「教養科目」と呼ばれていますが、実は皆さんが、専門家として将来大成するかどうかは、これらの科目の意義を理解し、しっかり身につけるかどうかにかかっているといっても過言ではないでしょう。教養科目を学ぶことで、専門科目の位置付けを理解し、社会の中での役割について客観視できるようになるでしょう。一見専門の分野とかかわりのないように思える分野が、意外な結びつきで、将来直接役に立つ情報になることも多々あります。学生時代から、狭い専門分野に特化し、ある範囲

のことしか関心を示さないようであると、ある限定した分野でとても役に立つ歯車になる可能性はあっても、創造的な仕事をする力は育まれにくいかもしれません。

有意義で成果の大きい学園生活のために、最も大切なものは健康です。健康を損なうと、あらゆるものが破綻することになります。健康を保持するのに、最も重要な要因は、「食生活に気を配ること」と「過度にストレスをためない工夫をすること」です。キャンパスライフがいつも外に開放されていることも大切です。自分だけの閉鎖回路にいつまでもとどまると、気がめいり、やがて身体の様々な不調となって現れます。総合大学の利点を活かし、教職員を含めた様々な人と交友する機会を積極的に創って下さい。(服部)

専門部会から — 諸君の受講を待っています —

外国語科目専門部会

社会の要請に応え、時代の趨勢に即応するために本学の外国語教育も徐々に、しかし、確実に変わっていかようとしています。教養教育の改革の検討がなされるなかで、外国語科目に関してもセメスター制が導入され、更には、トーフル及びトーイックのスコアによる英語の単位の認定が可能になります。その他、英語の能力別クラスが工学部1～3年次生向けクラスに新設され、また、工農2年次生向けの水戸地区での独語Ⅲの夏期集中講義が廃止され、工農地区での独語Ⅲの履習が可能になり、これまで以上に便利になります。

セメスター制については、従来通年2単位であった外国語科目が、前期、後期、それぞれ半期で完結し、半期毎に1単位が認定されることとなります。今年度に関しては、学生諸君は前期、後期とも同一クラスで同一教官のもとで教わることとなります。トーフル及びトーイックについて言えば、前者が米国やカナダの大学ないしは大学院に留学するのに相応しい英語力があるか否かをみる試験であるのに対して、後者は企業が社員の海外派遣や人事評価の際にどれだけ英語力があるかをみる基準として利用されるものです。本学では、それぞれのスコアに応じて、然るべき英語の単位を学生の申請により認定することになっています。な

お、トーフルの試験は毎月、トーイックの試験は年5回実施されていますのでチャレンジしてみたいかがでしょうか。(笹倉)

健康・スポーツ科目専門部会

新入生の諸君、入学おめでとう！さあ、新たな青春の1ページを開く時です。さて、悔いのない4年間の大学生活を過ごすためには、なんといっても心身ともに健康であることが絶対条件です。特に、激しい「受験戦争」の戦士だった諸君の体力は、極度に低下していることが、政府の「青年白書」等のデータからもハッキリしています。諸君の入学後の最初の仕事は、運動やスポーツをみんなと一緒にやることです。

茨城大学では、そのためのひとつとして、「健康・スポーツ」の授業を開講しています。1年次の前期か後期に15回、そして2年次にも同様に、計2単位が必修授業として用意されています。その内容は、①大学生活をエンジョイできる程度の体力をめざすコンディショニングコース、②よりハードな競技力を試すトレーニングコース、高校までチョット体育苦手だった君には③トリムコースが設定され、それぞれに、サッカーやテニス等のボールゲームやスキー等のレクリエーションが、また、エアロビック・ジャズダンスやサイ

クリング、ジョギング等の健康づくりが進められています。

高校までと異なること。それは、各種の専門家（コーチ）が、諸君の意欲と自主性を引き出して、スポーツを通したコミュニケーションづくりを展開していること。

さあ、諸君、週に1度は、全力でスポーツ、スポーツ！そして、チームメートとの語らいを！（岡本）

情報関連科目専門部会

最近、IT (Information Technology: 情報技術) 革命という言葉をよく耳にします。皆さんはITの波に乗っていますか？近年、集積回路技術の高度化によって高性能コンピュータの価格が低下し、驚くほどの早さで社会に普及してきました。現在では、コンピュータがあまりにも身近になったため、もはや、コンピュータ無しの社会は考えられない程です。コンピュータの普及は社会のあり方を大きく変えています。特に、通信技術との融合によるインターネットはこれまでの社会の常識を根底から覆すかもしれないといわれています。まさに、情報技術による社会革命です。皆さんが大学を卒業する数年先には、インターネットやウェブばかりでなく、さまざまな情報技術を使いこなせなければならない時代になっていることでしょう。

情報関連科目では、コンピュータの最も基礎的な使い方とそのマナーを勉強します。コンピュータにとってどのような仕事が得意でどのような仕事が苦手なのかまで理解できれば履修の目標は達成です。また、情報技術を専門科目でも履修予定の人は、この講義を経た後に、専門科目でさらに高度な勉強をします。

これからの社会で楽しく生きるためにも、また、時代に取り残されないためにも、情報関連科目は重要です。実習が主ですので、楽しんで学習してください。

(奈良)

人文科目専門部会

すでに終わったことですが、受験勉強はどうでしたか。問題をすぐに解くための公式、長文を読むための英単語など、短時間で膨大な量の暗記を強いられたことでしょうか。世界史や日本史の教科書にあったラブレ

ーや紫式部の名前を覚えたものの、ゆっくり読む暇もなかったというのが本当だと思います。文化的な項目に限りません。政治的な事がらでさえ、原因や結果をゆっくり考察してこなかったでしょう。

さて、大学に入った学生諸君は、今こそ人文科学を探求する面白さを味わって下さい。人間、それをとりまいている社会に対して、より多岐的なアプローチをする、ヨコに書かれたものをタテに読みこむ、一つまり、自分の頭で考え、心から納得し、感性を震わせつつ理解していくのです。記憶とは何なのか、荘園制度の中で人はどのようなことを考えていたのか、一人人間はどんな存在なのか……文献を調べる方法を学び、討論し、ビデオで映像を観たり、と様々な方法で知的な興味が刺激されることは間違いありません。広い意味での「教養」は、専門研究を選ぶ意味があることは勿論、感性的な把握と知識とを結びつける点で大切であり、楽しいものなのです。（杉井）

社会科目専門部会

西暦2000年、今年は言うまでもなく20世紀最後の年である。2000年には二つの言葉がついて回る。一つは、世紀末。この言葉には、なにか退廃の意味が含まれている。もう一つは、ミレニアム (millennium)。欧米で盛んに使われている。次の千年間の始まりを祝おうとする明るい意味が含まれている。イギリスではドームまで作ってしまった。

さて、新入生諸君、君たちは、このような二つの意味で表現される20世紀最後の年に本学に入学した。卒業は、いくら早くても、その時はすでに21世紀である。21世紀の日本、否、世界を担う諸君に期待されるのは、言い古された感があるが、「Think Globally, Act Locally」の態度である。

社会の分野は、シラバスの英語表記にもあるように「社会科学」(Social Science)を別の言葉で表現したものである。「社会科学は、社会現象を対象として研究する科学の総称」(広辞苑)である。それぞれの専門科目のハードな時間に飛び込む前に、社会の分野の諸先生が説き明かす社会のしくみの探検に参加してみようではないか。（飯塚）

自然科目専門部会

新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。いくら暖冬であったとは言え毎朝起きて出かける暖かい教室があるというのは心よいことだと想像します。

さて“自然系の科目について”ということなのですが、少し困っています。何故なら、一口に自然系とはいってもその中身は様々で、高校まで理科と数学といわれてきた科目の総称だからです。もう少し詳しく書けば、数学・物理・化学・生物・地学というわけですが、これでは説明になりません。

私自身が数学を専門としているせいも、最近その他の自然系の区別がよくつかないのです。それは私のひどい不勉強だけが原因ではなく、個々の学問の多様化・細分化が進む一方で、逆に最先端においては融合・組み替えがおこり、伝統的な分野による分類の意味がなくなってしまったからだと思います。しばらく前までは、個々の分野で閉じて議論できた問題が、次第に数学の問題でも物理と生物の視点とか、化学と地学とかを同時に視野に入れなければ解決できなくなってきたのです。

我が国ではあまり見られない現象ですが、欧米では複数の自然系分野で活躍している研究者、或いはそこまで行かなくても、複数の理論を自在に操る研究者がたくさんいるような気がします。どうしてそのようなことが可能なのでしょうか？確かに我が国の教育制度が必ずしもそのようになっていなかったこともその一因ですが、わが身をしみじみと省みれば、常に多様な角度からものを眺められる姿勢こそが重要だと思います。2000年を迎え、ギリシャ時代の哲学者やルネッサンス期の哲人を懐かしみ、ここはぜひ様々な自然系の科目の授業・演習・実験に参加して多様な見方を身に付けてみてはいかがでしょうか？

何かを始めるのにもう手遅れということはないようです。
(堀内)

総合科目専門部会

教養科目はいくつかのグループに分かれています。総合科目はその中の一つで、国語、数学、英語というような特定の教科に分類するのが難しいような科目が集められています。もう少し詳しく言うと、環境問題などのようなさまざまな分野に関わりのあるテーマを扱ったもの、最近社会で注目されている題材を扱ったものなど、総合性や学際性の高い内容のものが集められています。全体として、総合的な判断力や広い視野を養うことを目指しています。

このような特長を十分出すため、総合科目では一つの科目を複数の教員で担当したり、多くの学外講師を迎えたりする科目を数多く用意しています。このことは他の科目にはない総合科目の特長の一つです。このように総合科目は内容的にも授業形態としても非常に多様ですので、総合科目の授業案内（シラバス）には特に注意を払ってほしいと思います。

また、今年度から、各総合科目のシラバスや担当者の諸情報を、学内LANやインターネットなどから引き出せるようにする予定です。さらに、教養教育係の中にも端末機を置いて、学生の皆さんが自由に使えるようにする予定です。授業科目の選択にぜひ活用してほしいと思います。これは新しい試みで、より使いやすいものに整備している途中でもありますので、使ってみて意見などがあれば教養教育係にお伝えください。

(曾我)



キャンパス情報

人文学部から

新入生の皆さん

入学おめでとうございます。

人文学部は、人文学科、社会科学科、コミュニケーション学科、により構成されています。

人文学科の特色は、人間科学、歴史・思想、日本・中国文化、欧米文化、といった人間と文化に関する学問を少人数教育として学ぶことにあります。

社会科学科の特色は、経済学、法律・政治学、経営学、社会学、といった社会にかかわる学問を少人数教育として学ぶことにあります。

コミュニケーション学科の特色は、言語情報、言語コミュニケーション、コミュニケーション動態、メディア環境、といった文化の基礎となるコミュニケーション行為の構成と機能に関する学問を少人数教育として学ぶことにあります。

専門科目の修得は2年次からですので、その修得に全力を注入できるよう、1年次では教養科目を定められた通りに完全に履修することが望まれます。大学生活に頓挫する原因の殆どは、これが履修できないことにあります。その意味では、1年次のあり方が大学での学問・研究のその後を決定するといえます。頑張ってください。(梅田)

教育学部から

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

茨城大学教育学部は、基本的には小学校、中学校、高校、養護学校などの、高度の専門的知識と幅広い視野を持った教員を養成しようとする学部ですが、それだけではありません。情報文化課程は、情報化が私たちの社会や文化、生活にどのような影響を与えるのかを、立体的・多角的に究明するとともに、新たな情報文化を創造し、になえる人材の育成を目的としています。また、人間環境教育課程は、さまざまな今日的課題に対処するために、各分野の専門的知識を持つとともに、「専門家と一般の人々をつなぐ働き」も十分に果たすことのできる人材の養成を目指しています。

私たちの学部は、人文社会科学を専門とする教員と自然科学を専門とする教員が120人ぐらいいて幅広く学ぶことができますし、1年生のときから選修(たとえ

ば理科選修、英語選修など)と呼ばれる比較的小人数の単位からなるクラスメートと一緒に行動することが多く親密な交流ができる所です。

また私たちの学部には、研究面でも教育面でも優れた先生が大勢おられます。国内だけでなく国際的に活躍されている先生も多いのです。どなたがそのような先生かはここには書きません。それはこれから皆さん自身が見つけ出す楽しみを奪ってしまうことになるでしょうから。大学生活が有意義なものになるかどうかは、自分自身が本当にやりたいことを見出せるかどうか、今後もし付き合い合える友達を得られるかどうか、見聞を広めいろいろな経験をすることができるかどうか、というようなことに加えて、そのような(人間的にも)優れた先生を見出し親しく「付き合う」ことができるかどうか、に大きく依っていると思います。ぜひそのような先生を見つけだして下さい。Good luck!

(竝木)

理学部から ———— 学ぶ楽しみ ————

新入生の皆さん入学おめでとうございます。特に理学部を選んで入学してきた皆さんには、自然科学の洋々たる学問の海が待っています。その中で自然科学を学ぶ面白さを十分に満喫していただきたい。しかし、

最近の自然科学は急速に発展したり、総合化されたりして複雑になっています。やはり、基礎学力がないと楽しみも半減してしまいます。特に1、2年生では専門基礎科目をしっかり勉強して、幅広い基礎学力を身に付け専攻科目の勉強に備えてください。

そして教養科目も疎かにしてはいけません。語学や

情報処理はこれからは必須です。分野別科目や総合科目の中には卒業しても忘れられない科目や、いろいろな場所で役に立つ科目がきっとあります。専門以外のことを多く知っていると人生もバラ色になります。特に1, 2年生では幅広い分野の学問の壁にどンドンぶつかって楽しんでください。

専門も教養の講義もただ聞いているだけではつまらないです。わからないところやもっと深く聞きたいと

ころはいつでも積極的に教官に質問してください。時には研究室に押しかけて行くのもよいでしょう。時間さえ空いていればきっとやさしく答えてくれるはずですよ。大学の勉強はただ与えられるものを待つのではなく、自ら積極的に求めていく姿勢が必要です。学ぶ楽しみも人それぞれに違いがありますが、自分流の楽しみ方を見つけて大学生生活を充実したものにしてください。(三輪)

工学部から

「超整理法」(野口悠紀夫著, 中公新書)という本が以前ベストセラーになったことがあります。読まれた方も多いかと思います。誰もがきちんと整理できていたら探し物で時間を掛けたり、慌てずにすんだのにと後悔した経験をお持ちでしょう。これは古くからの人類のテーマであり、過去いろいろな整理術の本が出版されています。だいたいどの本も、整理=分類、という発想で書かれています。しかしこの本は、整理は何のためにするのかという原点に帰って考え、後で取り出す=検索、がポイントだと気づき、ファイル押し出し法という、コストのかからない、今流に言えば人間にやさしい方法をあみだし、提唱しています。整理するという考えを「超」えた発想の転換があります。

いま我々の行動は一流指向です。一流大学へ行き、一流会社に就職すること、他の人より豊かな一流の生活をおくる。決して悪いことではないでしょう。しか

しその前に考えるべきことがあります。自分はどのようなのか。どんな人生を目指そうとするのか。人との競争で勝ち一流になることではなく、自分にふさわしい、努力する価値のあることがいろいろ見えてくることと思います。

私はいま「超一流の講義」を目指して頑張っています。厳しいけど受講してみてもよかった、知識だけではなく、考え方を学んだ、人生が啓けたとみなさんが思うような講義を目指しています。工学部には私のように思い、すでに実践し成果を挙げておられる先生方も多数おられます。ただ「超一流の講義」は教師だけの努力だけでできるのではなく、学生の皆さんの心意気と我々の創意工夫がマッチして初めて実現します。工学部における学園生活を通し、皆さんが一流、二流を超越した高い考え方を身に付け、自分の能力を最も活用する「超一流の人生」を築くためのワンステップを踏み出すのを応援します。(鹿子嶋)

農学部から

農学部はこの4月から改組して3学科編成になりました。生物生産科学科、資源生物科学科、地域環境科学科の3つです。今までは生物生産科学科と資源生物科学科の2学科で、1つの学科の中にいくつかの異なった専門分野がありましたが、こんど地域環境科学に関する分野が独立して少しすっきりした形になりました。

新入生は入学時に3学科に分かれるので、そのことを2~3年次生よりよく知っています。2~4年次生は2学科編成のまま進行するので、3学科になったことの直接の影響はありません。ただし、留年すると面倒な事にならないとも限りませんので、特に2年次生は必修の単位をできるだけおとさないように心掛けて欲しいと思います。

農学部キャンパスでは、この4月から新築の福利厚生施設がオープンします。今年の2月までに、キャンパスの片隅にぼつんと取り残された古い建物の中の食堂と売店を利用してきた3年次生以上の学生と職員にとって、このことは特に感慨深いものです。教室棟に近くて新しい福利厚生施設を利用できる今年の農学部生は(職員も)幸せです。

この新しい福利厚生施設の南側に、これから研究室管理の温室などいろいろな実験圃場や施設が整備される予定です。

4月には弓道場も改築されて使えるようになります。テニスコートがいま使えない状態なので、できるだけ早く整備して下さるように関係者の方々にお願いいたします。(軽部)

教養教育—口アドバイス — 教養科目でこれやっちゃダメよ —

松田 哲 (人文学部 3年)

新1年生の皆さん、御入学おめでとうございます。なんてセリフは聞き飽きていると思うので、さっそく1年次の教養科目履修について、私の失敗・反省からのアドバイスに入りたいと思います。

一口に教養科目といってもその内容は多岐にわたり、全部で38単位あります。これらの単位は1, 2年のうちに取っておくべきです。1年生は履修する際に分かるのですが、1つの授業にあまり多くの生徒が集まると、定員に合わせて何らかの方法で生徒を切り捨てるのがよくあります。この時最初に切り捨てられるのが2, 3年生で、このまま教養の科目を4年まで持ち越してしまうことも多いです。2年からは専門科目の授業が入ってくるし、4年生は卒論や就職活動で忙しいので、ヒマなうちに終わらせてしまいましょう。

また、教養科目の中でも分野別科目について一言。私だけではないと思いますが、一般に文系は理数系教科が苦手です。なのに自然の分野で物理や数学の授業をとってしまい、大学で初めて微積を勉強したあげく、単位を落としてしまう人がたまにいます。理系の人も法学や経済はよく考えてから選んで下さい。

そして全ての授業にいえる事ですが、出席をとる授業では基本的に欠席は3回までです。4回休んだらアウトです。私は3回までは休んでもいいんだと解釈していましたが、3回休んだ後に風邪をひいたりして困った事になるので、なるべく出席した方がいいです。評価にも反映しますので。授業をとる際には、時間帯にも注意して下さい。1限の始まる時刻は8時50分です。この時間は高校までと大差ありませんが、大学生にとってはつらいものです。特に1年の初めはサークルなどのコンパが多く、一人暮らしの人は開放感から徹夜が多くなるので、朝早く学校に行くのがきつくなります。特に冬期はフトンから出るのもいやでしょう。

最後に一番大切なのは、³情報⁴を集めることです。どの先生の、どんな授業であれば、単位が楽に取れるのか。それとも半数以上の人が落とされるのか。出席

重視なのか、テストか、レポートか。中にはテストの問題が毎年変わらない先生もいるので、前年の問題を調達できればぐっと楽になります。以上の情報の発信源となるのは各種サークルであり、そこにいる先輩や同級生です。彼らから情報を得ることで、単位に縛られないスムーズなキャンパスライフを送り、4年間で卒業して下さい。ではサヨウナラ。

川口 亘 (教育学部 3年)

新入生の皆さん。ご入学おめでとうございます。教養教育についてのワンポイントアドバイスを書いてもらいたい、とのことでこの原稿をかくこととなりました。僕自身の言うことがどれほどの参考になるかは分からないけど、こんなもんなのか〜という感じで読んでもらえると良いです。

教養の授業と言っても、それほどはたいへんなものではないです。学部とかによって違いはあるのですが、外国語、体育、コース別の授業、分野別といって人文、自然、社会のなかから選択していくものが主なものです。申告票をきちんと出して、授業に出れば、よほどのことがない限り単位をもらえないということはないと思っていいです。だからといってさぼってばかりいたり、テストがあることを聞いていないとかいう言い訳は通用しませんから、そのあたりは気が抜けませんね。実際たまたまさぼった日にレポートとかテストの説明があつて、それで単位をとれなかったという人はいますからね。

授業を選んで自分の関心のあるものを受講していくというのは、たぶんほとんど皆さんにとって、初めてのことだと思います。ここで重要なのは少しでも興味が持てそうと思ったら、最初のガイダンスに出てみることをお勧めします。「後期で面白そうな授業があるから今は遊んでおこう」と考えているとその授業が定員一杯で受講できなくなってしまうということもあります。そうなるに関心の持てない授業を受講しないといけなくなってしまうということになってしまいま

す。だから興味をもてそうだと思ったら、ガイダンスだけでも受けておくとけっこう面白かったりして良いですよ。

外国語の授業は入学してすぐに、アンケートがあると思いますが、受講のしかたにもよりますが、1年生もしくは2年生で終わらせることができるでしょう。英語をさらに続けるということもできるし、新しい言葉を勉強するということもできます。外国語はやはり続けることが大事ですから、授業に出ていれば、テストもそれほど大変なことではないでしょう。ただ、あまりさぼったり気を抜いていると、それなりのことにしかならないってのはあるから、外国語はそれほど気が抜けないというのがあります。

体育は授業によって違うというのもあるのですが、ほとんどが出席重視ですから、はりきって出席しましょう。大学だと運動部に入ったりサークルでもしないと体を動かすこともないですからたまには運動もいでしょう。

これからの大学生生活を抜きすぎないように楽しんで、充実したものとしてください。

中三川 真也 (工学部3年)

教養科目でこれだけはやっちゃダメというのは自分の経験、または友達の実験からいっていくつかあります。工学部、農学部の人には心して読んで下さい。

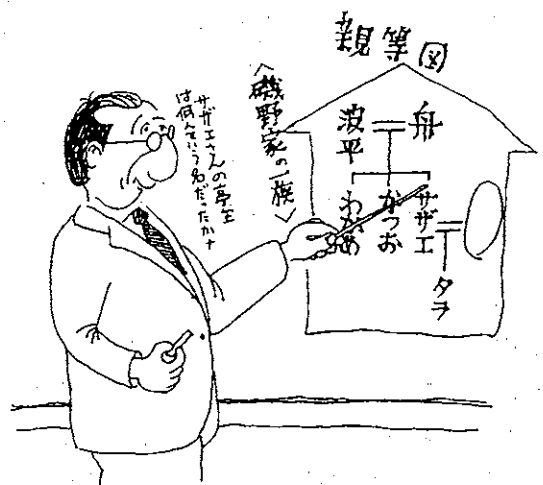
1年生の授業のほとんどはこの一般教養で埋まっていると言ってしまうのではないかと思います。さてさて、自分が卒業までに必要な一般教養の単位というものを知っていますか？自分が工学部なもので工学部を一例にあげると、人文、社会、自然、総合科目の各々を4単位ずつ取得しなければならないのです。“なんだ4年間で16単位取りゃいいじゃん”なんて思った方、かなり危険です。工学部生は2年次から日立へ、農学部は2年次から阿見へと移らなくてはならないのです。実は日立、阿見にはほとんど一般教養の授業カリキュラムがないのです。それだけではなく、2年になると専門科目と選択科目、実験などが入ってくるので一般教養を取る時間なんて無いに等しいのです。いや、自分はこれだけでいっぱいだった。だから、も

し、1年の時に必要な単位を取り損なうと……もうみなさんなら理解したでしょう。とにかくかなり危険だよ。まあ集中講義なんていうのも例外としてはあるけど、おすすめはできないなあ。

そういえば、もっと危険なものがありました。それはというと、身体活動です。1年間に1回しか履修できないにもかかわらず、2年間で4単位、つまり1回たりとも落とすわけにはいかないわけです。

最後に、卒業に必要な単位をすべて取り終えた時のことについて書こうと思います。私が失敗したのは、調子によって、多くの単位を取ろうとして、興味のまったくない授業を履修してしまい、あげくのはてには良くない結果が出てしまったことです。やっぱり、中途半端な気持ちで履修してもあまり良い結果には結びつかないですよネ。今さら思うことだけれども、もっと真面目にやっておけばよかったなんて思っています。それが何個かあることに気づいた時には、取らなければよかったなんて事まで考えてしまう自分がいるんだよね。これを読んでいる君達は、くれぐれも私と同じ誤ちをしないようにして下さい。

新入生のみなさん、何事にも言える事ですが、自分が興味のある事には、多少何かを犠牲にしようとも、それをやってみようとする気持ちを大切にして下さい。過ぎてしまった時間はとり戻すことは出来ません。自分の未来を見つめながら生活することが、何よりも大切な事であると私は思います。頑張ってください。



私と芸術の出会い

于 暁白（人文学部2年）

芸術とは、人間の最も人間らしい面を示すものであり、今日、世界のいかなる片隅においても、人間のいる限りは、そこには何らかの芸術がある。大学生として、芸術の鑑賞能力が不可欠だと思う。いくつかでも知的に芸術のあり方を把握し、その広大な世界を素直に享受していこうと考えるならば、そのために必要な「勉強」の方法を身につけたいと考える。このために私は「文化の創造と水戸芸術館」この授業を受けた。

この授業の担当教官は、教育学部の曾我日出夫先生と水戸芸術館の各芸術分野部門の専門家、授業の内容は、日本の文化施設と水戸芸術館の概要から、音楽の楽しみ方や現代美術の楽しみ方など、芸術の幅広い範囲でいろいろな知識を紹介され、そして、芸術を楽しむために必要な知識の種類とその学び方、芸術を奥深く鑑賞するための方法などを教えた。

この授業を受けて私は芸術鑑賞能力を高めことができ、これからの人生をより豊かに送ることができると思う。是非、この授業を他の学生にも推薦したいと思う。

飛田 千恵子（教育学部2年）

大学生活も早いもので2年目に突入しました。どんなサークルに入ろうか、どんな生活を送っていこうかとあれこれ悩んでいた1年前の自分の姿を昨日のことのように思い出します。

そのような中で新しい授業も始まったのですが、1年生の時間割はほとんどが教養科目でした。自分が学んでいきたい専門分野とは関係のなさそうな授業もとらなくてはならないので面倒だと思うかも知れませんが、自分の視野、興味を広げてくれるものと考えて、講義を聞くべきだと思います。それに、結構面白い授業もあるものです。私は心理学の授業を前期にとったのですが、授業の中で真理テストをしたり、自分の性

格を分析したりと、大変楽しく講義を受けることができました。また、哲学の授業では、あるテーマについて、みんなの意見を一人一人聞いていく、という形式もあり、多くの考え方を吸収することもできました。教養科目は講義、レポート、発表等を通して、自分のこれまでの考えにさらに深みを持たせることができました。先輩の話を聞いたり、シラバスをよく読んだりして、教養科目を履修し、自分をさらに賢い人間へと育てて下さい。

小島 尚子（理学部2年）

私は大学に入ってとてもステキな授業を受けることができました。それは英語Ⅱのミーコック・アン・テレーズ先生の授業です。今まで英会話教室などに通ったことがなかった私にとって、外国人の先生と直接話す機会がほとんどありませんでした。先生は十年以上日本に住んでいて日本語を話せるし、理解できるのですが、日本語で発表すると「English!」と飛んできます。でも全然怖がる必要はありません。ジェスチャーや日本語の単語をぼろぼろ言うので、ちゃんと英語を教えてください。一番最初の授業で、「一人を指名して答えを出すまで立たせることはしない。指されることに緊張していたら授業がつまらなくなるから。」と仰ってくれました。私達は気軽に、長期休暇中に起きた事を先生に英語で伝えることができたし、聞かれて分からなければ「I don't know」と言えばいいので英語を身近なものとして感じることができました。授業で先生が特に力を入れていたのが、3～4人のグループに分けて英語で劇を作ることです。先生から題を与えられることもあります。自分達で話を作り英訳するのはなかなか大変です。先生に見せると適切な表現を教えてください。初めは恥ずかしかったけれど、だんだんと英語で表現していくことの楽しさを実感しました。先生のおかげで1年間楽しく学べました。

「法と経済」での話でした。“なんで払ったんだ！取り返してきてやる!!”と、書店の駐車場に駐車して1万円取られた学生に対応し、店長に直談判して1万円を取り返したことがあったそうです。『違反駐車1万円』などというものは法的に根拠がないので、払う必要はないと説明していました。受講する前は「刑法、民法の解釈」などをやるのだろうと予想していましたが、講義全体が“敷金の取り戻し方・礼金を払う義務の有無”や“NHKの受信料を払う義務”などの学生からの身近な法律関連の質問に答える形式になっていて、かなり実践的な内容でした。「大学の授業」は教授が話すのを聞いているだけというイメージがあり、たいていそうでしたが、これはただ聞いているだけではない講義であり、面白く集中できるものでした。今まで疑問に思っていたもどう解決してよいか分からずに解決を放棄したことが数多くありましたが、そのいくらかが解決できたように思います。生活に役立つ内容であり、学生が参加しやすい講義なのでステキだなと思いつつも、ちょっとヘンな講義だったかもしれないとも思いました。

前期、後期ともに私は結構ステキな授業、ヘンな授業に出会いました。高校までの暗記ばかりの授業とは違い、考えさせられる授業が多く、私にとって教養科目の授業は楽しいものでした。

ちょっと違った発想から生物学を教えてくれた「生命のしくみと働き」では、毎回小テストがあるのですが、なんだかクイズのようでユニークなのです。例えば「キングコングはどこがおかしいか」とか。生物学的にサイズの面からどうもスマートすぎるらしいのです。そんなこと考えたことありますか？

ちょっと変わった講義内容にひかれて取った「明快な話し方の方法論」では、私はただその方法論を講義してくれるのだと思っていたのですが、なんと実際に生徒も立って発声練習したり、今までの受け身の授業と違い、双方向の授業に少しとどまってしまうました。今まで明快な話し方をしようなんて思ったことありますか？ソの音の高さで話し始めるといいそうで、そんなこと意識しながら今日も話してみたり。

受験勉強で固くなった頭を柔らかくしてくれたちょっとステキなちょっとヘンな授業でした。

教養教育古今東西 — よその国の大学を紹介します —

我々の講座に在籍中の中国からの留学生に、中国の大学事情について聞いたことを紹介します。

日本と違い、中国では全国共通の大学入試があり、その成績によって大学を選ぶというシステムです。彼の大学は武漢測絵学院（現在は武漢測絵科技大学）と言い、測量と地図作成の専門家の養成を目的とする大学です。このように測地学を専門とする大学は世界的に見ても珍しい（唯一？）と思います。ここの授業科目は基礎と専門に分かれており、彼が在学した1980年代頃は全科目必修でしたが、現在は若干の選択科目も存在します。基礎科目が教養科目に相当すると思われませんが、日本の大学の教養科目とはだいぶ趣が異なります。まず、その大半が専門科目に直結する理系科目で、電子工学のように日本では専門科目に分類されるものも含まれます。数少ない文系科目には政治・経済

・哲学などがあります。また大半は1～2年次に集中するものの、数学や英語（専門分野の英語）など一部の基礎科目が3～4年次でも開講されます。基礎科目も専門科目も数がかかなり多く、またそのレベルも高いので、学生達は日本（茨大？）の大学生よりも一生懸命勉強するそうです。一般に、中国の大学生は日本の大学生より高度な専門的知識を習得する反面、知識の幅という点では日本の学生の方が概して優っているとのことです。両国は教養教育の理念が根本から違うようです（もっとも、近年は中国でも幅広い教養を身につけさせる方向に変化しているそうです）。

彼の在学中は物価も学費も非常に安く、ほとんどの学生はアルバイトをせず学業に専念したそうです。また当時は大学も少なく、大学卒、即ちエリートということで、就職は引く手あまただったとのことです。し

かしその後の中国の経済発展に伴い、状況は一変しました。物価が高騰し、アルバイトをする学生も次第に増えてきました。また大学も大学生人口も増えた結果、就職難が生じ、大学院進学率の増加につながっているようです。こちらへんは日本と事情が似ているように

思います。日本同様、中国の大学も曲がり角にさしかかっているのかもしれませんが。

河原 純 (理学部)

掲 示 板 コ ー ナ ー

奨 学 金 制 度

「奨学金についての問い合わせは、学生部厚生課へ」

2 2 8 - 8 0 5 9

奨学金制度として、1) 日本育英会、2) 地方公共団体・民間団体の奨学金制度がありますが、いずれも人物・学業とも優秀で経済的理由により、学資の支弁が困難と認められる者に貸与されるものです。

1) 日本育英会

【奨学金の種類及び貸与月額】

第一種奨学金 無利子貸与
 きぼう21プラン奨学金 有利子(3%)貸与
 併用貸与 第一種奨学金の貸与を受けても経済的に著しい困難があると認められる者については、きぼう21プラン奨学金を併せて受けることができます。

(注)大学院博士後期課程は、第一種奨学金のみです。

区 分		入学年度	平成9 ~10年度	平成11年度~
		学 部 専攻科	第一種	自 宅 通 学
自 宅 外 通 学	46,000			47,000
第二種	自 宅 通 学		40,000	3,5,8,10万
	自 宅 外 通 学		46,000	円から選択
大 学 院	第一種	修 士 ・ 博 士 前 期	83,000	84,000
		博 士 後 期	115,000	117,000
	第二種	修 士 ・ 博 士 前 期	83,000	5,8,10,13万 円から選択

【出願資格】

第一種奨学生……人物・学業とも特に優れ、経済的理由により著しく修学困難な者

きぼう21プラン奨学生……

人物・学業とも優れ、経済的理由により修学困難な者

【出願方法】

1年次(1次募集)

2年次以上 掲示を見てください。

大学院生

専攻科生………入学手続きの際、お知らせします。

1年次(2次募集)………

7月中旬頃、掲示によりお知らせします。

※ 主たる家計支持者の失職、死亡又は災害等による家計急変のため、緊急に奨学金の貸与が必要になった場合は、随時出願できます。

【適格認定】

奨学生としての人物・健康・学業成績・経済状況を総合的に考慮し、その資格を有するか否かを認定するものです。

適格認定のために、「継続願」、「貸与額通知書」を10月上旬に配布し、「継続願」に経済状況・学生生活の状況・学修の状況を記入し11月中旬に提出し、それに基づいて適格を認定します。その結果、警告・停止・廃止の処置をとります。ただし、平成11年度以前の第一種奨学生、平成10年度以前の第二種奨学生については、従来どおり年2回奨学金受領資格認定はします。時期等については掲示によりお知らせします。

【在学届】

次に、該当する者は、速やかに在学届を提出して

ください。在学届を提出することにより、本学在学中は、奨学金の返還が猶予されます。

- ・高等学校で日本育英会の奨学生であった者
- ・貸与終了者で、大学又は大学院に留年している者

【進学届】

高等学校在学中に、平成12年度大学第一種及びきぼう21プラン奨学生採用候補者に決定されている者は、4月18日(火)までに進学届を提出してください。

進学届を提出した者は、在学届を提出する必要はありません。

2) 地方公共団体等

本学に募集の案内があったものについては、その都度掲示によりお知らせします。

本学に募集要項を送付してくる団体はごく一部です。希望する学生は、各自、奨学関係団体(県の教育委員会など)に直接照会してください。

<平成11年度本学へ募集案内のあった団体>

茨城県、岐阜県、岡山県、石川県、富山県、福島県、鹿嶋市、(財)宮崎県育英会、(財)川口育英会、(財)電通育英会、(財)大阪府育英会、(財)中村積善会、(財)山口県育英会

つ ぶ や き

新年度がスタートしたこの時期、キャンパスの中は新入生を迎えて華やいだあわただしさがただよっています。大学教員30年の私も新鮮な気持で日を送っています。

新入生の諸君は、大学の内や外で毎日「入学おめでとう」「よかったね」「これから4年間がんばってね」という言葉に囲まれているのでしょうか。だけど新入生諸君のすべてが「めだたい」「やったぜ」「頑張るぞ」と思っているわけではないですよ。第一志望の大学や学科でなかったという不満や挫折感を持ちながら、今新しい生活を始めている諸君も少なくないですよ。

そして、「希望と意欲に溢れて今ここに居るわけではない」という中途半端な気持や居所のなさというのは、新学年度のふんいきの中ではかなり辛いですよ。しかも、このような悩みや辛さをやり過ぎたり、そこから逃げたりしてはいけません、とも思っていますよ。私もかつてこのような経験があるので、他人ごとではなく思い出します。

「こうしたらいい」といった万能の処方箋はないので、このような悩みや辛さと誠実につきあっていく中で、結着をつけていかなければならないと思います。経験的に言えるアドバイスの一つは、気心の合う信頼できる友達をいち早く見つけることはかなり有効な手だてではないだろうかということです。これまでたくさんの不本意入学の諸君に出会ってきたけれども、周囲に何人かの親友を持つことのできた諸君はほぼまちがいでなく、4年後には「この大学での4年間は充実していた」と言って卒業しています。

この「ローザ・プルムラ」はこのように悩みを抱えた諸君からの意見を待っています。教養教育についてあるいは大学教育全般について不満や疑問さらには憤りを感じたときには、その声を編集部(共通教育棟1F、学生課教養教育係)に伝えて下さい。学生諸君のさまざまな声を交換させたいと思っています。

(Ebahiro)

発行日 平成12年4月

発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター

水戸市文京2-1-1

029(228)8416(学生課教養教育係)

Rosa Plumula

ローザ・プルムラ



●茨城大学・大学教育研究開発センター

ニュースレター No.17

目次

巻頭言	1
Open Your Mind, 友達を つくって、楽しい大学生活を ...	1
キャンパス情報	3
聞いて欲しい私の意見 -こんなだったの、大学って!-	5
VOICE -期末試験の裏と表-	7
教養教育古今東西	8

(平成12年7月発行)

今年に入って、何か突然警察内部の“不祥事”が立て続けに表面化し報道されました。しかし、過去の事例を思い出すまでもなく、同様の“不祥事”は我が国社会の種々の分野で繰り返り起こったこと、あるいは起こりうることに気付きます。共通の要素は何かというと、グループ内の論理、あるいは、単なる都合が（あるいは、“仲間への思いやり”でしょうか）原理原則を超越したことです。皆さん日常的に経験されているのですが、グループ内の雰囲気（いわゆる“空気”ですね）がある方向に流れていく時に、自分の持っている価値観・判断基準に基づいて、別の方向を指し示すのは難しいことです。大抵の場合は、あるいは、少なくとも当面は、大勢に従っておいて大きな問題は生じないように思われます。しかし、それが積み重なってどうしようもない事態になった時、責任者（当事者というべきか）はポロポロと涙を流してテレビに登場する事となります。あのようにしてテレビに登場するケースだけが問題なのではなく、実はあれは、氷山の一角で、日本文化のエッセンスなのです。重大な事態に立ち至らなかつた場合でも積み積もって現在の日本社会が形成されているわけですから、ことは重大です。国家としての日本が、国際社会で何となく重みがないのも原理原則に則って振る舞っていないからです。グループ内の論理が重視される事と、いわゆる“いじめ”は表裏一体、ワンセットになっています。しかも、このことは、あまり意識されないうちに自然に起こってしまうから厄介です。どこかで、この呪縛から解放しなければなりません。将来を担っている学生諸君、警察内部の“不祥事”は単に警察のみの問題ではありません。成長がとまらない内に独自の価値観を確立するように努力しましょう。（天竺）

Open Your Mind, 友達をつくって、楽しい大学生活を

大学教育研究開発センター長

田切 美智雄

1・2年生の諸君、楽しい友達ができましたか。1年生はまだ入学したばかりで、とまどっている者も多いかも知れません。2年生になっても未だにとまどったままの者がいるくらいですから、当然のことです。日本の学校の特徴として、中学・高校はそれぞれ3年分の年齢差しかない人達の社会です。そして、大学新入生はほとんどが高校卒業したての者ばかりです。1年生の仲間の年齢差はせいぜい3年ぐらいでしょう。でも、大学という社会は最低でも9年分の年齢差のある社会です。学生だけを対象にしても、60才を越える人から18才までおります。勉学という目的の大きな社会なのです。茨城大学には約1万人の学生がいるので

すよ。この大きな社会で4年間も暮らすのですから、楽しいことがなかったら、潰れてしまいます。友達をたくさん作って楽しくする、それも大学生活です。

一番手取り早いのは、サークルに入ること、そして仲間を作ること。サークルも一つ所に固執しないで、嫌になったらトラバユすること。これが出きる人達は、もうとっくにそうしているでしょうね。サークルやクラブは大学内だけではありません。大学生は社会人として、大学外のいろいろな団体に加入できます。経験値があがると、大学内とは違った楽しい生活が送れます。このような人達は極めて活動的グループに属する人達です。

高校までにサークルらしいものは何もしてこなかったという人もいますでしょう。でも心配ご無用。大学の

サークルは初心者大歓迎です。それは、サークルに積極的な人達は、教えることも喜びと感じている人達が多いからです。でもそんなあなたは競争が厳しいサークルは敬遠しておいた方がよいでしょう。大学から始めた趣味が一生の楽しみになる人も多いのです。

最近多いタイプは、もっと消極的で、人と話すのも苦手という人達です。このタイプの人達は、礼儀正しく、静かで、優秀そうにみえます。中には既に人生に達観してしまったように見える人もいます。この人達は一度にいろんなことを考えられるので、こんなことをしたら笑われる、こんなことをしたら嫌われる、こんなことをしたら馬鹿にされるなどと、頭がよく回転します。内心は、友達ともっとうまく付き合いたいと思っても、なかなか一歩が踏み出せなくなってしまいます。別な言い方をすると、自分の感情を表面に出すのが嫌だったり苦手だったりなのです。また、自分は誰にも頼らず一匹オオカミでやっていくなどと、粹がっています。受験の時の競争心が大学へ入ってもそのままだったりもします。短い間はこのスタイルでもやれますが、勉強がつかなくなったり、進路で悩んだりすると、とたんに寂しくなります。やっぱり楽しい友達が欲しいです。このタイプの人達は何人集まっても何も起こりませんから、きっかけが必要です。きっかけは、誰かが声をかけることです。まずはあいさつでよいでしょう。実は、このタイプの人達は勉強熱心ですが、その反面メンタルケアが必要になることが多いのです。私は、結婚相談所ならぬ友達紹介所が必要なのではないか、とも思っています。この人達はきっかけさえ与えれば、いろんな方向に走り出します。そのきっかけを得るために、クラス担任や所属する学部の先生の所へ相談に行ってください。そんな人を見たら、友達になってやって下さい。

最近、新人種が急増してきました。それは、テレビゲーム人間です。従来になかったタイプで、テレビゲームには夢中になります。この種の人達の集まりでは、対戦ゲームでもないかぎり、何人集まっても皆勝手な方向を向いてゲームをしています。テレビゲームにチーム戦があるのかどうか知りませんが、せいぜい1対1での仲間意識しか持ちませんし、ゲームを仲介しないと仲間になれません。この新人種と楽しい友達にな

るには、別な広場へ連れ出す必要があります。つまり、他のものへ興味を移らせることです。しかしこの人種を他の広場へ連れ出すのはなかなか難しいです。なぜなら、ゲームに最高の喜びを感じているのですから。でもこんな中から、将来の情報革命を担うような人材が育ったりするのですから、大事にしてください。

大学には留学生もたくさんいます。東アジアからの人達が多いのですが、いろんなところからの留学生に会う機会があります。留学生もまた、楽しい友達を探しています。留学生は、日本人の学生とうまく友達になれないことで悩んでいる人が多いのです。理由の一つは日本人学生の外国人への不馴れさですが、もう一つは日本人同志でも友達をうまく作れない人が多いためです。言葉の壁はありますが、誰かが強制的に付き合う環境を作ると、案外なんとかやれるものです。そんなきっかけを大学または教官が作るのは義務として、学生同志でも大いにやっていただきたいものです。私のところの学生は、野外実習の時に強制的に（他に方法がないので）韓国忠北大学の学生と同宿させます。最初は両方ともすくみあっていますが、2・3日もすると、結構打ち解けて話し合っています。異文化理解などという難しいことを抜きにして、はやりの歌手やファッション、そしておいしい食べ物は若者共通の文化です。

友達は学生ばかりとはかぎりません。先生だって友達になれます。先生と友達になるには、大学教授の特殊な生態をあらかじめ知っておく必要があります。その生態を知った上で研究室を尋ね、良い先生に当たればしめたものです。よい相談相手になり、そして授業のこつなども教えてくれます。いろんなパターンの先生がいることをまず知ってください。例えば、毎日研究室にいる先生、週に3・4日しかいない先生、昼間しかいない先生、夜にいる先生、などなど。高校の先生と違って、大学教授は勤務形態があってないようなもので、いつでも居ると思っははいけません。大学の先生は平均すると週に2回の授業と1回のゼミをしています。実験・実習系の先生はさらに1本の実験・実習をしています。授業や実験がない時間は、卒業研究や大学院学生の研究の指導や自分の研究、講義の準備などをしていますが、それもないと、先生仲間でお茶

やコーヒーを飲んだりして歓談しているか、学生と喋っているかのどちらかです。そうそう、大事な会議というのもあります。先生それぞれでこのパターンは決まっています、なかなか変えることができません。あなたにとって相性のいい先生を探すこと、これは進路

を決めるよりずっと大事かもしれません。

コカ・コーラのコマーシャルソングに、Open Your Mind という歌詞がありますが、人が仲間を作るときに最も大事なことです。日本人学生も留学生も先生も、Open Your Mind でいい友達になりましょう。

キャンパス情報

人文学部から

新入生諸君も大学生活はや3ヶ月、遠からず貴方達を期末試験が待ちかまえる時期となりました。教養と専門双方の掲示板を毎日見る習慣もついたことと思いますが、まさか休講の掲示だけしか見ないようになってはいないでしょうね。試験が終われば最初の夏休み、しかもこれまでになく長い休み、その時の計画もそろそろ頭をよぎっているかも知れませんね。しかし次のことをお忘れなく。この休暇中に、教職科目の集中講義が設定されていますよ。「中等教育教師論」と「教育の本質と理念」です。教職の資格を得ようと思っている人は、これを逃したら取り返しのつかないことにもなりかねません。これに関する掲示をゆめゆめお見逃

がしなさい。そしてそれ以外の集中講義もこの休み中に幾つか用意されています。お気をつけ下さい。終わりにもう一つ学生諸君の注意を促さなければならないことがあります。それは慨嘆に耐えないことなのですが、このところLL教室の下足箱に入れておいた靴の紛失することが何回か起きているのです。しかも残された靴もないということが。もうこれは不心得者の意図的行為と断じざるを得ません。もし大事な大事な、貴重な靴の持ち主は、それを脱ぐ必要のあるときはポリ袋か何かに入れるなど汚れないようにしてそれを教室内まで持ち込み、自分の足下に置いて下さい。本来は下足箱に入れておくべきなのですが、この際はそれもやむを得ないことでしょう。(鈴木)

教育学部から

皆さんの学園生活は順調でしょうか。アパートなどで一人暮らしの諸君や寮住まいの諸君は、故郷の親元を離れてちよっぴりホームシックにかかっているかも知れませんね。先日の少し長い連休は、一服の清涼剤になったでしょうか。

初めて経験しつつある大学の授業はどのように感じられますか。大学には高校までのような、上から決められた“指導要領”というものがありません。その代わり各大学や学部には独自の教育理念と目標があり、それに沿ってカリキュラムを編成しているのです。

教育学部の個々の授業も、諸君が卒業時に必要とする知識や技術、技能を体系的に学べるように設計されています。そのため、大学では好きな授業を好きな時に聴けるという安易な思いでいると期待はずれになりかねません。体系的な知識や技術を身につけるには、

諸君自身の忍耐と論理的思考の積み重ねが不可欠なのです。つまらないと思う講義に出会った時、それが真につまらないためか、あるいは自己の努力不足によるものかを虚心に考えることも必要です。前期も半ばを過ぎた今、履修中の授業を改めて達成目標に位置づけてみることをお勧めします。

ところで、教育学部には“教育実践研究指導センター”という研究施設があって、附属学校などの教育現場と一体になった幅広い実践的研究を推進してきました。この施設は今年4月、組織が大幅に改組・拡充され、“教育実践総合センター”と改められました。教育に関わる多くの複雑な今日的課題に取り組むため、教育臨床などの新しい部門が設けられ、精力的に活動しています。A、B両棟の間に独立して建つ3階建てのこの施設は、諸君が教員としての実践的力量を養う上でも、これまで以上に大きな役割を果たすものと期待されます。(山根)

理学部から

理学においても4月から脱靴廃止となりました。「だっか」と読みます。本年3月までは理学部の建物内へ入る際に、玄関で外履きの靴を内履きやスリッパに履き替えなければなりませんでした。校舎内に泥を持ち込まないようにして、建物内を清潔に保つことや、精密な測定を塵やほこりから守ることが目的でした。

4月から脱靴制度を廃止し、理学部の建物に入る際に、入口で靴を履き替えなくても良いことになりました。大学周辺と学内道路の舗装化が進み、靴に泥が付かなくなってきたことが脱靴廃止に踏み切れた理由だと思います。廃止に伴い、玄関にあった靴箱は全て撤去されました。新生に配布されていたスリッパは配布されなくなりました。玄関には泥拭き用のマットが置かれるようになりました。

しかしながら、建物内に泥を持ち込まないという願いは、依然として変わりません。また、泥を極端に嫌う精密測定機器やコンピュータ室への入室の際には、外履きを内履きに替えることを守ってもらうことや、外履き者の通行禁止を所々に設けています。

家庭にあっては、『玄関はその家の顔』と言われるます。玄関を見ただけで、その家がどのような家か、おお

よそ見当がつきます。「理学部玄関は学部の顔」です。昔は、靴の脱ぎ方や泥について親が子供に、やかましく注意したものです。学校の玄関でも、家庭と同じ心掛けを見せてくれるよう学生諸君に希望します。お寺の入口で「脚下照覧」という文字を見たことがありますか。

泥拭き用のマットには、靴の泥をいくらこすりつけてもかまいません。いつも玄関のマットに泥を落としてから入るといふ習慣は、理学内に入ることばかりでなく、図書館、博物館や美術館、病院、市内のお店や、レストランや、ホテルは勿論、あなたの家に入る際にも、きっと喜ばれることと思います。お店やレストランの店員はあなたのそのような行動をチラッと観察して、客の値踏みをしていますよ。靴を脱ぐ習慣の薄い外国に行ったときにも大いに役立ちます。ある会社では、入社面接にスリッパに履き替えさせることを取り入れ、採用試験のデータにしました。

大学で靴の履き方まで話題にするのかと、驚いた新生もあるかと思えます。成人として社会に出るために必要なマナーは大学生であっても身に付くようにしていただきたいと私は願っています。この習慣はあなたの一生の財産になります。(大西)

工学部から

インターンシップをご存じでしょうか。夏休み期間中の約2週間、大学を離れて民間企業などの職場を体験する制度です。学外実習と言った方が分かりやすいかもしれません。通常3年次の専門科目に含まれ2単位が与えられます。職場ってどんなところか？働いてどうということか？まず肌で感じる事が目的です。学校の外に自分を置いてはじめて見えてくるものもあるはず。自分に歯がゆさを感じたら、それこそステップアップのチャンスと考え、勉強しましょう。もちろん将来の進路を選択する上でも良い経験となるはずです。インターンシップは、工学部では平成10年度にメディア通信工学科が初めて実施し、11年度には電気電子工学科が加わりそして今年度は機械工学科、都市システム工学科が加わって学部全体に広がる勢いを見せ

ています。電気電子工学科ではすでに9名の学生が履修を希望しています。年々希望者が増えるのは頼もしい限りです。行き先としては、企業の研究所や技術開発部門、事業所の生産管理部門などが主です。幸い企業の理解と協力が得られるようになって受け入れ業種も広がりを見せていますが、まだ皆さんの全ての要望に応えるまでには至っていません。今後積極的に開拓していきます。

最後に老婆心(いや老爺心)から一言。職場の中に入るのですからそれなりの覚悟が必要です。途中で投げださないこと。遅刻は論外。職場の人との接し方、言葉遣い、そこそこ節度ある行動……。どうすればいいかって？それを学ぶのがインターンシップです。興味のある人は学科の教務委員の先生に相談してください。(池畑)

農学部から

農学部は平成12年度からこれまでの2学科8大講座を生物生産科学科、資源生物科学科および地域環境科学科の3学科6大講座に改組した。カリキュラム等は学年進行で変わるので、阿見地区では来年度から新旧のカリキュラムが進行することとなる。特に2年生以上で留年などと思うように授業が選択できなくなるかもしれない。

農学部キャンパスでは昨年度工事が始まった弓道場と福利厚生施設が本年3月に完成し、5月26日には竣工式が行われた。弓道場は甲地区の馬房に近接して配

置され、建築面積は射場約76㎡、的場約25㎡である。建物の屋根は切妻型で日本瓦葺き、庇は銅板葺き、玄関の床仕上げはクリア塗装松材縁甲板、的場床は檜の無垢材である。新道場が完成し、今後の活動が期待される。

福利厚生施設は乙地区、庭園を間に研究管理棟と対面する位置に建設された。2階建てで、延べ床面積約844㎡である。建物は十分な採光を確保するため、庭園に面したところはガラス張りとなっている。

1階は食堂、ラウンジ、売店等があり、2階は研修室となっている。愛称も「こぶし会館」と決まり、学生、教職員の交流と憩いの場となるであろう。(久保田)

聞いて欲しい私の意見 —こんなだったの、大学って!—

大島 健太 (教育学部1年)

大学生活が始まり、何も分からずに過ごした4月とは違い、周囲の様子が多分分かってきた。一人暮らしを始め、その生活も落ち着きを見せ、ゆとりというか自分の時間が増えた。

そんな中、大学生活について考える。今までたいしたインパクトが無い気がする。これだというものがない。まだ始まったばかりだからかも知れないが、自分が大学生だという意識が薄い。勿論今までは異なり、自分で考えて行動しなければならない。行動にも責任が問われる。そして何より自由である。なのに自分は変わらず、高校生活の延長線上で生活している気がする。大学ってこんなものだったのかと、物足りなさを感じる。

だが、嬉しいこともある。先輩達との交流である。大学生活のことや茨城での生活、役立つ情報を聞いたりと、食事を一緒にしたり、とても有意義な時間を過ごすことができる。相談にも乗ってくれる。大学生ならではのこともあり、一緒にいれて楽しい。

自分から何もしなければ何も起こらないが、自分から動けば色々と周りで何かが起きる。考え方一つで、行動の仕方でも、大学生活も全く違ったものとなる。良くも悪くも自分次第である。限られた時間をどう使うかは、自分が決めること。無駄に浪費することも、充

実した大学生を送ることも。だから、自分は自分から動き、周囲の環境を変えていこうと思う。それが大学で生活することなのかとも知れない。

かなり自由な大学生活

箕輪 千澄 (理学部1年)

最初に「これが大学か」と実感したのは、自分で履修科目を決めたときでした。今までは「時間割」が配られて、それに従って授業を受けるだけだったので、何も大変なことはありませんでしたが、自分で決めるとなると、これが難しい。自由すぎて困りました。でも、制限されていて困ったこともあります。理系の私は、大学では自分の専門の学習さえすればいいと思っていたので、文系の科目も選択しなければならないと知ったときは、期待はずれでガッカリしました。実際、授業を受けてみても、思った通り難しい。ちゃんと単位が取れるのか、本当に不安です。

また、「これこそ大学」と感じたのも、「自由さ」にありました。空き時間に、自分の好きなことをしたり、散歩に行けるなんて、今まででは考えられないこと。勉強で疲れてしまったときの貴重な自由時間、大切に使っています。それと、授業に遅刻しても注意されないこと。わざとではないのですが、たまたま遅れてしまった時、何も聞かれなかったので、一寸楽でし

た。でも遅刻はいけませんよね。やっぱり始めから終わりまで出席しないと。何も注意されないのは、「自分で判断しなさい。」ってことでしょうかね。

他にも自由なことはたくさんあります。コンピュータの使用や、サークル活動。とにかく、大学は「自由」で溢れていると感じました。まだまだ大学生活は始まったばかり。大学について、もっと新しい発見をしたいと思います。

石村 紘美 (工学部1年)

私が入学する前に想像していた工学部(機械工学科)は、機械をいじり、溶接をして火花は飛び散り、汗や油の匂いがプンプンする男の世界でした。女子校出身の私は、今までこのような世界に縁がなかったし、機械に関する知識も全くありません。合格したのは嬉しいけれど、授業についていけなくて、学校を辞める事になるのではないかと心配していました。しかし、実際は1年生のうちは教養科目中心の授業で、想像していた世界は存在していませんでした。それに、専門的な知識は徐々に付けていけばいいので安心しました。

工学部に入って何より驚いたのは女の子の少なさです。ある程度の覚悟はしていましたが、女子校とのギャップに初めは大変戸惑いました。でも水戸には他学科の人もいて、サークルなどで女の友達もいっぱいできました。そうしたら、いやだと思っていた工学部の男ばかりの環境にも慣れてしまいました。

現在の私の心配は、来年日立に移ることです。1年生だけが水戸なので、工学部の実態は全く分かりません。専門的な勉強が本格的に始まり、いよいよ男の世界になってしまうのでしょうか。大学生は勉強が楽になると甘い考えを持っていましたが、機械の話にはすでにいけないうえ、高校の時より勉強は大変です。来年からはもっと辛くなるだろうなあ。

このように、大学生活は私の想像していたものとはかけ離れていましたが、こんなものかなーと思いつつも楽しい生活を送っています。

前島 みさと (農学部1年)

大学に入って1ヶ月が過ぎましたが、まず始めに私は時間制作成に戸惑いました。資料を配付するだけでなく、できるだけもっと少しずつ生の詳しい説明が欲しかったです。それに資料の曖昧な箇所には困りました。大学には、高校までとは違い身近にクラスの先生がいないので、総合的に不安な気持ちでいっぱいでした。大学では全てにおいて自己責任が問われるということを実感しました。

次に授業について、小論文式のレポートが課された時には、自分の読解力と文章力の無さを思い知らされました。また、講義の中には、専門用語が難しく理解しにくいものや、ポイントがつかみにくいものもあるのですが、それでも講義は進むので大変です。自分で疑問を調べ解決する力も身につけていきたいです。

それから、サークルについて、私は何か見つけようといういろいろ見学しました。その時悩んでいた自分は少し辛かったけれど、私はそんな頑張る自分が少し好きになれました。

友達について、私は大学で初めて全国各地出身の人と友達になることができました。これからの大学生活の中で、嬉しいことも辛いことも一緒に感じ合い、励まし合える友達関係を築いていきたいです。

今はまだ大学生活の中で、新しい発見に圧倒されることの方が多いけれど、早くこの生活に自分のペースを作り、少しずつ自分の足で歩いていきたいと思えます。この初心を忘れずに、素敵な夢をつかむため、頑張ります。



VOICE — 期末試験の裏と表 —

鶴尾 夕海 (人文学部3年)

前期も半分ほど終了し、1年生の皆さんもそろそろ大学生活に慣れてきた頃ではないかと思います。

さて、今回のテーマは「期末試験の裏と表」ということですが、このテーマを聞いて私はハタと考えてしまいました。期末試験の裏って？原稿を頼まれた教官にも「裏といっても不正行為って訳じゃないからね」と釘を刺され、謎は深まるばかりです。

と、ここで悩んでいても仕方がないので自分の体験などを踏まえてアドバイスをしてみようと思います。まず、期末試験といっても、それにはテスト形式のものやレポート形式のもの2種類がありますが、ここではレポートについて取り上げようと思います。多分皆さんの中には、「え、テストなし？レポートだけ?! ラッキー」なんて思ってしまう人がいるのではないのでしょうか。実は私もそうでした。調子に乗って単位認定がレポートによるものばかりを選んでしまったりしたものです。でも、現実ってやっぱり、そんなに甘くはないのね…って気付いたのはテスト週間に入ってから

らでした。ギリギリにならないとやる気が起きないという私の性格にもよるのですが、レポート提出期限は結構重なるものなのです！それに、なぜだか未修外国語のテストまでもがその日だったりして。(でも、次の日は何の予定もナシだったりするのが不思議です。)そして、これが一寸重要なのですが、レポートを課されているのは自分だけではないのです。レポートのテーマを聞いて、「こんなの前日に参考文献借りて、ササッと済ませちゃおう」って思っていると、びっくりしますよ。その参考文献がほとんど借りられていたりするのです。さて、ここでお勧めなのが県立図書館や市立図書館です。少し遠いですが活用してみてください。

それから、期末試験期間のスケジュールは是非立ててみてください。いつまでに何をすればいいのか。これをきちんと把握しておくだけでもかなり違います。

以上のことを頭の隅っこにでもおいて、期末試験を乗り切ってみてください。もうだめだ…って思っても案外何とかなるものですよ。

永田 康幸 (理学部2年)

大学生活が始まって早くも1年が過ぎたが、その1年の間に僕が抱いていた大学のイメージが崩れていった。入学前のイメージでは大学生は遊んでばかりといった感じだったが……、確かに夜になると飲み会だのコンパだの遊び回ることも多いけど、昼間は全く違う。授業の数が多くて大変。朝早くから夕方遅くまで勉強、勉強……。1日に5限全部入ってた日もあった。卒業するには単位をしっかりと取らなきゃいけないけど、もう少し減らしてくれてもいいんじゃないかな？

そんなこんなで忙しい日々を送るうちに目の前には夏休みが！勉強のことはきれいさっぱり忘れて遊びまくるぞ、と思ったらその前に大事件が。そう、期末テストだ。年2回しかないとは言え、嫌なものだ。しかも授業の数が多いからテストの数も多いのは当然。特に僕がいる数理科は数学中心だから問題を解かないことには始まらない。レポートの多い他学部の生徒が本当にうらやましい。

僕のことはどうでもいいとして、何とかしてこの大きな山を乗り越えなければならない。単位をもらい易いのはやはりレポート形式のものだろう。時間をいくらでも使えるわけだし、図書館に行けば資料は山ほどある。それでも分からなければ、最後の手段の参考書丸写し。これでほとんどのレポートは何とかなる。残る問題は試験形式のものだ。レポートのように何時間もかけるわけにはいかない。しかし、試験勉強は嫌だ。だから僕のように一夜漬けとか当日に勉強するなんて事に。しかし、一夜漬けなんてその場しのぎだから、単位はもらえても何も自分のためにならない。そうしてきたことで僕は今後悔している。1年の時に基礎をしっかりとやらないと、2年以後の勉強で非常に困る。だから1年生には僕のようにはならないためにも、日頃から勉強していて欲しい。

ありきたりのことしか言えないけど、毎日の積み重ねが試験は勿論、後々にも役に立つと思う。1日1歩、3日で3歩、それが大事だと思う。

嶋田 耕平 (理学部 2年)

1年生の皆さんは、もうすっかり大学生活に慣れ、平穏な日々を送っていることと思います。この原稿を書いている時点からは、期末試験はまだ2ヶ月も先のことです。しかし、遠いと思っていた試験は、あっという間に目の前に迫ってきます。そうなると、大学の試験ってどんなだろうと不安になり、焦り出すことでしょう。

大学の試験は、論文形式が多く、文章を書く能力が要求されます。しかし、そんなに思い詰める必要はなく、よく復習して、事実や自分の考えをまとめておけば、十分対応できるはずです。

小野寺 宏允 (農学部 2年)

大学生活で気になるのが、単位の認定ではないでしょうか。成績がA・B・Cであれば、単位が認定されます。その成績をつけるために、期末試験があります。試験と言っても、今まで皆さんが中学校や高等学校で受けてきたような試験とは違ったものがほとんどでしょう。

それぞれの講義・教官によって成績評価の方法が様々ですが、その辺のチェックはしっかりできていますでしょうか。僕の経験から教養科目においては、出席が成績評価の中で重視される傾向にあると思います。したがって、出席をしっかりしていれば、成績について過大な心配は要らないと思います。逆に、試験が受けられる条件として3分の2以上の出席というのがあるように、出席回数が少ないと成績が厳しい評価になる可能性は否定できません。それでは、出席を取らない授業では、期末試験はどう乗り切れるのかということになりますが、そのような授業では、テストのみであっ

ここで、ささやかながら、理学部専門科目についての対策法を述べたいと思います。ちなみに自分は、生物・化学・地学系なので、数学・物理のことは分かりませんが、数理科の友人から少々情報を得ております。

生物学通論Iでは、語句の説明をする設問があるため、重要な事柄について理解を深めておく必要があります。化学通論Iは、試験に出る所がある程度事前に分かるので、しっかり復習してください。微分積分学Iは、演習の時の課題をしっかり復習すれば完璧です。IIは、講義をよく聞き、よく復習しましょう。

試験は7月下旬の真夏にあり、かなり暑く、辛いです。しかし、その先に待つ夏休みを思い、頑張りましょう。

たり、レポートによって成績が評価されます。テストのみの場合には、楽することは考えずに中学校や高等学校のように勉強することをお勧めします。しかし、授業によっては知識を問うものではなく、自分の意見を述べるという試験もあるので、試験時間内にきちんと答案を書く自身のある人は楽できるかも知れません。また、レポートは提出の期日までに結構時間が与えられるので、参考書などを利用して何とかできるでしょう。

試験をうまく乗り切るには、先輩や友達からの情報というのは非常に有効だと思います。教官によっては同じテストであったりするので、過去問を手に入れられれば単位はもらったようなものです。レポートは、指定された枚数を書けば、単位を落とすことは殆ど無いと思います。しかし、せっかく大学に来て色々な教養の授業を受けられるのだから、目先の試験にとらわれず、しっかり勉強をして学んだことを全て吸収するようにしてください。きっと、人生の中で役に立つときがあるでしょう。

教 養 教 育 古 今 東 西

ミレニアム、2000年1月1日付けで茨城大学農学部教官として採用され、3月教養教育FD研修会参加。4月新任教官説明会に出席して「本学における教養教育の位置づけについて」の説明を受け、5月総合科目

の講義。これが茨城大学に来てからの約半年間における私の教養教育との関わりです。積み木型、楔形、一貫型。何ですかそれは？一般教育課程と専門教育が4年一貫教育課程になり、教養部が廃止されたのも知ら

ずに参加したFD研修会でした。その研修会の中で気になった事柄を挙げながら、私なりに教養教育を少し考えてみたいと思います。

一つ目は、本学はキャンパスが3地区に分かれているため、教養教育は工・農学部学生の犠牲の上に成り立っているのではないかと。二つ目は、学生の学力低下問題が上がりました。それは高校までの学習指導要領の影響が大きく、学ぶ科目や内容が少ないためではないかとされています。しかし、それ以上に今の学生は個性がなく、みんな金太郎飴ではないか。三つ目は、教養教育に対する文系教官と理系教官との考え方の違いです。文系教官は学生に広い視野を身につけ、判断力を養いたい。一方、理系教官は4年間は限られた時間なので、教養教育を専門教育に入る前の準備期間にしたいなどの意見がFD研修会で聞かれました。

一つ目の離れた3キャンパスについて、水戸地区にはSCSがあるそうです。それらやコンピューター・ネットワークを利用して、工・農学部の学生は日立や阿見に居ながら教養科目の単位が履修できないものではないでしょうか。また、二つ目、三つ目の意見に対してはこれといった対策はまだありません。ただ、進学動機で「教養や視野を拡大する」と言っていた学生が、最近では「将来のために専門の知識や技術を習得する」と言っています。雇用情勢の悪化で、学生の実学志向はますます強くなっています。その為に、大学に在学のまま、あるいは卒業後に専門学校や放送大学（通信衛星放送スカイパーフェクトも含めて）を利用して何らかの資格を取って、就職活動を有意に運ぼうとしている学生がいます。また、一方では「これからの社会では、文系、理系を問わず総合的な知識と判断力を持った人がますます必要になる」との意見もあり、相反する考え方があります。

そういう中での教養教育はどうあるべきでしょうか？今の大学生は未成熟です。入学後にどれだけ成長させられるかが、教養教育に課せられた問題ではないでしょうか。本学の中島潤子名誉教授は「大学教員はこれまで研究ばかり重視してきたが、きちんとした教育をし、学生の面倒を見ることにもっと力を入れるべきではないか」と提言しています。今、全学部が一丸となって、全教官が多くの幅広い教養科目を設けて、そ

れを学生個々の能力に応じて自由に選択させる方式（選択するにも教官の指導は必要でしょうが）を採ってはいかがでしょうか。しかしながら、一つの大学がすべてを用意して、その良し悪しを競い合う時代は終わり、今後は一緒にできるものは一緒にやる発想が必要でしょう。東京の国立大学では「五大学連合」構想があり、2001年春スタートを目指し、教養教育を含めた連合授業の計画があります。とにかく、本来の「大学」らしい教養教育の復活を求めたいと思います。

以上が大学人となって半年の私の拙い考えです。

中島 弘美（農学部）

~~~~~  
今回は、アメリカの大学教育事情の一端を紹介させていただきます。

アメリカ大学の学部の教授科目は、一般的に、一般教養科目、必修科目、選択専門科目および自由履修からなっております。日本の大学のように、卒業研究（大学院修士コースに進学した学生も希望者を除き授業の単位取得だけで卒業できる）はほとんどない分、4年次まで、ぎっしりとコースワーク（授業のこと）で埋め尽くされており、授業重視はアメリカの大学教育の姿勢になっていると思います。大学から学生の学習計画モデルが提示されており、大学4年間の合計8学期間（年間3学期制や4学期制の大学もかなり多い）に、学生がそれぞれの専門コースを履修するためのガイドラインがあります。個々の学生は、決められた単位を修得すれば学士学位を取得できるシステムとなっておりますが、大学院進学者（特に博士コースまで進学希望者）と学部を卒業したのち社会に就職を希望する学生（修士止まりと考えている学生も含めて）の授業取得計画は異なっているように思います。学生達は、受講科目を選ぶときに、各講義に付けられた番号を見てそれが実務重視科目か研究レベルかを判断できるようになっています。また、学部5年間コースの設定により、学生は二つの学士学位を同時に取得できる場合もあります。適切な選択科目を選ぶことにより、別の学部や学科コースに進学することもできるシステムとなっております。

履修ガイドラインに関して、工学部の学生の場合、通常、数学、物理、化学、実験などの理系の基礎科目

は1年次を中心に受講されますが、人文、社会、芸術などの講義は、1年次から4年次まで1学期あたり2～4単位ずつ履修するように推奨されています。提示された履修ガイドラインでは、一学年30単位前後の負担となっています。また、必修科目の講義がゼミ形式で開講されることは非常にまれであり、このようなゼミ形式の講義は選択科目には若干ありますが、日本よりかなり少ないように思います。一方、ガイダンスなどのスケジュール、講義のシラバスの他に、講義に現在まで何人の学生が登録しているか、受講者数としてまだどれだけの余裕があるか、講義の成績、学生からの教官評価も大学のインターネットで確認できるようになっています。学生は入学と同時にe-mailアドレスを自動的に取得でき、学生寮、学内の数カ所に用意されている学生専用のコンピュータ室や端末は一日中使用可能です。

ところで、アメリカの講義スタイルに目を向けると、アメリカ大学における試験の厳しさが再認識できます。中には、試験問題を自宅に持ち帰って回答させるものもありますが、提出された解答に対する教官の評価は相当厳しく、他人の解答を模写したものなどは簡単にはばれず、それ故に他人に解答してもらうこともできないでしょう。これは、毎回の講義における宿題についても同様であると言えます。学期中は、毎回（たまにない場合もあり）のように相当量の宿題と格闘する日々が続く学生達の大学生活が大変印象的です。学生たちは不明な点を納得いくまで質問するため、教官のオフィスを頻繁に訪れます。講義中の学生達からの突然の質問に我慢強く答えることは教官の常識になっ

ているようです。一方、教官側も、学生の理解度を向上させるための講義や演習に対する工夫を大に行っており、また、このことが大変重要視されています。例えば、上記の重い宿題を通じて教官と学生のコミュニケーションが成立しているようで、教官側は、細かく採点することにより、学生にとって何が理解不足であるか把握して講義内容に反映できるようにしています。また、教官側の授業遅刻、休講、授業中の不真面目さなどはほとんどない状態にあります。こうした講義における学生と教官両者の努力の成果が学期末に相互に評価されます。すなわち、教官が成績に基づいて学生を評価するだけでなく、学生が授業担当教官の評価を行い、講義の態度、講義内容に関する十分な知識を有しているか、十分準備していたか、有意義な議論を積極的に奨励したかなどについて5段階でチェックされます。評価された結果も学生課やHPにて調べられ、公開されています。日本の大学においても学生による授業評価を行っているところもありますが、必ずしも評価結果を反映させた講義を行っているとは言えません。アメリカでは、もしも学生が学部長に告発したとすれば、該当する教官は大変なことになります。

なお、学部教育に関してではありませんが、アメリカでは、学部の講義と大学院の講義ははっきりとした区別がなく、一貫教育となっている場合が多いです。そして、修士課程、博士課程においても講義重視、つまり、基礎教育が重要視されるという特徴があると言えます。日本はどちらかといえば研究重視であり、この意味で、日本の基礎教育の充実が期待されています。

呉智深（工学部）

## つぶやき

大学教育研究開発センター運営委員になって1年が過ぎた。最初は委員会、特に小委員会で議論が活発に行われていることに少々戸惑った。会を重ね、議論の要点をうまくつかめるようになり、その要点のつまみ食いをするようになった。そうするにつれ、時には、農学部からわざわざ水戸まで出てくるような議題でもないのと思うこともあり、単純明快な議論が最も素晴らしく思えてきた。即ち、回りくどい議論に何時間もかけ最終的には結論が出ず、次年度にまわすなど、愚痴を言ったらきりが無い。これは、私だけの「つぶやき」であろうか。ローザ・ブルムラについても色々批判がある。しかし、教養の広報活動には大切である。しかし、いかんせん読者が少ない。もう少し面白

く、単純明快な記事が必要なのでは。例えば記録として永久に残せるものとか、定点観測的なものか、行き当たりばったりでない地についた記事が必要なのかも。ローザ・ブルムラという高尚なタイトルもそれが何であるのか分からない（教養だよりと分からない）学生が多いのではないのか。などなど、懐疑的な思いがどんどん積もる今日この頃である。（Y. A）

発行日 平成12年7月1日  
発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター  
水戸市文京2-1-1  
029(228)8416(学生課教養教育係)

平成16年度  
大学教育研究開発センター活動内容





## 平成16年度 大学教育研究開発センター活動内容

### 大学教育研究開発センター活動の経過

| 年 月 日                | 事 項                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|----------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 16. 4. 22 (木)        | 大学教育研究開発センター運営委員会 (第1回) <ul style="list-style-type: none"> <li>・総合英語プログラム実施に関わる委員会について</li> <li>・平成16年度の教養教育の年度計画について</li> <li>・接続教育の方向性について</li> <li>・平成16年度前学期推奨授業の募集方針について</li> </ul>                                                                               |
| 5. 19 (水)            | 第40回12大学教養教育実施組織代表者会議・事務協議会<br>(主催：山口大学) <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生による授業評価結果の公表及び評価結果の利用の在り方について</li> <li>・法人化のもとでの非常勤講師経費と教育体制について</li> <li>・大学における英語教育の位置付けと取り組みについて</li> <li>・教育センターが大学の教育の拠点となりうる方策について</li> <li>・2006年度問題への具体的取り組みについて</li> </ul> |
| 5. 20 (木)<br>～21 (金) | 平成16年度国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議会<br>(主催：岡山大学) <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業アンケートを授業改善に結びつける方策と体制について</li> <li>・理系基礎教育について</li> <li>・法人化後の教養教育の充実について</li> <li>・教養教育における産・官・学連携について</li> <li>・外国語教育に係る外部試験導入の状況と問題点について</li> </ul>                              |
| 5. 27 (木)            | 大学教育研究開発センター運営委員会 (第2回) <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成17年度基本計画案の作成について</li> <li>・教養教育に対する学部の意向について</li> <li>・教養教育のガイドラインの検討について</li> <li>・教養教育における成績評価の基準の作成について</li> <li>・教養教育の質の保証について</li> <li>・教育の拠点になるための方策について</li> </ul>                            |
| 6. 17 (木)            | 平成15年度後学期推奨授業選定委員会                                                                                                                                                                                                                                                     |
| 7. 8 (木)             | 大学教育研究開発センター運営委員会 (第3回) <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成17年度教養科目の基本計画について</li> </ul>                                                                                                                                                                         |

|              |                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成15年度後学期推奨授業の選定について</li> <li>・接続教育の検討について</li> <li>・教育IT利用方針の検討について</li> <li>・平成17年度非常勤時間について</li> </ul>                                                                                                               |
| 8. 5 (木)     | <p>大学教育研究開発センター運営委員会 (第4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成17年度教養教育基本計画について</li> <li>・平成17年度教養教育非常勤講師時間配分について</li> <li>・平成17年度教養科目ガイドラインについて</li> <li>・授業点検評価の方針について</li> <li>・平成17年度学年暦及び新入生オリエンテーション日程について</li> <li>・平成17年度教養バンドについて</li> </ul> |
| 9. 17 (木)    | <p>大学教育研究開発センター運営委員会 (第5回)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成17年度教養バンドについて</li> <li>・平成17年度教養教育実施計画について</li> <li>・平成17年度学年暦及び新入生オリエンテーション日程について</li> <li>・平成16年度教養教育シンポジウム及び教養教育FD研究会の実施計画について</li> <li>・理系接続教育の実施計画について</li> </ul>                 |
| 10. 7 (木)    | <p>大学教育研究開発センター運営委員会(第6回)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成17年度教養教育実施計画について</li> </ul>                                                                                                                                                             |
| 10. 28 (木)   | <p>大学教育研究開発センター運営委員会 (第7回)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成17年度入学生の外国語科目の履修設定について (各学部案)</li> <li>・成績評価の基準作りについて</li> <li>・「大学教育センター設置等」の概算要求の対応について</li> <li>・共通教育棟の整備計画について</li> </ul>                                                          |
| 11. 25 (木)   | <p>大学教育研究開発センター運営委員会 (第8回)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成17年度教養教育ガイダンスについて</li> <li>・理系接続教育のパイロット授業について</li> <li>・大学教育センター設置概算要求について</li> </ul>                                                                                                 |
| 17. 1. 7 (金) | <p>平成16年度前学期推奨授業選定委員会</p>                                                                                                                                                                                                                                       |
| 1. 13 (木)    | <p>大学教育研究開発センター運営委員会 (第9回)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成16年度前学期推奨授業の選定について</li> <li>・総合英語実施のための任期付き教員採用について</li> </ul>                                                                                                                         |

|           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|-----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学以外の教育施設等における学修の単位認定について</li> <li>・高等専門学校との単位互換協定に基づく単位互換科目の設定について</li> <li>・非常勤講師の任用に関連して</li> <li>・教養科目の公開講座化について</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 2. 15 (火) | <p>平成16年度茨城大学教養教育シンポジウム (会場：茨苑会館)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特別講演「適正な成績評価の実現のための取り組み」<br/>北海道大学高等教育機能開発総合センター 小笠原正明教授</li> <li>・適正な成績評価基準の確立に向けて (パネルディスカッション)</li> <li>①成績評価確立の必要性 (曾我センター長)</li> <li>②授業の理解度と成績分布の実際－授業アンケートの分析から－<br/>(横田工学部併任教員)</li> <li>③英語の成績評価－習熟度別教育の導入と成績評価－<br/>(福田総合英語教育準備委員長)</li> <li>④自然科目における成績評価－専門教育への橋渡しのための成績評価－<br/>(百瀬自然科目専門部会委員)</li> <li>⑤社会科目における成績評価－教養としての社会科目と成績評価－<br/>(佐藤社会科目専門部会長)</li> <li>・総合討論</li> </ul> |
| 2. 17 (木) | <p>大学教育研究開発センター運営委員会 (第10回)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中期計画及び年度計画について</li> <li>・大学教育研究開発センターに関わる概算要求について</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 3. 9 (水)  | <p>平成16年度教養教育FD研究会 (会場：茨苑会館)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・推奨授業受賞者表彰式</li> <li>・「わたし(たち)の授業、わたし(たち)の工夫」<br/>(受賞者による教授法の紹介)</li> <li>①英語 I (英語 I B T R) 上田人文学部講師</li> <li>②地球科学 (地球表層の環境とその変遷) 伊藤教育学部助教授</li> <li>③文明・技術系科目 (ものづくり創成実践)<br/>前川附属超塑性工学研究センター教授</li> <li>④総合英語 (レベル2) 桑原講師 (非常勤)</li> <li>・総合討論</li> </ul>                                                                                                                                        |

## 平成16年度大学教育研究開発センター 関係委員名簿

### 【運営委員会委員】

◎センター長 曾 我 日出夫 (教育学部)

○副センター長 永 井 典 子 (人文学部)

○副センター長 阿久津 克 己 (農学部)

| 区 分          | 人文学部    | 教育学部    | 理学部     | 工学部                | 農学部     |
|--------------|---------|---------|---------|--------------------|---------|
| 学部選出<br>併任教員 | 古 屋 等   | 小野寺 淳   | 堀 良 通   | 栗 原 和 美<br>横 田 浩 久 | 安 藤 光 義 |
| 学 部<br>教務委員長 | 植 野 弘 子 | 橋 浦 洋 志 | 一 政 祐 輔 | 城 道 介              | 小杉山 基 昭 |

### 【実施調整部教養科目専門部会委員】

◎実施調整部長 永 井 典 子

| 部 会 名     | 責任部局選出<br>併任教員 | 学 部 等 選 出 専 門 部 会 委 員 |       |       |       |       |         |
|-----------|----------------|-----------------------|-------|-------|-------|-------|---------|
|           |                | 人文学部                  | 教育学部  | 理学部   | 工学部   | 農学部   | 留学生センター |
| 外国語科目     | ※梁 繼国          | 鄭 基成                  | 君塚 淳一 | 北 和之  | 菊間 勲  | 久保山 勉 | 石橋 玲子   |
| 健康・スポーツ科目 | ※松坂 晃          | 岡崎 正男                 | 上地 勝  | 菅井 俊郎 | 井上 涼介 | 松田 照男 | /       |
| 情報関連科目    | ※鹿子嶋憲一         | 鈴木 栄幸                 | 野崎 英明 | 岡田 誠  | 畠山 正行 | 笠原 康裕 |         |
| 人 文 科 目   | ※黒田 浩司         | 有富美代子                 | 向野 康江 | 下村 勝孝 | 山田 光宏 | 伊丹 一浩 |         |
| 社 会 科 目   | ※佐藤 恵一         | 松村 直道                 | 中野 雅紀 | 藤間 昌一 | 大野 修  | 伊丹 一浩 |         |
| 自 然 科 目   | ※川田 勇三         | 土平 泰子                 | 牧野 泰彦 | 百瀬 宗武 | 岡 裕和  | 宮口 右二 |         |
| 総 合 科 目   | ※関 友作          | 山本 博史                 | 新井 英靖 | 北出 理  | 柴田 隆行 | 中石 克也 |         |

(注) ※印は、当該専門部会の部会長を示す。

| 委員会名            | 委員長     | 委 員     |       |       |              |       |
|-----------------|---------|---------|-------|-------|--------------|-------|
|                 |         | 人 文 学 部 |       |       |              | 教育学部  |
| 総合英語教育<br>準備委員会 | 福 田 浩 子 | 小泉 由美子  | 東 佳 史 | 小林 邦彦 | Betts.Robert | 君塚 淳一 |

### 【研究開発部】

◎研究開発部長 阿久津 克 己

| 人文学部  | 教育学部  | 理学部   | 工学部                | 農学部     |
|-------|-------|-------|--------------------|---------|
| 古 屋 等 | 小野寺 淳 | 堀 良 通 | 栗 原 和 美<br>横 田 浩 久 | 安 藤 光 義 |

平成16年度大学教育研究開発センター年報 編集委員

曾 我 日出夫 (教育学部 センター長)

永 井 典 子 (人文学部 副センター長)

○阿久津 克 己 (農 学 部 副センター長)

○印は、委員長を示す。

|       |                       |
|-------|-----------------------|
| 発刊年・月 | 平成17年3月               |
| 発 刊   | 茨城大学大学教育研究開発センター      |
| 住 所   | 〒310-8512 水戸市文京 2-1-1 |
| 電 話   | 029-228-8414          |
| F A X | 029-228-8069          |
| 印 刷 所 | コトブキ印刷株式会社            |

**Annual Review of  
the Center for Research and Development  
in University Education**

**No. 9**

**2005 • March**

**IBARAKI UNIVERSITY**

**Center for Research and Development in University Education**